
モンスターハンター -The great hunting days!-

天木武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター - The great hunting days! -

【Nコード】

N7827X

【作者名】

天木武

【あらすじ】

人と、モンスターと呼ばれる巨大な生物が共存する世界。そこでは「ハンター」と呼ばれるモンスターを狩ることを生業とする人々がいた。

ある者は名声を手に入れるために、ある者はその日の糧を得るために、そしてある者は己の夢をかなえるために。
これはハンター達の、素晴らしき狩りの日々の物語。

モンスターハンター本来の世界観、設定を重視した自称・正統派モ
ンスターハンター！

前書き

世界観はFが中心です。

MHFを知ってる人なら思わずクスツとしてしまうネタをちりばめてる…つもりです。

主に7.0や8.0あたりまでの設定としていますが、ドンドルマの街がクエスト受注の中心、既にパローネキャラバンが存在する、双剣の鬼人化で強走が解除されない等現在の仕様と異なる設定や独自の見解を含めた設定も存在します。

現在のところ、自分で考えたオリジナルのモンスターを登場させる予定はありません。

また、武器カテゴリはスラク以外の11種、武器防具についてもほぼMHF準拠としていく予定です。

プロローグ

やっぱり私にはまだ早かったのか。

そんな弱気な気持ちが一瞬脳裏をよぎる。その思いに追い討ちをかけるかのように灼熱の火球が私めがけて飛来し、すんでのところ
で右手の盾でそれを防ぐ。

「……ッ！」

直撃は避けても熱までは防ぎきれない。右手に受ける衝撃と熱に
思わず顔をしかめた。ガードを解き目の前の敵を睨み付ける。

鋭い爪を持つ翼、毒のある棘を持つ尾、2本の脚で大地に立ち、
緑の甲殻と鱗に包まれる竜 「陸の女王」雌火竜・リオレイア。

「リオレイアを1人で倒せるようになったらハンターとして1人
前」 いつからか、そんな話がハンターたちの間で広まっていた。
だから私は早く1人前と認められたくて来た。

なのに。

ブレスを吐き終えた頭に突きをひとつ入れて横にステップ、レイ
アの突進が私の横を抜けるのを確認して弾倉をリロードする。

「ハア……ッ！」

大きく息を吐き、呼吸を整える。

「強い……」

口から本音が漏れたのも無理はない。回復薬は全て使い切り、剣士にとって命綱である砥石も残りが少ない。

そのせいで砲撃と竜撃砲が気兼ねなく撃てない。それも戦いを長引かせている理由の1つだとは思っていた。

「とはいえ、そろそろ決めにかけられないと……」

長期戦になればなるほどこちらが不利になる。焦りながらもレイアの次の手は何か待つ。焦って先に出したら反撃をもらう。それが私がハンターになって最初のうちに学んだことの1つだ。

殊にガンランスにおいてはそれが顕著であり、相手の攻撃を防ぎ、そのあとの隙に攻撃をする、というのがセオリーだった。が、それにも限界はある。

焦りを生み出す心とも戦いながら、獲物の動きを見極めようとす。レイアの体が沈み込み、2歩後ずさる。

（しめた！）

私は内心ほくそ笑んだ。

レイアにとって最強の大技、サマーソルト　その巨体を1回転

させ、毒をもつ尻尾で相手をなぎ払う。

しかしそんな大技であるからこそ、出した後に大きな隙ができる。そこに竜撃砲を叩き込む。それで終わらせる。

算段は決まった。

レイア渾身の一撃を受け止めるために右手に力が入る。

『グウオオオツ！』

低いうなり声とともにレイアの巨体が宙に舞い

ギイン！

鈍い音と衝撃、右手の盾がそれを受け止める。

「もらった……！」

竜のブレスの原理を応用したというガンランス最大の奥義・竜撃砲。切り札を発射モーションにし、狙いを定める。

（狙うは頭、この一撃で終わらせる……！）

が、直後のレイアの動きは私の予想を裏切った。着地と同時に再び体が沈みこむ。

「そんな……！2回連続……ッ！」

まずい、竜撃砲は既に発射モーションに入ってしまった。夕

イミング的に良くみて相打ち、悪ければ……。

「くっ……！死なばもろとも！」

私は覚悟を決めて歯を食いしばり、次に来るであろう衝撃に備えた。

ドドウン！ ガギャツ！

「ぐ、うああああっ！」

左手に竜撃砲の反動を感じるのと胸に焼け付くような強烈な痛みが走ったのが同時だった。

そのまま脚が地を離れ背中から岩壁に叩きつけられる。

「カハツ……！」

一瞬息が止まり視界がぼやけ、力なく膝から崩れ落ちた。

「う……うう……」

明滅する視界を凝らし痛む胸に目を落とす。

体を保護していたザザミメールの一部が腹部から胸部かけて抉り取られ、血が噴き出している。深手ではあるが致命傷ではない。

しかし本当の問題はそっちじゃない。

「ぐっ、あううっ……！」

竜撃砲を撃った直後のガンランスは、ダメージで固定仕切れなかった左腕をすり抜けていた。その反動で後ろに流された左肩は背中同様岩壁に強打しており、もしかやと思ったのだが……。

「やっぱり……折ったか何かした……ッ！痛ッ！」

指1本でも動かそうとすると激痛が走る。

（このままでは武器が握れない、一方的にやられる……！）

が、焦りで顔を上げててもレイアが追撃をかけてくる様子がない。それどころか私に背を向け、脚をひきずりながら離れていく。

「逃げる……？じゃああと一歩、あと一歩でレイアを倒せる……！」

胸と左腕の痛みを堪えて体を起こし、愛用のスティールガンランスに右手を伸ばした。

その時だった。

「え……？」

眩暈。続いて体から力が抜け、入らなくなる。

「しまった……！レイアの……毒……！」

体が言うことを聞かない、目も霞んでくる。

「あと少し……あと少しで……一人前って……認められ……」

視界の端でレイアが羽ばたく様子が見える。

右手にガンランスの感触が伝わると同時に
た。

私の意識は途絶し

第1話

セレーネ。

誰かの私を呼ぶ声が聞こえる。

セレーネ。

ああ、この声、この感じ……あの人だ、あの人に違いない。私は顔を上げその人を見上げようとする。

が、霞掛かったようにその顔をはっきりと見ることができない。

セレーネ、なんであんな危険なことをしたの？

いつか、聞いた言葉。そう判断するより早く、私の口は勝手に動いていた。

「ねえ、聞いて！今日レイアと戦ったの！あとちょっとのところで逃げられちゃったんだけど……でも、もう倒せる！だから……」

不意に気配が遠ざかっていく。

「ま、待って！もうすぐレイアを倒せる……そしたら一人前って認めてもらえるでしょ！？だから待って！ねえ！待って……！」

「痛ッ……!!」

胸と左腕に走る激痛で少女は目を覚ました。目に何か溜まっ
ているような気がする。

(涙……?)

「気づいたようじゃの」

横からかけられた声に反射的に右手で目をぬぐう。

「お主にレイアはまだ早いようじゃ」

胸の痛みを堪えながら少女は身を起こす。レイアレイヤーと呼ば
れる髪型に切られた髪は短く切りそろえられ、髪の色は茶がかつて
いる。黒く綺麗な瞳はパツチリとしており、その面影にはどこかま
だ幼さが残っていた。

酒と食物の匂いが鼻をつく。普段は見慣れない場所だが、すぐに
大衆酒場の関係者用休憩室にある長椅子に寝かされていたと気づい
た。

酒場の方にも他のハンターはいないことに気づくと同時に、怪我
人なんだからもうちょっといい場所に寝せてくれてもいいんじゃない

いかとも少女は思った。

その思いもあって目を声をかけてきた老人　ギルドマスターと呼ばれている竜人族と言う種族である　　に向けた。

「腹と胸がレイアの尻尾でえぐられたようじゃな。鎧の破損状況を見て、もう少し深く入っていたらお主の意識を奪った毒とあわせて致命傷じゃったわい。レイアが逃げるときでよかったの。アイルーたちがすぐにお主を運んで応急処置をしたおかげで助かった。が、それでも危険じゃったんじゃぞ。何せ数時間意識を失ってたわけじゃし。ああ、治療はうちの女性スタッフがやってくれたから心配はいらん」

胸に痛々しく包帯が巻かれている。同時に首から左腕が吊るさされていることにも気がついた。

「あとは重いのは左腕じゃな。折れとるからその様子だとしばらくは安静にして様子を見たほうが……おい！聞いとるのかセレーネ！」

セレーネと呼ばれた少女はギルドマスターの声を無視するかのように壁にかけてあった愛用のガンランスと盾を手を取った。

「しばらくって……どれだけ待ってっていうのよ!？」

「セレーネ!」

ギルドマスターからの厳しい声にセレーネは1つため息をつき、ガンランスを背負いながら振り返った。

「……ハンターは体を一番大切にしろ、って言いたいんでしょ？私

にだってそのぐらいのことはわかってるわよ」

「じゃったら……！」

「でもじいさん、前に言ったはず、私は早く一人前って認められてあの人に近づきたい。だからこうして今ハンターになっているんだもの」

竜人族の老人は一度息を吐いた。

「……お主の気持ちはわからんでもないが、焦りは身を滅ぼすだけ、禁物じゃ。まずは体を完治させてから、わかったかの？」

セレーネは何も答えず、机の上にある自分が身に着けていたザザミシリーズの防具を手を取った。

「……体の治療のことは感謝してるわ」

そっけなく言つとそのまま背を向け、大衆酒場を後にしていった。

「セレーネ……お主が望んだ道じゃ、わしは何も言わんがの……」

手に持った煙草をギルドマスターはふかしながら呟いた。

ここドンドルマは大陸の中心に位置し、山あいには切り開かれた街

である。竜人族である大長老の指導の下、様々な施設を備えた大拠点であり、シュレイド地方の街に勝るとも劣らない規模となっている。

ここに集まりモンスターを狩猟して生計を立てるもの達は「ハンター」と呼ばれ、ある者は地位を手に入れるために、ある者はその日の糧を得るために、またある者は己の夢をかなえるために、日々狩りを続けていた。

ドンドルマはモンスターの生息する狩場からは近いとはいえない位置にあったが、パローネ・キャラバンという気球船団からギルドへの技術協力があったおかげで現在では気球による短時間の移動が可能となっていた。

そのドンドルマの一角、居住区画の中にセレーネ・ヴィヴェルドの住む家がある。セレーネはギルドマスターに言われた通り、完治するまで狩りは行わなかった。その間体を治療することに専念しながらもモンスターの情報収集、壊れた防具の新調、腕以外が完治した後半には基礎体力の維持のために体を動かすこともしていた。

そして数週間後、スティールガンランスを背負いザザミー式の防具に身を包んだセレーネは大衆酒場へ脚を運んだ。

「お！『一人娘』のセレーネじゃねえか！どうしたい、最近見なかったけどよお！」

大衆酒場にいるハンターの1人がセレーネに声をかける。

「一人娘」というのはいつしか彼女に着いた二つ名だった。誰に誘われても決して一緒に行こうとしない、1人で狩りをするから「一人娘」。さつき声をかけてきた男も以前セレーネをしつこくパーティに誘ったがそっけなく断られ、今では諦めてこうして声をかけるだけになっていた。

セレーネはそんなかけられた声も無視し、ギルドマスターの元へと歩を進める。

「じいさん」

「お、セレーネか。……ちゃんと療養したようじゃな。して、今日はどのクエを……」

「言つまでもないでしょ、レイアよ。この間の借りを返させてもらっわ」

その言葉を聞いてギルドマスターは渋い表情を浮かべる。

「お主、まだこの間ので懲りたらんのか？」

「この間、あいつは足を引きずった。あと一步で勝てた。だから今度は……」

「でもな、その一步が新人ハンターにとっちや大きな壁なんだよ」

予期しない後ろからの声にセレーネは振り返った。

太刀を背負った男とその後ろに双剣を背負った無愛想な男。太刀の男の方は笑みを浮かべて肩やところどころに棘がついた、見た目にも攻撃的な防具に身を包んでいる。青い髪を中央に集めて高く固めたドスタワーという髪型と細めに吊りあがった目はどこか攻撃的な様子を感じさせる。

双剣の男はレウスレイヤーと呼ばれる髪型をしており、少し赤みがかかった茶色の髪と合わせてセレーネと少し似ていた。武器は美しい一対の直剣、防具は腰から上はモンスターの素材を使ったと思われる赤い防具と金属製の足具。太刀の男の防具はわからなかったが、こちらはイーオス防具を中心に身を固めているということがセレーネにはわかった。

「そうだろ？ギルドマスター？」

「ああ、そうじゃ。お主の言うとおり」

「だからよ、俺がちよっと手伝ってやろうと思ってな」

さらに男はニヤツと笑う。

(……………ああ、こいつとは本能的に合わない)

下品な笑いだとセレーネは不快な気分になった。

「……………何がしたいの？」

「お前さん、リオレイアを倒したいんだろ？でも前回はもう少しのところで失敗した。だったら俺が手伝って……………」

「余計なお世話よ」

ピシヤツと言いつつ一言に男の言葉が思わず止まった。続けてセレーネは畳み掛ける。

「それにレイアは倒したいけど私は『一人で』倒したいの。悪いけどあなたのおせっかいは必要としてない。邪魔だから帰ってくれろ?」

少しの間男は黙ったが、ゆっくり口を開いた。

「……お前さん、ハンターランクは?」

「……何よ?」

「ザザミは倒しとるがドドブラがまだじゃから……16じゃな」

セレーネの代わりにギルドマスターが答えた。

「なるほどなるほど、それでスティールガンランスか……なるほどね……」

「何が言いたいのよ!はつきり言いなさいよ!」

怒気をはらんだ眼で男を睨みつける。

「落ち着けつて。一人で倒したいなら、まず武器を強化するつてのがセオリーだ。あなたは今スティールガンランスを使ってるが、強化が意外とてこずってるからそのままなんだろ?手っ取り早く強い

武器を手に入れるならハンターランクを上げて、よりモンスターの素材から武器を作るって方法がある」

そこまでを言い、セレーネから反論がないのを確認して男は続ける。

「つまり、俺が手伝ってやってハンターランクを上げる。で、あんたは自分の得物を強化する。そしたら1人でレイアでも何でもいきやあいい。どうだ？」

「だからそういつのを余計なお世話って……」

「待て、セレーネ」

「……何よじいさん」

首だけを後ろに向けてセレーネは聞いた。

「この若者の言うことも一理ある。レイアと戦いたいという一心でお主はザザミは倒したが、その後はどうじゃ？もう次の公式狩猟試験を受けれるハンターランクじゃ。ここいらでハンターランクを解放してもいいと思うがの。……お主名前は？」

「俺かい？俺はジャックだ。ジャック・イーブ。ちなみに後ろのはウルフって言うらしい」

「よし、じゃあセレーネ受注でお主ら3人でドドブラに行って来る
といい」

「ちょっとじいさん！余計なことしないで！」

「……セレーネ、お主はそろそろパーティを組むということをお学ばべきじゃ」

言い聞かせるようにギルドマスターは言った。

「ハンターは1人で狩るのもいいが、仲間と協力してこそ、じゃ。いずれパーティを組むことになる。今のうちに学んでおけ。……よし、3人で契約したぞ」

「ま、そういうことだ。よろしくな。んじゃあちよいと武器変えてくるから待っててくれや」

ジャックといった男はそういうと酒場を一度出て行った。

その間にウルフといわれた男は無言で受注を終えている。受注が終わるとセレーネの方へと近づいてきた。

「ウルフだ。俺もハンターランクは20になったばかりだ。よろしく頼む。もっとも、あいつはもっと高いがな」

「……あっそ」

興味なさ気にセレーネは答え、ギルドマスターを睨む。そんな視線など気にしていないように老人は煙草をふかした。

「待たせたな。さあ行くこつぜ」

ジャックが戻ってきた。さっきまでの太刀と違い、茶がかった、棘が多いものに代わっていた。

「俺の双剣は水、この子は属性なしだ。牙を折るなら……」

「心配すんな。俺が折ってやるよ。ついでにドドブラごとき瞬殺してやる。……セレーネ、お前ドドブラと戦ったことは？」

急に呼び捨てにされたことにますます不快な思いをしたが、もう半分諦めてセレーネは答えた。

「ないわよ。防具のためのザザミと、レイアの練習にクツクは多く戦ったけど、あとはドス連中の鳥竜種とババコンガ、ファンゴぐらいよ」

「そうかい。まあガンランスとドドブラじゃ相性よくないがな。武器を変える気は……」

「私はガンランス以外使う気はない」

はつきりした口調にジャックの言葉は一度途切れた。

「……まあいいや。ともかくさっさと倒しちまおう。ホットドリクはあるな？」

そういえば雪山に行くこと自体初めてだったとセレーネは今頃になって気づいた。

「ドドブランゴは山の上にいる。サクツといつちまうぞ」

ホットドリンクを一気に飲み干し、ジャックは走り出した。遅れまいとセレーネもホットドリンクを飲む。雪山の寒さに冷えた体が芯から温まっていくのを感じた。ウルフはいつの間にか飲み終えたか、セレーネよりも一足早く走り出していた。

雪山、というのはドンドルマのハンター達が呼ぶ通称で、正式には「フラヒヤ山脈」という。麓には雪山の厳しい環境下で発展してきた「ポツケ村」があり、雪山に赴くハンター達はここを拠点にしていた。ガウシカの毛皮を加工したマフモフや、特産物である雪山草を漬けた薬用酒、フラヒヤ麦を蒸留して作るフラヒヤビールはこの村だけならず、ドンドルマでも知る者が多いほど有名である。

そんな雪山草が生える山道を走り抜けると、ドドブラが待つ開けた場所に着いた。セレーネがドドブラのいる場所に着いたとき、ジャックは早くも一撃をドドブラの頭に振り下ろしていた。

「オラオラア！さっさと来ないと終わらせちまうぜ！」

見た目にも凶悪そうに反り返る刃の太刀を振るいながらジャックは叫んだ。負けじとウルフ、続いてセレーネがドドブラに走り寄る。

が、顔の前に張り付こうとしたセレーネの目の前にジャックの斬り下がりによる刃が近づく。思わず攻撃しようとする手が止まった。

「ちよつと！何すんのよ！」

「邪魔だ、顔の前に来るんじゃねえ！」

ウルフは過去にそういわれたことがあるのか、後ろ足付近に陣取り隙を見て連続攻撃を叩き込んでいる。「乱舞」と呼ばれる双剣の攻撃方法だ。先ほどの無愛想な様子と違う華麗な剣捌きに一瞬見惚れそうになったが、気を取り直してセレーネはウルフと逆の脚の位置に陣取るうとする。

が、ドドブラは素早くサイドステップを繰り返し、3人との距離をとった。

「逃げるな……ッ！」

抜刀したままでは機動力が落ちる。収刀し、距離をつめて突きを繰り返そうとする。

しかし、今度はジャックの太刀が前足に当たったようで、痛がるようにドドブラは転がり、再び距離は開いてしまった。

「……ッ……ッ！」

出発前にジャックに言われたことを思い出した。

『まあガンランスとドドブラじゃ相性よくないがな』

(関係ない、そんなものは技量でカバーできる、カバーする……！)

ぐつと歯を食いしばりもう何度目かわからない追撃。そのとき、ドドブラが一瞬怯んだ。

「いけるっ……ッ！」

隙を見出したセレーネは竜撃砲のモーションに入る。だが、前足に入るジャックの攻撃にドドブラが転がり、またしても距離は離れてしまう。

「クソッ……！」

発射間際だった竜撃砲を空撃ちし、舌打ちをする。

と、ほぼ同時にジャックの追撃よって断末魔の咆哮を上げ、ドドブラは息絶えた。

「は！まあこんなもんだな」

満足そうにジャックは太刀を鞘に収め、一方でウルフは無言のまま2本の剣を背負った。苛立ちを抑えるようにセレーネも武器を収める。

「最後の竜撃砲、惜しかったな？あれで決まったかもしれないのにな」

挑発的な言葉にセレーネはより苛立った。恨み言が喉まで出かけたが飲み込み、無言で眼をそらした。

「さて、これでハンターランク17になったわけだ。よかったな、セレーネ」

クエストからポケケ村の酒場へと帰ってきたジャックの第一声がそれだった。

「んじゃこの調子でガンガンと……」

「もういい」

小さな声で、だがしっかりとセレーネは呟いた。

「あ？」

「もういいって言ったのよ！あんたとは2度とクエには行かない！」

突然の怒鳴り声に酒場にいたハンターの目が集まる。

「な、なんだ！手伝ってやったのにその態度は！」

「私は手伝ってほしいなんて頼んでない！じいさんが勝手に決めたことだし、それにあんなの手伝ったってほ言わないわ。自分の強さを他人に見せ付けたいだけの、ただのアンタの自己満足よ！私は強くなりたくて狩りしてるの、あんたのやってることは私にとって迷惑なのよ！」

「何だと……！この女、言わせておけば……！」

ジャックの右手が振り上げられる。が、意外なことにそれを止めたのはウルフだった。

「やめろ。この子の言うとおりだ」

「おい、ウルフ……」

「俺もいつかは言おうとしてたことだったかな。この子のように強くなりたくないと願って狩っている者にとつてお前みたいな『勇者様』気取りが一番迷惑だ。……そもそもこのハンターランクのモンスタ―に、そのカクトスの太刀にアカムト防具じゃ不釣合いだ」

（カクトス……？アカムト……？）

セレーネは何を言っているかわからなかった、ただあの男の武器と防具は見たことがなくおそらく強い、としかわからなかったのにウルフはその素材に使われているモンスタ―の名前まで出した。そんなセレーネをよそに、ジャックは今度はウルフに矛先を向ける。

「なんだなんだてめえまで！せつかく俺が手伝ってやってるのに……」

「悪いが、俺もこの子と一緒に手伝ってくれと頼んだことは一度としない。お前が半ば無理矢理パーティを組んできたんだろう」

「ウルフ……てめえ……！」

「とにかく、お前のハンターランクならそれ相応の依頼でも受けて来るんだな。……もっとも、そこじゃついていけない腕前だから、こんなところで油売ってるんだろうけどよ」

怒りが頂点に達したジャックの右手が太刀の柄に掛かったとき、それまで酒場で見ていたハンターの1人がその右手を掴んだ。

「ジャックさん、だったよな？悪いがこの双剣の旦那の言うとおりだ。話を聞いた限りじゃあんたが悪い。あんたと一緒にクエストに行っても着いていったハンターが伸びない、それはこの子が望んでいることじゃない。ここでこれ以上揉め事を大きくしたくないだろ、さっさと出て行きな。……それともやるってんなら、相手になるぜ？もちろん獲物はなしだ。あんたを俺のハンマーで叩き潰すの面白そうだが、獲物を使つてのケンカはご法度、ハンターの資格を失うのはゴメンだしな」

男の座っていたと思われる席には機械めいたハンマーが立てかけてあり、その向かいに座っている弓を背負った女性ハンターも刺すような視線をジャックに向けている。

それだけでない。その酒場にいる全員が目が一様にジャックを非難するように降り注いでいた。

「ぐ……」

言葉を失いジャックは右手を柄から離す。

「そうそう、それでいい。……で、続きは外でやるかい？」

「クソツたれ！覚えてやがれ！」

捨て台詞を残し、ジャックが酒場を飛び出していった。

「は、きょうびどこの悪党も言わないようなセリフを吐いていきやがったな。だからあいつは三流以下なのさ」

ハンマー使いと思われる男はそういうと、やれやれと両腕を広げ

て自分の席へと戻っていった。

「……礼は」

「言わなくて結構だ。俺はただ腹が立つ男に一言言ってやってすっきりしただけだからな」

ひらひらと腕を振り、机の上の酒をあおる。それを契機に酒場の全員が自分たちの時間に戻っていった。

ハア、と1つため息をつき、セレーネは空いている適当な席に座る。と、そのときウルフが酒を注文して向かいに座ってきた。

「……なによ、あんたまだ帰ってなかったの？」

「まあな」

「さっき言ったでしょ、もうあんたとは……」

「それはあいつに向かっていったんだろ。それにお前はあんた『達』とは言わなかったしな」

痛いところを突いてくる。確かにセレーネはそう言った、苛立ちの矛先はジャックに向けてだけであり、ウルフは対象ではなかったからだ。

それよりも彼女にはさっき彼が言ったモンスターのことが気になった。

「……あんた、さっきあいつの武器と防具を見てなんかのモンスター

「の名前言ったわよね?」

「ん? ああ、エスピとアカムのことか?」

「エスピ? カクトスとかつて……。まあいいわ。あんた、ハンターランク20って言ったわよね? 多分そのモンスター、私達のランクじゃ情報すら出回らないと思うけど、なんでそんなこと知ってるわけ?」

ウルフは手元に届いた酒を一杯呷った。

「話すと長くなる。それにお前が知りたいのはそれよりもそのモンスターのことだろ?」

「な、なんで……」

「わかるさ、お前の目がそう言ってた」

「はあ?」

一瞬セレーネはこいつは頭がおかしいのかとも思ったが、はぐらかされたただけだろうと決めた。

「まあいいわ。……で、そのモンスターってどんななの?」

「知りたいか?」

セレーネは勢いよく首を縦に振る。

「だったら……」

残った酒を一気に飲み干し、ウルフは立ち上がった。

「もう一度俺とパーティを組め。さっきのは俺達の手で、とはいえない。今度は俺達の手でドドブラを狩りに行く」

第2話

「まったく……なんで1日のうちに2回もドドブラの顔を見に、しかもあたと来なくちゃいけないのよ」

結局セレーネはウルフと共に再び雪山にやってきた。

「お前も了解したことだろ。もう文句を言うのはやめたらどうだ？」

ホットドリンクを飲むセレーネを横目に見ながらウルフは言った。どういふことが彼はドリンクを飲んでいない。

「……まあもういいわ。言うておくけど私はさっきのとあわせてパ―ティプレイはこれで2回目よ。立ち回りとか……」

「俺のことは気にするな。いないものと思ってもらって結構、普段どおりに戦ってくれ」

「普段どおりって……ドドブラ自体2回目よ？」

「なら基本的に顔の前に陣取れ。俺は後ろ足に張り付く。ガードができるお前の武器なら顔の前で攻撃を防いで反撃ができるし、常に挟み撃ちになる。……言い方を変えれば、困になるとも言えないくないが」

言うことだけを言うとウルフは登山を進める。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！あんたホットは？」

「必要ない。戦闘開始直前に強走薬を飲む」

走りをやめずに言ったウルフの背中を追って慌ててセレーネも走り出した。

しばらく山を登ると中腹部に出る。つい数時間前に戦った場所と似たような場所、ドドブラがゆっくりと辺りを徘徊していた。

「基本はさっき言ったとおりだ、頭に張り付いて俺のことは考えずに戦ってもらって結構だ。……行くぞ」

おそらく先ほど言っていた強走薬であろう、あまり体によさそうではない色の液体を飲み干すとウルフは凄然とドドブラに向けて駆け出した。遅れまいとセレーネもそれに続く。

最初の打ち合わせどおり、ウルフは一瞬顔の前に牽制を入れ、そのまま後ろ足を狙う。ウルフの牽制の動きに気をとられたドドブラの顔に踏み込み突きを入れて砲撃、続けて斜め突きを入れてガードを固める。

直後、殴りつけるようにドドブラの右腕が振り下ろされ、セレーネの盾に衝撃が走った。

この間、強走の影響を受けるウルフは鬼人状態で後ろ足に縦切りから乱舞へと流れるような攻撃を叩き込んでいた。

(やっぱりあいつの戦い方、綺麗だな……)

思わず見とれた一瞬、ドドブラが狙いをウルフに変える。

頭に回るべきか。迷いが頭をよぎったが。

「いないものとして……考えさせてもらうわよ！」

ガードを解き、突きと砲撃を織り交ぜてコンボを繰り出す。その間自分に向けられた攻撃をウルフは鮮やかに避けていた。

セレーネの攻撃によって嫌がるようにドドブラが間合いを離れた。

若干ウルフが早く納刀、走って距離をつめる。顔に切り払いを入れ、そのまま前転して脚のほうへと移動する。

直後、追いついたセレーネの抜刀突きが当たる。

「あいつ……」

うまい。明らかにパーティ慣れしている。セレーネが陣取りたい場所は的確に空け、互いに干渉しない位置を取る。

先のジャックとは真逆、戦いやすいことこの上ない。

(これなら、勝てる……！)

セレーネが楽観したその瞬間だった。

『オオオオオオン！』

耳をつんざくようなドドブラの唸り声が辺りに響き、同時に手下と思われるブランゴが数匹集まってくる。

「な、何!？」

「咆哮だ!こいつの咆哮には手下を集める力がある!」

反射的に耳を塞いでしまったが、セレーネはすぐにガードの状態に戻る。

「さっきはこんなことなかったじゃないのよ!」

氷の塊のようなドドブラのブレスが盾にぶつかる。叫びながら、最後のほうは自分の声も聞こえなかった。

「どっかの勇者様が吼える間も与えずに討伐しちまったからな!」

ウルフの声が遠い。見ると一時的に脚からは離れ、ブランゴを片付けていた。

「クソツ……!動きが早い……!」

口元から白い息が漏れ、先ほどまでとは凶暴性と俊敏性が見るからに増している。反撃に手を出したくてもガードを解く暇がない。

「待たせた!」

ブランゴを一掃し、ウルフが戻ってきた。それに気づいたか、ドブラは狙いをウルフに変える。

「チャンス……！」

すかさず後ろ脚を狙うセレーネ。が、

「ダメだ！怒り時は！」

ウルフの声を聞いたのと竜撃砲のモーションに入ろうとしたのが
ほぼ同時だった。

次の瞬間、ドドブラが小一度さく跳ね、続いて後ろへと飛び退く。

「キャアアアッ！」

全体重がのった後ろ足の一撃に、華奢なセレーネの体は吹き飛ば
された。

「セレーネ！」

ウルフの呼ぶ声にもセレーネはうずくまったまま動けずにいる。

「そのまま顔を上げるな！」

言われたとおり下を向いていると、辺りが一瞬まぶしい光に包ま
れた。

「大丈夫か？」

ウルフがセレーネの元へと駆け寄ってくる。

「問題ないわよ……。私なんかよりあいつは……」

「閃光玉で目をくらませた」

見ればドドブラは周りが見えていないようでプレスやステップを闇雲に繰り返している。

「立てるか？一旦ここから離脱して体勢を立て直す」

「な……。私は大丈夫よ！それよりあいつを……」

「いいから言われた通りにしろ」

有無を言わせないウルフの様子に、仕方なくセレーネはそれに従って後についていった。

「ダメージは？」

「問題ないって言ったでしょ。今回復薬飲んで痛みも取れたし大したことないわよ」

「そうか、そいつはよかった」

言いながらウルフは砥石を取り出し、武器を研ぎ始めた。

「お前のダメージの心配半分、その他準備ごとに半分、ってのが一

「離れた理由だ。お前も研いでおけ」

一足早く2本の剣を研ぎ終えたウルフはそれを背負い、手ごろな岩の上に腰掛けた。

「ついでに言っておくとお前が飲んだホットドリンクの効果もそろそろ切れるし、ここはドドブラの巡回ルートだ。来るまでは体を休めておくといいだろう」

「何よ偉そうに……。あんたいつから私の指導教官になったの？」

「強くなりたいたんだろう？なら人のアドバイスは甘んじて受けるべき、それが命を繋げることもあるからな、お嬢さん」

無口な男かと思っただけで意外と軽口も叩く。

「そのお嬢さんってのはやめて。私はもう17よ。……ところであなたのその双剣、かっこいいわね」

研ぎ終わり、ついでに弾倉をリロードしながらセレーネは聞いた。

「これか？名前はホーリーセーバー。……親父が俺によこしたものを強化した双剣だ」

「お父さんが？『よこした』って、形見……とか？」

「……」

答えないウルフを見てまずいことを聞いたとセレーネは思った。

「ごめん……」

「ん？ああ、親父なら残念ながらまだ生きてる」

「は！？じゃあさっきの沈黙は何よ！謝って損したじゃない！」

「……縁を切った」

「え？」

今度は今度で予想外の答えにセレーネが狼狽する。

「その続きは後でだ。……そろそろあいつがこの辺に来るぞ」

真面目な顔つきになったウルフが立ち上がる。いつドドブラが来てもいいように手には強走薬を持ち、いつでも飲める状態だ。

少し前からホットドリンクの効果が続いていることを実感したセレーネもホットドリンクを飲み干し準備を整える。

「奴もそれなりに弱ってるはずだ。ここで終わらせる」

「了解よ。さっきのようなへマは踏まないわ」

「そりゃあ心強い。……ところで」

ウルフがセレーネのほうを振り返りフツと鼻で笑った。

「何よ？」

「……お前のような奴でも謝るときはあるとは、意外と素直なんだな」

「な……！」

文句の1つでも言い返してやろうと思ったそのとき、2人の目の前に白い毛の巨体が舞い降りる。

それを目で確認するより早くウルフは強走薬を飲み干し、セレーネは恐れることなく駆け出した。

ドドブラが2人に気づくが早いか、セレーネは踏み込み突きを繰り出し、再び戦いの幕が切って落とされた。

戦局は2人のほうが優勢だった。

さっきまでの戦いで戦い方をわかっているというのもある。が、それ以上にセレーネにとって、このウルフという男に背中を任せられると気づいたことのほうが大きかった。

(こっちの考えまで見透かすかのように立ち回ってくれるとはね)

『オオオオオオン！』

一瞬口元に笑みがこぼれたのも束の間、ドドブラが怒りの咆哮を

上げる。

「チツ……!!」

相手が弱ってきているのは目に見えて明らかだった。このまま押し切れるかと思っただが、そううまくもいかない。

セレーネは一つ大きく息を吐き出し隙を見つけようとドドブラの猛攻に耐える。

「私に攻撃が来てるってことは、その間あいつは双剣の攻撃に晒されるってこと……」

自分に言い聞かせるようにガードを固め、攻撃の合間を縫って突きを入れていく。

一度間合いを取ったドドブラが大きく腕を振りかぶり、ウルフに飛び掛る。しかしウルフはその飛び掛った足元を転がり攻撃を空ぶらせた。

その間にセレーネが後ろから駆け寄る。

「バカ！後ろは！」

(言われなくてもわかってる！)

答える代わりにガンランスを構える。 竜撃砲。

ドドブラがバックステップする。が、それはセレーネのわずか前で止まった。

チャージ完了、銃身の温度が上昇し炎が紅から青へと変わる。

「いつけえええッ!!」

セレーネの口と銃口から吐き出された魂は激しい爆炎となり。

断末魔の叫び声を上げ、ドドブラは息絶えた。

「ハア……ハア……」

(勝った……!)

竜撃砲を撃った反動で、左腕に心地よい痺れが残る。

「なるほど、わざとバックステップを出させてそこを狙ったわけか」

武器をしまいながらウルフは関心した声を出した。

「迂闊に竜撃砲で狙っても動きが早すぎるからね。さっき一撃もらったときに距離感は掴んでたし、これなら……」と思ったんだけど、案外なんとかなるもんね」

少し誇らしげにセレーネ。

「いい判断だ。さっきバカ呼ばわりしたことは謝らないとな」

「それはいいわ。それより、来る前に約束したこと、忘れてないわよね?」

「ん？……ああ。そりゃあ忘れてないが……」

「それじゃあさっさと帰りましょ。ドンドルマに戻る気球の中で話は聞かせてもらおうわ」

言いながら、早くもセレーネは剥ぎ取りナイフを手にドドブヲを剥ぎ始めた。

「さてと、じゃあ早速教えてよ」

セレーネは気球の甲板に腰を降ろす。椅子もあるのに他のハンターを避けるように座るその様子にウルフは思わず苦笑をこぼした。

「ジャックの奴が装備してた武器と防具の話だよな？」

「そうよ。確かカクトスとアカ……なんとかって」

「カクトスとアカムトか。そもそもカクトスというのはエスピナスというモンスターの亜種素材から作られる武器につけられる別名みたいなものだ」

セレーネの近くに腰を下ろしながらウルフは話し出す。

「エスピナス……確か樹海にいるモンスターよね？毒があるとか麻痺があるとか……」

「ほう、よく知ってるな。それは原種だ。そいつの素材からは基本的に毒属性の武器が作れる。あいつが持っていたのは亜種の武器、火属性がついてる」

「原種と亜種で何か違うの？」

「大違いだ。亜種は広範囲を焼き尽くす死のプレスと全てを薙ぎ払う全身の振り回しがある」

「へえ……」

興味津々と言った様子でセレーネは聞いていた。

「防具のアカムトルムってのはアカムトルムという未だ生態に不明が多い、火山に住むモンスターのことだ。ギルドの中でも経験を積んだハンターしかクエストを紹介してもらえない」

「え！？じゃああいつって強いハンターなんじゃ……」

「どんなに腕のいいハンターでも仲間と協力ができない戦い方じゃ一流とは言えない。そういう意味じゃあいつは強い、と思いたくはないな。もつとも、あいつ自身の力ではなく、例えば同じ獵団の腕利きのハンターの顔利きで受けた、ということもあるがな」

「そうなんだ、そういうことも……」

「……で、そのアカムトルムだが、表立って公表はされていない。飛竜族の祖先という見方もあるし、あのグラビモスを一瞬で倒してしまう様子も目撃されたとかで、迂闊に公表したらパニックになる

危険性があるとギルドが判断してるらしい」

「グラビモス……確か鎧竜とか言われてて、強力な熱線を放つモンスターよね。それより強いってこと……」

そこまで聞いてセレーネの頭にある疑問が浮かんだ。

「もう一ついいかしら？」

「なんだ？」

「……あんだ、なんでそんなに詳しいの？」

フツと鼻で笑うウルフ。

「……ま、さつきちょっと話しちまった手前だ」

空を見上げ、ウルフは続けた。

「俺の親父とおふくろはハンターだ。2人は生まれてくる子にもハンターになってほしいと思っていた。だから俺と、2人の兄と1人の姉は物心ついたときからハンターとしての英才教育を施されてきた。8歳のときにランポスの巣に放り込まれたりもしたな」

なるほど、それで知識があつたのか、セレーネは思った。

「親父もおふくろギルドでもなかなか名の知れたハンターらしくてな。大老殿にいる大長老の依頼でドンドルマの街を脅威から救ったこともあつたらしい。だがおふくろと結婚して、年を感じて引退した。あとは俺たちに継がせるつもりだった」

「アカムトルムの話もお父さんから？」

「親父が知ってるモンスターの情報は全て覚えさせられた。特徴、習性、弱点、巡回ルート、注意点……。実はドドブラはハンター登録する前に、兄たちと数度狩ったことがある。ギルドに特別に口を利いて、な」

「……でもあんた、さっき縁を切ったって」

「そつだ、俺はオヤジとの縁を切った」

「そこまでしてもらってなんで……」

「あの人は、『狩りは効率だ』と言っていた。兄弟それぞれに武器が割り当てられ、俺には双剣以外の選択肢はなかった。なぜだと思っう？それが最も早く、効率よく、そして安定して狩りが出来るからだ。オヤジは狩りをするとき、人間が絶対的に強いと信じて疑っていない。でも俺はそうは思わない。人とモンスターの命のやり取りに『効率』なんて尺度を持ち込みたくない」

（普段は冷たい感じなのに意外と熱い男ね）

セレーネはそう思った。

「だから家を飛び出したの？」

「ああ。ギルドに登録した後も兄貴たち以外とパーティを組むことは禁じられた。親にしかれた道しか生きる方法がないのか、そう思ったとき、俺は絶望した。ハンターすら辞めてやろうと思って家を

飛び出した。……でも俺にハンター以外の生き方なんてわからない。そんな気持ちで半ば自棄な気持ちで酒場にいたときにジャックに会い、そして、お前に会った」

「え！？私！？」

突然話を振られ、セレーネが戸惑う。

「最近はとりあえずハンターランクを上げてわかりやすく自分の地位を高めようって考えの奴が多い。そんな中でお前は頑なにレイアを1人で倒すことにこだわっていた。そのときに思ったんだ。こんな強い信念のあるハンターはどんな奴なのか、そいつと一緒に狩りをしてみたい、ってな」

「わ、私は別にそんな……」

「俺はハンターであることにまだ誇りは持てない。なりたくてなったわけじゃない、って心のどこかで思ってる。双剣だって使いたく使ってやるわけじゃない。でもこれ以外の戦い方を知らない。つまり全部が『しょうがなく』なんだ」

ここまで話し、ウルフはため息を1つ挟んだ。

「逆に、聞いていいか？」

「何？」

「なぜ、そこまで1人で狩ることと、ガンランスにこだわる？」

ピクツと一瞬セレーネの動きが止まった。

「答えたくないなら答えなくていい。ただ、『使う気がない』と言ったな。俺が同じ質問をされたら『それ以外は使えない』って言うだろうから、それが気になっただけだ」

しばしの沈黙の後、セレーネは口を開いた。

「……私は元々ハンターじゃなかった」

そう切り出す。

「これだけ知識の豊富なあんたならマイトレ、って知ってるでしょ？」

「ああ、凄腕のハンターに与えられる特別な施設だろ」

「そう。……私は元々はギルドから派遣されたその管理人だった」

驚いた様子のウルフをさておき、セレーネは続ける。

「私が契約したハンターはガンランスとランスを主に使うとても優秀で素敵な人だった。たまにしてくれるお土産話もハンターの世界をまったく知らない私にとって何より面白いものだった。エスピナスを知ってるのもその話のおかげだったりするの。……でも、話を聞いてどんなに面白いと思ってても私はマイトレの管理人であの人はハンター。一緒にその経験を分かち合うことが出来ない……。それがどうしても耐えがたかった……。そんなある日、新たに沼地に現れた強力なモンスターの調査に行くって言ってあの人は出かけていった。私はこっさりついて行って、狩場に入っちゃったの」

珍しく驚いた顔をするウルフ。

「ギルドの仲介無しにか！？……まったく無茶をする」

「今思うとほんとその通りよ。……で、着いたはいいけど道に迷っちゃって……。どうしようか困っていたらそのモンスターが突然私の前に現れたの。鋭い牙と全てを刺し殺すような眼……。そいつは私を敵だと思って天に向かって吼えた。その咆哮を聞いたら、脚がすくんで全く動けなくなつて……。そいつが息を吸い込んで、きつと攻撃が来る、私はそれで死んじゃうんだって思つて目を閉じた。でもいつまでたつてもそのときは来なくて……。目を開けたら、あの人が私の前で盾を構えて私をガードしてくれていた。その後はただ震えているだけの私の前でそのモンスターをあつさり討伐したの」

「ほう……」

「帰ってきてギルドマスターのじいさんを始めとして、皆にこつぴどく怒られたわ。でも、あの人だけは怒らなかつた。ただ、悲しい目をして私にこう聞いたの。『セレーネ、なんであんな危険なことをしたの？』って。私は泣きながら言つたわ、『だつてあなたと同じところに立ちたかつたから、待つて話を聞いているだけなんて嫌だつたから』って。あの子は驚いた顔をしたけど、すぐ真面目な顔になつてこう言つた。『ならハンターになればいい。そしてハンターとして強くなつたら、一緒にクエストに行こう』って。だから私はハンターになつて、あの子を救つてくれた武器と同じガンランスを選んだ。私はこの武器でハンターとして強くなる、そう決めたの」

ここまでを話し、セレーネはフツツと自嘲的に笑つた。

「おかしな話よね。笑いたきゃ笑っていいわよ」

「いや、むしろ逆だ」

予想外に真面目な声が返ってきてセレーネはウルフのほうを向いた。

「お前のその夢、俺にも手伝わせてくれ」

「は！？あんた何言ってるの！？」

「……今の俺には夢も何もない。ハンターとしてしか生きていけないとわかっていながら、本当にそれでいいかわからずにいる。……でもお前と一緒に狩りをしていれば何かがわかる気がする。だからそのときまで俺にも手伝わせてくれ」

「冗談で言っている、と最初は思っていたセレーネだったが、ウルフの目は真面目そのものだった。

1つため息をつき、セレーネは口を開く。

「……言っておくけど、私はハンターとしてはまだまだ未熟だし、それ以外でもかなり迷惑をかけるわよ？」

「覚悟の上だ」

そっけない返事だったが、それがこの男らしいと思い、セレーネは微笑を浮かべた。

「じゃ、改めて。セレーネ・ヴィヴェルドよ。……これからよろし

くね、ウルフ」

「……ウルフ・オブシディアンだ。こちらこそよろしくな、セレーネ」

気球の甲板上、空の中で2人は固く握手を交わした。

第3話

「一人娘」のセレーネがパーティを組み、しかもその相手が男だという噂は大衆酒場中に瞬く間に広がった。

それなら、と今までパーティを断れた男たちがこぞってセレーネをパーティに誘ったが、あっさりと却下されていった。

いらない誤解を招くかもしれないとも思ったが、別に寄り付かれるよりも楽でいいかとセレーネは開き直っていた。

「あんたはいいの？ 私は他の連中に寄り付かれるのは面倒だし、余計な誤解されたままでもいいけど。あ、でも勘違いはしないでよ？ 私は狩りのパートナーしてあなたを認めてるだけだから」

「俺は別になんでも構わん」

狩りから戻ってきて酒場で一息つきながら、セレーネとウルフはそんなやり取りをしていた。

ハンターランクが17を越えてからというもの、2人は様々なモンスターと対峙してきた。フルフル、シヨウグンギザミ、ガノトトスといった相手はなんとか狩猟までこぎつけたが、グラビモス、デアアブロス、ヴォルガノスといった強敵は実際に戦って経験を得たら、無理せずリタイアするなどということもあった。

「しかし意外だ」

「何がよ?」

手元の一杯を呷ってウルフは言った。

「てっきりプライドの塊だと思っていたが、無理な相手と判断したら退くとはな」

「ハンターは体が1番でしょ、私にだってそのぐらい……」

「その割にはこの間のフルフルで危なく感電死させられそうだったかな」

「う……。あ、あれは!……そういう時もあるわよ」

「要するに、熱くなると後先考えずに突っ走るタイプなわけか」

的確に言い当てられ、セレーネは反論できずに黙った。

「ま、お前が暴走したら俺が止めればいい、そういう役割だしな。

……それはそうと、さっきのギザミでハンターランクが22を越えたよつだが?」

「そうね。じいさんにもそう言われたわ」

セレーネが手元のカップに入った液体に口をつける。と、言ってもウルフが飲んでいる割ったホピ酒とは違い、薬草と落陽草から抽出された茶である。

「なら……そろそろ頃合だな」

スパイスワームのレッドオイル炒めなどという見るからに辛そうなものを平然とつまみながらウルフは言った。

「頃合……ね」

「火山に行ったついでにドラグライトと紅蓮石も調達した」

「ええ」

「ジャックの奴が言った方法とは違うが、これでそのスティールガンランスを強化できる」

「そうね」

「ついでにこれまでにいろんなモンスターと戦って経験も積んだ」

「……わざとあいつをさけて、ね」

手元の茶を飲み干し、セレーネは続ける。

「今度は、あのとまのようにはいかない……」

翌日、密林の狩場。

ここにセレーネは1人で来ていた。あの時の雪辱を晴らすためである。

「リオレイア……今度こそ……！」

セレーネの背には今までとはフォルムの異なる新たな武器が背負われていた。

近衛隊正式銃槍。

スティールガンランスから討伐隊正式銃槍を経て強化された、ギルドに卸されるという由緒あるガンランスである。

それにウルフが提供してくれたレイアに対する数多くの情報。

「今のお前なら、焦らなければ間違いなく勝てる」

そう言って彼は酒場からセレーネを見送っていた。

「他人事だと思って気軽に言ってくれるわね。……さて」

セレーネは狩場に着くと真っ先にある場所へと向かった。

中心の天井にぼっかりと穴の空いた洞窟、傷ついたモンスターたちが休む場所である。注意深く中に入るが、そこにレイアはいないが、それでよかった。

「よし、狙い通り……」

日の光の差し込む穴の下に行き、上を見上げる。眩しい光が目にし込み、目を細めながら穴の中心位置を探した。

「大体この辺、っと……」

そしてそこにシビレ罫を張り、洞窟の隅で息を潜めてレイアが来るのを待つ。

「あとはここで尻尾を切る……」

それこそがウルフがセレーネに教えた作戦だった。

出発前の酒場。

相変わらずホピ酒のお湯割を飲み、昼食代わりだろうかヒーヒーカレーを食べながらウルフはセレーネにレイアの情報を教えていた。

「まず、レイアの巡回ルートに天井に穴が開いた洞窟がある。俗に巣とも言われてるが。レイアがそこを巡回するとき、穴の開いた場所から洞窟に入って一度翼を休める習性がある。それを利用して、穴の下にシビレ罫を張っておき、翼を休めに来たレイアの尻尾を切る」

「別に私はレイアを倒したいだけで尻尾の素材とかいらないけど？」

「確かに尻尾は素材を欲しがる為に切られることが多いが、尻尾を切ることで攻撃のリーチを短くすることが出来る。以前お前が食らったというサマーソルトについても尻尾を切ればその分短くなるし、尻尾の振り回しもリーチが短くなる。何かと有利になるということだ」

「へえ……そうなんだ。でもさ、もし罠中に尻尾切れなかったらどうするの？1対1なんだし、この間戦ってみて尻尾に回り込むチャンスはなかったと記憶してるけど」

手元のホピ酒を1度呷ってウルフは答える。

「もし、は考えないで切れ。……とは言っても切りきれないことはありえる。そのときに尻尾を狙うなら大きく分けてチャンスは3つ。1つは突進後、ただしガンランスの場合機動力を考えると追い討ちは難しい」

「そうね……」

「2つ目はプレス時。プレス中は尻尾が隙だらけだし吐き終わりにもチャンスはある。が、これも1つ目ほどではないにしろ機動力が必要だ。難しい場合もある。そして3つ目。これが最大のチャンス。……サマーソルトの終わりだ」

「確かに。あの時は隙も大きいし、だから竜撃砲も狙える」

「加えてサマーソルトが終わったとき、あいつの尻尾は着地に合わせ下がる。尻尾を切ればあとは顔の前で我慢比べだな」

「前はそれで長引いたことが敗因だったんだけど……それについ

ては何かいい手はない？」

ウルフは苦笑を浮かべた。

「そこはお前の腕前しだいだ、特に何か言えたものじゃないと思うが……。アイテムをうまく使え、ぐらいしかアドバイスできないな。回復薬、閃光玉、罨、場合によっちゃ爆弾とかを使うのもありかもな。ありきたりだが下準備は大切だ」

「……そう言われるとこの間は下準備が足りなかったようにも感じるわね」

「ま、はっきり言って俺は特に心配してない、心配する必要がないからな」

そこまで言ってウルフはセレーネの目を見つめながら続けた。

「今のお前なら、焦らなければ間違いなく勝てる」

「フッ……」

酒場でのやり取りを思い出したとき、思わずセレーネの口から微笑がこぼれた。

（なぜだろう、あいつに「勝てる」と言われたとき、本当に負ける

わけがないと思えた)

同時に、そう思ってる自分に対してもどこかおかしさを感じたのだった。

と、そのとき、上空からなにかが羽ばたくような音が聞こえた。

(来た……!)

心臓が高鳴る。はやる気持ちを抑え、息を殺してセレーネはレイアが降りてくるのを待った。

レイアが視界に入る。

罨にも、セレーネの存在にも気づいていないようだった。

(もう少し……!)

祈るような気持ちで見つめること数秒。

『グウオオオオ!?!』

「かかったッ!」

狙い通りにレイアが罨にかかり、歓喜の声を上げてセレーネは尻尾を指し駆け出した。

「切れるっ……!」

怒涛の突きと砲撃を繰り返す。

踏み込み突き、前突き、切り上げ、砲撃、斜め突き、斜め突き、切り上げ、砲撃……。

が、レイアの尻尾が切れない。

「まずい、このままだと……」

そのセレーネの不安を裏付けるように、シビレ罫の効果が切れ、レイアが自由になる。

「間に合わなかった……」

1つ舌打ちをし、レイアの振り返りに合わせてガードを固める。

直後、レイアの放った火球が盾にぶつかり熱が拡散された。

「我慢比べ……か」

ウルフの言葉を思い出し、突きを2つ。

突進をガードしてやり過ごし、尻尾に追い討ちが出来ないかと振り返るが、やはり距離を離され追撃は困難だった。

「サマーソルトのあとを狙うしかない、か……」

サマーソルト対策のためにサマーソルトのあとを狙う。矛盾したことをやるうとしてるなとセレーネは苦笑する。

と、距離をつめたところでレイアが尻尾を振り回した。

「ま、これの対策にもなるか……」

尻尾が大振りと判断し、ガードでやりすごして竜撃砲を狙う。

「くらえっ！」

転ぶのを願って狙った一発は脚に直撃したが、レイアは一瞬怯むにとどまった。

直後にレイアが咆える。

再びガードを固めて咆哮の威力を殺ぎ、咆え終わらない頭に一撃突きを入れる。

そのとき、レイアが2歩あとずさり体が沈みこんだ。

「よし……！」

突きのあとのステップで横に抜け、サマーソルトの尻尾範囲外へ。レイアの体が宙に舞い、着地のときを狙って尻尾めがけて踏み込み突きを繰り返す。

「まだなの!？」

なかなか切れない尻尾に焦りを覚え、愚痴りながら前突き、続けて切り上げ。

『グウオオオオ!』

「よしっ！切れた！」

切り上げ中突然手ごたえが軽くなり、切れたレイアの尾が地面に落ちる。

「あとは……焦らないように戦っただけ……」

再び気を引き締め、セレーネはレイアと対峙した。

「…………ふっ」

残りわずかになったホピ酒を飲み干し、ウルフは1つため息をついた。

（今頃あいつはレイアと格闘中か）

セレーネに自信を持たせる手前、特に心配してない、などとは言ったものの、やはり心のどこかでは狩りの行方が気にはなっていた。

（帰ってくるまではまだまだ時間もかかるだろう、何か適当にクエストにでも言っただけ時間をつぶすか……）

そう思って立ち上がるうとしたとき、

「よう、ここに空いてるかい？」

陽気な声と共にウルフの正面の席に1人の男が腰掛けてきた。

赤っぽい防具を身に付けているその男は、テーブルの脇に機械仕掛けのハンマーを立てかけ、兜を脱いでその脇に置いた。兜から表れた顔は声の感じと似た明るい雰囲気を出しており、短く刈り上げられた黒い髪はクロオビショートと呼ばれる髪型だ。防具の方はところどころに棘があり、いかにも「鎧」という感じの防具だった。

「ああ、空いてる。ついでにここも空く」

話すのが面倒だというのが本音だったが、ウルフは席を立とうとする。

「なんだよ、つれないな……。ちよつとは話し相手になってくれてもいいんじゃないのか？ウルフさんよ」

席から立ち上がったウルフの動きが止まる。男は口元を緩めながらウルフを見上げていた。

「ちよつとバツシュ！また面倒ごと？」

男の後に弓を背負った女が駆け寄ってくる。

少し大人びたような優しそうな顔立ち、ブロンドの髪はナナストレートと呼ばれるロングヘアーの髪型で、その頭にはティアラをつけ、体と腰は桃色の、腕と脚には紫色をしたゴム質の防具をつけている。その防具は色合い的に若干不釣り合いにも思える。

「ほつ……」

「ごめんなさい、なんかこの人がいきなり絡んじやって……」

「でもよ、ネル。俺はこいつが1人でいるから……」

ウルフは1つ鼻を鳴らして口を開いた。

「なるほど。そちらのお嬢さんは頭はハイメタU、体と腰にフルフルU、腕と脚にゲリヨスU。こっちは全身レウスか。よく考えてあるな」

自分の装備を言い当てられ驚く2人を尻目に、ウルフは腰をおろし、店員を呼んでホピ酒のお湯割りを頼んだ。

「お前たちはどうする？1杯ぐらいならおごってやる」

「お！本当か！？じゃあ俺はこの人と同じやつを！ネル、お前は？」

「いいの？じゃあウォーミル麦酒をごちそうになるわ」

「それからホワイトレバーの串焼き3人前な！」

店員がオーダーを取って去っていく。

「俺は食い物までおごるとは言っていないが？」

「その分はこっちで出すさ。……さてと」

男は改めてウルフのほうに向き直った。

「まずは自己紹介といこうか。俺の名はバツシュ・ザファイア、器用なハンマー使いだ。器用って所以は片手剣と一応ライトボウガンも使えるところからきてる。こっちはミネルバ・ロアベルク。俺はネルと呼んでるがな。俺とは幼馴染だ」

「ウルフだ。紹介はいらないかもしれんが。……どこで俺の名を知った？」

「おいおい、覚えてないのかよ！そりゃないぜ！」

バツシュが両手を広げてオーバーに驚いてみせる。

と、ここで酒と食べ物が運ばれてきた。ホピ酒を1度呷り、

「記憶にない」

ウルフはきっぱり言い放った、

「ひっでえ……軽くショックだ……」

言いながらバツシュも酒に口をつけ、顔をしかめた。

「なんだこりゃ、アルコールが強いだけで味しないじゃねえか？」

「だからいい。余計な味もない、安上がりですぐ酔える」

「いつも通りフラヒヤビールを頼むんだ……。えーっと、なんぞ知ってるか、だったな」

「ああ」

「ちょっと前に、お前さんポケ村の酒場でトラブってたろ？」

ホピ酒を口につけながらウルフは考え込む。

「いつの話だ？」

「ほら、最近あなたと一緒にパーティを組んでる、あのセレーネって子がクエストから帰ってきて上位ハンターと言い争ってたときの」

「思い出した、ドドブラのときのことか」

「あの時止めに入ったのが俺だよ。覚えてないのか？」

「悪いな、全くだった」

バツシュは落ち込むそぶりを見せて肩を落とした。

「ま、そりゃ別にいいや。今日声をかけたのはあの『一人娘』を口説き落とした男がどんな奴か話してみたくてな。珍しく相方がいないようだったからチャンスだと思ったのさ」

「あの子、ずっと1人だったから私も1度パーティに誘ったんだけど、断られちゃって。でもあなたとは組んでるみたいだし、どんな魔法を使ったの？」

「別に何も。互いの利害が一致しただけだ」

「ふっん……」

聞かないほうがいい話題と判断したか、ミネルバはそこで話を一旦止めた。

「もう一ついいかしら？」

「なんだ」

「さっき席を立とうとしたけど私たちの装備を見て面白い、とか言っ
て立つのをやめたわよね？あれってどういう意味？」

「ああ、ミネルバさんだっけか、あんたが一式装備を使ってなかったから面白いと言った」

「そう……」

手元の麦酒に口をつけるミネルバだが、まだ質問に対して満足な回答を得られていないという顔だった。

「それだと期待した答えの半分だわ。あなたは私たちの装備を言い当てる、その上で面白いと言った。それについて聞きたいわね」

「少し装備に詳しいなら言い当てることぐらいできるだろう」

「そうかしら？私の装備は自分で言うのもあれだけど特殊な組み合わせをしてある。これは武器の特性を考えて組んだ装備だけど、それをあなたは面白いと言った。多分武器の特性と合っていると考えて言っただけでしょうけど、そんなこと普通じゃ気づかないと思うけど？」

答えずにウルフは酒を一口含む。

「……何が言いたい？」

「なんであなたがそんなに詳しいのか。それを知りたい気持ちがないわけではないけど、それだけ情報通であるなら確信が持てるわ」

ミネルバのその言葉を待っていたかのようにバツシュが続ける。

「おそらくあなたは腕が立つ……。そこで提案だ。こっちは俺とネルの2人、そっちはセレーネとあんたの2人。ここは1つ互いに協力して4人パーティを組まないか？」

「……ふう」

レイアが飛び立ったのを見てセレーネが1つため息をついた。これで何度目か、3回目までは数えていたが、おそらく5、6回目だろう。

「『今のお前なら、焦らなければ間違いなく勝てる』ねえ、『我慢比べ』ねえ……」

自嘲的に笑い、武器を研ぐ。これで砥石の数は半分を切った。

「あいつ、他人事だと思って根拠もなしに言ってるじゃない？この間とあんまり変わってない気がするわよ……」

次いで回復薬を口にする。美味とはいえない味が口の中に広がり、体の痛みと疲労が引いていく。

しかし口ではそう言いながらも、前回よりも手ごたえがあることはセレーネも感じていた。場数を踏んできたからかそもそもその被弾が少なく、加えて回復薬を調合分まで持ち込んだためにまだ余裕があった。

「まだまだ楽観は出来ないけど……」

気を引き締めなおしてレイアのあとを追う。ペイントしてあるため足取りはつかめている。

海岸線を北に抜け、そこから南東、森の中の泉へ。泉の近くに着地するレイアが見える。

「水を飲もうつての？そうはさせないわよ……！」

そつと、しかし素早く駆け寄り、セレーネは竜撃砲の体勢に入る。が、レイアもそれに気づき、咆哮を上げようと息を吸い込み首を上げた。

「遅いッ！」

一瞬早く、セレーネの竜撃砲がレイアの足元を捕らえた。堪らずレイアの巨体が崩れる。

その期を逃さずに頭めがけてコンボを決めて離脱、次に来るであろうレイアの反撃に備える。が、レイアは力なく立ち上がって切れ

た尻尾を振り回すだけだった。

予想に反した動きに戸惑いながらもセレーネは隙を見て攻撃を続ける。と、あることに気づいた。

(レイアの動きが鈍い……?)

それにさっきは水を飲んでいて、このことから導き出せる考え。

「レイアが弱っている……?」

勝てる、その思いが一瞬頭をよぎったが、すぐに払拭した。

(油断したら逆にやられる)

前回のサマーソルトで形勢が一瞬で逆転することは身に染みている。

セレーネは力で押そうとはせず、ガードを固めて根気強く攻撃を続ける。

この我慢比べに耐え切れず先に音を上げたのはレイアだった。レイアが2歩後退、体が沈みこむ。

「サマーソルト!」

今回はこのあとに竜撃砲を狙って失敗した。同じ轍は踏まない。

まず攻撃をガード、あとは突きながら様子を見る。そう決め、右腕に衝撃を覚悟した。

が、衝撃が来ない。攻撃は空振り、レイアの体が一回転する。

「そうか……尻尾を切ったせいで当たらないんだ……！だったら！」

セレーネはバックステップして風圧の外に逃げる。

次いで降りてくるレイアの頭に切り上げを放ち様子を見る。着地と同時に再びレイアの体が沈みこんだ。

「やっぱり来た……！」

『サマーソルトは2度連続で出すことがある。この間のお前の敗因だな。あれはレイアが追い詰められたときに出しやすい傾向があるそうさ。そのせいであと一歩というところで力尽きてしまうハンターは大勢いるらしい』

ウルフが教えてくれたその情報通りだった。

さっきの一撃で間合いは掴んでいる。

レイアの尻尾が空を切ったことを確認、次いで近衛隊正式銃槍の冷却が終わって放熱板が閉じていることを確認する。

「よし……！」

銃口をレイアに向け、銃身から生える炎が蒼炎となり。

「くらえっ！」

短い気合と共に、一回転が終わって滑空状態のレイアに爆炎が吸い込まれる。

直後、低い唸り声を上げながらレイアが地面に叩きつけられた。

間髪いれず、踏み込み突きで追い討ちをかけ、間合いを離す。が、レイアが起き上がらない。

「……え？」

昔ゲリヨスを狩りに行ったときは死んだフリをされて酷い目に合ったっけ、とか思い出す。まさかレイアもそんなことをするのか、しかしウルフはそんなことを注意しなかったし、聞いたこともないと考えをめぐらせる。

「まさか……」

ガードを固めるために力をこめていた右腕が下がってくる。

「勝った……の……？」

目の前のレイアはそのセレーネの問いに答えることもなく静かに横たわっていた。

脱力しかけた体を奮い立たせ、警戒したままレイアへと近づく。

陸の女王・雌火竜リオレイアは息絶えていた。

「勝った……！」

そうわかった途端、脚の力が抜けて膝から崩れ落ち、続けて武器が左腕からすり抜けた。

「勝ったんだ私……レイアを……ついにリオレイアを一人で倒したんだ……！」

瞳から熱い液体が流れてくる。

「やっと……やっとあの人に一步近づけた……」

既に傾きかけた夕日がセレーネを照らす。その夕日の中、セレーネは勝利の余韻を一人味わっていた。

「……でだ！俺がレウスの頭に一撃お見舞いしようとしたところ、ガブラスの野郎が横槍を入れてきやがった！頭に来た俺はレウスとガブラスをまとめて遙かかなたにぶっ飛ばしてやったってわけよ！」

向かいの席のハンマー使いはもう何時間話し続けてるかわからない。相当な量の酒を飲んでいるバツシュの武勇伝を延々と聞かされ、さすがのウルフも1つため息をつき、壁の時計を見た。まだ日中だったときにバツシュたちと話し始めてもうかなりになる。

その証拠に少し前に日は沈み、酒場は夕食をとるハンターも見受けられるようになった。そうなっても相変わらず目の前の男は話をやめようとせず、酒と食事だけが増えていった。

奢ってやるとか言うべきじゃなかったと思いつつ、自分の分は自分で出させるかとも思い、再び何気なく時計へと目移った。

「気になるの？」

バツシュの武勇伝の邪魔にならないように小声でミネルバが聞いてきた。多分この男は酔うといつもここでミネルバも適当に流しているのだろう、聞いてても聞いてなくても関係ないようだとかわかったウルフは、体はバツシュに向けたままで耳と意識をミネルバのほうへと向けた。

「彼女……昼頃出て行ったんでしょ？順調にいったらもう帰ってきてもいいころだと思っけど……」

ウルフは答えず目の前のホピ酒に口をつける。今日は酔えない、そう気づいたのは少し前で、それからは割らずにホピ酒を頼んでいたが、やはり酔いは回ってこなかった。

「……なぜそう思う？心配はしていないとさっき言わなかったか？」

「だったら、わざわざ強い酒を頼むことも、時間を気にすることも、ここでこいつのバカ話を聞き続ける道理もないと思っけど？」

「フン……」

肯定も否定もせずウルフは鼻で答えるだけだった。

言われてみればそうだ。なぜ帰らなかったのだろう、それ以前に帰るといふ選択肢すら思いつかなかった。

自嘲的に口元を緩め、それに気づかれないように再び酒を啣る。

「口数少ないし冷たい人かと思ったけど……仲間思いのいい人ね。彼女が羨ましいわ。実はあなたに惚れてたりするんじゃないの？」

「ないな。あいつには目標にしている人がいる。俺はただ自分のハインターとしての腕をあいつに貸してやってるだけだ」

話しすぎたな、とウルフは後悔した。その予想通りミネルバが何かを言いかけるが、

「おおい、聞いているのかネル？あのおとき俺がレイアを気絶させなかつたら今頃お前は黒コゲになってたかもしれないな。だんだんぞお！？」

「あー、はいはい……」

助かったな、と残り少なくなった酒を飲み干し、次を注文しようかと顔を上げたとき。

ガンランスを背負った少女がクエスト出発口から戻ってくるのが見えた。

「セレーネ！」

ウルフは反射的に叫びながら立ち上がっていた。そのウルフをみつけ、セレーネが駆け寄ってくる。

「やったのか？」

ウルフの問いかけにセレーネは少し表情を崩しながら頷いた。

「ありがと、ウルフ。あなたのアドバイスのおかげで勝てた……。これで少しは1人前に近づいたって自信が持てた」

もつと言んでいるかと思っただが、控えめなセレーネに疑問を抱きながらもウルフは返答した。

「そうか。だが俺のおかげじゃない、お前自身が強くなったからだ」

「そう……かな……。でもね、同時に気づいたの。あの人はまだまだ遠くにいる、だから、私はもつともつと強くなるなくちゃいけない、このぐらいで浮かれてちゃいけない、って」

(俺が感じた疑問はこれだったか)

ウルフは何も言わず席を1つ脇にずらして腰掛けた。

「……え？」

「座れ。その心がけは立派だが。……今日ぐらいは勝利の余韻に浸れ。お前の祝勝会だ。幸い祝ってくれるギャラリーも目の前に2人もいるしな」

セレーネは腰を下ろしながら目の前の2人に視線を移す。

「……誰？」

「えーっと……今日ウルフさんの話し相手をしてたものでーす……」

答えるミネルバの歯切れが悪い。それもそのはず、さつきセレーネが来た時に話を止められたせいか、バツシユはそのまま寝てしまっていた。

「店員！ホピ酒割らずに1つと特上ギガントミートステーキだ！…
…セレーネ、お前は？」

不審そうにバツシユを見るセレーネを横目に、ウルフは声を張り上げて注文をしている。ウルフにしては珍しいと思いつつも、自分のためにやってくれてるとセレーネは心の中で感謝した。

「ブレスワインとジャンボピザ、あとジャンゴネギとリュウノテールの猛牛バター炒め！…：…言っておくけど私お酒は弱いけど、今日は飲ませてもらうわよ！」

仲良さげに微笑む2人を見て、適当なところでお邪魔虫はさっさと退散するかとミネルバは心の中で思ったのだった。

第4話

「うーっ……頭痛ア……」

レイアを討伐した翌日、酷い倦怠感と頭痛と共にセレーネは目を覚ました。

昨日は結局夜遅くまで酒場に入り浸ってしまった。普段まったくといっていいほど飲まない酒なのにプレスワインを3杯飲んだあとに向かいに座った女性からウォーミル麦酒とかいう甘めの酒を勧められて2杯飲んだところまでは覚えていたが、そのあとは何を飲んだか、どうやってここまで帰ってきたかの記憶も怪しい。セレーネの数倍飲んではずのウルフが平然としてたために、負けじと意地を張ったのが原因だろう。

「えーっと……こんなときに利くやつ……」

気だるい体を起こし、アイテムボックスの中を探す。

あまり体によくなさそうな黄色い液体の入ったビンを取り出した。落陽草とハチミツを調合してできる元気ドリンクだ。滋養強壮・栄養補給の効果があり、もしかすると二日酔いにも利くかもしれない。

「ハア……」

ため息をつき、その中身を一気に飲み干す。

「……なんでこれハチミツ使ってるのにこんな不快な後味なのよ？」
良薬は口に苦し、かもしれない。言ってるそばから気だるい感じは抜けてきたような気がする。

そのまま顔を洗い、2、3度頬を叩く。

「よし……！」

レイアに勝って浮かれていたのは昨日まで。

(今日からはまた気持ちを切り替えないと)

セレーネがそう気を引き締めたその時だった。

ゴオオオオオン！！

「きゃっ……！」

すさまじい爆音と共に起きる地響き。家が揺れ、思わずセレーネはバランスを崩す。

「な、何！？」

キッチンにいるアイルーたちも慌てたように騒いでいる。

ただ事ではない。

そう直感し、愛用の武器と防具を身につけ、外に飛び出た。

「な……」

音がした方角を見てセレーネは絶句した。セレーネの居住区と反対側の街から黒煙が立ち上っていた。

ゴオオオオオン！！

今度は左手のほうから爆音が聞こえ、次いで見える黒煙。

「何よこれ……どういことよ……」

頭が思考停止し、一瞬その場に立ち尽くす。と、その近くを鎧を身にまとって槍を持った男達が通り過ぎようとする。

「あ、待って！」

セレーネの声にその中の男の1人が立ち止まる。

「なんだ！今忙しいんだ！」

「あっちのほうで煙が上がってるみたいだけど、いったい何が……」

「モンスターだよ！モンスターがこの街に攻めてきたんだ！」

「なんですって！？」

人間の村がモンスターに襲われる、ということとはよく聞く話で、ドンドルマもその対策として街に防衛の施設が作られて守護兵団も存在している。

しかしここ最近、特にセレーネがここに来てからはこれほど大事になったことはなかった。

「早く安全な場所に避難しろ！」

「私はハンターよ！何かできることがあったら……」

「だったらギルドに行つて手伝えることがないか聞いてこい！お前もこの街に暮らすハンターなら、防衛に力を貸すんだな！」

それだけを言い残し、男は走り去っていく。とにかくギルドに行こうとしたそのとき、

「お、セレーネじゃねえのか？」

聞き覚えのある顔にセレーネは振り返った。

「あんた……確か、ジャック……」

「おう、覚えていてくれて光栄だ」

ジャックは唇の端をニツと吊り上げた。

「……何の用よ？」

「おいおいご挨拶だな、つてまあ用もないがな。見かけたから声をかけたただけだ」

この男の顔を見ていると何かイライラする、とセレーネは感じて

いた。

「……あっそ。悪いけど急いでるから、用がないなら邪魔しないで」
「奇遇だな、俺も急いでるんだが……。お前、もしかして防衛戦に参加しようとしてるのか？」

振り返ろうとするセレーネの動きが止まる。

「私が住んでいる街が攻撃されてるのよ、守ろうとするのは当たり前じゃない？」

「何だ……。やっぱりそうか。いいか、忠告してやる。お前らは下位ハンターだ。防衛は俺達上位ハンターと、さらにその上の凄腕ハンターに任せておけばいいんだよ」

「な……。それ、どついう意味よ！」

「そのままの意味だ。ヒヨッコハンターの出番はないってことだ。足手まといになるから、おとなしく大衆酒場で酒でも飲んでモンスタ共が帰っていくのを待ってな」

言いたいことだけを言い終わるとジャックはそのまま走り去っていく。頭に来たセレーネは追いかけて一発ぐらい殴ってやるうかとも思ったが、それよりも防衛に回るほうが先と考えて、その気持ちを自制して大衆酒場へと走っていった。

大衆酒場の中には結構な数のハンターがいつものように席に座っていた。が、雰囲気が違う。

いつもより話し声が少なく感じるし、殺気立つような空気がある。

「セレーネ、こっちだ」

声のほうを見ると、ウルフが手招きしているのが見えた。

「どうということ!?!?どうして皆防衛に行かないの!?!?」

席に座れ、というウルフのジェスチャーを無視し、立ったままセレーネはウルフに詰め寄った。珍しく酒を飲んでいない、そのぐらいウルフも真面目に考えている状況とも取れた。

「ギルドマスターからのお達しだ。現在防衛の手はなんとか間に合ってる。もうしばらく俺達下位ハンター達は現状待機と……」

「ちょっと!?!じいさん!?!」

ウルフの言葉が終わらないうちに、セレーネはギルドのスタッフとなにやら話し込んでいるギルドマスターの元へと駆け寄った。

「……セレーネか?見てわからんか、今忙しい」

「なんでここにこんなにハンターがいるのに待機なのよ!?!どうしている間にも街の被害は広がっていくでしょ!?!?」

「おい、セレーネ……」

背後から止めようとするウルフの声が聞こえるが、セレーネはかまわず続ける。

「私だつてこの街で暮らすハンターなのよ！今すぐ防衛に……」

「落ち着け、セレーネ」

再びかけられたウルフの声に、セレーネはそこで言葉を止めた。

「……お主の気持ちはわからんでもないが」

ギルドマスターは煙草をふかして続ける。

「現在ここにいるハンターを防衛に回さなくてもなんとか守りきれている状態じゃ。無論、ここでお主達を防衛に向かわせることも出来る。じゃが、ここで新しくモンスターが来たときに素早く対応できるように、お主達を待機させておるのじゃ。モンスターが群れることは基本的にないが、興奮状態になると引かれあうように集まり、襲撃することがある。まさに今がその状態、よって現状は待機してほしいというわけじゃ」

セレーネからの反論はなかった。

「……じゃあもしここから防衛にいかないといけなくなったら、まず私に声をかけてよ」

「それなら心配ない」

三度聞こえたウルフの声に今度は振り返る。

「俺はここにいるどのハンターよりも早くここに来てギルドマスターに言つてある。『待機状態が解けたら俺のパーティに最初に声をかけてくれ』ってな」

「確かにこの若者が最初にそう申し出た。セレーネ、お主のパートナーなら焦らずに待つて……」

「ギルドマスター！」

3人の会話を割つてギルドの女性スタッフが小走りにこちらに駆け寄つてくる。

「なんじゃ？」

「大変です！新たに複数のモンスターが街に近づきつつあるとの報告です！防衛に回れるハンターの数が必要ないため、こちらからも3パーティほどのハンターに手伝ってもらいたいということですよ！」

「……じゃそうじゃ。早速出番じゃの」

ギルドマスターは2人に視線を戻し、クエスト受注書に筆を走らせる。

「して、あと2人はどこじゃ？」

「何言つてるの？私達は2人よ」

と、ギルドマスターの筆が止まった。

「ダメじゃ。防衛という失敗は許されないうえにモンスターの種類がわからない以上、4人で万全を期さないと認めることは出来ん」

「そんな！」

「セレーネのパーティなら、4人だぜ」

背後から聞こえた声にセレーネとウルフは振り向き、ギルドマス
ターも目を向ける。

「昨日酒を飲みながら約束したんでな」

そこにはハンマーを背にし、兜を手に持った男と弓を背にした女。

「……………あんた誰？」

予想もしなかった返答に声をかけた男が拍子を崩す。

「バツシュだよ！昨日そこで一緒に酒飲んでたろ！」

「……………厳密に言うとおんたはこの子が帰ってきたときからずっと酔いつぶれて寝てたから、『一緒に』飲んではいないけどね」

補足したのはミネルバだ。

「う、うるせえ！とにかく、昨日パーティを組むと……………」

「私は約束した覚えはないわよ」

セレーネがあっさり否定する。

「な……お前防衛に行きたくねえのか！」

「そりゃあ行きたいけど、してないものはしてないもの」

「こっちのウルフの旦那と話についてるんだよ！なあ、そうだろ！」

「セレーネ次第だ、としか言った覚えはない」

「またも交わされるバツシュ。」

「う、ぐぐ……。ネル、タッチだ……」

「はいはい……。でもウルフさんにパーティを組みたいという話をしたのは事実だし、あなた次第って返答ももらってるわ。もし気にいらなければ今回1回だけでもいい、4人いないと防衛戦にはいけないみたいだし、それでどうかしら？」

セレーネは一瞬考え込む。

「まあ……。そついう話なら……」

「よっしゃ！決まりだ！じいさん、俺ら4人で頼むぜ！」

「了解じゃ。……なんでもいいが、内輪もめで自爆はやめるんじゃぞ？」

「そんなことするわけねえだろ！よろしくな、セレーネ、ウルフ！」

「……こいつ、なんとかならないの？」

セレーネはバツシュからは見えないようにミネルバに声をかけた。

「防衛戦なんて初めてだつて張り切っちゃってるのよ……ごめんなさい。昨日は楽しかったわ。今日はよろしくね、セレーネちゃん」

「……そのセレーネ『ちゃん』ってのはやめて。呼び捨てでいいわ。あと、昨日薦められたけどウォーミル麦酒もしばらく飲みたいとは思わないわね」

「あらそう？残念ね。気に入ってもらえたと思ったのに……」

「……いいかの？受注完了じゃが」

ギルドマスターは先行き不安という顔で4人を見つめながら言った。

「ギルドマスター、モンスターの情報はわからないのか？」

「すまんの、まだ未確認じゃ。ただ、防衛エリアにはどこからかがブラストイーオスも侵入しておるとい話聞いておる」

「関係ねーさ、そんな雑魚はな」

気楽なバツシュだが、ウルフは小難しそうな顔をしている。

「何か気になるの？」

「ああ……相手の情報がないというのは不安だね。俺とお前は武器

が一種だからいいが、バツシュとミネルバの2人は他にも武器があるみたいだからな。敵によって相性があるから情報があれば使い分けられたんだが……。あとはガブラスとイーオスというのも気になる。本命に集中できない可能性がある」

「場所は西第16地区じゃ。守護兵団の指揮をとってる者にこいつを見せるとよからう」

そう言うとギルドマスター直筆のサインが入った紙を渡してくる。ウルフはそれを受け取ると丁寧に丸め、ポーチの中に入れた。

「いいか、あくまで防衛だけを考えるんじゃ。モンスターにダメージを与えれば逃げ帰るかもしれん。それでいいんじゃ。絶対に無理をするでないぞ」

「大丈夫、わかってる」

「大衆酒場からいの一番に飛び出して行ってやられました、じゃ笑いものになっちまうからな」

「わしはお主ら2人が心配で言ってるんじゃ……」

セレーネとバツシュが答えたのを見て、ギルドマスターは肩を落とす。

「で、その2人をコントロールするのが俺達の仕事、ってわけだ」

「ま、そういうことね」

先に酒場の出口に向かうセレーネとバツシュを追ってウルフとミ

ネルバが続いた。

第5話

ドンドルマはモンスターの襲撃に備えて街の周囲に頑強な防壁が築かれており、空から迫る敵には「バリスタ」と呼ばれる固定弩弓、大型モンスター対策としての「滅竜砲」と呼ばれる大砲、さらには巨大な機械仕掛けの槍である「撃龍槍」が備えられていた。

その防壁周辺で再び黒煙が上がる。

モンスターたちにとって難攻不落であるこのドンドルマが今攻め込まれているを証明していることに他ならない。

「西の第16地区ってどこだ？」

「私が道知ってる！」

セレーネが先導し、バツシュ、ウルフ、ミネルバが続く。目的地に近づくにつれ、街の被害が大きくなっていくのがわかる。

「こりゃひでえな……」

バツシュの感想にセレーネも同意見だった。メゼポルタ広場のあちこちで被害らしい被害もなかったが、ここは道のあちこちがえぐれ、瓦礫が散乱している。

さらに進むと倒壊している家屋が目に入ってきた。

「何よ、あの家の壊れ方……」

セレーネが疑問に思ったのはその壊れ方だった。

「焼け落ちたわけじゃない、まるで吹き飛ばされた、とでもいうよ
うな……」

「セレーネ、前だ！」

ウルフの声に反射的に目を前に向けると、赤い影が自分に覆いかぶさるように飛び掛ってきた。

すんでのところで左手側へと飛び退き、難を逃れる。

赤い鱗に鋭い爪、そして口からは獲物の体力を奪う毒液。

「イーオスカ！」

バッシュが叫びながら背中ハンマーに手をかける。

さつきギルドマスターが言っていたことを思い出す。

『ただ、防衛エリアにはどこからかガラスとイーオスカも侵入しておるとい話は聞いておる』

「何よじいさん、防衛エリアどころか街の中にも侵入されてるじゃないの！」

セレーネもガンランスに手をかけようとした。

「セレーネとバツシュはそのまま走れ！」

背後でウルフの声。振り返ればホーリーセーバーを手にイーオスを薙ぎ払っている。

「なんでよ！」

「お前達の武器は走りながらは戦いにくい、ここは俺とミネルバが抑えながら追う！それに目的はあくまで防衛エリアの大物だ！」

ウルフのさらに後方ではミネルバが愛用のパワーハンターボウを構え、上空のガブラスめがけて牽制の矢を放っている。

ガブラスは飛竜種に分類されてはいるが、「蛇竜」と言われるように蛇のように長い体と翼を持つため、他の飛竜種よりも飛竜ではないように見える。このガブラスは「不吉を呼ぶ存在」「厄災の使者」とも呼ばれ、不気味な存在として人々の間で知られていた。

「しんがりは私がやる！ウルフも2人に続いて！」

矢を放ちながら後ろに走るといふ器用な方法でミネルバは3人との距離を開けずに走っている。が、それでもイーオスとガブラスの数は増える一方で、ついにセレーネとバツシュの進行方向に4匹もイーオスの群れが現れた。

「クソツ……！」

武器を抜くべきか、やり過ぎすべきか。一瞬躊躇の後、バツシュはアイテムポーチの閃光玉に手をかけた。

と、その瞬間、横つ面を叩かれたように2匹のイーオスが吹き飛び、次いで走ってきた影に残りの2匹が吹き飛んだ。

「ちくしょう、こんなところにまでイーオスとガブラスが……！」

重そうな鎧に身を包み、槍と盾を持った男が立っていた。その後ろからはこちらにも重そうな銃のようなものを抱えた男が歩いてくる。

「あんたら……守護兵団か？」

先頭を走るセレーネとバツシュが2人の元に着き、バツシュが声をかけた。

「ハンターか？………たく今頃現れておいしいところだけもらっていくってか？」

槍を持った男が口を開き、ムツとしたセレーネが反論しようと口を開きかけた。

「だったらあんたらもハンターになればいいだろ、なかなか筋はいみちいだしな」

それより早く、バツシュが皮肉めいた答えを返す。

「ふん！ゴメンだね、俺達は街を守るといつこの職業に誇りがあるんだよ」

「だったらなおさらここで口喧嘩してる時間もないってことだ。この辺りの指揮を執ってるのはどこにいる？」

「……この道をまっすぐだ、そこに隊長がいる」

銃を持った男が無愛想に答える。その間にイーオスの相手をして
いたウルフとしんがりを務めていたミネルバが合流した。

「どうも。……こっちだとさ」

バツシュは顔で道を示し、走り出す。

「本命は残してやってるんだ、ちゃんとしないと承知しないからな
！」

背後から聞こえてきた声にバツシュは右手を上げて応えた。

「何よ、あいつら好き勝手言って……」

「そうか？ そんな悪い奴らじゃないな」

「ハア？ 本気でそう思ってるの？」

「セレーネ、お前はもうちょっと大人になったほうがいいな」

「あなたに言われたくないわよ！」

「ハハッ！ ごもつとも」

バツシュとそんなやり取りをしているうちに防衛エリアに到着。

「指揮官は誰？」

「なんだ貴様ら？」

セレーネの声にその場にいた男達のうちの1人が答える。

「ハンターだ、ギルドマスターからの要請で、この街を襲撃してるモンスターを撃退するために来た。これがギルドマスターのサインの入った書簡になる。責任者を出してくれ」

少し遅れて着いたウルフが早口に要件をまとめると、髭をはやした中年ぐらいの男が出てきてウルフの書簡を手取る。

「この区域の責任者だ。……確かに了解した。現在モンスターとは防壁の周辺で応戦中だ。なんとかそこまで後退させることに成功している」

「相手は？」

「……わからん。竜であることはわかるんだが……。強力なプレスでこちらの被害も少くない」

「レウスとかじゃなくて？」

セレーネがウルフと隊長の間に割って入る。

「そういう類の飛竜ではないな。……気をつける、銅のような鱗を持ち、こちらの攻撃の手ごたえがない。いや、むしろこちらの攻撃が届いていないのではないか、とも思える」

「どつという意味だ？」

「……バリスタは利いているようだった。が、弓銃隊の攻撃はことごとく奴に当たる前に弾かれた。まるで見えない何かに止められているように……」

「そんな竜が……」

セレーネは思わず言葉を失う。ウルフなら何か知っているんじゃないかと表情を伺ったが、珍しくモンスターの名前を出さず、むしろどこか蒼ざめているようにも見える。

「ともかく、奴はこの先のエリアにいる。イーオスとガブラスもまだいるから気をつける。俺達も出来る限りで援護はする」

「了解した。行くぞ」

ウルフが短く答え、移動を始める。

何か情報をくれるのではないかとセレーネはそのあとを期待して待ったが、ウルフは口を開こうとはしなかった。

「ねえあなた、何か心当たりがあるんじゃないの？」

街の玄関口の防衛エリアでセレーネはウルフに尋ねた。

「……ないわけじゃない」

「だったら、教えてもらえると助かるな」

この場所で相手を待つ、と提案したバツシュがイーオスを相手にしながら聞いてくる。

「……古龍、というのを知っているか？」

「レウスやレイアとはまた別？」

「別だ。あれは飛竜だ。……古龍というのは飛竜よりも高い知能を持ち、強力な力を秘めた龍のことだ。目撃例が飛竜より遥かに少なく、ギルドもその情報は必要以上に流れないように統制していて、俺もこの目で見たことはない」

「その古龍じゃないかって？」

ミネルバが上空のガブラスを撃墜しながら尋ねる。心なしか、ガブラスの数が増えているように感じる。

「ああ、俺の予想が正しければ……！」

ヒュン……ヒュン……。

ウルフの声を遮るように風斬り音のような音色が辺りに響く。

「何……この音……」

「クソツたれ……！考えたくなかった最悪の展開だ……！」

ウルフが奥歯をかみ締め、搾り出すように言った。あのウルフの焦る表情をセレーネは初めて見た。

次いで、視線は風斬り音の方へ。

銅のように茶がかった鱗、巨大な翼、その周りで渦巻くように起こっている風。

『グウオアアアッ!』

「『鋼龍』クシャルダオラだ!」

ウルフが叫び終わらないうちにセレーネとバツシュは武器を抜き、臨戦態勢に入る。

『グウオアアアッ!』

古龍がもう1度吼える。

「そんな咆哮なんか!」

盾で音の衝撃を防ぎ、セレーネが一撃を入れようと踏み込む。

「よせ!無理だ!」

その声とほぼ同時、荒れ狂う風がバツシュとセレーネの足元をすくった。

「な、なんだこりゃ!」

「くっ……！風！？」

思わず尻餅を着いたセレーネのほうにクシャルが振り向き、息を吸い込んだ。

「セレーネ！」

「そんなの……！」

竜の習性上ブレスが来ると踏んだセレーネは右手の盾をかまえる。

セレーネの予想通りクシャルはブレスを放った、が、予想以上の威力にセレーネはよろけた。

「な、何よ……こいつ……」

「このっ……！」

業を煮やしたミネルバが後ろから矢を放つ。

が、それはクシャルに届きすらせず、風の壁によって弾かれた。いや、弾かれただけではない。

「な……！」

放った矢がそのままミネルバの元へと返ってきたのだ。

間一髪でそれを交わしたミネルバだが、心のダメージは拭いきれそうにない。

「……俺達じゃ太刀打ちできん、一旦退くぞ……！」

「なんですって!？」

考えもしなかったウルフからの言葉にセレーネが非難の声を上げる。

その間にもクシャルはブレスを吐き、狙いを定めて突進してくる。

「ここで私達が逃げたら街はどうなるのよ!代わりが来るまでに被害が増える一方よ!」

「しかし俺達のカじゃ……」

クシャルの突進をよけ、ウルフが力無く言った。

「セレーネの言うとおりで。このままじゃ退けねえ!古龍だ?上等じゃねえか!」

「そうよ、このままおめおめと帰るわけにはいかない……!矢を弾かれてそのまま帰るなんてごめんだわ!」

バツシュを止めるはずのミネルバも戦う気になっている。

諦めたようにウルフはため息をついた。

「……仕方がない、やるか!ミネルバ、毒ビンはあるか?」

「もちろん!ついでに強撃と麻痺と睡眠も常備!」

「よし……!!」

ミネルバの返事を確認し、ウルフは閃光玉を投げる。眩しい光が辺りを包んだ。

「今のうちに毒ビンをつけて撃てるだけ撃て！」

「でも風で……」

「奴の風の制御力を落とす方法は3つ！目がくらんでいる状態にする、毒状態にする、頭に一定以上の衝撃を与える、だ。今なら風の邪魔は無い、その間に毒にしる！それである程度の時間奴の風の制御を防げる！」

「わかった！やってみる！」

言いが早く、ミネルバは弓に毒ビンを装着する。

「バッシユは頭だ！奴の角が折れれば風はまったく制御できなくなる！ハンマーなら気絶ぐらいは取ってみせる！」

「おうよ！ついでにこのバインドキューブで麻痺まで取ってやらあ！」

「セレーネは俺と脚に回れ！バッシユを援護する！隙があるならいつでも竜撃砲を叩き込め！」

「了解！」

叫びながらセレーネは感じた。

(やっぱりウルフはこうじゃないと締まらないわね)

口元に微笑を浮かべ、一発目の竜撃砲の体勢に入った。銃口から爆炎が放たれる、が、クシャルはダメージを受けている様子がない。

「攻撃に気をつけながら手は休めるな！」

「言われなくても！」

ウルフの声に叫び返すセレーネ。

そのとき、目がくらんだ状態のクシャルのひっかきがセレーネの目の前に迫る。

「あぶなっ……!!」

なんとかガード、ステップで頭をバツシュに譲る。

「私も頭に回ろうか？」

「いや、あの2人に任せたほうがいい。ハンマーに巻き込まれたいなら止めはしないが」

ウルフに言われたとおりにセレーネは90度向きを変え、後ろ足付近に再び陣取る。

長い間パートナーだった言うだけあって、バツシュとミネルバの連携は見事だった。

当てずっぽうに出すクシャルの引つかきとブレスの合間を縫ってバツシュが頭にハンマーを叩きつけ、離脱と同時に弓を引き絞り終えたミネルバが毒ビン着きの矢を放つ。

「こいつっ！暴れんな！」

うまく頭を殴れないことにバツシュがいらだっているようであるが、

『グウオアアアッ！』

クシャルが前足を上げて吼える。

吼え終わったとき、再びその周りで風が渦巻き、ミネルバ以外の全員が脚を取られてその場によるめいた。

「毒にしきれなかった……！」

「クソッ！こんなことならバインドキューブじゃなくてヴェノムモンスターの方を持つてくるんだった！」

起き上がり、文句を言いながらバツシュが背後に閃光玉を投げる。しかし一瞬早くクシャルがセレーネとウルフの方に振り返り、光はクシャルの視界から外れる。

が、そこまで見越していたか、ウルフも自分の背後に閃光玉を投げており、クシャルはこの閃光を正面から浴びた。

間髪いれずにミネルバがポイントを移動しながら毒付きの矢を放

っ。

「ミネルバ！まだ毒らない！？」

「わからない！……クックとかならとっくに毒になってるってのに！」

セレーネに対して答えつつ、ミネルバは内心焦っていた。

（毒ビンが足りないかもしれない……）

小さく舌打ちをし、嫌な予感を消し去るかのように矢を放ち続ける。

「ラスト……お願い！」

クシャルが再び前足を上げて吼えるのと、ミネルバが最後の毒ビンを放つのが同時だった。

その場の全員が再び風が巻き起こるのを覚悟した。

が、

「やった！」

ミネルバが歓声を上げる。

クシャルの周りの風がやんでいた。

「よっしゃ！待ってたぜ！」

バツシュが叫び、頭にハンマーを振り下ろす。その一撃は見事に決まったが、横から飛び込んできたガブラスに吹き飛ばされた。

「バツシュ！」

「ちくしょ……！この雑魚め！」

心配そうな声を上げるミネルバに手で問題ないことを伝える。

「バツシュ……！」

再びミネルバが悲痛な声を上げた。クシャルが息を吸い込みブレスを放とうとしている。

「うおっ……！」

間一髪、横にダイブしてよけるバツシュ。ブレスはバツシュがいた場所を通り、壁にぶつかってそこを大きくえぐった。

「な……！」

セレーネはゾツとした。

最初にあれを盾で防いだのだ、もしも防ぎきれなかったなら体がバラバラになったかもしれない。

「チツ……毒で風を制御できないうちに頭にダメージを与えないとまた元の木阿弥になっちまうつてのに……！」

ウルフの焦りを感じ、セレーネも頭に回ろうとするがクシャルは大きくバックステップを踏み距離をとる。

追撃をかけようと振り返るがそこにクシャルの姿がない。

「上だ！」

そのウルフの言葉通り、銅色に鈍く輝く翼を羽ばたかせたクシャルは空中に浮遊していた。

「こいつ……！」

セレーネが飛ぶクシャルの足元へと銃槍を突き上げ、次いで砲撃。

声を出し、頭を上げた素振りを見せたことに嫌がっていると判断したセレーネは続けて2発目を放とうとした。

『シユオオオ……』

いや、それは嫌がったのではない。

息を吸い込むような鳴き声の後、体全体を叩きつけるように前脚で地面を蹴ってきた。

「あつッ………！」

直撃こそしなかったものの、強烈な風圧がセレーネの頭部を揺さぶり一瞬意識がブラックアウトする。直後、砕かれた石畳の破片が降り注ぐ。

「セレーネ！」

石つぶての雨をまともに浴び、声もなくセレーネは吹き飛んだ。

「ちよつと……嘘……でしょ……？」

悲鳴も上げなかった様子にミネルバが青ざめて攻撃の手が止まった。

「ネル！攻撃をやめるな！あいつがそう簡単にくたばるわけねえ！」

ミネルバを叱咤し、バツシュが閃光を投げる。光は見事にクシャルの視界をとらえ、そのままがくように地面に落下した。

「おい、セレーネ！大丈夫か！？しつかりしろ！おい！」

その隙にウルフはセレーネに駆け寄っている。

眼を開いたまま気を失っていたセレーネだったが、ウルフに2、3度体を揺さぶられるうちに瞳に光が戻ってきた。

「いつ……たあ……」

「大丈夫か！？」

「見ての通りよ……。いつ……。今日ばかりはザザミの殻の硬さに感謝しないといけないわね……」

見れば石の破片は鎧に傷をつけていたが、体に直接ぶつかってはいないようだった。

「むしろ頭の方がぐらぐらして気持ち悪いわ……」

「最初の衝撃で脳震盪を起こしたかもしれないな。立てるか？」

「立てるわよ。戦えるわ」

ガンランスを杖代わりによろめきながら立ち上がるセレーネを見てウルフは顔をしかめる。

「無理しない方がいいが……」

「こんな私だっていないよりはマシでしょ？ 3人であいつに勝てる？」

ウルフは無言を返事の代わりにする。

「それに……前にあんたには言ったと思うけど、私は元々はギルドの人間だった。だからこの街とこのギルドが好きなの。それを、あいつらに蹂躪されるのを黙ってみているなんて私にはできないわ」

「ふ……。それだけの気迫があるなら大丈夫だな。……たのむぜ、相棒」

（相棒、か……）

心の中でウルフの言葉を反芻する。

かつては「一人娘」などと呼ばれたこともあった自分が今「相棒」と呼ばれる。そんな感覚も悪くない、そう思うと体の痛みも引いて

いくような感じさえた。

(まだ戦える！)

回復薬グレートを飲み干して1つ深呼吸し、目の前の敵を睨み付けつつ戦線に復帰するために駆け出す。

「ごめん！もう大丈夫！」

「セレーネ！」

「きつと戻ってくるって信じてたわ！」

喜びの声を上げるバツシュとミネルバだったが、声に反して戦況はよくないことが見て取れた。さっきまで消えていた風が再び起こっており、2人の顔から疲労の色が伺える。が、それでもミネルバは不敵に笑った。

「戻ってくるタイミングも予想の範囲内……！さあバツシュ！シヨ
ータイムと行くわよ！」

「おうよ！」

叫ぶなりバツシュが閃光玉を投げてクシャルの風を消す。続けてミネルバが放った矢が当たると黄色を撒き散らした。

「麻痺ビン……？」

ミネルバの矢を放つ間隔がさっきまでより短い、おそらく麻痺を取りに行っているのだろう。

暴れるクシャルの攻撃を避けながら3人はそのときを待つ。が、
ほどなくして

「止まった！」

クシャルの動きが止まった。麻痺だ、しかしそれにしては予想以上
上に早い。

「お前が戻ってくる前にある程度蓄積させていたみたいだ。あいつ
いい弓師になるかもな」

言いながら鬼人化したままウルフは尻尾に回り込む。

「バツシュ！」

「待ってました！」

すかさず頭へ。

2度殴りつけたあとに大きく振り上げる一撃。俗に「縦3」と呼
ばれる、ハンマーのもっとも単純にして最大の破壊力を持つ攻撃方
法である。

負けじとセレーネも脚目掛けて竜撃砲の体勢をとる。

「いけっ！」

気合と共に一発を放ち、踏み込みつきで距離をつめなおして突き
を入れる。

「気をつけて！そろそろ麻痺が解けるんじゃない!?」

セレーネの言葉通り、硬直が解けたクシャルが首を左右に振って今にも動き出そうとする。

「ところがぎつちよん！」

バツシュの振り上げた一撃がクシャルの頭を見事に捕らえ、上体を大きく仰け反らした後、倒れこんで地面で悶え出した。

「スタンだ！言ったら、ショータイムだってな！」

倒れこんだクシャルの頭をなおも執拗にバツシュは叩き続けながら叫んだ。

「あの2人……すごい……！」

「なかなかの連携だな……。あいつらいい夫婦になる」

ウルフがどこまで本気で言ったかはしらないが、軽口を叩く余裕は出た、とセレーネは前向きにとらえて武器を研ぎ始める。

セレーネが研ぎ終わるのと入れ替わりに今度はウルフも武器を研ぎだす。

(なんだかんだ言って私達も連携取れてるじゃないの)

一瞬そう思ったセレーネだったが、「いい夫婦になる」というウルフの言葉を思い出し、頭を振り目の前に敵に攻撃を叩き込むこと

に集中した。

(あいつと夫婦とか……ないわね)

チラリとウルフの方を見るとちょうど研ぎ終わったらしく目が合った。

なぜか赤面した気がしてセレーネはあわてて顔をそらし、クシャルへの攻撃に集中する。

同時にクシャルがスタン状態から立ち直り、1度吼えてバックスで距離をとった。頭へのダメージが利いているのか、風を纏っていない。

「チャンスだ！今なら風がない！バツシュ、ミネルバ！可能なら頭を狙って角を折ってくれ！それであいつの風の制御を完全に無力化できる！」

ウルフの声を受け、追い討ちをかけようとする2人だがクシャルがブレスを放ったために容易に近寄れない。

次いでミネルバ目掛けて突進し、すんでのところでミネルバはそれを回避する。が、再び前脚を上げて咆哮を上げ、辺りに風が渦巻きだす。

「くそつたれ……！あれだけチャンスもらって角が折れないってんじゃ……」

ハンマーを振り上げるが、風に脚をとられ、バツシュがよろめく。

「器用なハンマー使いの名が廃るってもんだろぅがよ！」

体勢を崩しながらも意地でクシャルの頭目掛けて叩きつけた。

その一撃にクシャルが大きく仰け反り、頭から何かが飛び散るのが見えた。

「折れたッ！」

次の攻撃に備えて横に転がりながらバツシュは叫んだ。その言葉通り、クシャルの周りの風がやんでいる。

チャンスとばかりにウルフが後ろ脚に乱舞を叩き込み、ミネルバの矢が翼を捕らえ、セレーネの砲撃が鱗を焦がす。

一瞬怯んだ隙を見てセレーネは竜撃砲のモーションに入った。爆炎がクシャルの後ろ脚を襲い、再び大きく仰け反る。

と、そのままクシャルが飛び上がった。

さっきの滑空状態の比ではない、遙か上空まで飛び上がっている。

「逃げた！？」

距離が遠くてはつきりとしなが、クシャルが向いている方角は街の方ではなかった。

そのまま、街とは別の方向へと力なく羽ばたいて行く。

「防衛しきった、ってところだな……」

疲れたようにウルフが声を絞り出した。

「一旦さっきの守護兵団のキャンプまで戻りましょう、ここにはまだイーオスとガブラスが残ってるし、ゆっくり出来そうにないわ」

ミネルバの意見に全員が賛成し、さっきのキャンプまで戻る事になった。

守護兵団のキャンプに4人が戻ったとき、最初に待っていたのは歓声と拍手だった。

「すげえな、あんたら！あの化け物を追っ払っちまうなんて！」

「ハンターってのはあんま好きじゃねえが、今日ばかりは感謝するぜ！」

その場の全員に歓迎されていると、さっき情報をくれた中年の指揮官が4人の前に歩み寄る。

「見事だった。残ったイーオスとガブラスの掃除は我々に任せてくれ。逃げたモンスターの行方はギルドの観測隊が追っているだろう。君達はギルドに戻って報告と、疲れているだろうその体をゆっくり休めてくれ」

「ああ、言葉に甘えさせてもらっ。後はよろしく頼んだ」

ウルフが短く受け答えその場を去ろうとする。セレーネもその背中に続いた。

「あいつ、本当に逃げたの？」

大衆酒場へと戻る帰り道、まだ傷跡が残る街を歩きながらセレーネはたずねる。

「あいつってのはクシャルのことか？ さあな。だが俺達は防衛しきった、それも古龍からな。討伐こそできなかったがそれで十分だろ」

「そう……ね。でもあそこまでいったんなら、あと一歩で倒せた気もするけど……」

「欲を張りすぎると命を縮めるぞ」

「そっついうんたは欲がなさ過ぎるって言われねえか？」

2人の会話にバツシュが割り込んできた。

「さあな」

短く答え、ウルフはそれ以上口を開こうとしなかった。どうやら本当に疲れているようだ。

やれやれ、と両手を広げてバツシュは今度はミネルバを話し相手と決める。

「……あなたは、いいの？」

「なにがだ？」

しばらく無言で道を進んでいたセレーネだったが、短くそう切り出した。後ろからバツシユとミネルバがなにやら話す声は聞こえてくるが内容まではわからない。

「もう少しでクシャルを倒せたかもしれない。そうしたら、ハンターとしての地位だとか、名声だとか、そんなものも手に入れられたかもしれない。それでも……」

「かもしれない、は仮定の話だ。実際に俺達は撃退が精一杯だった。もつとも、俺は地位も名声も興味はない。……お前そんなものを求めてたのか？」

「違うわよ！私はある人に憧れて、近づきたくてハンターになったって言ったでしょ！私が心配してるのはあなたのこと！あなたほどの腕と知識があるなら私じゃなくてもつといいハンターと組めば、さっきのクシャルを倒せたのかもしれない、その方があなたのためになったんじゃないかと思って……」

「セレーネ、俺と組むのが嫌になったのか？」

「だからなんでそうなるのよ！私にはあなたのことを純粹に心配して言うてやってるのに……。あーもういい、知らない！勝手にすれば！？」

フンとセレーネがウルフから顔を背けて言った。

「ああ、そうだな。今までもそうだったし、これからもそうさせてもらう」

いつもどおりのそっけない返事だったが、セレーネにはそれがウルフラしくて少し嬉しかった。

と、なにやら視線を感じて後ろを振り向くとバッシュとミネルバがニヤニヤしながらこちらを見ている。

「……なによ？」

「いやあおふたりさん仲がいいようで……」

「盗み聞きしてたの？」

「聞きたくなくてもあんなに声を張ってたら聞こえちゃうわよ……。まったく、セレーネちゃんったらモテモテなのね」

「その『ちゃん』ってのはやめてって言うてるでしょ。……ったく」

口ではそう言いながらもこの2人がいなかったらクシャルには勝てなかった、そう思うと多少感謝しないとはいけないとも思った。

そんなやりとりをしているうちに大衆酒場に着く。

中に入ると先ほどより明らかにハンターの数が減っていた。迎撃にでたのか、それともひと段落つきつつあるからなのか。

「じいさん、戻ったわよ」

そんな酒場の様子を横目で伺いながら、セレーネはギルドマスターの元へと歩み寄る。まだ少し忙しそうではあったが、それでもピークは過ぎたようだ。

「おお、セレーネか」

老人はどこか嬉しそうに4人の方を振り返った。

「話は聞いておる。クシャルダオラを撃退したそうじゃな。やるではないか」

「まあね」

「ギルドマスター、できれば相手の特定をしてから依頼してほしいな。今回はうまくいったが、次はそういくとも限らん。相手がクシャルとわかっていたら俺は降りた」

セレーネとギルドマスターの会話にウルフが割り込む。

「ム……。その件に関しては謝らねばならんようじゃな」

「降りた、って……あんたそれ本気で言ってるの!？」

「分が悪すぎた。下手をすれば命まで落としかねない」

「でも勝てたじゃない!」

「運がよかつただけだ」

2人の言い争いを見かねたギルドマスターが口を開く。

「これこれ、やめんか。……しかしそういうことであるならこの話はやはり他のハンターに頼むことにしようかの」

「この話って……なんのことよ?」

「実は……。ギルドの観測隊がお主らが撃退したクシャルの行き先を調べたんじゃ。その結果、北のフラヒヤ山脈に向かったということじゃった」

「雪山に……」

バツシュがぼそりと呟く。

ギルドマスターは1度煙草をふかして続けた。

「一度街を襲った以上、また来ないとも限らん。そこで討伐隊を派遣しようかという話になったんじゃが……。手負いにさせたのはお主らじゃから、お主らに頼もうと思っていたのじゃが……。断るなら他のハンターに頼もうかの……」

「待て、じいさん」

口を挟んできたのはバツシュだった。

「その依頼、セレーネが受けないって言うなら俺達だけでも受ける」

「ハア?ちょっと、横から何よ!」

「……私達はポケ村の出身なのよ」

「それとこれと関係が……」

「大有りだ。ポケ村はフラヒヤ山脈の麓の村だ。もし傷が癒えたクシャルがポケ村を襲ったら……。俺達の故郷が襲われるなんてのはゴメンだ。この街に思い入れのあるお前なら俺達の気持ちがかかるだろ？」

バツシュの言葉の通りだった。セレーネはこの街を守りたい、と
思っ
て
今
回
の
防
衛
を
真
っ
先
に
買
っ
て
出
た
の
だ
か
ら。

「あなたたち2人が断るなら私達だけでも受けさせてもらっわ」

ミネルバもバツシュと同じ考えらしい。

「わかった。とりあえずお主たち2人は受注じゃな。……して、セレーネ、お主はどうする？」

「言っまでもないでしょ。あれはもともとは私の獲物よ」

そこまで言っ
て
セ
レ
ー
ネ
は
ウ
ル
フ
の
方
を
見
た。

「……あなたが乗り気じゃないのはわかってる。でも止めても私は行くわ。この2人の気持ちはわかるし、それに……。やっぱりどうしてもこの手であいつを倒したいの。あそこまで追い詰めることが出来たんだから……」

そこまで言っ
て、
セ
レ
ー
ネ
は
微
笑
を
作
っ
た。

「今までありがとう。もしあなたの気が変わってなくて、……私が生きて帰ってこれたらまたパーティ組みましょ」

「やれやれ……」

ウルフは1つ大きく息を吐き出した。

「『生きて帰ってこれたら』じゃない。『生きて帰ってくる』んだ。……お前の無茶が俺にも移っちゃったみたいだぜ」

「ウルフ！じゃあ……！」

「俺も行く。お前達だけを行かせたら危なっかしくてしょうがないからな」

「おいおい、言ってくれるじゃねえか。……ま、礼は言うておく、ありがとよ」

フ、と1つウルフは笑った。

「必要ない、俺が決めたことだしな。……代わりと言っちゃなんだが、1つ条件がある」

第6話

フラヒヤ山脈。かつてセレーネは公式狩猟試験として、ここにドブラを狩猟しに来たこともあった。

「昼だつてのに相変わらず冷えるわね……」

「そうか？俺達はこの辺出身だから慣れちまつてるのかな。ま、どっちにしるホットドリンクか強走薬飲めば関係ないだろ」

セレーネの言ったとおり今は昼である。

ウルフが出した条件、それは「自分のアドバイスを出来るだけ受け入れて欲しい」というものだった。全員の暴走を止める役割のウルフからの、ほぼ当然ともいえる要求に誰からも異論は出なかった。

だが、雪山の拠点となるポツケ村に着いたとき、ウルフから出た言葉は誰も予想していないものだった。

「それにしてもゆっくり休んじゃってよかったわけ？」

「しつこいぞセレーネ。確かにクシャルも弱っているかもしれないが俺達の体の疲労もかなり溜まっている。……これでこの説明は3回目じゃないか？」

「あーはいはい、そうでしたね」

ふてくされたようにセレーネが言う。

「しかし旦那の言うこともわかるが……。俺もそのまま突撃に一票
だったけどな」

「いいだろう、もう1回説明してやる。いくら弱っているとはい
えクシャルダオラは古龍だ。その……」

「その古龍にこちらが万全な状態で望まなければ勝ち目はない。そ
の結果例え長期戦になったとしても、こちらの状態が万全でないな
らまだ長期戦になるほうがいい。……もう2回も聞いたら覚えるわ
よ」

「わかってるならいい」

あくまでウルフは万全な状態で挑むことを主張し、仕方なくでは
あるが、結果として3人はそれを飲んだ。

結局ポツケ村に着いたその日はゆっくり休み、日が空けた翌日に
クシャルを討伐に雪山にやってきたのだ。

「……で、クシャルさんは頂上にいるってことでいいのかしらね？」
どうも口調が嫌らしくなってるかな、と思いつつセレーネは言っ
た。

「そう見るのが妥当だろうな」

気にもかけずにウルフが答える。

山の麓から登り始めてそろそろ半時は経とうかとしており、現在は狩猟試験でドドブラと戦った場所、頂上まではもうすぐだ。

「ねえ……気になってることがあるんだけどさ……」

「なんだ？」

「前に公式試験のドドブラで来たとき……こんなに吹雪いてた？」

セレーネの言葉通り、頂上に近づくにつれて辺りは視界が悪いほどに吹雪になっている。

「変ね……。確かにフラヒヤ山脈は生物の生息環境としては厳しいところではあるけど……。それでもこんなに吹雪くことってあったかしら……？」

「俺も見たことがねえ。俺はガキの頃からガウシカやらポポやらを狩りに来てたし、ネルよりこの山に来たことが多いはずなんだが……」

バッシュとミネルバの言葉を聞いてか、ウルフが静かに口を開いた。

「……クシャルダオラは別名『鋼籠』と呼ばれている。だがあいつには他にも別な名がある。知ってるか？」

「わかるわけないでしょ、昨日初めて存在も名前も知ったんだもの」
より厳しくなる吹雪に苛立ったようにセレーネは言い切る。

「1つは『風翔龍』だ。風を操るあいつにふさわしい名前ってわけだ。そしてもう1つが……」

白銀の視界の中、先のほうで何かが動いたように見える。

初めおぼろげだったその輪郭は、銀色に輝くようにも見え、次第に龍の姿を形作っていく。

「……『吹雪の召喚者』だ」

背筋に何か冷たい物が押し付けられた気がした。ホットドリンクを飲んだはずなのにこの吹雪の視覚的影響のせいか。

(いや、違う)

セレーネはなぜクシャルが「古龍」と呼ばれ怖れられているかを悟った。

目の前の吹雪、まるでその中心にその龍は立っているようだった。

いや、「ようだった」ではない。実際にそいつは吹雪の中心にいたのだ。

「さあて……。第2ラウンドと行くのか……！」

微笑を浮かべながらつぶやいたウルフがポーチから取り出した強走薬を一気に飲み干す。

自分に迫る人間達を確認したクシャルは前足を挙げ、咆哮を上げ

た。

「ちよ、ちよっと待ってよ！あいつ本当に私達が戦ったクシャルなの！？」

「鱗の色が変わってないか！？ウルフさんよ、どういことだよ！」

セレーネとバツシュが続けて叫んだ。

「昨日街で戦ったクシャルは脱皮直前だったようだな。クシャルは脱皮を繰り返して成長すると言われている。錆付きつつある甲殻を脱いだ、こいつがクシャルダオラの本当の姿と言ってもいいだろう」

「冷静な説明どうも！それでこいつがターゲットでいいんでしょうね？」

「翼を見る。どんなに殻を脱いでも傷まで完全に消えることはない。あれは昨日ミネルバがつけた傷だ。……さて、おしゃべりはこの辺にするか」

ウルフがその場から飛び退く。

一瞬遅れてそこをクシャルのプレスが通り過ぎた。

「角は！？昨日へし折ったじゃねえか！」

「古龍種にとって制御器官でもある角は再生することが確認されているらしい。……と、いうわけでバツシュ、ミネルバ、あとは任せろぜ」

そこまで言ってウルフは閃光玉を投げた。眩い光が降りしきる雪に反射し、辺りを照らし出す。

「まったく気安く言ってくれるわね……！バツシュ、いくわよ！」

「おうよ！」

ミネルバは毒ビンを着用し、バツシュは左手を背に回して獲物を手にする。

今回バツシュの武器はハンマーではなかった。

「ウルフの奴、角が再生するとわかってたからわざわざ俺にこいつを持たせたってわけか……！」

バツシュの左手に握られた武器はさながら小型の斧のようだった。

デッドリイタバルジンと呼ばれるその戦斧は、ゲリヨスやイーオスから手に入る毒袋を使って刃に毒をコーティングした片手剣である。

ウルフはバツシュが片手剣も使えると聞いていたことを覚えていて、毒片手剣を使うことを要求した。

「閃光で一時的に風を制御できなくし、その間に毒片手と毒ビンで毒状態にする」

バツシュはゲリヨスの頭を模して作られた毒ハンマーのヴェノムモンスターも所持しており、そちらを使うことも提案したが、ウルフはあくまで片手剣にこだわった。

「確かにお前のハンマーの腕は認める。あのクシャルからスタンを取るぐらいだからな。だがそのスタンと加えてハンマーの攻撃力、その分を考えても常時毒にできる方を俺は重視したい。とにかくあの風の鎧をなんとかしないとどうしようもない」

昨日移動中の気球でウルフに言われた言葉だった。

「だったらその期待に応えないとな……！」

迎撃戦のときのウルフのポジションと交代し、バツシユが後ろ足に、ウルフが顔に張り付く。これはダメージよりも毒の蓄積を重視したいバツシユが手数を稼ぎ、代わりにウルフがアタッカーの役を受けると言う意味でもあった。

そのウルフは、ひっかきの間を縫うように目がくらんだままのクシャルの頭に攻撃を入れる。

基本的には昨日と同じ戦い方だった。

あとは毒になって風を制御できなくなったところで角を折り、完全に制御できなくする。そうなればこちらのペースになる。

一瞬セレーネの頭に楽観的な考えがよぎったが、気を引き締め直し再び後ろ足に狙いを定める。と、クシャルが前足を上げて吼える。

閃光が解けたのだ。

龍風圧が来るのを覚悟してセレーネは身構える。が、そのときはこなかった。

「よっしゃ！やった！」

バツシュが叫ぶ。その言葉に変わらず、クシャルの周りからは風が消えていた。

毒状態になったクシャルが風を制御できなくなったのだ。

「オツケー！よくやったわ、バツシュ！」

バツシュに労いの言葉をかけながらミネルバはそれまでつけていたピンを外し、新たに付け直す。すぐさま放たれた矢は黄色の煙を纏いながら風の制御がきかないクシャルの頭に直撃した。

「よし……！あとはこのまま押し切ってやる……！」

ここまでガードを固めてきたセレーネが攻勢に出る。クシャルの横っ腹を狙って竜撃砲。

その様子を見ていた3人も攻勢へと転じ始めた。

普段バツシュと見事な連携を見せるミネルバだが、それは連携の相手がウルフになっても見事だった。

（と、いうよりウルフの動きが良すぎる、ってところか……）

数発の斬撃を入れ、注意がウルフに向いて引つ掻きがきたところで離脱、そこに狙い済ましたミネルバの一撃が突き刺さる。

自分以外に攻撃の目が向けばすかさず乱舞を叩き込む。

後ろに目があるのかと思うほどウルフの位置取りはすばらしく、ミネルバは麻痺ビンによる麻痺を蓄積させていく。

(これはこいつと組むと余計な心配をしないで済む、とても狩りやすい……。『一人娘』のハートを射止めたのも納得ね……)

我ながら戦闘中に余計なことを考えたミネルバは自嘲的に鼻で笑った。

続けて放たれた矢は翼に吸い込まれる。

と、クシャルの体が硬直した。麻痺である。

「来い、セレーネ！」

ウルフは叫ぶとクシャルの頭を中心よりやや右側に陣取った。

「了解！」

空いた左側に駆けつけたセレーネが踏み込み突きを入れる。

3連突きからステップしたときを見計らってミネルバがセレーネの攻撃位置へと矢を放つ。見事な波状攻撃。

「ケッ、俺だけ除け者かよ……」

クシャルの頭付近で奏でられる双剣、銃槍、弓の三重奏から外れているバツシュが1人愚痴た。

(とはいえ、ありゃあ俺が入る余地はねえ。いい連携だ、「一人娘」が聞いて呆れるぜ……)

フン、とバツシュが鼻を鳴らす。

直後、クシャルの麻痺が解けた。が、今度は大きくよろめいて地面に倒れこむ。

「よし！折った！」

珍しくウルフが興奮したような声を上げる。

見れば街を襲撃したとき同様、クシャルの角が折れていた。これで風の制御はできなくなるはずである。

「畳み掛ける！」

倒れたクシャルの前脚を狙ってセレーネの猛攻、ウルフもすかさず乱舞を繰り出す。

起き上がったクシャルは嫌がるように後方へと大きくバツクステップした。

「逃げるな……！」

確かな手ごたえを感じていただけに、ここで間を取られたのをセレーネは不快に思った。

追いかけてようとクシャルの姿を追おうとする。が、風を制御できなくしたはずなのに未だ吹雪は収まらず、鋼龍の姿は白雪の中に見

えなくなる。

「クツ……!!」

慌てて追撃のために武器を背負いなおし、真っ直ぐクシャルへとセレーネが走る。

その「真っ直ぐ」が優勢と見たセレーネの心の甘さだったのかもしれない。

「セレーネ！ガードだ！」

吹雪の中から聞こえたウルフの声に反射的にセレーネは盾を構える。

うつすらと見えたクシャルは空中に滑空し、今まさにブレスを吐こうとしていた。

「ヤバ……!!」

力をこめた腕にブレスの衝撃が走る。

「くっ……!!」

十分に準備しきれなかったために腕が痺れる。思わず盾を持った腕が下がりがかけた。

「ガードを解くな！」

ウルフの声にしかめていた眼をクシャルに向けると、既に第二撃

の準備に入っている。

「2連発……！」

慌てて痺れる腕に力を入れなおして盾を構えなおす。それとほぼ同時に盾から重い衝撃が走ってきた。

「ああうっ……！」

なんとか防ぎきったが腕に力が入らなく、セレーネの右腕がだらりと下がる。

「セレーネ！」

三度聞こえたウルフの声に顔を上げ、セレーネは背中に何か冷たいものが走った気がした。

クシャルが大きく息を吸い込む。

「ちょっと……冗談でしょ……！」

ガードをしようにも腕が動かない。回避も間に合わない。

(やられる……！)

死、という恐怖を感じ、セレーネは反射的に眼を閉じて体を強張らせた。

横殴りの衝撃がセレーネの体にぶつかり、そのまま倒れこむ。

(…………え？横から…………？)

予想以上に受けた衝撃が少ない。体も深刻なダメージを受けた様子はなく、開けた目に雪が入る。

「私…………生きてる…………？」

自分がほぼ無傷であることに驚きながら体を起こしたセレーネは、次の瞬間より驚愕する光景を目の当たりにした。

「ウソ…………」

それまでセレーネがいたはずの場所にウルフが倒れていた。

横殴りの衝撃、無傷の自分、倒れているウルフ。

セレーネの頭の中で考えたくもない一本の線が出来上がっていく。

ウルフは自分をかばってクシャルのブレスを受けた。

「ウソ…………でしょ…………？」

覚束ない足取りでセレーネがウルフへと駆け寄る。

「ウソでしょ…………？ねえ、ウソって言うてよ…………！」

セレーネがウルフの肩を揺する。

返事はなく、ガクンとその頭が返った。

ウルフの顔は青白く、唇の色は紫がかった。

「あ……あ……」

腕が震える。寒い。ホットドリンクを飲んでいるのに。

(違う、そんなじゃない)

ガタガタと体が震えだす。

(誰のせい？私のせいだ。私のせいでウルフがこんな……)

「セレーネ！」

横から聞こえたミネルバの声に我に戻る。

「ミ、ミネルバ……！私の……私のせいでウルフが……！」

パンツッ！

左頬に痛みが走った。叩かれた、と気づいたのはその後だった。

「しつかりしなさい！まだウルフが死んだと決まったわけじゃないでしょ！」

「で、でも……どうしたら……」

「いい？まずはウルフを連れてこの付近から離脱して安全な場所に行つて。この吹雪と古龍が相手つてことでアイルーたちは近づけないと思う。だから運び屋のアイルーたちが来れる安全な場所まで行

くこと。わかった？」

「だけどそんなことしたら……」

「私達のことには心配しないで。今もバツシュが1人であいつをひきつけてるし、なんとかなる」

気づかなかったがクシャルの攻撃がまったく来ないところを考えるとバツシュがうまくひきつけているということだろう。

「そしたら次は応急処置。秘薬あるならそれを飲ませて……あとはあなたの判断に任せる。……とにかく諦めないで！」

訴えかけるような、何かを願うような眼。

「わかった……ウルフは絶対に死なせない……。だから、あなたたちも死なないで……！」

フツ、とミネルバは笑った。

「当たり前よ。誰に言ってるの？……さ、行って！」

力強いミネルバの言葉を受け、セレーネはウルフの腕を肩にかけて背負う。そこまですを確認して、ミネルバはバツシュの元へと走った。

振り向いてセレーネの様子を確認したかったが、この吹雪ではもう見えなくなっているだろう。ウルフのことも心配だが、バツシュのことも気にかかる。

パートナーの元へと急ぐ。

幸いにしてバツシュはまだ健在で、なんとかクシャルと対峙していた。

声を掛けるより先に弓を引き絞り、クシャルに向かって放つ。新
手の敵を感じたか、クシャルはミネルバのほうへと向き直った。

「おせーぞ！ネル！」

短く文句を言うが、その語気からはどこか安心したような感じが感じ取れた。

「ゴメン！さすがバツシュね、よく耐えたわ！」

「あたりめーだ！俺を誰だと思ってんだ！……と言いたいところだが、正直かなりきつかったがな」

あのバツシュが珍しく弱気になっている。それほどこの相手が強いということだ。

「ウルフは？」

「わからない……まだ息はあったみたいだから、あとはあの子の応急処置次第ってとこね」

自分目掛けて放たれた必殺のブレスを間一髪で避け、クシャルの頭目掛けて矢を放つ。

（あの子の手前、強がって見せたけど……）

次の矢を番いながら自分の心の正直なところに気づき、内心歯噛みする思いだった。

(今日ばかりは……腹をくくらないといけないかもしれない……)

「よし、ここまでくれば……」

バッシュとミネルバがクシャルと戦っている場所から数分走った場所。

本当はもっと離れたかったが一刻も早くウルフの手当てをしないといけない。

(いや、もしかしたら手当て以前に……)

嫌な考えを消すように頭を振り、そっとウルフを降ろすと首元に指を当てて脈を確認する。

「よかった……まだ息はある」

だがまだ安心は出来ない。クシャルのあのブレスをまともに浴びたはずなのだ、時間と共にどんな影響が出るかわからない。

実際、他のモンスターを例にすると、ゲリヨスの毒は最初は体の

だるさを覚える程度である。

しかし何も対処をしなかった場合、時間が経つにつれ頭痛、眩暈、吐き気、最終的には身体の諸機能の不全を引き起こし死に至る。

だがこれは解毒草とアオキノコを調合して出来る解毒薬で応急処置ができる。あるいは体の自然治癒力を強化するにが虫を摂取することでも一応の処置となる。

つまり一刻も早くウルフの状態を把握し、対策をとることを求められているのである。

「まずは体力の回復を……」

セレーネはアイテムポーチから秘薬を取り出す。体のダメージを回復し、痛みを和らげる薬である。

それなりに貴重品であるし使いすぎは体に毒となるが、今はそんなことは言ってもらえない。

「ウルフ、これを飲んで……」

お世辞にも体によさそうとはいえない黒い塊をウルフの青くなりつつある唇の中に入れる。

「飲み込んで……!!」

が、ウルフはそれを飲み込もうとする気配がなかった。

「ねえ！飲み込んで！飲まないと死んじゃうのよ!!」

そんなセレーネの必死の願いも通じず、口から秘薬がポロリと落ちた。

「そ、そんな……」

もはや自分で飲み込むだけの体力もないのだ。

「このままじゃウルフが……」

(どつする？どつしたらいい?)

焦るセレーネの頭に1つの方法が思い浮かんだ。

(そうだ！昔あの人私が寝てるときにしてきたあのいたずら……あれで思わず漢方薬を飲まされて……。……もうどうこう考えてる暇はない……。これしか……。！)

おもむろに秘薬を自分の口に運ぶ。それを噛み砕き　セレーネはウルフの唇に自分の唇をゆっくりと重ねた。

氷のような冷たい感覚が唇に触れるのを感じながら、セレーネは口の中の秘薬をゆっくりと流し込んでいく。

さっきは飲むことができなかったウルフも今度は少しずつそれを飲み込み、セレーネは口の中にあった秘薬を全て移した。

「フウツ……。！これでひとまずよし……。あとは……」

自分とウルフの唾液で塗れた口元を手の甲でぬぐいつつ、アイテ

ムポーチの中を探る。

「体温が下がってるみたいだからホットドリンクを飲めば……」

ウルフはさつきまで強走薬を飲んで戦っていた。ホットドリンクを飲ませて効果があるかは不明だが、なにもしないよりはマシ、とセレーネは考えた。

秘薬と同じ要領で口に含みウルフの口に持っていく。2度、3度と繰り返し、ようやく容器の中の液体を空にした。

「ウルフ！しっかりして！ウルフ！」

頬に両手を当てて顔を揺する。ホットドリンクを飲ませたはずなのにウルフの顔はまだ冷たい。

「なんで……！」

手袋を取り、ウルフの手を直に触る。

冷たい。

まるで氷のようだ。

「ホットドリンクだけじゃダメだ……。なにか外部から暖める方法を考えないと……」

火を焚こうにもこの雪ではすぐ消える可能性もある、なによりこの辺りには木や油がない。

「どっする……どっすねば……！」

ウルフの手を両手で強く握り締め、必死にセレーネは頭を働かせる。

急がなくてはいけない。

こうしている間にもウルフの命の火が消えようとしているのだが何も頭には浮かんでこない。

(嫌だ……死んじゃ嫌だ……！)

眼に熱いものが溜まっていく。溢れ出たそれは頬を伝い、雫となつて雪に落ちた。

「嫌だ……嫌だ……！ウルフ……！」

そのままセレーネが声を出して泣き出しかねない、というその時だった。

「う……」

それまで意識を失っていたウルフがうめいた。

「ウルフ!？」

セレーネがウルフの顔を覗き込む。

「セレーネ……か……?ということ……どうやらまだ死んじやいないみたいだな……」

搾り出すようにウルフはそう言った。

「よかった……」

安堵から大きく息を吐くセレーネ。

「なんだ、お前……泣いてるのか……？」

「えっ……！？」

そういえばつい今まで泣いていたことを思い出し、セレーネは慌てて指で眼を拭った。

「な、泣いてなんかないわよ！」

「ウソ付け……眼が真っ赤だぞ……」

「こ、これは……」

フツ、と1つウルフは笑った。が、直後小さくうめき声を上げる。

「ウルフ！？」

「……無駄話はこちらまでにするか……。俺があいつのブレスを食らってから……どのくらいだ……？」

「えっと……まだ10分と経ってないくらい……」

「俺に何かしたか……？」

「な、何かって……」

さっき、もしかして意識が戻っていたのか、だとしたら……。

先刻のことを思い出し、思わず顔が熱くなる。

「応急処置のことだよ……。なんだ、何か言えないようなことでもしたのか……？」

「し、してないわよ！えっと、秘薬とホットドリンクを……。その……飲ませたぐらい……」

再び先ほどのことが頭によみがえり、途中から言葉が小さくなる。

「そうか……。……セレネ、今竜撃砲は撃てる状態か……？」

「え？え、ええ……。もう冷却が終わってるから撃てるけど……」

「よし……。竜撃砲を撃て」

「は？それに何の意味が……」

「いいから撃て……。俺に向かっては撃つなよ」

ウルフの狙いがわからないまま、とりあえず言われたとおりにセレネはあさつての方向へと竜撃砲を放つ。放熱板が撥ね上がり、銃身の熱を逃がそうとし始める。

「撃ったわよ？どうしたらいい？」

「そしたら……ここにそいつを突き立ててくれ……」

ウルフが顎で示したのは自分の左手から少し離れたところ。

まだ意図が読めないが、指示通り雪にガンランスを突き立てる。

ジュウツ！という音を立て、そこにあつた雪が見る見る融け、湯気を上げていく。

「よし……！」

右手を動かし、左手の手袋を外そうとする。

慌てて駆け寄り、セレーネはウルフの上体を起こすのと左手の手袋を外すのを手伝う。

「すまない……。ついでに足の方も脱がせてもらえないか……？」

「いいけど……」

ますます何をしようとしてるのかわからないまま靴を脱がせる。

「よし……これで……！」

ウルフは上体を起こし、おもむろに剥き出しになった両手と両足を雪が解けた場所へと突っ込んだ。

「ぐっ……！」

「そっか……！ 竜撃砲後の放熱を使って雪を溶かし、即席の風呂を作る……！」

「本当は全身浸かりたいが……クツ……！ ホットを飲んでるなら効果の利きにくい末梢部分を暖めれば何とかなる……」

「さすがウルフ……まったく思いつかなかったわ……」

セレーネが感心した声を上げる。

「親父に狩場で生き残るための方法は一通り叩き込まれたからな……」

「そっか……。……湯加減はどう？ 暖かくて気持ちいい？」

心に余裕が出たのか、冗談交じりでセレーネが問いかけた。

「はっきり言って……ツツ……！ 最悪だ……。無数の針で突き刺されてるような感じとでも言っつかな……」

「えっ……」

「凍傷になりかけの部分を無理矢理暖めてるんだ……。こつもなる……」

「そ、それ大丈夫なの……？」

「壊死するよりは数倍マシだ……。……とはいえ……ッ！ さすがに……辛いな……」

奥歯を食いしばり、天を仰いでから、ウルフは口を開いた。

「……セレーネ、何か話をしてくれ。気を紛らわせたい……」

「話って何を……」

「何でもいい……。そうだな……。じゃあお前がまだマイトレの管理人をしていたときの……。その主人の話をしてくれないか……？」

「いいけど……」

「まだその人の名前も聞いてないんだ……。話してくれよ」

「……わかったわ」

ふう、と一つ息を吐いてセレーネは話し出した。

「あの人……。名前は『ダフネ』って言うの。凄腕ハンターの中でも屈指のハンターらしいわ。ギルドからの信頼も厚くて、難しそうな依頼を頼む場合の有力候補ぐらいらしくて」

「そいつはすごいな……」

「ええ……。実際戦ってるのを見たのは……。前に言ったと思うけど、勝手に狩場に追いかけて行ったときだけなんだけどね。『自分が死ぬかもしれない』という恐怖よりあの人の華麗な戦いに心奪われた。いつも話に聞いていたあの人はこんなに凄いんだ、私もあんな風になりたい、って思ったのは覚えてる」

「ガンランスを使うようになったのは……。その、ダフネさんが使っ

「てたからだっただか？」

「ええ。といつても使う頻度が高かった、ってぐらいで、ランスも比較的多いって言うていたけど、ほぼどの武器も使えてたみたい。私を助けてくれたときはガンランスだったけど……」

懐かしむようにセレーネは言った。

「……ところで気になってたんだが」

「何？」

「元マイトレの管理人、だよな？」

「そつよ？」

「……本当に管理できてたのか？」

「なッ……！」

右手が上がりかけたがすんでのところで自重する。相手は怪我人だ。

「……どういう意味よ？」

なるべく平静を装ってセレーネは尋ねる。

「こりゃ失礼、失言だったかな……。そのままの意味だが……。こついつちやなんだが、お前がマイトレの管理をしている姿が想像できなくてな」

「こう見えても私はアイルー広場のアイルーたちには結構評判がよかったのよ?……まあ時々料理を作って、失敗しちゃったりして渋い顔されちゃったときもあったけど……」

「それはお前らしいといえはお前らしいな……」

ジツとセレーネはウルフの顔を睨む。気にかけない様子でウルフは続ける。

「他にはどんなことしてたんだ?」

「そのアイルーたちの相手が多かったかな。あとは雑草を処理したり、いつあの人帰ってきてもいいように掃除したり」

「結構大変そうだな……」

「そうでもないわ。1番大変なのは……ダフネが命を懸けて戦っているのに私は待つてることしか出来ない、って考えながら待つてるときだった……。このままだと私は永遠にあの人と同じ場所に立ってないって悩んで……。……ま、私はハンターのほうが性に合ってるってことかしら」

フフツとセレーネが笑った。

「でもハンターになったとしても、ダフネは私よりも遙か先にいて、まだまったく届かない……。それでもあの方は私の目標で、いつかきつと追いついてみせる……」

「……目標、か」

ポツリとウルフがつぶやく。

「目標って言葉でごまかしてないか？」

「は？なにがよ」

「お前、そのダフネさんのこと、好きなんだろう？」

「な……！す、好きって……！」

セレーネの顔が紅くなる。

「わかりやすい反応だな……」

「……ま、まあそりゃあ好きか嫌いかっていわれたら好き、だけど……。でも、なんていうか、そういうのとは少し違うというか……」

「……素直じゃないようで、意外と正直な奴だな。からかい甲斐がある」

「あつそ！悪かったわね！」

唇を尖らせ、セレーネはそっぽを向いた。

「悪い悪い、つい調子に乗りすぎた。……レイアを1人で倒したことをダフネさんは？」

話題が戻ったことで機嫌を直したか、セレーネはウルフのほうを

向きなおした後で首を横に振る。

「どこにいるか連絡をつけられないし、それにやっとスタートラインに立ったただけなもの。もっと先に進んでから報告したいわ」

「そうか……」

ここまで話し、2人の会話が1度途切れた。

「……そういえば、まだ謝ってなかったわね」

その沈黙を破るようにセレーネが口を開く。

「謝る？何をだ？」

「私をかばったせいであいつのプレスをくらって……ゴメン……」

「お前のせいじゃない。気にするな」

「でも……」

「ドンドルマを出るときに言ったはずだ。『生きて帰って来る』ってな。それを思い出したら……体が勝手に動いちゃった。……もつとも、お前をかばったのはそれほど分が悪い賭けじゃなかったが」

「え？どういうこと？」

「おそらく死にはしない、と踏んだから飛び込めた」

「何言ってるのよ……説明して」

「あいつは滑空状態から3発ブレスを撃ってきたな」

「ええ」

「3発とも空中から斜めに、同じ角度で撃ってきた。……いや、厳密には2発目までは同じ角度で撃ってきたのを確認した」

「それで？」

「1発、2発目とガードしたお前の位置は少しずつ後ろにずれた。だから3発目、お前を突き飛ばしながら位置を後ろにずらし、直撃を避けた」

「……あの一瞬でそこまで見抜くとはさすがウルフ……」

そこまで言っただけでセレネはあることに気づき、背筋に冷たいものが走る感覚を覚えた。

例えそれに気づいたとして、直撃ではないにしろブレスが当たる、というのはわかってはいるはずだ。

（死ぬかもしれないブレスに自ら飛び込んで私をかばったっていうの！？）

「直撃じゃなかったが、さすがに古龍のブレスは効いたな。体に影響が出ると思ったが一瞬であそこまで体温を奪われるとは思ってなかった。今こうして話してもらえるのもお前の応急処置のおかげかな」

「え？え、ええ……」

セレーネが半ば上の空で返事をしたときだった。

「ニヤー！遅くニヤって申し訳ないニヤ！」

荷車を引いた4匹ほどのアイルーたちが2人の元へと駆け寄ってきた。

「負傷したハンターさんを運びに来たニヤ！頂上付近の吹雪が強すぎるのと相手が相手なだけに手間取ってしまったニヤ」

力尽き戦えなくなったハンターをベースキャンプへと運ぶアイルーたちである。

彼らの働きのおかげで一命を取り留めたというハンターは大勢おり、セレーネもレイアと初めて戦い敗れたときにアイルーのおかげで助かったハンターであった。

「えっと……力尽きたハンターがいたって聞いたんニヤけど……」

「ああ、こつちよ。今応急処置中」

「いや、もう大丈夫だ」

見ればさっきまでと変わってウルフの顔に血色が戻ってきており、即席の風呂から出した手の感覚を確かめている。

「助かった、セレーネ。話をしてくれたおかげで痛みから気を逸らすことが出来た」

「それはどうも。じゃああとは村に戻って正式な検査を受けた方がいいわ」

「ああ、そうだな。だが……」

ウルフは足もお湯から出し、拭いてから靴を履きなおす。

「……それはあいつを倒してからだ」

「ちょ、ちょっと何言ってるの！直撃じゃないとか言ってたけど、プレスをもらってるのよ！」

「ああ。……だがさっきも言ったはずだ。『生きて帰ってくる』と。これは全員だ、今もクシャルと戦っているバツシユとミネルバを含めた4人全員だ」

セレーネはハツとした。忘れていたわけではない、しかしウルフのことで頭が一杯だった。

「俺はまだ戦える。今確かめたが手も動くし足も問題ない。……多少体にダメージが残ってはいるが、さほど支障はない」

「……全員、っていうのはあんたも入ってるのよ？それはわかってる？」

「当たり前だ。俺も死ぬつもりはない」

そこまで言ってセレーネから反論が来ないのを確認し、ウルフはアイルーたちのほうを向き直った。

「……そういうわけだ。悪いがまだ俺はキャンプに戻るわけにはいかないからな。無駄足を食わせたな」

「いいニヤいいニヤ。ハンターさんたちが元気ならボクらはそれでいいニヤ」

「そつだニヤ。給料さえもらえればニヤんでもいいニヤ」

「現金なアイルーね……」

セレーネの一言にウルフがフツと1つ笑った。

「さて……決着をつけにいくか……！」

「ええ！」

2人は立ち上がる。

「いつてらっしやいニヤ！頑張るニヤー！」

アイルーたちの応援を背に受け、2人は再び狩場へと走り出した。

第7話

バツシュとミネルバは苦戦していた。

2人とも深刻なダメージは受けていないが、バツシュは何度かひつかきと鞭のようになつた尻尾を受けており、ミネルバは地面への叩きつけ攻撃を避けた際に飛ぶ礫を受けていた。

しかしそのダメージよりも深刻だったのが2人の疲労である。それまでの4人時よりも運動量が増え、そこにダメージも重なる。心の中にだんだんと焦りが生まれ始めていた。

「クソツ、ここまでとは……！最初は2人ででもやる、とかかつこつけといて情けねえ……！」

引つ掻きを盾でガードした衝撃で後ずさりながらバツシュは小さく愚痴た。回復薬の残量が少なくなりつつあることが、彼の不安をさらにあおる。

「ほんと……私も自分が情けないわ……」

イラつく気持ちを抑えながら小さくミネルバもつぶやいた。

クシャルに対し苦戦する自分への苛立ちもあった。だがそれ以上に自分が弱気になっていることのほうがイラついた。

バツシュは最高のパートナーだと信じている。だからどんな相手でも負けることはない、そう信じて疑わなかった。

だが目の前の古龍はそんなミネルバの思いを踏み躪ろうとしていた。

「ぶざけないですよ……バツシュと約束したのよ……2人で強くなるって……」

ギリツとミネルバが奥歯を噛み締める。

「だからこんなところで……こんなところでその夢を終わらせてたまるもんですか……！」

ミネルバが鋭い目でクシャルを睨みつけ矢を引き絞る。

その恐ろしいまでの殺気に一瞬バツシュもミネルバのほうに目を向け、クシャルもそれに気づいたか狙いをミネルバに定めた。

「ネル！あぶ……」

「くらえッ！」

さっきまでより遥かに短い時間で放たれた矢だったが、その威力は殺がれるどころかむしろ鋭さを増し、クシャルの頭に突き刺さった。

思わずクシャルが怯む。

その隙にミネルバは横に大きくステップを踏み、同時に再び一瞬のうちに矢を放つ。

「ふざけんじゃないよ！あんたごときに！」

明らかにミネルバは豹変していた。

「あーあ、とうとうキレちゃった……」

バツシュは1つため息をついた。

「俺の暴走を止める役割はどこにいったんだよ……。しょうがねえな……！」

再び勢いを取り戻したミネルバを見て小さく口元を緩め、バツシュはミネルバの援護に入った。

丁度そのとき、狩場に現れた2つの影。

「ごめん！戻った！」

「よっしゃ！強力な援軍のご登場ときたか！」

歓喜の声を上げ、振り向いたバツシュの顔が一瞬固まった。

「な……！」

「バツシュ！余所見してんじゃないよ！」

ミネルバの声に目をクシャルに戻し、尻尾の鞭を盾で受け止めた。

「ウルフ！なんでてめえがいやる！」

「いちゃ悪いか？それともそれは死んでろ、という意味か？」

「ちげえ！なんで山を降りなかった！」

「3人よりは4人の方がいいだろう？」

「そりゃそうだが……！」

「なんだっていい！戦えるなら背中の中剣をさっさと抜きな！」

ミネルバの怒鳴り声に一瞬驚いた表情を浮かべたセレーネとウルフだったが、すぐ互いの獲物を構えてクシャルに取り付いた。

「バツシュ！ミネルバどうしたの!？」

「詳しくは後で話す!……あいつは普段おとなしいが一度頭に血が上るとあなあつまうんだ。火事場のなんとやら、ってやつか？あれのせいで昔酒場で……」

「バツシュ！無駄口叩く暇があったら一撃でも多く斬りつける！」

叫びながらもミネルバの手が緩まない。

常人を超える速度で矢を番い、引き絞り、放っている。そしてそれは明らかにクシャルが嫌がっている。

「後ろがガラ空きだ……！」

鬼人化状態で尻尾に張り付いたウルフが乱舞を放つ。目にも止まらぬ乱撃はさつき死の淵を彷徨っていた人間とは思えないキレのよさだった。

たまらずクシャルが後ろに飛び、そのまま滑空状態に入る。

「させるかッ！」

短く叫んだミネルバが矢を放つ。

その狙いは少しも違わずクシャルの頭を捕らえて地面へと叩き落した。

「もらった！」

さきほどから続けて尻尾を狙っていたウルフが再び乱舞。

「ハアアッ！」

その乱舞の終わり際を狙い、セレーネが踏み込み突きを繰り出す。

(手応えあり！)

セレーネのその感想の通り、クシャルの尻尾は根元付近から綺麗に切断されていた。

「よし！あと一息だ！気を抜くなよ！」

「言われなくても！」

ウルフの声にミネルバが答える。セレーネも緩みかけた気を再び引き締めなおした。

クシャルが飛ぶ。だがそれを見据えたかのようなミネルバの矢がクシャルの頭を捕らえる。

一瞬怯んだ隙に足元に潜り込んだセレーネは銃槍を突き上げ、立て続けに弾倉内に残っていた3発の砲撃を叩き込んだ。

たまらずクシャルが落下、すかさず竜撃砲の体勢に入る。

3人もここが勝負どころとクシャルに猛攻する。

「いけッ！」

セレーネが竜撃砲を放つ。それを待つてバツシュが飛び込み足を斬りつける。

頭ではウルフが乱舞、さらにミネルバもその間を縫うように連続射撃している。

しかしそれだけ攻めてもクシャルはまだ倒れない。

「クッ……仕切りなおすか……」

これ以上は危険、と判断したウルフが頭から離れる。

が、攻めきりたい気持ちが出たか、ミネルバは離脱が一瞬遅れた。

「退け！ミネルバ！」

ウルフが叫ぶとほぼ同時、クシャルが猛然とミネルバに突進する。

「やべえっ！ネル！」

遠めに見ていてもわかるほどの強烈な衝撃にミネルバの顔が歪む。

「ぐっ……！舐めるなッ！」

口から鮮血を吐き出しながら叫び、零距离でクシャルの頭に矢を撃ち込む。

その一撃にクシャルの動きが止まった。

「くらえッ！くらえッ！！！」

二撃、三撃と矢が突き刺さり、体を痙攣させつつ ついに鋼龍クシャルダオラがその場に崩れ落ちた。

「ざけんじゃないわよ……！あんたごとき……やられるわけが……」

「ネル！」

右手に持っていた矢を力なく落とし、倒れかけたミネルバをバツシユが慌てて支えた。

「バカ野郎！無茶しやがって！心中する気か！？」

「ハアツ……ハアツ……だ、大丈夫……大したこと……ない……」

「ないわけあるか！今回復薬を……」

「そのぐらい自分で出来るから……」

震える右手をアイテムポーチに伸ばすミネルバだったが、うまく開けることが出来ない。

「……無理しない方がいいな」

ウルフが静かに口を開いた。

「あの連射で右腕の筋肉を酷使しすぎてる。その痙攣は当面治まらないだろう。……それからさっきの突進で肋骨を何本かもっていかれてるはずだ。無理に体を動かすな」

そう言いつつ、ウルフは震えたままの自分の手を見る。

「……などと偉そうに言ってる俺も無理をしすぎたな。腕に力が入らなくなってきた。バツシュ、ミネルバを診てやってくれ。セレーネは俺とクシャルを剥ぐぞ」

「わかったわ」

短く答え、たった今自分達が倒したクシャルの近くにしゃがみ込む。

もう死んでいる、と分かっているてもその顔を見てると今にも再び起き上がってこちらに襲い掛かってきそうな錯覚すら覚える。

ついさっきまでこいつと戦っていた、というのが夢のような気がした。

確かに自分はこいつと戦い、そして勝った。勝ったはずだった。

なのにその実感がわからない。

「どうした、セレーネ？」

ウルフの呼びかけにセレーネは我に返る。

「……なんでもない」

まだ心の中はすつきりしていなかったが、今はそれよりもクシャルを解体することの方が優先と考え、セレーネは腰のナイフを抜く。

しかしいつもの感覚で剥ごうとするが、どうもうまくいかない。

ウルフを見ると、鋼の鱗と甲殻の間、刃の通るところを器用に探し当ててうまく剥いでいる。

「ねえ、ウルフ」

「ん？」

剥ぎ取り作業の手を休めずにウルフは返事をする。

「私達……勝った、のよね？」

「勝ちか負けかで言えば勝ちだろうな。……なんだ、さっき何かを
考え込んでた風なのはそれか？」

「ええ、そう……」

ウルフの剥ぎの様子を見てようやく少しコツを掴んできた。

「お前のことだ、勝った実感がわかない、とか考えてたんだろう」

「え……？」

まるで心を見透かされたかのようなウルフの言葉に思わずセレー
ネの手が止まった。

「なんだ、凶星か……」

対照的にウルフは手を止めようとはしない。

「確かに私は……私達はクシャルダオラの討伐に成功した。でも、
私何もしてないんじゃないか、私のせいでウルフまで危険な目に合
わせちゃって、足引っ張っただけなんじゃないか、って……」

「セレーネ、俺達はなんだ？」

「え？な、なにって……」

ウルフは手を止めてセレーネのほうを向き直る。

「仲間、というと……まあこそばゆい気もするが……俺達はパーテ
ィだ、背中を預け合う身だ。確かに1人の身勝手な行動がパーティ

全員を危機に陥れることもある。……でもな、逆に互いにフォローしあうことも出来る」

「そんなこと言ったって……私は……」

「俺はお前をかばい、お前は俺を懸命に処置してくれた。そして今俺はこうしてここにいる。それじゃ不満か？」

答えずにセレーネはうつむく。

「同じパーティなんだ、なんでも1人でやろうとするな。……俺は今までお前と狩って来て、お前を邪魔だ、足を引く張ってるなんて思ったことは1度もない。まあそいつはあの2人にも言えることだが。……むしろ逆、お前と会えて、お前と狩ることができて嬉しく思ってる」

心臓が1つ大きく鳴った気がした。

ウルフからそう言ってもらえて嬉しいと同時になんだか恥ずかしかった。

「胸を張れ、セレーネ。クシャルを倒したんだからな。……そして」

休めていた作業を再開しながら。

「……これからも頼むぜ、相棒」

ウルフなりの照れ隠しだったのかもしれない。

だが、セレーネの心を晴らすのには十分だった。

「ええ……！こちらこそ……！」

セレーネは空を見上げる。

さっきまでのクシャルの吹雪がウソのように晴れ渡り、フレトヤ山脈の美しいその峰を照らしていた。

エピソード

結局、4人がドンドルマに戻ったのはその2日後のことだった。

下山後、ポツケ村のギルドへの報告はセレーネが1人で行っていた。

応急処置をしたとはいえ凍傷の危険性があつたウルフ、軽いとはいえ断続的に攻撃を受けていたバツシュ、最後に強烈な一撃をもらったミネルバの3人はそのまま医者へ直行。

バツシュの怪我はそれほどでもなかったが、ミネルバは肋骨2本を折られ、ウルフは後遺症の危険性があるとかで翌日にかけて丸1日絶対安静と言ひ渡されポツケ村で体を休めたのだった。セレーネも防衛戦から続けている古龍連戦の影響か、翌日は昼まで寝てしまっていた。

「それにしてもこの街をクシャルから防衛してから3日しか経ってないのよね……」

3日ぶりにドンドルマの街に帰ってきてきてセレーネが発した第一声だった。

「だな。結構経っちゃった気がするぜ」

バツシュがそれに答える。

「それにしても後遺症が残るかもしれないと言われたときは心配したけど、大丈夫そうで安心したわ」

セレーネがウルフのほうを見ながら言う。

「お前の応急処置がよかったからじゃないか」

「ほとんどなにもしてないわよ。即席の温泉のアイデアを出したのはあんたなんだし」

「だとしても、そこで意識が戻らなかつたら俺はあの世行きだったんだ。いい処置だったってことだ」

「……そういやよ、ウルフのその温泉の話は聞いたが、セレーネの処置ってのは何をしたんだ？」

バツシュが口を挟む。

「な、なにして……べ、別に普通に秘薬とホットドリンクを飲ませただけよ」

「ふーん……」

返事に詰まったことに何かあるんじゃないかとバツシュが勘繰ったような声を出した。

「バツシュ、あんまりからかいすぎて『一人娘』に背後から竜撃砲叩き込まれても、私は知らないわよ……」

普段より少しトーンを落とした声はミネルバだ。

行きと同じ防具をつけているが、その下は包帯が巻かれていた。大声を出すと傷に響くため、普段どおりの音量の声が出せずにいる。加えて、身体の限界を超えた連射のせいで右腕の筋肉を傷め、大事をとって首から吊っていた。

「……そういうミネルバも私をからかってるでしょ？ 今日はその怪我に免じて見逃してあげるけど」

「あら？これが本当の骨折り損のなんとやら、ってやつ？」

「……ネル、それ使い方を間違ってるぞ」

怪我をしても対応はいつもと同じことにバツシュは内心安心した。

そうこうしているうちにメゼポルタ広場を抜け、大衆酒場へと着いた。

「おお！セレーネ、待っておったぞ！」

酒場に入ってきた4人を見つけ、珍しくギルドマスターが興奮した声を上げる。

「ポツケ村のギルドには報告したからもう知ってると思うけど、改めて……フラヒヤ山脈のクシャルダオラ、討伐したことを報告するわ」

「うむ、しつこく苦勞じゃった」

ギルドマスターからの労いの言葉を受け、セレーネの表情が緩む。

「……いい顔になったの。ハンターの顔じゃ」

「そうかしら？」

思わず苦笑し、ウルフに助け舟を求めるように視線を移す。

「ギルドマスター、街の防衛はもう大丈夫なのか？」

セレーネからパスを受けたウルフは話題を変えた。

「おかげさまでの。お主がここを出た後もしくはらくは襲撃があったが、なんとか退けることができた。……そういえばお主、あのクシャルダオラのブレスを受けたそうじゃな？」

「直撃じゃなかったがな。冗談じゃなく死を考えた」

「ふむ……古龍のブレスについての体験談は興味があるの……。あとで話を聞かせてもらおうぞ」

「お手柔らかに」

苦笑を浮かべながらウルフは返した。

「ともかく防衛から続けて討伐までご苦労じゃった。ギルドから何かしらの謝礼が出るじゃろつし、わしの方からもそれとは別に何か謝礼を考えとる。ま、期待せずに待つことじゃ」

そこまで話し、ギルドマスターは満足そうに煙草を1つふかした。と、そのとき、大衆酒場の入り口から4人組のハンターが入ってきた。

「まったく、あのじいさんにや文句の1つも言わないと気がすまねえって話だよな。……おいギルドマスター！」

その声にその場にいたセレーネ達も振り返る。

「あ……」

「ん？どうした、セレーネ？」

ウルフの問いかけにも答えず、セレーネは固まっていた。

「話が違うぜ？追撃戦は手負いのテオ・テスカトルっつー話だったろ？それがなんでクシヤルまで追加でやることになってんだ？しかもあのクシヤル、やたらつええのなんの……久しぶりに死ぬかと思っただぜ！？」

背中に銀で裝飾されたガンランスを背負った男がギルドマスターに食って掛かってきた。

(テオ……だと……？)

ウルフは4人をもう1度見る。

リーダー格と思われるガンランスの男の他に全身を黒の防具で纏って同じく黒の刀身の大剣を背負う女と、緑の地の色に棘が多いラ

ンスを背負う女、そしてゲリヨスの頭部を模したヘビィボウガンを背負う男の4人。

(あのボウガンはゲリヨスから作れる「タンクメイジ」の上位武器、ランスはエスピ武器ということは分かるが……。他の2人の武器は見た事がない……。あのテオ・テスカトルに勝った、というのだから並みのハンターではない、ということか)

テオ・テスカトルはクシャルダオラ同様、古龍種に分類されており、クシャルの風のように体の周りに火の粉を纏っている。その粉を空気中にはら撒いて爆発を起こす他、口から吐き出される炎は全てを焼き尽くすものとして恐れられている、とウルフはハンターである父から聞いたことがあった。ついでに「できることなら戦いたくない相手だ」ということも。

「おお、ご苦労じゃったの。報告は受けとる。あのクシャルダオラはギルドから正式に『剛種』として認定された。強いのはもつともじゃ」

「他人事みたいに言ってるじゃねーよ！ついでみたいに頼んでくるから受けたらあれだぜ……。そうじゃなくても人使いの荒い防衛戦からの連戦で疲れてんだ、勘弁してくれよ……」

「それだけおぬしらがギルドから信頼されるといふ証拠じゃ。よいことではないか」

そこまで言っただけでギルドマスターは煙草をふかした。

「よいことってなあ……。あのな、じいさん……」

「……おお、そうじゃ！セレーネ、ダフネとは久しぶりに会うんじゃないかの？」

思い出したように老人がそう言った。

(何……？)

思わずウルフは男を見た。

「……ダフネ……」

セレーネが放心したような、しかしどこか嬉しそうな表情でポツリとつぶやく。

と、ウルフは防具越しに背中からつつかれるのを感じた。

「旦那、ちょっと話が飛びすぎて見えないんだが……説明頼める？」

「……セレーネは元々ギルドが凄腕のハンターに提供する『マイトレ』の管理人だったって話は知ってるよな？」

「……おい、ネル、知ってたか？」

「は、初耳なんだけど……」

「俺もだ……」

「……管理人だったんだよ。そのときの契約先のハンターに憧れ、……ある意味恋にも似た感情を抱き、あいつはハンターになった。そのハンターの名がダフネ……」

「あ、あそこにいる奴が……セレーネの……」

ひそひそとそこまで話し、バツシユは口を開けたまま言葉をなくした。

「ダフネ……！」

再びセレーネがその名を口にす。

「……セレーネ？セレーネじゃない！久しぶりじゃないの！」

「ダフネ」と呼ばれた　ランスを背負った「女」が返事をした。

「な、何イーツ！？」

小声ながらバツシユは思わず叫んだ。

「おいウルフ！女なら女って最初から言え！『ある意味恋にも似た』だの紛らわしいこと言いやがって！」

「……俺も知らなかった……」

「……は？」

「あいつ、目標のハンターが女だったなんて一言も……」

そんな混乱している3人をよそ目に、

「ダフネ……！会いたかった……！」

セレーネはダフネの胸へと飛び込んでいた。

「ちょ、ちよっと！セレーネ！」

一瞬困った顔をしたダフネだったが、そのままセレーネの背中を優しく撫でている。

「ねえ！聞いて！」

「なあに？」

「私レイアを一人で倒せたの！レイアを一人で倒せれば一人前なんでしょ？これでダフネに少しは近づけたでしょ？」

「へえ！レイアをソロで」

「それを抜きにしてもセレーネは十分一人前じゃ。街を襲撃したクシャルを仲間と共に撃退、その後雪山で討伐しとるからの」

煙草の煙を吐き出しながらギルドマスターが付け加えた。

「すごいじゃないの！私達もクシャル倒してきたところだし、一緒ね」

「……おいダフネ、俺達が倒してきたのは『剛種』って認定されたってさっき言ってたろ？その子が倒したのはどう考えたって下位種じゃ……」

「野暮なこと言わないで。ちよっと黙ってて」

ダフネに一睨みされリーダー格の男は肩をすくめた。

「セレーネ、あなたはまだまだ強くなるわ」

「本当!？」

「ええ、本当。私が言うんだから間違いないでしょ?……でもね」

「あつ……」

ダフネがセレーネの頭に装備していたザザミヘルムを外す。隠れていた茶色の髪が現れた。

「うん、やっぱりこっちのほうがセレーネっぽくてかわいい」

「ちょ、ちょっと……」

「強さだけじゃなくてかわいさも磨きをかけたほうがいいわ。そういう年頃なんだから」

「わ、私はそんなの別に……」

「とにかく、狩りに行かないときはヘルム外した方がかわいいわよ。できればいつも。視界も広くなるしね。私はその方が好き」

「あなたが……そういうなら……」

「……ダフネ、そろそろいいか?もう行くぞ」

リーダー格の男が少し呆れたように口を開いた。

「んもう、せっかちな人ね。……じゃあセレーネ、そろそろ行くわね」

「うん……」

少し残念そうにセレーネ。

「そんな残念な声を出さないの。きつとまたいつでも会えるわ。また成長したあなたに会うことを楽しみにしてる。……じゃあね」

ダフネはセレーネの髪を掻き揚げ、額に優しくキスをした。

「パーティの方、この子をよろしくね」

後方で成り行きを見守っていた3人にダフネは手を振り、大衆酒場から出て行った。

「ダフネ……」

その後姿を追うようにセレーネはポツリとつぶやいた。

「……セレーネのあの表情とあの感じ……ありゃあどう見ても恋する乙女だな……」

「あら？バツシュでもそれに気づくんだ？」

「何？どういう意味だ、ネル？」

「さあね？自分の胸に手を当ててよく考えたら？」

2人の会話はさておき、ウルフはギルドマスターの元へ歩み寄る。

「ギルドマスター。今の4人、防衛戦には……」

「あ？ああ、勿論参加しとった。えっと功績は……レウス上位種2頭と下位種1頭を討伐、テオ・テスカトル上位種1頭を撃退じゃな。その撃退したテオを追ってセクメーア砂漠へ行き、さっき聞いたとおりテオと直接防衛戦には関係ないが剛種のクシヤルを討伐、と。

……あやつらはギルドの中でも屈指の腕利きじゃからの」

「な……それだけの数をあの4人が……」

「そうじゃ。まあ腕だけで言えばおぬしの兄達も……」

「やめてくれ。俺はもう縁を切った。関係のない話だ」

ウルフはギルドマスターに背を向け、セレーネの肩を後ろから叩く。

「セレーネ、喜びに浸るのはいいが……。いつまでそうしてる？俺達はここで立ち止まるわけにはいかない。もっと強くなるんだろ？」

「……わかってるわよ！あんたに言われるまでもなく！」

振り返ったセレーネの顔はウルフが知っているいつものセレーネだった。

ウルフはフツと小さく笑う。

「それでいいんだ。……だがまあ今日のところは」

空いていた近い席に腰掛ける。

「クシャルの討伐祝いもまだだった。とりあえず飲むとするか」

ニツとセレーネは笑い、バツシュとミネルバのほうを見る。2人も微笑み、椅子に座った。

「オツケー！じゃあ今日は飲むわよ！」

店員を呼ぶセレーネの声が酒場に響く。

その様子を見てギルドマスターは満足そうに煙草の煙を吐き出す。

酒が届く。その器を全員が持ったのを確認してセレーネが口を開いた。

「コホン……。では、ドンドルマの防衛とクシャルダオラの討伐を祝って！」

続けようとしたセレーネをウルフが手でさえぎる。

「……そして、俺達の素晴らしき狩りの日々に」

全員目が合う。

ニツと笑い、4人は同時に口を開いた。

☞ 乾杯！☞

1 章後書きと設定等解説

以上で1章が終了です。

投稿間隔の短さからわかるかもしれませんが書き溜めてあり、これは読み直して修正しての投稿でした。

このファイルの作成日時を見ると2年前の11月、そのうちどこかに上げようか思ってたならこんなに時間が経ってしまいました。

その間、新モンスターが次々と実装され、ドンドルマはなくなり、双剣の無限鬼人化が終了してラファが息を引き取り、毒麻痺の肉質無視が消えてアルギユもなかったことになって、SRだの爆撃オーラーアローだのHCなんちゃらだの、MHFの変遷には驚くばかりです。

自分についてはいけなくて10・0前に引退してしまいました……。それでもモンハンもMHFも大好きでそれでこの話を書こうと、最初に書いていたMHFの世界で書くことにしました。

さて、当初はこの話だけで完結予定でした。

が、当時MHF現役でやってた手前、やはりMHFオリジナルモンスターに触れるべきだろう、とか、今回のような防衛戦もいいけれどやっぱりオオやシエンといった超弩級モンスターも熱いだろうとか考え始めるとだらだらでいいから続きを書きたいと言う気分にもなりました。

こんな拙い文章ですが、今後も読んでいただけると幸いです。感想もいただけたらすると書いてる人が大喜びします。

言い訳とか設定とか。

1章にして古龍を倒すといういきなりかよと突っ込まれそんな内容ですが、本編でも触れてる通りモンスターには下位種、上位種、変

種・剛種が分かれてると言う設定です。

さらに最近では特異個体なんてもいるみたいですが…。

これはMHFでも受けれるハンターランク帯によってモンスターの個体差が生じるので、それを拡大解釈して反映した、ということにしておいてください。

そのため、今回のクシャは下位種であり、上位種クックよりは強いだろうけど上位種のグラビよりは弱い、程度で考えてください。

実際MHFをやってみると22クシャは下位ハンターのHR上げのお供、平常入魂の対象、最初に古龍骨を手に入れる相手、と古龍とはなんだったのか、になってしまっています。

閃光さえあれば龍風圧もそこまで恐くないですし…。

それでも古龍である以上、目撃数は少ない、嵐を起こすなどの超常現象、そのため存在自体が脅威であるためにギルドも情報が必要以上に流出させない、ということでの話の中では扱っています。

また、武器や防具の素材についても、例えば本来ウルフが使っているホーリーセーバーはその前段階のオーダーレイピアもHR22からでないとは生産不可能だ、とかその防具を強化するには古龍素材が必要になる、とかあるかと思えます。

かなり元を重視しているつもりではいますが、多少の素材変更等は大目に見ていただければ助かります…。

クシャでさえ情報が統制されている状態なので、一国を滅ぼしたという設定のミラとか山を飲み込むという設定のヤマツがホイホイ狩られては設定が破綻してしまうので…。

そういうわけでHR30以降の狩猟試験も本来なら30でシェン、40でヤマツ、50でミラですが、これは大きく変更されています。詳しくは本編2章で書く予定です。

後書きが長くなってしまいました。

それではここまで読んでいただいた皆様、本当にありがとうございました。

前編

「それじゃ、お互いのハンターランク16試験突破を祝って、乾杯」

ブロンドの髪の方がそう言ってグラスを掲げると向かいに座った男がにやりと笑い、そこにジョッキを合わせた。

ポツケ村。俗に雪山とも呼ばれるフラヒヤ山脈の麓にある村である。

そこはモンスターを狩って生業とするハンター達が雪山に赴く際の拠点としている村だった。

その村の酒場、1組の男女が互いのジョッキとグラスに注がれた酒を一気に呷っていた。

「かあーッ！やっぱこの村の名産、フラヒヤビールは最高だな！ドンドルマで飲むのとはまた違うぜ！」

いかにもハンター、という様な防具であるバトルシリーズに身を包んだ男は美味そうにジョッキを空けるとそう叫ぶ。

壁にはボウガンの弾倉部分を模した機械的なハンマー、工房試作型ガンハンマが立てかけてあり、この男がハンマー使いであることを意味していた。

「姉ちゃん！こっちフラヒヤビール追加！あとポポノタン焼き、塩で！ネル、お前は？」

「まだ雪山草酒は残ってるしそこまで空腹なわけでもないから、任せるわ」

「んじゃ以上で、よろしくー！」

わかりましたー、と言い残して店員はいそいそと店の奥に姿を消した。

「バッシュ、久しぶりに帰ってきたのと公式狩猟試験突破で嬉しいのはわかるけど、あまりハメを外しすぎないでよ」

ネルと呼ばれた女性はそう男に忠告する。

ゴム質の防具、ゲリヨスシリーズに身を包み、彼女の隣の空き席には折りたたまれた弓のパワーハンターボウ？と食事の邪魔になる左腕の籠手が置いてあった。

「へいへい。まあ文句なら美味すぎるここのフラヒヤビールに言いな……つてきたきた！」

バッシュと呼ばれた男は聞く耳を持たない様子で2杯目の酒を啜り、運ばれてきた料理を口に運ぶ。程よい苦味が喉にひるがり、それを味わいながら喉元を通した。

男の名はバッシュ・ザファイア、女の名はミネルバ・ロアベルク。

2人はこのポケ村出身のハンターで、ドンドルマの街から久し

ぶりに故郷であるポツケ村に帰ってきて、そこで公式狩猟試験を終えたばかりだった。

「まったく……いつまで経ってもあんたは変わらないわね」

「そうか？どの変が？ガキの頃からフラヒヤビール飲んでたところとかか？」

「……ちよつと、あんたと長い付き合いだけどそれ初耳よ。いつから飲んでるのよ？」

「んー……。覚えてねえ。気づいたら飲んでた」

あつさり言い放ったバツシュに呆れたようにミネルバがため息をこぼした。

「幼馴染である私の目の届かないところで飲んでるなんて……」

「届くところで飲んでたら怒るだろ？」

「それは怒るわよ！体によくないでしょ」

「細かいことはいいじゃねか、もう過ぎたことだぜ」

バツシュはそう言い終わるが早いかジョッキを空にし、再び店員を呼ぶ。

1つため息をこぼしたミネルバだったが、グラスの中身が残り少ないことに気づき、それを飲み干してバツシュの注文に付け加えることにした。

「……で、何の話だったっけ？」

「あんたのビールの話。でももういいわよ」

「ん、俺の体に気を使ってくれるのは嬉しいが、俺だって自分のことぐらい自分でやるぜ？」

「そうかしら？ 私から見たらまだまだ子供にしか見えないけど」

「お、言ってくれるじゃねえか」

そこまで話したところで次の酒が運ばれてくる。

「しかし早いもんだな」

バツシュが3杯目に口を付けながらつぶやいた。

「何が？」

「ちょっと前までこの村で見習いハンターやって、んで18歳になったときに村長に認められて正式にハンターになって、そのあとドンドルマに行ってハンター稼業で今日ハンターランク16の公式試験。長いようであつという間だったな」

「あんたが村長の推薦蹴らなければ私達は『ウォーリアー』のクラス、つまりいきなりここからスタートできたのよ。それを1からでいいとか言い出すから……」

「いいだろ。1からのスタートのほうがか心機一転できるってもんだ」

る」

「ま、別にいいけどさ……」

結局それも過去にミネルバが了承したことである、今更どうこう言いつつもりもあまりない。

場をごまかすようにミネルバがブレスワインのグラスに口をつける。

と、同時にクエストから帰ってきた様子の男達3人が酒場に入ってきた。酒場にいるハンターの数はそれほどでもないため、否が応でもその3人は目立った。

「あーあ、寒くてやってらんねえぜ」

「ドンドルマと比べるとちっぽけな酒場だしな。おい酒だ！酒と食い物持つて来い！」

見るからにガラの悪そうな男達であったが、それぞれ思い思いの武器を持っていることからハンターと推測できた。

「……ああいうのがいるからハンターを嫌う人も出てくるのよね」

「だな」

短く応えてバツシュは酒を口に運んだ。

事実、ポツケ村はハンターの拠点として発展した村であったが、心無いハンターがいることを嫌っている村人も少なからずおり、村

長を含む村の中心人物たちと話し合っていたこともあった。

「おい！なんだこりゃあ！」

その男達のところから怒声上がる。場にいた人間の目が声の元へと向けられる。

「俺は酒を頼んだんだぞ！？それをなんだこれは！こんなんじゃ酔えもしねえ、わかってんのか！？」

男の手にはバツシユが飲んでいるものと同じジョッキ。

「で、ですが……。ここでお酒というと一番の名産はそのフラヒヤビールで……」

「ああ！？おい、聞いたか？こんな小便みてえなもんがここじゃ名産の酒だよ！」

男達の下品な笑い声が響いた。

「野郎……！！」

フラヒヤビールはバツシユの好物であり、同時にポツケの村の名産。そのフラヒヤビールをけなされたというのはポツケ村をけなされたことであり、バツシユの嗜好をも否定することに繋がる。

反射的に身を乗り出しかけたバツシユをミネルバが片手で制した。

「ネル！止めるな！」

「熱くなるんじゃないよ。ここであなたがつかつかかってギルドからあんたまで咎められるのは私はゴメンだわ」

「そりゃあそうだが……！」

「このスタッフが何かしら対応するでしょ、あんなの放っておきなさい」

バツシュが椅子に納まったのを確認してミネルバは酒を一口、口へと運ぶ。

「……ま、いい気はしないけどね」

ポツリと一言付け加え、我関せずと言わんばかりに視線をテーブルに戻した。

ハンターはモンスターを狩る職業である以上、血気にはやる人間が多い。そのためハンター同士の小競り合いは日常茶飯事のようなもので、大抵はギルドに所属する店のスタッフが止めに入るか、酒場の外に追い出してお互いが満足するまでケンカするか、で収めている。

しかしそれでも収まらない場合やもつと重大なハンター間のトラブルがあった場合はギルドの人間が介入、嚴重注意や警告といった口頭のものから始まり、罰金、狩猟行為の一時禁止、重くなるとハンター資格の剥奪までありえた。

止めに入ってもよかったが、ケンカつ早いバツシュのことだ、結局こちららもギルドから怒られる結果になるだろう。

ギルドに睨まれるのは得策ではない。

そうミネルバが考えている間、なおも男達はスタッフの女の子に
いちやもんをつけている。

(彼女には悪いけど、このままもう少し我慢してもらつかならね…
…)

「あ、あの……では代わりのお酒を……」

「代わりの酒なんざいらねえよ」

「では代金はいららないので……」

「わかってねえなあ、そういうことを言ってるんじゃないよ」

「あの……私新人で今研修中でどうしたらいいか……」

「ほお！じゃあいい機会だ、教えておいてやるよ」

3人のうちの1人が下卑た視線で店員を嘗め回すように眺める。

「金じゃない責任の取り方もあんだろ？例えばその体で払う、とか
よ……」

「か、体……！？」

「お、そいつはいいな」

もう1人もそれに乗ってくる。

「あいつら限度つてもんを……！」

「バッシュ、よしなつて……！」

再びミネルバがバッシュを小声で制す。

男達は嫌がる店員の腕を掴んでいた。

「女なんだからそのぐらいしてもらわねえとなあ！ハンターやつてる奴もいるが、女なんてのは股あ広げて男に奉仕してたほうがお似合いだぜ！」

その言葉を聞いた途端、手に持ったグラスを机に叩きつけてミネルバが立ち上がった。

「……ちよつとあんたたち！」

「お、おい！ネル！」

突如横から投げられた女の声に男達の手が止まった。

「なんだテメーは？」

「見てのとおりハンターよ。さっきの発言、聞き捨てならないわね」

「ああ？」

男達が店員を掴んでいた手を離して立ち上がる。その隙に悲劇の店員は店の奥へと走って逃げていく。

「聞き捨てならないならどうすんだ？」

「訂正しろ」

「おーおー、強気でいいねえ。俺はこういう強気な女も好みだぜ。今俺達3人なんだが、よかつたら俺達のパーティーに……ッ！」

それ以上男の言葉が続くことはなかった。

一瞬のうちにミネルバからとんだ平手が男をそのまま吹き飛ばす。

「このクソ女ッ！」

張り倒された男の隣にいた男から蹴りが飛ぶ。

一応防具で身を包んでいるとはいえ腹に強烈な一撃を受け、机をなぎ倒しながらミネルバが後ろへ吹き飛んだ。

「ネル！野郎ッ！」

バツシュが飛び掛ろうとしたそのとき。

「……やってくれんじやないの」

幼馴染であるバツシュでさえ思わず動きを止めるほどの冷たい声。

「おもしろい……蹴りなんて入れてくれたってことはそれなりの覚悟できてんでしょっかね……！」

まるで冷たい刃物を喉元に当てられるような錯覚。

言うなれば、雪山草を積み、フラヒヤ山脈に登ったとき、不運にも轟竜と遭遇して目が合ったような。そんな恐怖感。

それほどまで殺気を放ち、見るだけで全てを射殺すような目でミネルバは立ち上がる。

「お、女だと思って手エ抜きゃあいい気になりやがって！」

蹴りを入れた男がミネルバの顔目掛けて殴りかかった。が。

「おおっ……！」

そばで見ていたバツシュが思わず感心するほど。

男の拳をすり抜け、代わりに放ったミネルバの拳が男の顔に綺麗に吸い込まれていった。

鈍い音を残し、カウンターの要領で一撃をもらった男は悲鳴も上げれず吹き飛んだ。

「死にやがれ！」

「ネル！あぶねえ！」

バツシュの声が早いか、最後に残った男が椅子を振り下ろす。

しかし、ミネルバは避けるどころか。

「はあああつ！」

握り締めた右の拳をその椅子へと叩きつけた。

バキイツ！

木の折れる音が響き、男が持つ椅子が砕ける。

「な……！」

その言葉の続きが出るより早く、ミネルバは男の懐へともぐりこんで左拳をアゴ目掛けて突き上げる。重心が上に浮くと同時に右腕を取り、男を背中から床へと叩きつけた。

「ざけんじゃないよ！」

叫ぶと同時に馬乗りになり、躊躇なく右拳を顔面目掛けて振り下ろした。

「あんたらみたいなの三流以下のハンターにバカにされる筋合いはねえんだ！」

続けて左拳。

「女がハンターやって何が悪い！私はハンターなんだよ！」

さつき壊した椅子の残骸を手に握る。

「くたばれ！」

尖った木の先を喉元に突き刺そうと振り上げた手は誰かによって止められた。

その主を睨み返した顔に平手が張られる。

「バカ野郎、本当に殺す気か？」

「あ……」

止めに入った声の主　つまりバツシュの平手でミネルバの顔から先ほどまで感じられた畏怖感が抜けていく。その手から抜け落ちた椅子の残骸がカタンと音を立て床に転がった。

「……つたく、またやりやがって。俺を止めておいて何やってんだよお前は」

「あ……私……」

「ここか！？ハンターが揉め事を起こしてる酒場というのは！」

丁度そのとき、ギルド関係者と思える男達数名が酒場へと入ってきた。

「た、助けてくれ！あの女が！」

ミネルバが最初に張り倒した男が叫ぶ。

「あ！テメー、コラ！先にここの店員にちよっかいだしたのはそっちだろっが！」

「話なら集会所で聞いてやる！ついてこい！」

バツシュとミネルバは両手を肩より上に上げ、反撃の意思なしを表して続く。

3人の男達は1人はそれほどダメージではないようだが、残りの2人はかなり利いているようで、特に最後にミネルバに馬乗りにされた1人ではまともに歩けない状態だった。

(あーあ……こりゃ正当な状況と言ってもこっちが分が悪いかもな……)

振り返って状況を確認しつつ、バツシュはそう自嘲的な笑みを浮かべた。

「あー……もう最悪……」

翌日、酒場の隅にバツシュとミネルバの姿があった。

バツシュの予想通り、正当防衛であるにしても過剰という見解が最初されていたが、店員の女の子が「自分を守るために間に入ってくれた」と主張してくれたこと、1対3という状況であったこと、男達が度々他の酒場でも問題行動を起こしていたこと、加えて2人の故郷であるポケケ村の村長が寛大な配慮をしてくれた、ということなどで注意のみで無罪放免となった。

「このバカたれが、ややこしい問題を起こすんじゃないわい！」

普段温厚な村長がそれだけ語気を荒げてミネルバを叱ったため、本人は相当応えているようだ。

「だからそう気を落とすなって。口頭だけで済んだんだ、よかったじゃねえか」

「よくないわよ……」

相変わらず机に突っ伏したままミネルバが答える。

「そうか？」

「だったらなんで私達の周りに誰も座ろうとしないのよ……」

「いやあ、まあそういう日もあるだろ？」

ミネルバが顔を上げる。

「座ろうとしたらあからさまに周りの人たちが席を立っても、そういう日もある？」

「……ま、そういう日もあるんじゃないか？」

投げ槍に答えてバツシュはジョッキを呷った。呷りつつさっきの出来事を思い出す。

幸い酒場に出禁などということにもならず、それだけは不幸中の

幸いと2人は酒場に入り、適当な席に腰を下ろした。

が、近くに座っていた男達があわてて立ち上がり、その場から少し間をおいた場所に座りなおした。

ハア、と1つ大きくため息を漏らしてミネルバは立ち上がった。

「おい、ネル？」

「……ごめんなさい、お楽しみの邪魔をするつもりはなかったわ」

場所を動いた男達に短くそう声をかけ、隅のほうの誰もいない席へと歩いていく。

「いいのかよネル、何か言い返すとか……」

「多分昨日私がやったことが広まってあんなつたんでしょ……。ここで余計なこと言ったら、それこそ尾ビレが着くわ……」

疲れたように腰を下ろし、お茶を一杯頼んだ後はずっと机に突っ伏したままの調子である。

「お前がこんなだとこつちまで調子狂うぜ……」

一言ぼやいて名産酒を喉に流すが、ミネルバは何も答える様子はない。

「あの……」

と、そこへおずおずとした女の声が割り込んできた。

「おお！昨日の！」

バツシュのその声にミネルバも気だるそうに顔を上げる。見れば昨日絡まれていた酒場のスタッフだった。

「あの、昨日はありがとうございました。私新人で今研修中で……どうしたらわからなくて……。お礼と言ってはなんですが、これ、私からのサービスですので、よかったら食べてください」

見ればトレイには2人で食べきれるかと言っぐらいの料理が乗っており、それを机の上に運んでくる。

「いやあ……ありがたいけどこんなに食べられるか……」

「あ、飲み物の方がよかったですか？大丈夫です、飲み物もお好きなので飲んでください」

「おお！本当か！？んじゃあフラヒヤビールもう1杯！ネル、お前も何か飲めよ！」

嬉しそうにビールを追加するバツシュだが、一方でミネルバの沈んだ様子は変わらない。

「まだ残ってるからいいわよ」

一言そついい残すと再び顔を突っ伏す。

「あの……私を助けたせいで村長から怒られたってことは聞いてます。昨日のことは本当に感謝してます、それと同時に申し訳なくも

思ってます」

「別にあなたが謝る必要はないわ。悪いのはあなたに絡んだあいつらだし、なにより悪い癖で頭に血が上ってやりすぎた私が悪いのよ」

突っ伏した顔を上げようとせずミネルバ。

「そういうこと。むしろ『助けてもらった』って主張してくれたことをこつちが感謝したいくらいだ。あれじゃ1対3とはいえ、どうみてもネルの過剰防衛だからな」

「だからあなたは気にしなくていいの。私はただ自己嫌悪に陥ってるだけだし」

「……わかりました。とにかく、ありがとうございました。何かあったらまた声かけてくださいね」

一応は納得したのか、スタッフはペコリと頭を下げて他の客のオーダーを取りに行く。

「ま、サービスはありがたいけど……。こりゃ食いきれそうにないな。ネル、へこむのもいいがちょっとは食うの手伝ってくれよ」

「あの子が勝手に持ってきただけでしょ。気持ちだけもらっておくわ」

完全に落ち込みモードのミネルバを前にし、バツシュは大きくため息をついた。

別にこれから何かを狩りに行く予定もない、どちらにしるミネル

バがこの様子では狩りどころではないだろう。

仕方ない、今日は食うもの食うだけになりそうだな、とバツシュが諦めかけたときだった。

「うう、いいかい？」

女の声にバツシュが顔を上げる。

見れば背に最近開発されたゲネポスの素材を使った狩猟笛、げねぼおるの改良型を担いだ女がこちらを見下ろしていた。赤と紫の色をあしらった見たことのない防具に身を包み、露出が多目のその肌は若干茶がかっていた。髪は白、女性にしては珍しいドスシャギーと呼ばれる短髪は、その口調とあわせて姉御肌、というのが合っている。

その奥ではさつき酒場に入ったときに席を動かこうとした男達がないやら心配そうな目でこちらをチラチラと見ている。

(ああ、なるほど……)

バツシュは理解した。

どの世界でも面白そうな噂が流れれば、その真偽を確かめようとする者が出てくる。おそらく、どこからか「昨日酒場で3人の男を相手に殴り飛ばした女ハンターがいる」と聞きつけ、ここに来たのだろう。

「好きにしな。ただ、こいつは昨日3人ほどのしてるからな、どうなってもしらねえぞ？」

「バツシュ……」

目の前に立っている女に対する警告のつもりで言ったはずが、バツシュは机から半分だけ顔を上げたミネルバに睨まれる。

「アハハッ！」

その様子を見ていた女は声を出して笑うと遠慮なく空いていた椅子に腰を下ろした。

「なんだい、噂は本当だったのかい。でも全然怖そうな……いや、まあ今のはちょっと怖いかもしれないけど、大暴れしそうな雰囲気には見えないけどね」

「昨日は日が悪かったのよ……」

「こいつの悪い癖なんだよ。一旦頭に血が上ると見境がつかなくなつて……」

「バツシュ、余計なこと言わないで」

不機嫌なミネルバの一言は少し酔って饒舌になりつつあるバツシュを黙らせるのに十分だった。

「なるほどね、だから『エスピナ・アーチャー』か。考えた奴かなかなかだね」

何かに関心しながら女は背の狩猟笛を降ろした。

「……何、その『エスピナ・アーチャー』って」

「こっちフラヒヤビール1杯よろしくー！……ね、この机の食べ物もらってもいい？腹減っちゃってさ」

「好きにすれば。それより、その『エスピナ・アーチャー』って……」

「お！サンキュー！……んっとね、『エスピナスみたいな性格の弓師』って意味かな」

油で揚げられたケルビ肉であるフライドケルビを口に頬張りながら女はマイペースに話す。

「……エスピナス？」

「ああ、そうか。あんた達下位ハンターか。あ、いや馬鹿にして言つたつもりはないんだ、気を悪くしたらごめんよ」

ここでようやくバッシュはこの女は悪気があるとかこちらを苛立たせるとかいうのではなく、純粋に興味本位で来たことと、おそらく自分達よりハンターランクが上の上位ハンターであることに気づいた。

「エスピナスってのはちょっと前に樹海で生息が確認されたモンスターのことさ。まだ生態に謎が多いからか、上位種と下位種の区別がなくて、上位ハンターになってからじゃないと狩りに行かせてもらえない。普段はおとなしいんだが、一旦怒ると手がつけられないぐらいに暴れまわるのさ」

「うまいこと考えたもんだ、ネルにぴったりじゃねえか」

今度は無言でバツシュを睨みつける。

「いや……。今のは……素直に謝る、悪かった」

「アハハツ！あんだ達面白いねー！」

女は笑いながら運ばれてきたフラヒヤビールを口に流し込む。

「それで、……えっと、あなたはなんでここに？」

「ああ、そういや自己紹介がまだだったっけ。あたしはピーチつてんだ。見ての通りカリピスト、狩猟笛使いさ。えっと『エスピナ・アーチャー』さんはネルだっけ？」

「ミネルバ・ロアベルクよ。こいつは長い付き合いだから私のことをネルって呼んでるけど。それから『エスピナ・アーチャー』はやめてくれない？」

「オーケー、わかったよ。のされるのはゴメンだしね」

反論するのも面倒と感じたが、ミネルバは再び机に突っ伏した。

「バツシュ・ザファイアだ。この村出身の『器用なハンマー使い』ってところかな」

「『器用なハンマー使い』ねえ、いいねそのネーミング。あたしも『器用なカリピスト』とか名乗ろうかな。まあ、あたしは全然器用じゃないんだけどさ……。ところでどの辺が器用なんだい？」

ピーチの質問にバッシュは軽く鼻を鳴らして答える。

「ハンマーの他に片手剣も使える。相手によって使い分けれるってことさ。ついでにいうとライトボウガンも何とか使えるぜ」

「へえ、ハンマーを使いながら片手もねえ。そいつは器用だね」

感心したような声を出しながらピーチはヒーヒーカレーを手元に寄せ、口に運ぶ。

「ん！やっぱ飯はヒーヒーカレーに限るね！……まあでもそれで器用、ってんならうちの兄貴は相当器用ってことになるな」

「兄妹揃ってハンターなのか？」

「まあね。今でこそガンナーの兄貴だけど、一通り全武器使えてたよ。親父に叩き込まれてさ。もつとも、今じゃガン以外で狩ることはほとんどないけど。前に片手剣やら太刀やらはたまに使ってたかな。まあ力武器は合わないとかで大剣とハンマーは苦手そうだった」

「すげえオヤジさんだな……。あんたも全武器使えるのか？」

「まあね、と言いたるところだけど、あたしは飲み込みが悪いんでこいつで手一杯さ。親父に双剣か笛のどっちかにしろ、って言われてこいつを使ってる」

「へえ……苦勞してるんだな……」

バッシュがジヨッキを呷る。

「それでもないよ。兄貴は親父の期待に応えないといけないうって言う義務感から大分無茶してるけど、あたしは気楽にやらせてもらってるし。それに狩猟笛を選んだことを後悔してないからね」

「お、なんでだ？」

「しちめんどくさいのは嫌いでね。殴る、吹く……。狩猟笛は単純でありながら奥が深い。だから好きなのさ。……さてと、飯ごちそうさま」

見れば2、3人前はあったであろうヒーヒーカレーが綺麗に平らげられている。

「食わないのかい？せつかくたくさんあるのもつたいない」

「これでもそれなりには食ったんだぜ？まあネルが食欲ないって言うてるからあんまり減ってなくも見えるけど」

「んじゃもうちょっともらってもいいかい？まだ食い足りなくてさ」

あれだけのカレーを平らげてまだ食うのかとバツシユは内心呆れていたが、ピーチはそんなのお構いなしに料理を口に運んでいく。

「……あんた、もしかして昨日の騒動の張本人を見るといいう名目でここに来て、ついで飯にありつこうとしてたとかじゃないよな？」

「アハハ……」

笑っただけでピーチは反論しない。

「この状況じゃ、否定しても説得力ないしな……」

言いながらも口に料理を運ぶのは止めようとはしない。

「別にいいけどよ。どのみち俺達だけじゃ食いきれなかっただろうし」

「そう言ってくれると気兼ねなく食が進められるよ」

「元々気にしてた様子なかったろ……」

普段ならミネルバと話してるような他愛もない話を今日は初対面のピーチと話している。どこか妙な感じはするが、ミネルバがあの調子だから仕方がない。

(ま、今日1日は放っておくか……)

それならばらくここで談笑してるのも悪くない、そう思ってバツシュは口を開いた。

「ところでピーチさんはなんで油売ってるんだ？別に俺達を見に来ただけじゃないだろうし、かといってこれから狩りに行くように見えないし……」

「んー？あんた達を見に来ただけだよ。あと呼び捨てでいいって」

あっさりと言い放つ。

「……ま、半分はそうだけどね。ここに来たのは昨日さ。来て狩り

に行つて帰つて来たはいいが、兄貴がレクサーラに行くとか言い出してさ」

レクサーラとはセクメーア砂漠、通称砂漠と呼ばれる場所の近くにあるオアシス村である。砂漠に赴くハンターたちの拠点ともなっている村だが、まだ発展途中でポツケ村よりも小さい規模となっている。

「ゲネポスの素材がどうしても急ぎで必要だから砂漠に行くとか言つて。ゲネ程度ならあたしは行かなくていいだろってゴネたら、1日ぐらいで戻るから待つてろって置いていかれたのさ」

「なるほど……」

「んで、昨日は早いうちから飲みすぎたせいで早めに寝ちゃつて、起きたらもう酒場での乱闘騒ぎが噂になつて『ちくしょー！早く寝るんじゃないか！』と後悔して、せめて本人には会おうとここまで来たつてわけ」

「なんで早く寝たことを後悔してるのよ？」

「ここまで無言を通してきたミネルバがようやく会話に参加する。

「そりゃあその場においてあたしも一暴れしたかったわよ」

「いてくれたら全部任せて、こんなブルーな気持ちにならずにすんだのに……」

そう言い残し、再び机に突っ伏すミネルバ。

「ね、なんでそんなキレちゃったの？」

「なんでだっていいでしょ、もう忘れた」

机からミネルバの声が反射してくる。

「最初は店の姉ちゃんが普通に絡まれてるだけだった。酒と言われ
てフラヒヤビールを出したんだが、こんなの酒じゃねえみたいなの
とを言い出して難癖をつけた」

ミネルバの代わりにバツシュが話し出す。

「あ、あたしならその時点で飛び掛ってるわ。この村のこの最高品
をバカにする奴はブルファンゴの群れに放り込んで轢かれちまえば
いいんだよ」

「話がわかるね、やっぱりフラヒヤビールはいいだろ？」

「最高だね。いろんな酒飲んだけどこいつは喉越しも苦味も後味も
全てが最高さ。これのよさのわからない酒飲みがいたらそいつにこ
の酒のよさを1日説教してやってもいい。……ああ、話の腰折って
悪かったね。で、どうなったんだい？」

「俺もあんと同じでその時点で飛び出しかけたんだが、ネルに止
められた。店の方でなんとかするだろ、ってね。そのあとはどう責
任とるんだ、だの体で責任取れ、だの女はハンターなんざやるより
そうやって男に尽くす方がお似合いだ、だの言ってたな」

「うわ……最悪、あたしがいたら再起不能にしてやってたわ」

露骨にピーチが顔をしかめた。

「で、そこまで聞いたところでそれまで俺を止めてたこいつがつかかっていったってわけだ。気持ちはわからんでもないが」

「そりゃそこまで言われたら頭にくるわよ」

「それ以上にこいつはハンターになることをずっと願ってたからな。ガキんととき、山に登ってブランゴに囲まれて……」

そこまで聞いたところで突っ伏したままのミネルバが突然立ち上がった。

「ちよ、ちよつと！バカ！あんた何昔のこと人にベラベラ喋ってるのよ！いや、それよりもあのことまだ覚えて……」

「当たり前だろ。あのとときの約束がきっかけでハンターになったんだ、片時も忘れたことなんかねえよ」

「バ、バカ……！そんな恥ずかしいセリフ真顔で言わないでよ……！」

耳まで真っ赤にし、今度はさつきまでとは別な意味でミネルバは机に突っ伏した。

「あらやだ、あたしはお邪魔虫かな？」

「ん？なんでだ？」

「アハハッ！ミネルバ、あんた苦労してんのね！」

「……うるさい」

声を上げて笑うピーチにバッシュは何が面白いのかわからず首をひねる。

「あーあ、面白かった。ついでに腹も膨れたし、ほんとごちそうさま」

ピーチが1つ伸びをする。見れば机の上にあった料理はほとんど片付いていた。

「……ね、兄貴まだ来そうにないし、腹ごなしがてら、一狩り行かない？」

「でも俺達はまだ下位ハンターだぜ」

「そっちに合わせるよ、あたしはなんでもいいからさ」

「といつても俺も特にないしなあ……」

ミネルバの意見を仰ごうと突っ伏した後頭部へとバッシュが目を移す。視線を感じたか、ミネルバが頭を上げた。

「……私は昨日の乱闘騒ぎで手ちよっと怪我してるの。狩れない、ってわけじゃないけど、支障出るかもよ」

そう言って上げた右手には包帯が巻かれている。

「そりゃ素手で椅子ぶっ壊してたもんな……」

「うお、強烈……。ま、無理にとは言わないよ。でもここでこうやって腐ってるよりもちょっと気分変えに行った方がいいんじゃない?」

ふう、と1つ息を吐いてミネルバが体を起こした。

「……確かにそれもそうね。いいわ、つきあう。で、何に行くの?」

「えーっと……」

ピーチが2人の武器に目を移す。

「バツシユはガンハンマ、ミネルバはパウハンね……。ま、ドドブラでいいんじゃない?」

「昨日狩猟試験でやってきたばつかだが……。まあいいか。ネルが武器用に素材欲しいと言ってたし」

「ああ、ニクスのこと? 急ぎじゃないけど……。作りたいのは事実だし、いいわ、行きましよう」

「よっしゃ、決まり! んじゃあ受注してくる」

意気揚々とピーチがクエストを受けに行った。

「……なんかうまいこと乗せられてる気がするわ」

「そうか? 別にいいだろ、やることもねえんだし」

ミネルバには能天気なバツシュがどこか羨ましく見えた。

後編

「右手、いけるか？」

フラヒヤ山脈、ドンドルマの人間が「雪山」と呼ぶ狩場。その山の麓を3人のハンターが登っていく。

「ベストからは程遠いけど戦えるわよ」

さきほどまで甲の部分に包帯を巻いていた右手を防具に収め、その後ミネルバは右手を閉じたり開いたりやけに気にかけていた。

「今のところ痛みはないわ。あとは矢を撃つときにどうなるかだけど……」

「そんな細かいところ気にしないでいいんじゃないの？」

同じタイミングでホットドリンクを飲んだはずなのに一足先に飲み終えたピーチが言う。

「そうもいかないわ。私は常に針の目を通すぐらいの心意気にいる、狙ったところを正確に撃ち抜けないのはガンナーとして致命的だもの」

「兄貴と同じようなこと言うんだね。兄貴はアーチャーじゃなくて主にライトガンナーだけど、少しでも柔らかい肉質の部分にいか

多くの弾を叩き込むかを考えて撃ってるらしい。手数勝負の武器だからね」

フラヒヤ山脈の寒冷な気候が生んだ、氷に覆われた洞窟を進んでいく。

「そついうもんなのか……。ライト使うときは何も考えずに貫通弾を適当に通してたぜ……」

「少しはピーチのお兄さんを見習った方がいいんじゃないの、『器用なハンマー使い』さん？」

「へいへい、考えておくよ」

口先で反論しながら、さっきまでの酒場の様子から少しずつミネルバに調子が戻っているように感じ、バツシユは少し安堵する。

右手のことも気がかりだが、それ以上に精神状態の影響は連携にミスを生みやすい。そういう意味でミネルバの精神状態が気になっていた。

（ま、あいつがああの調子だったらこつちまでトチつちまいそうだったしな）

口元をわずかに緩めたバツシユの眼前に洞窟の出口が広がる。

「バツシユ、頭はあんたにくれてやる。この中であいつの牙折れる武器はあんたのガンハンマだけだしね。ま、狙いにくいと思うがついでにスタンでも狙ってくれ。あたしは旋律一通り吹いたら邪魔にならないように後ろ脚付近に行くよ。ミネルバもそれでいいかい？」

「構わないわ。どの道前衛の動きに合わせるつもりだったから」

「お、いいね。兄貴が後衛だと後衛にも気を使わなくちゃいけない気がして疲れるんだよね……。気にせず動けっていつも言ってるけどさ」

緊張など微塵もしていない様子でピーチはニツと笑った。が、次の瞬間には顔を引き締めている。

「さて……。それじゃ一暴れするとしますか！」

薄暗い洞窟を抜け、頂上付近の開けた場所に出る。

一面の銀世界、そこに四足で立ちすくむ白き牙獣、雪獅子たちの主・ドドブランゴ。

「バツシュ、頭もらえるならいつもと同じ感じでいいわね？」

「ああ。……。右手が痛むからって俺に当てんなよ？」

「努力するわ。……。行くわよ！」

「おつよー！」

バツシュとミネルバが気合いを入れると同時に場所を少し離してピーチが演奏を始める。

その様子に気づいたドドブラが威嚇の意味をこめて1つ大きく吼えた。

狩りの始まりである。

まっすぐ顔に突っ込むバツシュを狙ってドドブラが右の腕を振り下ろす。が、それを読んで誘発させた上で素早く横に回避。そのバツシュを壁に使い後ろから飛来したミネルバの矢がドドブラの顔に命中し、黄色の煙を散らす。

（よし、右手に痛みがない。いける！）

ミネルバがそう思うと同時に体の底から力が湧き出てくるように感じる。

「そうか、狩猟笛……！」

ピーチの演奏する狩猟笛の旋律効果である。

狩猟笛の旋律は闘争心を向上させるもの、持久力を著しく伸ばすもの、体力の癒しを促進するものなど様々な効果をもたらす。これは狩猟笛の種類によって奏でられる旋律も異なる。今ピーチが演奏したのは闘争心を向上させ攻撃力を上昇させる、狩猟笛においてはスタンダードな旋律の1つだった。

「よし、これなら……！」

モーシヨンの大きいドドブラの飛込みを横に避け、矢をつがえて弦を引き絞る。振り向いたドドブラの頭目掛け、バツシュがハンマーを振り下ろす。それが命中すると同時、間髪を待たずにミネルバが矢を放つ。直後、バツシュが離脱したその刹那、矢はドドブラの顔へと吸い込まれた。

(へえ……！)

演奏しながら2人の様子を観察していたピーチは内心感心した。

(いい動きしてるじゃないの……。一朝一夕に身につけられる連携じゃない、あの2人やるね……。！)

今日の狩りは面白くなりそうだ。

ニヤリと唇の端を緩めると同時に演奏の終えた笛を背負い、ドドブラの後ろ脚へと駆け出す。

ドドブラが体を起こして倒れこみ、起こった振動を一息待ち、後ろ足へと武器をぶん回す。

「バツシュ、多分そろそろ！」

ミネルバの声が聞こえた。

何がそろそろかとピーチが考えた瞬間、ドドブラの動きが止まる。麻痺だ。

「よし！後は任せたわよ、バツシュ！」

「ショータイムと洒落込もうぜ！」

ドドブラの頭目掛けてバツシュがハンマーを振り下ろす。続けてもう1度殴り、その勢いを利用して体を回転させて振り上げの連携、通称「縦3」を繰り返す。

(なるほど、それでショータイム、ってわけか)

バツシュの邪魔にならないよう、側面から後ろ脚を狙いながらピイチは2人の狙いに気づいた。

(麻痺ピンを装填したミネルバの矢で動きを止め、その間にバツシュのハンマーでスタンを狙う、か)

これなら長い時間相手の動きを封じたままダメージを与えることが出来る、2人の必勝の連携だった。

(でも、おそろく……)

それはバツシュと同じ打撃武器であったから、ピーチが気づいたのであろう。

振り上げが当たる。同時にドドブラの麻痺が解けた。

が、そこまでだった。

「クソツ！何発か腕に吸われた！」

(やっぱりね、本人も気づいてはいたか……)

殴る、という行動は元来振り回して当てる、と言うものに近い。強力な一撃を狙えば狙うほど力を優先し、目測は疎かとなる。

結果起こるのがバツシュが言った「吸われる」ということ。狙った場所と異なる場所に当たる、これを「吸われる」と呼ぶハンター

もいた。

（牙獣種は首が短い奴が多い、頭を殴ろうとして腕に邪魔される、なんてのはザラにある。かくいうあたしもこの手のモンスターは苦手だしね……）

ピーチが考えをめぐらせているうちにドドブラは反撃開始とばかりに前脚をあげて立ち上がる。

「チツ……！」

バツシュの短い舌打ちが聞こえた。

次の行動は予測できている。バインドボイス。簡単に言えば吼えるだけである、が、五感を持つハンターにとってその咆哮は聴覚を襲う攻撃となる。大気を震わせ耳をつんざくその咆哮は、聴覚の他に心の恐怖心へと訴えかけ、たとえどんなに心の準備をしようとも対抗策を持たないハンター達は反射的に耳を塞ぎ硬直してしまう。だから「バインド」なのである。

『オオオオオオン！』

バツシュの装備も対抗策を持たない、故に体の防衛反応を覚悟した。

が、そのときがこない。

「あ、あれ？何で……」

「え？ちよつと……バツ……！」

ミネルバが叫ぶより早く、バツシユは横に飛び退く。直後、その場所にミネルバが撃った矢が飛んできた。

(おいおい、嘘だろ……！)

ピーチが内心驚愕する。

「なんでだ！？牙も折れてないのに……」

証拠に辺りから雑魚のブランゴが数匹集まってくる。

ドドブランゴは雪獅子達の主であり、王を王たらしめているのが口にある立派な牙である。炎属性の武器でしか折ることの出来ないこの牙こそが長の象徴であり、逆に言えばこれを折られるということとは王の失墜を意味する。牙を折られた王はもはや王ではなく、そうなればついてくる手下のブランゴたちを失い、同時に威厳を失った咆哮からはハンターを恐れさせる恐怖感すら消え、「バインドボイス」でさえなくなるのだ。

しかし現にブランゴが現れている以上牙が折れてはいない、バインドボイスの効力は失っていないはずである。

「悪い！『聴覚保護』の旋律をかけたって言ってなかった！」

「すげ、そんな便利な旋律あるのかよ……。ま、でもこれで戦いやすくなっただぜ！」

口元から白い息を漏らし、より凶暴になったドドブラとバツシユが対峙する。

その邪魔にならぬよう、ピーチは雑魚のブランゴを掃討しつつ、平穩ならぬ思いをしていた。

（さつきあいつが吼えたとき、ミネルバは「明らかに」バツシュを狙った……）

手が痛んで手元が狂った、とか傷つけたくて狙った、という類ではない。

（撃つたのは威力を限界まで殺した矢だ、弦を引き絞りきってない）
狩猟笛を叩きつけ、現れた3匹のうちの2匹目を倒す。

（つまり、咆哮が来てバツシュが硬直する、というのを見越した上で、外からの衝撃でそれを無理矢理解かせようした……！）

人は想像を超えた状況に合った時、思考が停止して身体の反応も停止する。それに対し肩を揺るといったような外部からの衝撃を与えることで正気に戻ることがある。

ミネルバは、肩を揺する行為をそのまま矢を当てるといふ行為に置き換えた、ということになる。

（普通に考えればありえない、が、出来るなら非常に有効なバインドボイス対策になる……）

ドドブラの咆哮の範囲は狭い。それ故可能な方法である。

（まったく、とんでもないもの見せ付けてくれるじゃないの……！）

3匹目のブランゴを狩り終え、ピーチが再びドドブラに戻る。とする。

それとほぼ同時、ドドブラが怯んだように見えた。

「よっしゃ！折ったぜ！」

勝ち誇ったようなバツシュの声が聞こえてくる。

見れば立派に生えていたはずのドドブラの牙の片方が半分ぐらいの長さにまで折れている。

牙を折られたことに怒ったのか、ドドブラが前足を上げて吼える。しかしもはや威厳を失った咆哮は手下を呼び出すことも出来ず、目の前のハンターを怯ませることもできない。

「くらえっ！」

頭に狙いを定めたバツシュの強烈な一撃が振り下ろされる。確実に頭を捕らえた打撃にドドブラがのたうつように転がった。

「ついでに遅くなったが取ったぜ！」

バツシュの言葉通り、ドドブラはスタン状態で眼を回している。

チャンスとばかりに追撃。バツシュは頭の真ん前、ミネルバはバツシュの邪魔をしないようにそのやや斜め後方、ピーチはこれまでどおり後ろ脚付近。

(ピーチ……?)

ふとミネルバが視線を感じた気がしてピーチのほうに眼を運ぶ。意図的にピーチはミネルバを見ていたらしく、眼が合うとウィंकを1つよこし、そのまま柄でドドブラを殴り始めた。

(そうか、そういうことなら……!)

すかさずミネルバもビンを装填。

(残り分だけでは厳しかったけど、ピーチの援護があるならもしかしたら……!)

そのままバツシユの邪魔にならない位置に矢を放つ。命中した部分に黄色い霧が広がり、すぐ消える。麻痺ビンだ。

それを一瞬横目に見つめ、ピーチは続けて柄で殴り続ける。

(残りが少ない……。取れないか……?)

麻痺ビンの数が少ない、加えてドドブラもスタンからそろそろ立ち直るころである。

「ラスト1発……行けッ!」

気合とともに放った最後の麻痺ビン付きの一発はドドブラの右腕に突き刺さる。

直後、ドドブラがスタンから立ち直り　ミネルバのほうを向き
なおした。

「クツ……！足りなかった……」

手ごたえはあった、だがあと数発分ビンがあれば。

そんな無念を心に抱きつつ、ドドブラの飛び掛りに備えて攻撃の斜線上から横に飛び退こうとする。

既にバツシュは一旦距離を置いて離脱しているのは見えた。が、攻撃態勢を取ったはずのドドブラがその場に崩れ落ちる。

「麻痺！ここで畳み掛けるよ！」

ピーチだ。ミネルバの足りない麻痺ビン分の麻痺を蓄積させていた。

続けて笛を構え演奏体勢に入る。

「よし！決めるわよ、バツシュ！」

「おつよー！」

残りの強撃ビンを装着しながらミネルバが叫び、バツシュが応える。

バツシュの強烈な連撃、それとドドブラの頭の間を縫うように飛来するミネルバの矢。さらにピーチの演奏により体の底から力が沸いてくる。

「うおりゃアアアア！」

渾身の力を込めたバツシュの振り上げがドドブラの頭を捕らえ
最期の叫びを残してドドブランゴがその場に力尽きた。

「ふーッ……。さすが上位ハンターさんだ、昨日より数段楽しかったぜ」

ガンハンマを背に背負いながら少し疲れたようにバツシュがつぶやいた。

「冗談。あんたらの腕ならあたしがいなくたって変わらないでしょ」

「そんなことないわよ。正直言ってあなたのような強いハンターと一緒に狩れて勉強になったこともあるわ」

「やれやれ……」

ミネルバの世辞とも取れる言葉にピーチは両手を広げた。

「褒めたって何も出てきやしなよ?」

「しかしこんなに早く帰ってこれるとはな。ピーチ様々だ。……どれ、狩り終えた記念にもう1回飲み直すか!」

酒場へと帰ってきて狩猟の報告を済ませると、どこか嬉しそうに

真つ先にさつきまで座っていた席へと向かうバツシユ。

「まったく……あいつつたら……」

「ま、でもいいんじゃない？単純でわかりやすい、でも信頼が置ける。あんたが惚れるのもわかる気がするよ」

「な……！ほ、惚れ……！」

耳まで真つ赤にし、ミネルバはピーチに反論しようとする。

「違うのかい？」

「ち、違うわよ！私とあいつは幼馴染で、だからこうやってパーティ組んで……」

「あれ？行く前に小さい頃の約束がどうのこうのって言ってなかったっけ？」

「あ、あれは……」

ミネルバが言葉に詰まる。

その様子を見てピーチが声を出して笑った。

「……何よ？」

「アハハッ！いや、悪い悪い。あんたらお似合いだと思ったからさ」

「……あっそ」

冷やかしと取ったミネルバはピーチに背を向けバツシユの席へ行くこととする。

「バカにしていただけ言ったわけじゃないさ」

思いがけないピーチの言葉にミネルバが振り返る。先ほどの茶化しがウソのような真面目な顔だった。

「確かに暇つぶしも兼ねて行った、つてのもあるけど、本当のところ腕が立つようならうちのパーティに誘おうと思ってたのさ。今うちは3人でさ。本当は4人兄妹だから丁度になるはずが、末っ子がちよつとひねくれちゃって抜けちゃったのよ。……ま、でももういいや」

ここまで真面目な顔で話したピーチだったが、ニツと笑顔に変わる。

「あんたら2人はいいコンビだ。さっきの狩り中の息の合い方は見事だった。だからあんたらは2人でいてこそ、なんだな。どっちかスカウト……なんて野暮な真似は出来そうにないや」

「そうかしら……」

「そうそう。……あとこれからもっと成長するには……鈍い彼にミネルバがどうアプローチするか、だけどね」

「ちよ、ちよつとピーチ！」

「アハハッ！」

他人事のように笑ってピーチはミネルバの肩を叩く。

「ま、頑張りなよ」

「あのね……」

「おい、2人とも何してんだよ？フラヒヤビール3人前で頼んじまうぞ！」

なかなか席にこない2人を見かねてバツシュが叫んだとき、酒場の扉が開いた。

中に入ってきたのは金、銀、銅をあしらった大剣を背負い、漆黒のディアブロシリーズに身を固めた大男と、燃えるような赤い長髪と相手を射殺すような鋭い眼をし、見たことのない金と銀の鱗をあしらったライトボウガンを肩にかけて複数種の防具を身につける男だった。

「おい……あれ、『魔眼』じゃねえのか……？」

酒場で飲んでいたハンターが何かを小声で話しているのがミネルバの耳に入ってくる。

(『魔眼』……？)

あのライトの男の別名だろうか、確かに眼は鋭い。

と、大男の視線がこちらに向けられる。

「お！いたぜ、兄貴！」

そういうと2人がミネルバの元へ近づいてくる。

(昨日ぶっ飛ばした奴の仲間かしら……？)

思わず体に力が入る。バツシユも慌ててミネルバの元へ駆け寄ってくるのが見えた。

が、男達の目的はミネルバではなかった。

「探したぞピーチ。村で待ってると言っただけだ」

「兄貴がもうちよっとかかりそうだったからちよいと狩りに行っただのさ。このお嬢さんたちと一緒にね」

ピーチが兄と呼んだ男がチラッと2人を見る。敵意はないのだからがそれでも身が竦む様な眼だった。

「そうか。……うちのじゃじゃ馬が世話を掛けた」

軽くあごを引き感謝の意を示したようだ。

「い、いえ……こちらこそ……」

思わず反射的にミネルバの頭が下がっていた。

「このあとはフルフルでも狩るのかい？」

「いや、状況が変わった。ドンドルマに戻る。ここにはお前を連れ

て行かないといけないから立ち寄った」

「姉貴のところじゃ俺一人でいいって言ったんだが、兄貴も行くって言ったからよ」

大剣の男が口を開いた。

どうやらライトボウガンが1番年上、次がピーチで大剣は体格に合わず1番下らしい。さっきのピーチの話から推測するとさらにこの下に1人いてパーティを組んでいたのか、とミネルバはふと考えた。

「あら、そりゃ手間掛けさせたね……」

「行くぞ」

そう言うと2人は振り返った。

「ま、そういうわけだ。一緒に狩れてよかったよ、バッシユ、ミネルバ」

「いえ、こちらこそ」

「ピーチ、また機会があったらよろしくな」

軽く右手を挙げ、ピーチは2人の男達についていった。

「行っちゃった、か」

「んだな。……ところでネル、お前あいつとさっき何か話してなか

「ったか？」

バツシュの質問にさっきピーチに言われたことを思い出し、思わずミネルバの顔が赤くなる。

「なんだ？どうした、ネル？」

「……なんでもないわよ！ほら、飲むんでしょ？付き合っわよ！」

「お！いいねえ、そうこなくちゃ！」

嬉しそうに席へと向かうバツシュを見てミネルバは思わず小さくため息をついたのだった。

それから数カ月後。

2人は狩りを続け、16だったハンターランクも20となっていた。

装備も変わり、バツシュはレウス一式に、ミネルバは頭をハイメタウ、体と腰をフルフルウ、腕と足をゲリヨスウという装備になっていた。

今はフルフルの亜種を狩り終え、ポツケ村の酒場で夕食を兼ねて一杯やっているところだった。今日は酒場にも人が多い。温暖期で

あるため、普段より過しやすい季節となり、雪山のモンスターの動きが活発化しているのが原因であった。

「姉ちゃん！こっちフラヒヤビール1杯追加な！……しかし今日は賑わってるな」

ファンゴ肉の串焼きを口に頬張りながらバツシュが感想を漏らす。

「そうね。温暖期でモンスターたちが多いからでしょうね」

答えながらミネルバは氷樹リング酒を口に運ぶ。

(でも逆にこのぐらい人が多いなら下手に店員にちよっかい出すよ
うな奴も減るかもね)

ふと、そんなことをミネルバが考えていると、バツシュの頼んだフラヒヤビールが運ばれてくる。スタッフも忙しいようで置くだけ置くよ次のテーブルへと行ってしまった。

「これじゃ酒より人に酔っちまいそうだ。今日は適当なところで切り上げるか」

「そうね……」

バツシュの案にミネルバが賛同したそのとき。

「もついいって言ったのよ！」

酒場に女の叫び声が響いた。

喧嘩か、とハンターたちが一齐に声のほうに目を向ける。バツシユとミネルバも例外ではなかった。

「なんだ、仲間割れか？」

バツシユが口にビールを運びながらつぶやく。

「あら……？あの子……『一人娘』じゃない？」

「ネル、知ってるのか？」

「ええ。あの子、誰ともパーティーを組もうとせず、公式狩猟試験を受けようとしなくてずっとハンターランク16のままなのよ。だからいつの間にか『一人娘』って言われてた。見るに見かねて1度パーティーに誘ったんだけど、あっさり断られたの。なんでも1人でレイアを倒すことにしか興味がないとかで誰とも組まない、って……」

「ふうん……。『一人娘』ねえ……。お前の『エスピナ・アーチャ―』みたいなもん……」

その話はするな、というミネルバの一睨みでバツシユはそれ以上その話題に触れるのをやめることにした。どうやら本当に嫌がってるようだ。

「と、とにかく……。その『一人娘』がなんだってパーティー組んでるんだ？」

「さあ？……でもあの感じからすると無理矢理組まれたみたいね。それで揉めてる、と」

「……あれ早いところ止めた方がいいな。『一人娘』が揉めてる相手、『ルーキーテイカー』のジャックだろ？」

「え？……ほんと、そうじゃない。あいつ、まだ新人を自分が所属してる獵団に無理矢理誘おうとかしてるのね。それで手始めにクエに誘ったってわけか……」

「昔俺達も声かけられたもんな。まあ断ったら素直に引き下がったから気にならなかったが。あいつの噂を聞いたのはあとからだったっけ」

再びジョッキにバツシュが口をつける。

「そんなこと呑気に言ってる場合？ジャックの奴って喧嘩っ早いって話でしょ？……ったく、誰も止められないなら私が……」

「あー、待て待て」

身を乗り出そうとしたミネルバをバツシュが止めた。

「何よ？」

「お前がいつたらまた酒場がひっくり返りかねないからな」

「……しないわよ、そんなこと」

「こええ、睨むなって。そういう眼でいっても説得力ねえ」

ふう、と1つため息をついてバツシュが続ける。

「……ま、別に酒場がひっくり返るのはいいけどよ。お前が怪我するのはあんま見たくないからよ」

「えっ……」

ミネルバの次の言葉を待たず、バツシュは立ち上がった。

「はぁ……これは感謝すべきなのかしらね……」

自分を心配してくれたことをどこか嬉しく思い、今回の一件は自分の最高のパートナーに任せようとミネルバは心に決め、事の次第を見送ることにした。

外伝1話後書き

外伝第1話、バツシユとミネルバの過去の話でした。

時系列的には本編1章の結構前、ラストの部分で本編1章1話のラスト部分に繋がります。

それにしても本編1章とこの話と、早くもドドブラ3頭目ですね…。そもそも雪山の下位モンスターと言えばドドブラ、フルフル、ドスファンゴ、それ以外だと古龍のクシャルとキリンしかいないので仕方ないと言えば仕方ないのですが…。

特に今回は「咆哮の範囲外から無理矢理硬直を解除」をやりたいかつたので、フルフルでは範囲が広すぎたためにドドブラに白羽の矢が立ったというわけです。

ドドブラやレウスレイアのようにカウンター咆哮してくる相手だとタイミングが計りやすいため、この方法は自分がやっていた頃たまに見かけることがありました、まあ耳栓つけろって言われると見も蓋もないんですけど…。

そんなわけで後書きでした。

読んでくださった皆様ありがとうございました。

プロローグ

泣いている。

なぜかわからないが、そのことだけははっきりと分かった。

辺りには霧がかかっているようによく見えない。

なんだか寒い気がする。

そんな中、ただ私は1人泣いている。

理由はわからない。ただ悲しくて、申し訳なくて、胸が一杯で泣いている。

泣くなって。

男の子の声が聞こえる。顔を上げるとそこに傷だらけの男の子が無理に笑顔を作っ立っていた。

このぐらいの怪我、全然なんともないぜ。だから泣くなって。

なんともないわけない。そんなに血が出てるのに痛くないわけない。

そう、少しずつ思い出した。

私は雪山草を積もつとして、間違つてブランゴのなわばりに入つてしまつて、囲まれたところを助けてもらつて、そのせいで彼はたくさん怪我をして……。私のせいでそんなに痛い思いをしたのに痛くない、つて言つて……。

ウソじゃねえよ。このぐらいちつとも痛くない。だって俺は将来、ハンターになるんだからな！

ハンター……？

そうさ！ハンターはすつごく強いんだ！だから俺はこのぐらいの怪我、ちつとも痛くないんだ！そして俺は村で1番のハンターになつて、ドンドルマに言つて一声上げるんだ！

……わかつた、私ももう泣かない。私もハンターになつて、もつと強くなる。

おい、お前……。

こんな泣いてばかりいる自分はもう嫌、だから私も一緒にハンターになる……！

……よし！じゃあ俺達は今日からパートナーだ！2人で共に強くなるんだ！よろしく頼むぜ！

うん！

立ち上がるために差し出された手を掴む。その手に触れたとき、光が広がっていき。

第1話

「ん……」

ミネルバ・ロアベルクはマイハウスのベッドの上で目を覚ました。

「夢……か……」

もう何年前の話かも覚えていない。だがそのときの約束は今でもはっきりと覚えていた。

今ミネルバがハンターをしているのは、そのときの男の子　バツシュ・ザフィーアと交わした約束があるから、と言っても過言ではなかった。

（今更あのときのことを夢に見るなんてね……）

1つ息を吐き、大きく伸びをする。寒冷期ということもあってか、冷たい空気が起きたばかりの体には心地よい。

「さてと……」

昨日の狩りが長引いたせいで起きたのは遅かったが、今日の集合時刻は昼前、時間に多少の余裕があるため少し何か食べておくか、と判断したミネルバはテーブルに座り呼び鈴を鳴らす。ニヤーと言

う声と共に給仕アイルーがミネルバの下へとやってきた。

「ご主人様おはようございますミヤ。お食事ですかミヤ？」

「ええ。ちよつとお腹に入れておきたいから、軽くお願い。家にある食材を使うなら、メニューは任せるから」

「了解ですミヤ。少々お待ちくださいミヤ」

そういつと給仕アイルーは奥の厨房へと入っていった。

ハンターたちの家であるマイハウスはハンターランクに応じて提供されるグレードが変わってくる。ミネルバは高いグレードの家ではなかったが、それでも給仕アイルーとキッチンを任せるアイルー数匹は家の中にいるのだった。

キッチンから漂ってくる食欲をそそる匂いを嗅ぎながら、朝の夢のことを考えていた。

それはまだミネルバが子供のときのことだった。

雪山、と呼ばれる「フラヒヤ山脈」の麓にあるポツケ村出身のミネルバは、小さいときから食料や村の店に並べる商品の材料を取るために常日頃から雪山に登っていた。そのためどこか気が緩んでいたのかもしれない。

凶暴なモンスターが出没しやすい狩場付近には近づいてはいけな
い、と言われていたのにその日に限ってその付近まで雪山草を積み
に行ってしまった。そこは雪獅子・ブランゴのなわばりで、潜んで
いたブランゴに囲まれたときに。

バツシュが助けてくれた。

ブランゴの鋭い爪や投げってくる氷塊に傷つきながらもバツシュはブランゴを追い払った。

そのときにハンターになることをお互いに約束し、そして2人はその夢を叶えたのだった。

「あの頃の私は泣いてばかりだったな……。泣きそうになったり、心が折れそうになったら逆に怒りの感情を持って、って自分に言い聞かせて……。それが高じて怒りで我を忘れるようになって、今じゃ『エスピナ・アーチャー』とか二つ名までつけられるか……。笑えないわね……」

自嘲的に鼻で笑う。

と、料理が完成したらしく、テーブルに食事が運ばれてきた。

「お待ちせミヤ。ホワイトレバーとレアオニオンのサンド、それからランランサラダミヤ」

「ありがとう」

2切れに切られたパンの片方を掴み、口へと運ぶ。レアオニオンを焼いたことよって生まれる甘みとホワイトレバーの柔らかな食感が混ざり合い、非常に美味だ。

食欲を満足させながら、今日のこの後のことを考えようとしたミネルバだったが。

(……まあいいか)

もしかすると空腹のせいで苛立ったり、余計なことを考えたりしていただけかもしれない。

(なるようにしかならないわね)

2切れ目のパンを食べ終え、付け合せのサラダを口に運ぶ。あっさりとした味付けの野菜はミネルバの好みの味だった。

「ごちそうさま、おいしかったわ」

食べ終え、正直な感想を述べてミネルバは立ち上がった。

「ミヤー。そう言われると嬉しいミヤ。お腹が減ったらまた呼んでミヤ」

給仕ネコが皿を片付け始めるのを横目に見つつ、ミネルバはアイテムボックスへと向かい愛用の武器と防具を身に纏う。

パワーハンターボウ？。

実はミネルバは上位ハンターになっていた、いや、ミネルバだけではなく3人の仲間達もである。

本来上位ハンターになるためにはハンターランク30で公式狩猟試験を受けなければならない。だがクシャルを倒したときにギルドマスターが言った「ギルドから何かしらの謝礼が出る」という言葉は嘘ではなく、このクシャル討伐を公式狩猟試験の代わりとして、

試験免除で上位ハンターになることが出来たのであった。

そのクシャルとの戦いで負った傷はもう完治したが、そのとき身を守ってくれたのがこの防具だった。

ハイメタUヘルム、フルフルUレジストとコート、ゲリヨスUガードとレギンス。ミネルバはこの防具に愛着があり、強化を続けて上位になってからも愛用していた。

「そついや、ウルフは私の防具の組み合わせを初めて見たときに『面白い』とか言ったんだっけ」

本来防具はそのモンスターのシリーズ一式で揃えるほうが装備のコーディネートは勿論、能力を発揮しやすかったり戦いやすかったりする。だがミネルバは敢えてそれを崩し、各防具の長所を生かす形でこの組み合わせをしていた。

「……………それにしてもあいつも罪な男よね」

一通りの装備を終え、時間を確認すると。

「ヤバッ……………結構ギリギリかも。……………じゃあ出てくるから留守番よろしく」

姿は見えなかったが給仕アイルーに声をかけ、ミネルバは外に出る。起きたときも感じたことだが、寒冷期の風が少し寒く感じる。

居住区を出てメゼポルタ広場へ。

今日は安売りの日であるフェスタのようであちらこちらで、特に

食材屋の方から客を呼び込む声が聞こえる。安売りには興味があったが、時間が怪しいために仕方なく店の前を早足で素通りする。

大衆酒場に駆け込んで時計を見ると時間はほぼ約束の集合時間丁度であった。

酒場内を見渡すとレウス装備で身を包み、テーブルに機械的なハンマーを立てかけた男が一人で食事を取っているのが見える。

「ゴメン、バツシユ。ギリギリになっちゃった」

ガッツチャーハンを食べながらフラヒヤビールを流し込むバツシユの向かいに、背の弓を降ろし籠手を外しながらミネルバは腰を下ろす。

「いや、まだ俺だけだし、見ての通り飯食ってるところだ。謝る必要はねえよ」

基本的にバツシユは酒場で食事を取る。理由は簡単で、そのほうがフラヒヤビールが飲めるから、というものだった。

「今朝、夢を見たわ」

「ほう、どんな？」

「……あんととハンターになる約束したときの夢」

口に含んだフラヒヤビールを噴出しそうになり、バツシユは思わず咳き込んだ。

「ちよ、ちよつと……大丈夫？」

「何言い出すのかと思えば……なんだってまたそんな昔のこと？」

「さあ？見ちゃったんだからしょうがないじゃない」

「あの頃のお前は泣いてばっかだったよな」

残りわずかになったガッツチャーハンを口に運ぶ。

「それが今や怒ってばっか……」

「ん？何か言った？」

満面の笑みで自分を見つめてくるミネルバがバツシュには逆に怖かった。

ミネルバが何を言いたかったかは計りかねるが、とりあえず話題を変えようと思いつつチャーハンを平らげる。

「それよか、今日からどうすんだ、ネル？」

「そうね……。私達2人で狩りに行くのもやむなし、かもね……」

「まあそれもしょうがねえかも……。あの様子じゃ……」

そこまで言ってバツシュは口を閉じる。

代わりに入り口から入ってきた影に右手を挙げて自分のいる場所を示した。

「セレーネ！こっちだ」

バツシュに呼ばれ、まだ少女の面影が残る女ハンター、セレーネ・ヴィヴェルドは2人の元へと歩み寄ってきた。

首から下は上位になってから強化したザザミスの防具に身を包み、頭防具を着ける代わりに耳に真つ赤なピアスをつけていた。

セレーネにとって目標であると同時に「ある意味恋にも似た感情」を持っているハンターから「普段の髪型が見えているほうがかわいい」と言われて以来、この装備スタイルになっていた。加えて、背負うガンランスはスノウギア「ドライブと呼ばれる氷銃槍に変わっていた。

「待たせてたらゴメン……」

どこか元気がない様子でセレーネは謝り、腰掛ける。

ふう、と1つため息をついたのはミネルバだ。

「まあネルも今来たところだし、俺も飯食ってたからな。気にすることねえよ」

そう言い、バツシュはジョッキに残ったビールを空けた。

「さてと……んじゃ3人揃ったことだし」

「ねえ……」

「ウルフからの連絡なら、聞いてないぞ」

セレーネの質問を見越してバツシュが答える。

「そう……」

「なんだ、ビンゴか」

自分の予想が当たったにもかかわらず不愉快そうにバツシュは鼻を鳴らした。

「セレーネ、気持ちはわからなくてもないがな。そっちがその調子だと悪いがこっちまで調子が狂う」

「わかってるわよ。わかってるけど……」

「確かに、旦那が20日ぐらいで戻るから一時的にパーティを外れる、と言ってからもう10日近く経つが……。帰ってこないもんは帰ってこないんだ、仕方ねえだろ」

「それはそうだけど……」

20日ほど前、セレーネの狩りのパートナーで双剣使いであるウルフ・オブシディアンはしばらくパーティを抜きたい、と言ってドンドルマから離れていた。

親と縁を切った、と彼は言っていたが、上位になったと言う報告にだけは行きたい、とのことだった。ついでに少し1人の時間が欲しいとかでしばらく抜ける、と言ったときり、連絡も何もなかった。

「なんか……しつくりこないのよ……」

「セレーネ、お前の言いたいこともわからないでもないがな……」

「『一人娘』が聞いて呆れるわ」

「お、おい！ネル……」

そのミネルバの挑発的な言葉にもセレーネは何も返さない。

朝感じたイライラは空腹のせいではなく、やはりこうなるであろうと予想できたからか、と思い、1つ大きいため息をついてミネルバは立ち上がった。

「バツシユ、行きましょ。あんたのレウス防具をSにしないといけないんだから」

「そりゃそうだが……」

「私も……」

「レウス素材、何かにいるの？」

「使う予定はないけど……でも……」

「だったらいいわ。レウスなら2人でも狩れるし、古塔だから日帰りで帰ってくる。ウルフが戻ってくるかもしれないって思ってるなら待ってたら？……王子様の帰りを待つお姫様のようにね」

「……わかった」

もう一つ、短くため息を吐いてミネルバはセレーネに背を向けた。

「行くわよ。……それじゃ留守番よろしくね、セレーネちゃん」

セレーネは何も答えなかった。

一瞬眉をピクリと動かしたが、ミネルバはそのまま歩き出した。

「おいネル……いくらなんでも言いすぎじゃねえか？」

「……わかってるわよ」

バツシュの問いかけに不機嫌そうにミネルバは答えた。

「わかってるけど……でもあんなセレーネを見るとなんかイライラするのよ」

「まあな……。調子崩されっぱなしだしな」

「昨日までも危ないところは何回もあったし……あのまま狩り場に出すと、あの子……いつか死ぬわよ」

「同感だ。ウルフの野郎、さっさと戻ってきてセレーネ嬢ちゃんをいつもどおりに戻してくれての……。『一人娘』を一人じゃ狩れないようにしちまって……あいつは罪な男だね」

朝自分が思ったことと全く同じことを口にしたバツシュにミネルバは鼻を鳴らして軽く嗤った。

第2話

「ハア……」

2人が酒場から出て行ったのを確認し、セレーネは大きくため息をこぼして頬杖をつく。

ウルフがいなくなっからイマイチ調子が出ず、2人の足を引っ張っている実感はあった。

しかも相手は種類こそ一緒なもの、今までより強力な、下位ハンターでは受注を許されない強さを持つ個体の上位種が相手なのだ。

ガードをしたときに受けた今までより重い感触、攻撃を続けても倒れない今までよりタフな体力。初めて様子見に上位のクックと対峙した時、セレーネはあることを強く感じた。いや、セレーネだけではない。バツシュとミネルバも同じことを感じていた。

武器と防具を強化しないといけない。

まずは手堅く採取・採掘から始め、次に欲しい素材にあわせて狩りたいモンスターを狩る、と言うことになった。

ミネルバのドドブランゴ、セレーネのザザミと終え、次はレウスを希望していたバツシュの番だった。しかし自分が希望したザザミと連戦していて、セレーネは不調がさらに悪化しているのを感じて

いた。

自分のために2人が付き合ってくれているのに調子が出ない、この状況が不調にさらに拍車をかけ、結果現在の状態になってしまったのであった。

「私、あいつにそこまで依存してたってことかしらね……」

ボソツと呟きまた1つため息をついた。

(やめよう、考えてるだけ無駄だし、今日は狩りに行くつもりはな
いんだ。考えないようにしよう)

セレーネはスタッフを呼びとめウォーミル麦酒を頼んだ。嫌なことを忘れるためには酒の力を借りるのが楽で早い。寝て起きて明日になればウルフは帰ってくるかもしれない。

そんな希望的観測を抱いているうちに目の前には頼んだ酒が運ばれてきた。酒に弱いことはわかっている、おそらく一気に一杯を飲み干せばすぐに酔えるだろう。

そう考え、目の前の容器に口をつけようとしたときだった。

「酒に逃げるってのはあんまり関心しないわね」

不意に聞こえた女の声にセレーネは反射的に顔を上げる。

さっきまでミネルバが座っていた席の後ろに、全身黒の防具に身を包み、同様に刀身が黒い大剣を持った女が立っていた。

「……なんでそんなことがわかるのよ？」

女はセレーネに許可を取るわけでもなく、無造作に向かいの席に腰掛けた。

「思いつめたような顔して酒と向かい合ってたら……酒で何か嫌なことを忘れようとしてる、とは考えない、セレーネ？」

自分の名前が言い当てられたことにセレーネは驚いた。

その隙に女はセレーネの目の前にあった酒を奪い、半分ほどを口の中に流し込んだ。

「あんだ、なんで私の名前知ってるのよ？」

勝手に向かいに座ったことと自分の酒を取られた文句もついでに付け足したかったが、まずは一番気になるところだけを尋ねる。

「『一人娘』のセレーネ、と言えば、知ってる人は知ってる有名な、って自分で思ったことはない？」

言われてみれば自分は不名誉な二つ名で呼ばれることもあるし、昔は酒場で揉めたことも多少ならずともある。知ってる人には顔は割れているかもしれない、とセレーネは思った。

「……まあ私の場合はそうじゃなくて知ってるんだけどね」

「ハア？どういう意味よ？」

「そのままの意味だけど。……あなた、私のこと見覚ええない？」

問いかけつつ、女は酒を口へと運ぶ。

「知らないわ」

一瞬考えたが、知らないものは知らないと考えてセレーネはそう答えた。直後に聞こえる、はぁー、という大きなため息。

「……まあそうよね。あなたあのときダフネのことしか見てなかったものね」

「ダフネ？ダフネを知ってるの!？」

そこまで言ったところでセレーネはあることに気がついた。

「もしかしてダフネの……」

「そ。同じパーティを組んでるエリスよ。エリス・クロガネ。よろしく」

エリスはそう言うとグラスの中身を飲み干した。

「ふーん、ウォーミル麦酒ねえ……。好きなの？」

「別に……。酔えれば何でもよかったから……」

「よかつたらなんでそんな荒れてるのか教えてくれない？」

余計なお世話、と言おうとしたセレーネだったが、エリスの目は真剣だった。少なくとも興味本位だけで聞きたがってる、というよ

うには見えない。

「一応ハンター暦は私の方が長いし、困ってることがあったら相談に乗るけど?」

返事を保留し、無言でセレーネは考えていた。

「もしかして……男とか?」

エリスは引く様子もなく、このまま塞ぎこむよりはマシと考え、セレーネは口を開いた。

「まあ……男と言えば男ね……」

「ほうほう!それでそれで?」

話に食いついたエリスが身を乗り出してくる。

「私の狩りのパートナーの話よ。別にケンカした、って訳じゃないけど……。しばらく休みがほしいって出かけた後、帰ってくるって言った日を過ぎてもまだ戻ってこない、ってだけ」

面倒さ半分、つまらない期待をされるのも困るという考え半分でセレーネは大雑把に説明した。

が、狩りのパートナーの話、とわかると同時にエリスの顔が少し固くなった。

「別に自分としてはそこまで気にしてたつもりはなかったけど……まあギルドのほうに狩り中に命を落としたとかって連絡もないから、

死んではないと思うけど。でもそれを気にしちゃってるのか、最近私の調子がイマイチだから、パーティ組んでた残りの2人だけでクエストに行っただってこと。そういうわけで、期待してるような男と女の話じゃなくてごめんなさいね」

「ふーん……つまりその2人に置いていかれてショックでも受けた、ってわけ？」

セレーネがムツとしたようにエリスの方を見つめ返す。

「図星、か……。でもその2人のハンターは賢明な判断をしたわね」
「どづいうこと？」

「ハンターにとって背中を任せるべき仲間の不調は、そのままパーティ全体に跳ね返ってくることもある。覚えておいた方がいいわ」

反論しようとしたセレーネだったが、口を閉じてうつむいた。

相手はダフネと共に戦う一流のハンターなのだ。レイアを1人で倒したとはいえ、まだ一人前と言えるかも怪しい自分が何か言い返すことなどできるはずがない。

「ま、気は落とさなくていいと思うわよ」

疑問に思いセレーネが顔を上げる。

それに気づかないか、エリスはスタッフを呼びとめブレスワインとロイヤルチーズを注文している。

「飲む？おごるわよ。さっきのでいいかしら？」

「……落陽茶を」

「自棄酒はやめってこと？ま、いい心がけだと思っわ」

エリスは落陽草から作られる茶である落陽茶を加えて注文し、セラエのほうに向き直った。

「『2人に置いていかれた』わけでしょ？」

「ええ……」

「いい仲間を持ったわね。多分その2人は自分たちのこともあるだろうけど、あなたのことも思ってそうしたんだと思う」

「どういうこと？」

注文した物が運ばれてくる。ブレスワインを口に運び、満足そうな表情を浮かべてエリスは問いに答える。

「2人は無理にあなたを連れて行くことも出来たけど、敢えてそれをしなかった。確かにさっき言ったようにパーティ全体への影響もあるだろうけど、あなた自身戦えない、ということじゃないみたいだし、連れて行くことと思えば連れて行けた。でもいざ狩場へ出れば自分の身は自分で守るのが最優先。あなたが危機に陥ったときに助けられないかもしれない。そうしたくないから、あなたのことを思っつて連れて行かなかった、と思っただけで、どうかしら？」

「私のことを思っつて……」

「だから見捨てられた、とか考えなくていいってこと。私だって調子が悪いときは『その分までカバーする』って言われるより置いていかれたほうがいいって思うことも……。……まあ本音じゃ一緒に行きたいけど、あるわね」

エリスはロイヤルチーズを口に運び、次いでブレスワインも運ぶ。

「ま、その相棒が帰ってくるまでは軽めのクエストをこなす方がいいと思うわ。今ちよつと暇してるから私が一緒に行ってもいいけど……。やっぱり慣れた相手と行きたいでしょうから」

「……わかった」

「うん、素直でよろしい」

子供扱いされたような言い方に少しムツとしたが、同時に怒る気力は出たことに気づく。

「今の話聞いている限りだとあなたが今パーティを抜けてるパーティナの彼に惚れてるとかっていうのもありだと思うんだけど……。……どうなのよ、その線は？」

「ないわね」

きっぱりと即答。

「そんな全否定しなくても……。なんか浮いた話ないの？2人で手を繋ぎながら夜のアーリーナで歌姫の唄に聞き惚れた、とか酔った勢いでチューしちゃった、お持ち帰られちゃった、とか」

思わずセレーネの動きが止まる。そういえば雪山のクシャルとの戦いのとき。

(無我夢中で応急処置したがけど、あれって見ようによっては……)

「ん？思い当たる節あるの？」

目ざとくエリスが尋ねる。

「な、ないわよ！そんなこと！」

「ま、そうよねー。ダフネー筋だもんねー」

ブレスワインの酔いが回っているのか、さっきまでの真面目な様子とは別人のようである。

「で、そのあなたに見向きもされない可愛そうなハンター何て言うの？あ、あと今クエストに行ってる2人も」

「クエストに行ってる2人はバツシュとミネルバ。ポツケ村出身のハンター。私の相棒はウルフって言うの」

ウルフの名を聞いた途端、エリスの顔が変わった。

「どうしたの？」

「……ウルフ、って言ったわよね？」

「ええ」

「まさかフルネーム、ウルフ・オブシディアンじゃなくて？」

「えっと……。そういえばそうだったような……。でも、どうして？」

ふう、と小さく息を吐き、エリスは残っていたプレスワインを飲み干した。

「……何でもない、忘れて。前にそんな名前のハンターを捜していた人がいたってだけ。そいつの印象があまりに強かったからちょっと思い出しただけよ。……さてと」

エリスは席を立つ。

「ま、休暇だと思ってしばらくのんびりするのもいいとも思うわよ。くれぐれも無茶とかしないように。あなたになにかあったらダフネが悲しむからね」

「あ、あのー！」

去ろうとするエリスに声をかける。

「ありがとうございます……」

「やっぱり素直なところあるじゃないの。いいってこと。また会いましよ、セレーネ」

一瞬含み笑いを浮かべた顔が振り返ったが、漆黒の防具に包まれた背中が離れていき、やがて酒場の外へと消えた。

エリスの背を見送った後、セレーネは目の前のお茶を飲み干した。

「休暇だと思う、か……」

さっき言われたことを口の中で呟き、首を横に振る。

「……でも私の目標はダフネに追いつくこと、だものね。そう、だからこんなところで立ち止まってるわけにはいかなかったわ」

改めて自分の目標を確認しなおしたセレーネは、カップの中の茶を見つめつつ、続けて自分に言い聞かせるように呟く。

「よし……！そうと決まれば心機一転、クックでも狩って……」

「クックに行くなら、俺がついていってもいいかな？」

正面から聞こえた声に心臓が撥ね上がりそうになる。

ずっと待っていた声。

セレーネが聞き間違えるはずがない。

ゆっくり顔を上げると、そこに白く輝く防具に身を包んだウルフの姿があった。

「あ……」

それ以上の声を出すことが出来なかった。

(帰ってきたら散文文句言ってやるう、とか食事代を出させてやるう、とか思ってたのに……！)

それ以上にウルフが生きて帰って来た、と言うことに対する喜びのほづが大きかった。

「どうした？俺はてつきりやかましく怒られるか飯を奢れとか言われると覚悟して帰って来たんだがな」

セレーネが固まったままなのを確認し、ウルフは向かいの席、さつきまでエリスが座っていた場所に腰を下ろす。

「な……！」

考えを読まれたかのように的中され、耳まで赤くしてセレーネは反論した。

「そう言われるのがわかってるならなんで早く帰ってこなかったのよー！」

「こつちにはこつちの都合ってもんがあったのさ。……しかしその言い方だとそんなに俺に早く帰ってきて欲しかった、と聞こえるが……？」

「う、うるさいわね！バツシュとミネルバと3人じゃイマイチ調子が出なかったのよ！」

「その2人はどうした？」

「2人でレウス狩りに言ったわよ。私は不調を理由に留守番ってこ

と」

「おっと。そいつは悪いことをしたな」

「いいわよ別に。あんたが生きて帰ってきてくれただけで……」

そこまで言っつて、セレーネは自分が今口走つた言葉の意味を考えて慌てて訂正する。

「あ、ち、ちが……今のは……えっと……」

「わかつてるよ。パートナーに勝手に死なれちゃ後味が悪いもんな」

「ま、まあそついで……」

「それはいいとして。……クック、本当に狩りに行くのか？」

机に座つて頬杖を突き、セレーネは1つため息をつく。

「別にどうしても、ってわけじゃないのよ。他なら他で何か緊急性があるクエストならそれでいし、主に気合を入れなおすって意味が強いだけだったから」

「なら1つ提案があるんだが……いいか？」

「なによ？」

ウルフは酒場のスタッフを呼んだ。おそらく次に言つてある言葉葉を予測して、セレーネは再びため息をついた。

「久しぶりの再会だ。今日のところはひとまず飲むと言いつつでいい
うだ？」

第3話

翌日。前日の夜にドンドルマに戻ったバツシュとミネルバは昨日と同じ時間に酒場に集合しており、その後現れたウルフの姿に驚きを隠せない様子だった。

「お前……いつこっちに帰ったんだ？」

フラヒヤビールの泡が口についているのにも気づかない様子でバツシュが尋ねる。

「昨日の昼過ぎかな。2人がレウスを狩りに行った後だってセレーネは言ってたが」

「そのセレーネだけど……大喜びだったんじゃないか？」

「文句の1つも言われるのは覚悟してたが、夕飯と酒を奢ってやったら綺麗さっぱり気にしてない様子だった」

「ああ……。じゃああいつ今日は二日酔いで遅いのか？」

「誰がなんですって？」

笑いながら言ったバツシュの後ろからセレーネの声が聞こえた。

「お、おう。来てたのか」

「来ちゃ悪い？」

多少不機嫌そうに答えながら、セレーネはミネルバの隣の席に腰を下ろす。

「いいえ、全然。……いつも通りのあなたが戻ってきたようでお姉さんは嬉しいわ」

「誰がお姉さんよ。……まあ今まで迷惑かけたことは謝るわ」

セレーネのその言葉を受けてミネルバがフツツと笑った。

「あなたが謝るって言うのは意外な気がするけど……やっぱりそうじゃないとこつちの調子も狂うってもんだわ」

「セレーネのついでに俺も謝っておくか。戻るといった期日をオーバーしたことはすまないと思ってる。ただ、言い訳をするつもりじゃないが……。おかげでこいつを作ることができた」

そう言い、ウルフは自分の防具を指した。

「ああ、初めて見たときから見たことがないから気になってたんだ。なんだ、その防具？」

「詳しくはそのうち話すが……。……最近新しく狩場として認められた『峡谷』と言われる場所を知ってるか？」

ウルフの問いに3人が首を横に振る。

「場所はここから遙か西、少し前に無価値と思われていた名も無き荒野の大地で希少な鉱物が発見された。その後、そこは『峡谷』と呼ばれ、新たに狩場になった、と言うわけだが……。地元に戻ったときにそこで依頼があると紹介され、その報酬でこいつを作った」

「報酬って……その最初に言った希少な鉱物のこと？」

ミネルバの質問にウルフは頷く。

「ああ。『白星鉄』って言ってたな。そこで取れた白星鉄を運ぶ輸送隊の護衛が依頼だった」

ウルフはホピ酒のお湯割を口に流し込む。

「……ま、それはいい。とにかく、その鉱石から作られたのがこの防具、『ブランシリーズ』だ」

ふうん、と3人の息が揃う。

「……じゃあそのピアスは？私が着けてるレッドピアスのようなものとはまた違うみたいだけど……」

「……これは親父が俺によこした書物を解読して出来たものだ」

「あれ？お前家族とは仲違えしてたんじゃない……」

言ってからバツシユはミネルバに机の下で足を小突かれ、軽率な発言だったことに気づいた。

「あ……わりい……」

「ん？ああ、別に構わん。気にしていない。バツシユの言うとおり確かに俺は親父やら兄貴やらとの仲は悪いが、くれると言うものはもらっておいて損はないからな」

「なんていうの、そのピアス」

「『衝撃のピアス』と武器工房の親方は言ってたかな」

バツシユがフラヒヤビールを呷って1つため息をつく。

「ちくしょう……羨ましいぜ、なんでお前ばかり……」

「いいじゃないの、バツシユ。あなただって昨日そのレウス防具の強化が終わったじゃない」

「まあそりゃそうだけだよ……」

「あれ？Sにするとか言ってなかった？」

セレーネの問いかけにバツシユはどこか都合が悪そうに目を逸らした。

「……素材がありえねえんだよ。Sにしようとしたら逆鱗がほしいとか言われた。ある程度持つてはいたんだが、完全に強化するには相当数必要になるとか言われたんだよ。だったらこのレウスの強化余地がまだあるってことでこつちを優先したんだ。工房の親方が言うにそれでもかなり強度が強化されるって言ってたし」

「ちょっと待て。ということレウスを狩りに行く用事は終わった

のか？」

「ああ、俺のほうはもういいが……なんでだ？」

ウルフは机の上のホピ酒を呷って一呼吸置く。

「セレーネから聞いたが、1人ずつ狩りたいモンスターを上げていて、最後がバツシユという話だったそうだな」

「そう言ったわ。それがどうかした？」

「じゃあ次は俺がリクエストすれば、それに行くってことだよな？」

一瞬3人が顔を見合わせた。

「……俺はかまわねえけど、ネル、お前は？」

「いいわよ」

「私も異議なし」

「即決か。そいつはありがたいな」

「で、何に行きたいのよ？あんたのことだから突拍子もないものとか勝つ見込みのないものとかは行かないんでしょうけど」

「さすがセレーネ、いい読みだ。……ただ今回はちょっとばかり危険な橋を渡ることになるかもしれないが」

「何よ」

勿体ぶったウルフの物言いにセレーネが答えをせかす。

「……エスピナス」

一瞬の間をおいて、バツシュがミネルバの顔を見た。

「……殴るよ？」

「わ、わりい……予想外の答えについて……」

「俺が何かまずいこと言ったか？」

狩りたいモンスターの名を言っただけなのに何か悪い空気になったのを感じてウルフが言った。

「エスピナスとミネルバ、何か関係があるの？」

「えーと、まあなんと言うか……」

「……バツシュ、説明してあげて頂戴」

ハア、と1つ面白くなさそうにため息をついてミネルバは頬杖を着いた。

「お前がそう言うなら……。詳しく説明しても後が怖いから大雑把に言っと、こいつは狩り中の極限の状況とか、怒りで我を忘れると性格が豹変しちまうのさ。雪山のクシャルのときを思い出してもらえばわかるだろうが……」

「……そういえばそうだったわ」

「で、あるときポケ村の酒場でちよいと揉めてな。乱闘騒ぎになつてこいつ1人で男3人をノックアウトしちゃったのさ。そんでその豹変振りから着いた二つ名がエスピナスみたいな弓師ってことで……『エスピナ・アーチャー』ってわけだ」

「十分詳しく説明してくれてるわね。……ま、そういうこと。逆恨みもいいとこだけど、一応因縁があるってことよ」

なるほど、とセレーネが頷きながら話を聞く。

「セレーネ、あなたも不名誉な二つ名を勝手につけられたんだから、私の気持ちはわからないでもないでしょ？」

「まあ……そうね」

返答につまりながらセレーネが答えた。

「でも仮にも私の二つ名になっているモンスターだもの、一度お目にかかりたいとは思っていたわ……。聞いた話だと、私の二つ名の元になったのは怒り時になると暴れるからなんですって？」

「俺も話に聞いたことしかないが、そうらしいな。凶暴さはレウスやレイアの比じゃないらしい」

斜向かいに座っているバツシュが唾を飲み込んだのがセレーネにはわかった。

「そいつは……またやっかいそうな相手だな……」

「でもウルフにしては珍しいわね、危険な狩りはしないものだと思
つてたけど……」

「あら、さすがパートナーのことはよくわかってるってことかしら
？」

ミネルバに茶化されたが無視を決め込み、セレーネはウルフの答
えを待つ。

「あいつの素材から作られる双剣は樹海付近に住んでいるある部族
の武器をモチーフにしているものらしい。実はここを離れている間
にその部族出身の双剣使いに出会ってな。かなりの腕だったから教
えを請おうとしたんだが、自分が今背負っているエスピナスの武器
を作れて使いこなせたら考えてやる、と言われたのが理由だ」

「珍しいわね……」

「何がだ？」

一息ついてホピ酒に口をつけた後でウルフがセレーネに尋ねる。

「あんたがこんなに一気に喋るのも珍しいけど……」

「悪かったな」

「でもプライドが高いと思ってたのに……」

「プライドなんてものは死んだら何もならん。俺はハンターだ。…
…と胸を張って言えるようになった、ハンターであることに誇りを

持てるようになったのはまあ最近だがな。そしてハンターである以上自分の腕、自分の命が全てだ。無様に撤退して他の連中の笑いものにされようが臆病者とのしられようが、命を捨てたら意味がない。そのために……強くなるために頭を下げ稽古をつけてもらうことぐらいなんてことはないだろ」

思わず3人は返す言葉を失った。

以前クシャルダオラと戦ったとき、ウルフは初めに撤退を提案した。勝つ可能性は0でないからだったろうが、それでも勝てる、と言いつれない状況と判断しての提案だった、と今の3人にはそれがわかった。

「一応言っておく。縁起でもないが、もしもの話で聞いてくれ。もし、この先この4人で戦っていて、俺を残して全員が戦闘不能となった場合、俺は自分の命だけでも優先する。その逆、勝つ見込みのない状態で俺が戦闘不能になったら、遠慮なく俺を見捨てて逃げてくれていい」

「ちょ、ちょっと待ってよ!」

思わず声を上げ、立ち上がりそうな勢いでセレーネは机に身を乗り出した。

「何よそれ!?じゃあ聞くけど、なんであんなあるとき私をクシャルのプレスからかばったのよ!??」

街を襲撃したクシャルダオラを追った雪山での追撃戦、その最中にセレーネはクシャルのプレスを浴びそうになったことがあった。

そのとき身を呈してセレーネをかばったのは他ならぬウルフだった。

結果、プレスは直撃しなかったためにウルフは一命を取り留め、その後戦線に復帰したが、一歩間違えば命を落とした可能性があることは言うまでもない。

「……あれは勝算があったからやっただけのことだ。これから先、あれより絶望的な場面が出てきたときのことを想定しての話だ」

「まあ旦那の話はわかったけどよ」

まだ何か言いたそうなセレーネを抑えてバツシュが割って入った。

「自分の命が一番だ、って話にや俺も納得はする。ウルフほどじゃないが俺もそのぐらいの心構えをしなくちゃいけないってのもわかってる。……でもよ、そう言ってる割に旦那意外と熱いじゃねえか」

「そうね。そうじゃなきゃ2人ででもクシャルと戦うって言った私とバツシュを助けるなんてしないでしょ？」

ふ、とウルフは1つ笑う。

「……今言ったのはほとんど親父や兄貴からの受け売りだ。俺はあいつらは好きじゃないが、この考えだけは支持してる。だがその結果親父が行き着いた『狩りは効率的に行うべきだ』という考えには賛同しかねる。なぜなら、『勝てる』という安心感、慢心は心の緩みを生み、結果思いも寄らない痛手を負うと考えているからだ。狩りは常に緊張感の中で行われるべきだ。それに……」

ウルフはグラスに4分の1ほど残っていたホピ酒を一気に飲み干して続ける。

「……俺がやりたいのはひりつくような命のやり取り、人間達とモンスターの互いの命を掛けた真剣勝負……。人の知恵が勝つか、モンスターの力が勝つか、そういう戦いがしたいのさ」

そう言い、わずかに口元を緩めたウルフを見てセレーネは背中に寒いものが走るのを感じた。

(ウルフが……そんな考えを持ってハンターをしていたなんて……)

同時に矛盾も感じていた。

「何よりも命が一番」と言いながら、同時に「ひりつくような命のやり取りをしたい」と言う考え。

(もしかすると我を忘れた場合、一番制御できないのは私でもミネルバでもなく、ウルフなんじゃ……)

頭によぎった嫌な考えを消し去れるようにセレーネは頭を横に振り、その場に座る3人に目を移す。

「……ま、考えは人それぞれだからな。とりあえず旦那がやっぱり熱い男だったことはわかった」

バツシュの言葉にミネルバも頷く。2人は2人で納得している様子で、きつと自分の考えすぎだとセレーネは思うことにした。

「さてと、話が逸れたが……。エスピナスと戦うに当たって何点か

注意点がある、と言っても俺も実際に戦ったことはないから聞いた話が主だが」

「怒ると暴れる、の他にも何かあるの？」

「いろいろある。もっとも他の特徴はお前には似てないものだ。安心しろ、ミネルバ」

ウルフとしては軽いジョークのつもりだったが、ミネルバはあからさまに不快な感情を出していた。それを気にかけていないようにウルフは続ける。

「まずは暴れまわる時の破壊力。強烈な一撃は当たり所が悪ければそれだけで命を落としかねないし、助かったとしても気を失う可能性が高い。そうなればそこに無防備のまま追撃を受けることになる。さらに厄介なことにあいつの全身を覆う棘にはレイアの棘のような毒がある。それが奴が『棘竜』と呼ばれる所以でもあるがな」

「おいおい……大ダメージ、気絶、毒かよ……。二つ名着けられたネルがかわいく見えるぐらいのヤバさじゃねえか……」

「まだある。奴のプレスは……」

「体に直接のダメージとなる毒と神経毒の2種類……つまり、私たちが一般的に言う毒と麻痺の効果を同時にもたらす」

3人は声の主のほうへと目を移す。

「セレーネ、なんであなたがそんなことを知ってるの？」

「人づてに『毒が……麻痺が……』って聞いたことがあっただけよ」
「セレーネの言うとおり、ブレスを食らうと毒と麻痺だ。早い話、攻撃をもらったら命を持っていかれる、ぐらいの覚悟をしたほうがいいということだ」

思わず3人は黙り込む。

「レウスとかレイアの比じゃないな……」

「そうね……。今まで戦ってきた相手より遥かに手ごわい……」

「……ウルフ、私達に勝算はあるの？」

セレーネの質問にウルフは軽く鼻で嗤った。

「さあな。……ただ、知ってると思うが、俺は勝ち目のない戦いはしない主義だ」

その答えを聞き、セレーネは口元を緩める。

「だったらいいわ、やりましょう。バツシュとミネルバも賛成よね」
「？」

「おつよ！もちろんだ！そうだろ、ネル？」

「ええ。……私の二つ名のモンスターにふさわしいか、この眼で確かめてやるわ」

4人は互いの顔を見合わせる。

「よし……。そうと決まったら早速行くとしよう。奴のねぐらは樹海だ。直接向かうことになるから準備した後にもう一度集合しよう。クエストの手続きは俺がしておく。それからあいつは氷属性に弱いと聞く。もし弱点属性武器があるなら持ってきてくれ。それじゃあ一旦解散」

ウルフの声を合図に4人がテーブルを立ち上がった。

「さてと……。毒が危険なのよね。ということは解毒薬を買っておかないと……」

セレーネは酒場の隅にある、ハンター達の気分転換用の遊戯もかねた射的場のほうへと歩き出す。ここはハンターズシヨップとしてハンターの役に立つ道具を売る店としても兼任していた。

「すみませーん、欲しい物があるんだけど……」

店員が奥で探し物をしているのか、店頭にいない。

「はいはい、すみませーん、お待たせしまし……。あらっ!?!?」

現れた店員の意外な声に一瞬視線を外していたセレーネは反射的に眼を戻し、「あっ」と呟いた。

ピンクを基調とした服に2つに分けて編んだ髪と特徴的な眼鏡。

「セレーネ……。?セレーネでしょー?ちょっと前までマイトレの管理人だった……」

「アネット！久しぶりじゃない！」

店員である彼女の名はアネット。まだセレーネがギルドのスタッフだった頃の同期生であった。

「そーよー。ほんと久しぶりー。いつ以来だっけ？」

「ギルドでの研修で同じグループになって、それが終わったあと配属が決まって別々の街になって……それ以来？でもあなたレクサーに配属になったんじゃない？」

「そうなのよー。あそこ昼は暑いし夜は寒いし砂は飛んでくるし……。無理だと思いつながら転属を頼んだらこの人手が足りないってことで最近やっと戻って来ることが出来たのよー」

「はあ、と大変だったことを思い出したように1つため息をつくアネット。

「……でもセレーネ、本当にハンターになっちゃったんだねー。噂で聞いたときはもうびっくりだったよー」

「まあね。……あ、忘れるところだった。解毒薬を買いに来たのよ」

「はいはい、と言ってアネットは棚を探し出す。

「はい、どつぞー」

「ありがとう」

「ね、パーティとか組んでるの？」

「え？ああ、あそこで今クエストの手続きしてる双剣背負った奴がいるでしょ。あいつがパーティの1人よ。ウルフって言うんだけどね」

「んんー？」

アネットはカウンターから身を乗り出し、眼鏡の位置を手で調節しながらウルフのいる方を見つめた。

「何？どうかした？」

「……ウルフ、って言ったよねー？もしかしてオブシディアン家の人？」

昨日エリスにも同じことを聞かれたことをセレーネは思い出した。そのときも確か「オブシディアン」という単語を口にしていた。

「……どうだったかな。あいつあんまり家のこととか話したがらないからさ。そのオブシディアン家ってのはなんなの？」

「んー……。私の気のせいかな……。前私がいたレクサーラの酒場で揉め事があったときにさ、数十人のハンターをあっという間に返り討ちにしちゃった人がいたのー。その人がなんとかオブシディアンとかって名前……。その人にちよつと似てる気もしたけど、よく見るとあんまり似ていないかもねー」

「ふーん……」

買った解毒薬をポーチにしまいながら昨日のことも含めてウルフに聞くべきかを悩んでいた。

「……ま、いいわ。このあと樹海まで行く予定があるから、今日は行くわね。また今度ゆっくり話しましょ」

「そうだねー。じゃあいつてらっしゃい、気をつけてねー」

手を振るアネットに軽く手を上げて応え、クエストの受付手続きを終えた様子のウルフの下へと歩いていく。

「どうしたセレーネ。もう準備はいいのか？」

「ええ、解毒薬を切らしていただけだったし。そっちも手続き終わり？」

「ああ」

「そっか。……ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「なんだ？」

「過去にレクサーラで絡んできたハンター10人ぐらいを返り討ちにしたことかあったり……」

「するわけないだろう。10人も相手にして勝つ自信はないな」

セレーネは1つため息をつく。

「そうよね。……いやね、あそこのショップの店番やってる子、私の昔の同期でちょっと話したんだけど、前働いてたレクサーラであんなに似てるような人が10人ぐらいを返り討ちにした、とか言っ

「てかさ」

ウルフは無言でセレーネの言葉を聞いていた。

「なんか『オブシディアン家の人に似てる』とか言ってた気がするけど……あんたのフルネームってそんなだった？」

一瞬ウルフの眉が動いた気がした。

「……もしかして聞いてちゃまずいことだった？」

「いや、いつかは話そうと思ってたことだ。……確かに俺の名はウルフ・オブシディアンだ。おそらくそのショップの店員が見たというのは……俺の兄弟のことだろうな」

「兄弟？」

「ああ。人が言うに1番上の兄は俺に似てるらしい。……そう言われて嬉しくはないがな」

そういえばウルフは勘当同然で家を飛び出してきた、と前に話していたことを思い出した。

「そっか。……ま、私の知らないところで大暴れして悪い噂が立ってない、ってわかったから安心したわ」

「元々それで心配などしてないだろう？」

「普段のあんた見てりゃそうよね。余計な争いごととかしないしね」

「そういうことだ」

ウルフとしてもあまり話したくないだろう話題と考え、セレーネは早めにこの話を切り上げた。おそらくエリスが言っていた「ウルフを捜していたハンター」というのはウルフの兄弟のことだろう。しかしその兄をよく思っていない以上、別にこの話をする必要はない。

そう考えていると、準備が終わったのか、入り口の方からバツシユとミネルバがこちらに近づいてきた。

「お待ちせ。確か……氷属性が効くのよね？丁度氷属性弓のグラキファーボウが完成したところだったし、これを使わせてもらおうわ」

「俺のほうは氷はなかったんでガンハンマ派生の正式採用機械鎧だけどな」

「いいさ。俺のこいつもギルドナイトサーバーに格上げされたとはいえ水属性だしな。……セレーネのは氷か？」

「ええ。スノウギアドライブよ」

背を向けて武器を見せるセレーネ。

「よし……。行くとするか」

いつもより気合の入った顔でウルフはそう呟いた。

第4話

バテユバトム樹海。木々が生い茂る狩場であり、大陸から海を越えた先の、比較的最近狩猟が解禁された場所でもある。ドンドルマのハンターたちはここを「樹海」と呼んでいた。

緑が豊かな影響か、ここでは様々なモンスターの姿を見ることが出来る。今回4人が目的にしているエスピナスは近年ここで目撃され、ギルドに公認されたモンスターの一種である。その他にもこの樹海では白く輝く巨鳥を見た、という話や木々の間に不気味に紅く光る2つの眼を見た、という様々な噂話があった。

その樹海に今4人が降り立つ。

「密林に似てるみたいだけど……より大きな木が多いわね……」

ベースキャンプを出てまずセレーネが口にした言葉だった。

「ここは狩場として解禁されてからの日が浅いからな。まだわからないことが多くある。噂じゃチャチャブーの集会が行われる場所もあるらしい」

「バッシユ、それに参加したらいいんじゃない？」

「よせよネル。……それは俺じゃなくて旦那だろ？」

「なんでよ？」

不思議そうな顔をして尋ねるセレーネ。

「あいつらは常にホピ酒を持っているからな。いつもホピ酒を飲んでいる俺のほうがお似合いだともいいたいか？」

「さっすが。頭がいいぜ」

「遠慮しておこう。あいつらと飲んでもせつかくの酒が不味くなりそうだしな」

「どの道あの酒じゃ味も何もあつたもんじゃねえだろうよ……」

バッシュと他愛もない話をしながらも、ウルフは先頭を進んでいく。

「うわっ……これ、樹？」

ベースキャンプから北へ進み、木々を避けて進んだ先に1本の大きな樹が立っていた。その樹がこちらを誘い飲み込むように大きな穴が空いている。

「そうだ、セレーネ。これは『千年樹』とも呼ばれる樹だ。モンスタールたちはこの中を根城にしているという話だ。おそらくエスピナスもこの中だろう」

一瞬3人の顔が強張る。

「行くぞ」

無造作にウルフは樹の中へと入って行った。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

遅れてセレーネ、バツシュ、ミネルバが続く。

樹の中は広い空間で、草食種であるアプトノスやケルビたちが生息していた。

「なるほど……確かにモンスターが集まるみたいね。でもここにいのって草食……」

「セレーネ、気をつける」

ウルフの声に反射的に動きを止める。

「左手側だ」

言いながら、ウルフは手に強走薬を手にしていた。バツシュとミネルバの2人も緊張した面持ちで自分の得物を手にしている。

セレーネが視線を左手側に移すと。

そこに一瞬背景と同化して見えたそれはわずかに身じろぎ、よく見れば棘の殻に包まれた飛竜が眠っている姿だった。

「なッ……!!」

思わず声を上げそうになって慌てて口を閉じる。ここで刺激して

起こすようなことがあってはまずいと判断したからだった。

「大丈夫だ」

そんなセレーネの考えを見越したようにウルフは言った。

「大丈夫って……目の前で飛竜が寝てるのよ！？大丈夫なわけが……」

「エスピナスの特性を忘れたか？『怒るまではおとなしい、怒ると手がつけられなくなる』だ」

「いくらなんでもおとなしすぎだと思っただけだね……」

2人の会話にミネルバが口を挟む。

「おとなしいのはわかったからよ、とにかくおっぱじめてもいいんだよな？」

いつの間にか頭の前に陣取ったバツシュが尋ねた。

「ああ、やってくれ。まずは起こすところから始めないといけないしな」

強走薬を一気に飲み干し、ウルフも背の双剣に手をかけた。

「それじゃ……始めるぜ！」

その声と同時にバツシュがハンマーを全力で振り下ろす。

ガギイン！

鈍い音が当たりに響く。

「……つてえ！」

思わずハンマーに添えた利き腕を放す。

「バツシュ！大丈夫！？」

「あ、ああ。……予想以上に硬くて手が痺れちゃった」

「硬い……？」

セレーネも自分の位置から最も近い部位である翼を力をこめて突いてみる。再び鈍い音がして体ごと後ろに仰け反った。

「ちょっと……ウルフ、これどうするのよ？」

見れば時折弾かれながらも尻尾の先端部分を狙って乱舞を繰り返している。

「お前は弾かれずに攻撃する方法があるだろう」

「あ、そうか」

構えたガンランスから紅蓮の炎が上がる。

「さあ……これで起きなさいよ！」

轟音と共に竜撃砲が放たれた。が、エスピナスは動じる様子がない。

「おいおい、こいつもうこのまま捕獲とかしちまえば……」

そこまで話してバツシュは息を飲んだ。

それまで寝ていた飛竜がその巨体を起こしたのだ。

「ッ！」

反射的にセレーネが盾を構える。

エスピナスの首が横に動き、盾越しに眼が合った。

(来る……！)

盾を持つ右手に力が入る。

しかし、そんなセレーネの意図とは裏腹にエスピナスはくるりと踵を返し、ノロノロと辺りを徘徊し始める。

「……え？」

思わずセレーネの右手の力が抜けた。

「何あれ……本当にこいつが怒ると手がつけられないっていうエスピナスなの……？」

「油断するな」

短くそう言い、ウルフは距離が離れたエスピの元へ進む。

「奴にとつてまだ俺達は取るに足らない存在、と思われてるわけだ。放っておけば気が変わってどこかへ行く、とか考えられているんだろ。俺達はその気がない、ということを書いて知らせる本気にさせてからが本当のエスピナスということになる」

「オツケー、それじゃ本気になってもらおうじゃないの。私の二つ名にもなるその姿、見せてもらおうわ！」

弦を引き絞り、徘徊するエスピへと矢を放つ。棘に包まれた背中に命中したがそれでも気にかける様子はない。続けてウルフが足元で乱舞、セレーネが翼へと砲撃、バツシュが頭にスタンプをお見舞いするがやはり応える様子がない。

ハンターたちを自分に群がる小バエとも思っているのか、時折尻尾を左右に振ったり翼を羽ばたかせたりはするが、反撃してくる様子はまるでない。

「こいつ、このまま討伐されちゃうんじゃないの？」

ミネルバが楽観的な意見を言ったその時だった。

「来るぞ！散開しろ！」

足の下で乱舞していたウルフが珍しく叫び、そのまま横へと回避する。

そしてセレーネは見た。

これまで緑色だった体に、まるで血が通っていくかのように妖艶な橙が染み出していく。一瞬の後、鮮やかに体色を変えた飛竜がそこに立っていた。

「な、何よこい……」

『ヴオオオオウーン!!』

出しかけたセレーネの声は耳を割らんばかりのエスピの咆哮にかき消され、次いでその咆哮から起こる衝撃に体を吹き飛ばされる。それはウルフの注意を聞いて距離を取っていたバツシュも同様で、予想外の風圧に巨大樹の根に当たる部分に背を打ち付けていた。

「セレーネ！バツシュ！」

「わ、私は大丈夫！バツシュは!？」

「いってえ……大丈夫だ！」

「ならすぐに立ってそこを離れる！」

後方のバツシュの位置を確認するとセレーネのほぼ真後ろ。ここでガードしきれない攻撃が来たら一網打尽にされる。

そう思いエスピに目を移すと、頭を一瞬下げ、尖った角が目に入った。

「まずい……!」

反射的に盾を構えて来るであろう衝撃に備える。が、その衝撃の代わりにセレーネの横を一陣の風が通り過ぎた。

「なっ……！」

初めはプレスだと思った。が、プレスではない。

質量が違う、横をすり抜けたのは間違いなく巨体。現にさっきまで眼前にいたはずのエスピナスは今、セレーネの後方　つまりバツシュがいた位置　にいた。

幸運なことにバツシュはその場から横に跳び退いていたため無傷だった。加えて、セレーネのいた方向と逆に避けたために2人の立ち位置は直線上にならずにすんでいた。

セレーネが頭の中でそう理解したとき、エスピがこちらに振り返る。間違いなく次の狙いは自分だ。

(でもあの突進が来るなら……武器を納めてる時間はない……！)

腹をくくって盾を持つ手に力をこめる。

エスピは息を吸い込み、口から漆黒の球体を吐き出した。セレーネの盾にぶつかったその球体が爆ぜ、不快な刺激臭が鼻を突く。

「これが毒と麻痺を同時に引き起こすプレス……！」

こんなものを喰らったらたまらない。麻痺したところにさっきの突進を受けたら間違いなく無事ではすまないだろう。

「これは今まで以上にきついかもね……」

自嘲的に1つ笑みをこぼす。

再びエスピが頭を後ろに下げる。が、今度はプレスではなく、後ろに羽ばたき距離を取っただけだった。

「セレーネ！今のうちにこっちだ！」

スノウギアを背に戻すと同時にウルフの声が聞こえた。見ればセレーネ以外の3人はすでに準備万端という具合で、その足元がわずかに変色している。

「そうか、落とし穴……！」

ウルフの狙いに気づいたセレーネは3人の方へと駆け出す。それより少し遅れて着地したエスピが猛然とセレーネへ向かって突進してくる。

(ギリギリまでひきつけられ……！)

自分の走る速度を遥かに上回る足音が後方から迫る。今すぐにも横に避けたい衝動を抑え、セレーネは全力で走った。

「今だ！」

ウルフの声を合図に、それまで真っ直ぐ走ってきた進路を直角に変えて跳ぶ。絶妙のタイミングでセレーネは突進の直線状から逃れた。

エスピも獲物が横に逃げたのに気づいて急制動をかけるが、高い突進力が仇となり、そのまま落とし穴へと突っ込んだ。

『グウオアアア!?!』

唸るような声を上げてエスピナスの巨体が落ちる。

「もらったっ!」

それを待っていたかのようにミネルバが叫び、矢を放った。次いでバツシュが頭、ウルフが背へと狙いを定める。

避けたことで出遅れたセレーネだったが、右翼へと駆け寄って抜刀の一撃を叩き込む。

「えっ……!?!」

一突きしてまず驚いた。怒る前と肉質が全く違う。さっきは何をしても効いてる様子がなく、竜撃砲も効果があるのか疑わしかったが、今回は確かな手ごたえを感じる。

その証拠に数回の攻撃だけでもかわらず翼爪の棘は何本か折れ、鱗の間から血が噴出していた。それは他の3人も同じようで、ここぞとばかりに攻撃を繰り返している。

が、エスピナスが空に舞い上がる。落とし穴の拘束時間が解けたのだ。

全員がその場から一旦散り、一瞬遅れてエスピナスの巨体が着地する。追撃をかけようとエスピの動きを3人が注視する。

しかし棘竜はその翼を羽ばたかせ巨大樹の中から外へと飛んでいってしまった。エスピの姿が見えなくなったのを確認し、ウルフは1つため息をついて双剣を砥ぎ始めた。

「ちよつとウルフ！」

「おい、旦那！」

セレーネとバツシュの声が重なり、思わず顔を見合わせた2人だったが、バツシュが眼でセレーネに続きを譲った。

「聞いてないわよ！あんなに暴れまわるだなんて！知ってるなら前もって言つてよ！」

「悪いな、俺も実際に戦つたのは初めてなんでな」

「じゃあなんで怒り状態に移行したときに真つ先に反応できたんだ？」

回復薬を手にしながらバツシュが尋ねる。

「……2人はポツケ村の出身だったな？」

「ああ、そうだが、それが？」

「ならティガレックスは知っているだろう？」

バツシュとミネルバの表情が明らかに曇った。

「ええ、知ってるわよ」

「できれば思い出したくもねえ……。雪山草を摘みに行ったときにあいつと出くわしてよ……。死ぬかと思った……。で、そのティガが何の関係があるんだ？」

「戦っていないならわからないかもしれないが……。ティガレックスは怒りに移行した時に全身が赤く染まる。これは血管を拡張させて血流をよくし、体を動きやすくするためだ。今のエスピナスの怒りへの移行時、それとまったく同じ現象が見て取れたからわかったというわけだ」

「もう1ついい？」

話を聞きながらスノウギアを砥いでいたセレーネが尋ねる。

「さっきまで何やってもまったく受け付けられないような硬さだったのに急に柔らかくなったのはどうしてかわかる？」

「俺も気になった。さっきは渾身のスタンプで手が痺れちゃったのに今は全然そんなことはなかった……。なんでだ？」

「それもさっきのティガと似たものだ。血流がよくなるということと同時にその肉質が落ちると言うことも意味している。もっとも、エスピはティガの比ではないほどに肉質が柔らかくなるようだがな」

「つまり攻撃に特化した分、守りは手薄になったってことか」

バッシュの言葉にウルフが頷く。

「そう。つまり奴の攻撃は激しいが、代わりに守りは弱い。なら短期戦で決着をつけることも可能だ。……長期戦になればなるほどこちららは消耗する。攻撃の際は多くないかもしれないが、それでも短期決戦を狙っていくぞ」

そこまで説明して全員の準備が終わったのをウルフは確認した。

「さてと……ちょっと長話をしちまったが……。休憩にはなったか？」

3人は頷く。

「オツケーだ、いつでも行けるぜ」

「よし。さっさと片付けに行くとするか」

ウルフの声をきっかけとして4人が走り出した。

第5話

エスピナスは樹海の北、湖に面した部分へと移動してきていた。

怒りが治まっているようで、先ほどまで翼に斑模様には浮かび上がっていた赤い血管は見えなくなっており、辺りをノロノロと徘徊している。だが背中や翼にある棘の一部は折れ、腹部にも傷が見取れる。

「やはりさっきの攻撃は利いてるな。つまり怒らせないと刃が通らんか」

「でもよ、怒ったら怒ったでやっぱ手はつけられないぜ？」

バツシュが苦笑いでウルフに答える。

「ミネルバ、奴がおとなしいうちにある程度麻痺ピンを撃ってみてくれ。怒ったら麻痺を取ってほしい。その間にバツシュがスタン、これで長時間拘束が出来るはずだ」

「わかった、やってみる」

「了解だ」

ミネルバは弓にピンを装着し、バツシュは背中のハンマーに手を

かけた。

「俺とセレーネはミネルバの合図があるまであいつの注意を引く。それから総攻撃で怒らせるぞ」

「オツケー」

4人が散開する。ミネルバの一撃を口火に戦いの第2幕が切つて落とされた。

放たれる矢がエスピに当たるたびに黄色の煙が上がる。しかしエスピはそれをなんとも思っていない様子で体を小さく震わせ、羽を細かく羽ばたかせるだけだった。

「あくまで私達は眼中にないってこと……？いいじゃない……。その思い上がり、打ち砕いてあげるわ！」

既にクツクなら麻痺になる量の矢は放っている。だがミネルバは手を休めない。

(クシャル……とまではいかなくてもクツクよりは麻痺への耐性があると考えるのが妥当……。だったら……)

考えながら放った矢が命中し、黄色の煙を撒き散らす。それでもエスピに変化がないことを確認し、ミネルバは声を上げた。

「いいわよ！ショータイムと行きましょー！」

「おつよー！」

待つてましたとばかりにバツシュがまだ硬い頭目掛けてハンマーを振り上げる。ウルフも駆け寄り左脚へと乱舞を繰り出し、逆の右足に駆け寄ったセレーネは竜撃砲を放った。

と、エスピの翼に先ほどまでの斑模様が再び浮かび上がる。

「よし、来るぞ！ミネルバ、頼む！」

叫んでその場を飛び退きながらウルフは冷静に状況を判断していた。

(やはりさっきまでより怒りへの間隔が短くなっている……。俺達の攻撃は予想以上に利いている、ということか。あとは麻痺からスタンへと繋がればこちらが大いに有利になるが……)

空気を切り裂くような咆哮が辺りを包み、反射的にウルフは耳を両手で押さえる。

だがその間に2度、矢が命中するのを目の恥で確認した。

(そもそも麻痺毒を持つこいつに麻痺が通用するか……。それが最初の問題か……)

鳥竜種でいうなら、麻痺毒を持つドスゲネポスは麻痺に対する耐性が高く、同様に毒を吐くドスイーオスやゲリヨスは毒に対する耐性が高い。効果がない、とまではいかないにしろ、どこまで効果が現れるかは不明だった。

(それでも今はやるしかない、か)

咆哮が終わり、エスピがミネルバに狙いを定めた瞬間、ウルフは手に持った閃光玉を投げてエスピの目の前で炸裂させた。莫大な量の光をまともに浴び、エスピナスがよろめく。その隙にミネルバは麻痺ビン付きの矢を打ち込んでいく。

「……無理か？」

小さくウルフが呟いた瞬間、エスピの動きが止まった。

「待つてました！」

雄たけびと共に飛び出したバツシュがハンマーを叩き下ろす。

「多分2回目は無理……これが最初で最後になるわ！」

叫びながらミネルバは残りわずかの麻痺ビンを外して強撃ビンに付け替えている。

「十分だ！」

バツシュはそう言い、振り下ろしたハンマーを勢いよく振り上げた。狙いは寸分変わらずエスピナスの頭を捕らえ、立派に生えていた角が根元から碎けて飛んだ。

「よし、いいぞー！」

興奮した声をあげながらウルフは尻尾を切り落とそうと乱舞を繰り出し、セレーネは右翼に斬撃と砲撃を織り込んで攻撃している。既にその翼は傷ついてその棘は無残に折れ、その他の場所の棘も折れている。

(勝てる……！)

セレーネは勝利を予感した。

「とどめ、行くぜッ！」

その予感を裏付けるようにバツシュの力強い声が聞こえ、ハンマーが頭を確実に打ち上げた。ここでスタンに移行する、それが今までの必勝の策だった。これで決まる、少なくともセレーネはそう思った。

だが、エスピナスの体は倒れなかった。首を左右に振って麻痺からの回復を確認し、それだけだった。

「う、嘘だろ！？レイアとかレウスならとっくに……」

バツシュに明らかに見て取れる動揺。その動揺がバツシュを頭の前と言う最も危険な場所からの離脱を遅らせた。

エスピナスの頭が右下に低く沈み込む。

次の瞬間、勢いよく突き上げられた頭によってバツシュの体は宙を舞っていた。

「バツシュ……！」

ミネルバが悲痛な叫び声を上げる。

「ガハッ……！」

背中から地面に叩きつけられたバツシュを見た瞬間、セレーネは駆け出す。

そのまま気を失ったのか、バツシュは動かない。その動かないバツシュ目掛けてとどめとばかりにエスピが息を吸い込み、口から球体が放たれる。

「させるかッ！」

咄嗟のタイミングで両者の間に割って入ったセレーネは右手の盾を突き出し、そのブレスを防いだ。が、万全の体制でない状態でガードをしたためにバランスが崩れ、右腕にも痛みと痺れが走る。

(追撃が来るとまずい……！)

内心焦ったそのとき、右腕の痛みが引いた気がした。

「な、なんだ……？」

それは後ろで倒れているバツシュも同じようだった。気を失っていたはずが、上体をわずかに起こそうとしているのが眼の端に見える。

しかし状況はまだ悪い、ここで突進が来れば2人まとめて轢かれてしまう可能性も残っている。

だが、エスピは再び息を吸い込み、ブレスを吐くだけにとどまった。痛みが引いた右腕に力をこめ、今度は体勢を整えて受け止める。

ブレスの煙が晴れて、セレーネは初めてエスピが突進してこない理由に気が付いた。右の足元にウルフの乱舞、左の足には雨のようなミネルバの矢が押し寄せていたからだった。

「あんたの相手はこつちだ！こつちを見な！！」

興奮状態に入ったミネルバが叫ぶ。

2人の攻撃は確実にエスピから突進力を奪っているようで、嫌がるようにその場で回って尻尾を振るう。

「チツ……！！」

回避しきれない至近距離で尻尾を受けてウルフが吹き飛ぶ。

「ウルフ！」

「さあ、これで残りは私だけだ。こつちを見なよ！」

その理解するはずのないミネルバの声の通り、エスピナスはゆっくりと自分と同じ二つ名を持つ弓兵の方へと振り返った。

「こいつはバツシユの分だ受けとりな！」

ミネルバが吠えた。放たれた矢は寸分変わらずエスピの左眼を抉り抜く。

『グウオオオ！？』

耐え切れずに棘竜が仰け反った。

「次は右眼だ！」

宣言して放たれた矢は、しかしわずかに右眼を逸れ、首元に突き刺さった。小さく舌打ちをし、次の矢を番えるると同時にエスピが息を吸い込む。

「ミネルバ！避けて！」

セレーネの叫び声とほぼ同時、エスピナスがブレスを吐き出した。

(当たる……！)

そうセレーネが思った瞬間、ミネルバは右足を軸に体を半回転させる。艶やかな髪が数本焼け落ちたが、紙一重でブレスを避けた。

「もらったッ！」

さらに左足を軸に半回転、再びエスピと向き合ったミネルバは番えたままの矢を放つ。

矢は眉間に突き刺さり、エスピの動きが一瞬止まった。その隙にダメージから回復したウルフが尻尾に斬撃を入れる。

『グウオオアアア！？』

巨体が前につんのめるようにバランスを崩し　それまで立っていた場所に尻尾が切り落とされていた。

体中傷つき、尻尾も半分ほどの長さになったエスピは4人に背を

向けて足を引きずりながら歩き出す。

「逃がしゃしないよ!」

ミネルバが追いかけて追撃の矢を放つ。が、エスピは翼を羽ばたかせて上空へと飛び立って行ってしまった。

「逃がしたか……」

歯噛みし、弓を畳んで背に背負うと、ミネルバは踵を返してバツシュの元へと走り寄った。

「バツシュ!」

「だ、大丈夫だ……。セレーネが間に入ってくれたおかげで死んじやいねえよ……」

それでも右手に回復薬グレートを持っており、ダメージは深刻なようで苦しそうな顔をしている。

「バカ!死んだらどうするのよ!あんたが死んだら……私……」

「わ、わかったから体を揺らすな……!い、いてえ……」

「あ……!ごめんなさい」

思わず力が入った左手を肩から離し、ミネルバは目元を拭った。

「角砕いておいてよかったぜ……残ってたら串刺しだった……」

「軽口を叩く余裕はあるようだな。……とはいえ、その様子じゃ肋骨をやられてるな。回復薬程度じゃ焼け石に水だろう」

「そういう旦那も……大丈夫なのか？さつき尻尾当たってたろ……」

バツシュの言葉にセレーネはハツとした。

「そうよ！さっきの尻尾……大丈夫だったの!？」

「あいつ自身弱っていたからな、酷くはない。回復薬で痛みも治まっている。……しかし左手に若干力が入らないのは事実だ。乱舞を連続で振るえば支障が出るかもしれんな」

「クソツ……ここまで来ておいて……满身創痕か……」

回復薬を飲み干し、バツシュが呟いた。

「セレーネ、ミネルバ、2人は大丈夫か？」

「私は平気。さつきバツシュを庇ったときに右腕が痛んだけどすぐよくなったし……。あれって……」

「旦那が生命の粉塵を使ってくれたんだろ？」

フン、とウルフは1つ鼻から息を吐いた。

「助かったぜ……。その辺の援護がなけりゃこうして喋れてもいなかったろうしな……。ありがとよ」

「わ、私は別に……」

思わず顔の体温が上がった気がしてセレーネは顔を背ける。

「へッ……こついつときだけ素直じゃねえよなあ」

「な、何よー！」

「盛り上がってるところ悪いが、話を戻すぞ。……ミネルバももう少しは撃てるな？」

ウルフの「もう少し」という部分にミネルバの眉がわずかに動いた。

「……お見通し、ってわけか」

ふう、と1つミネルバは息を吐いた。

「ええ、そう。連射したおかげで右腕が軽く痙攣してるわ。でも撃てないわけじゃない、まだ撃てる、まだ戦えるわ」

「そうか。3人なら……」

「待て、おい」

そう言うのとバツシユが胸を押さえながら立ち上がった。

「ちょ、ちよっとバツシユ！」

「俺も戦う……。あの野郎、俺のハンマーをもらって気絶しないとはいい度胸だ……。おまけにこっちはこのダメージ……。この落と

し前はきつちりつけさせてもらっぜ……！」

「威勢がいいのはわかるが、動けるのか？」

ウルフの問いにバツシユは胸を力強く叩いた。が、痛みがあったのか一瞬の間があつて口を開く。

「こ、このぐらいなんてことはねえ！ハンマーだつて振れる！つまり戦えるってことだ！」

賢明にアピールするバツシユに対し、ウルフは何かを考え込んでいたようだった。

「でもバツシユ……無理はしないほうが……」

「……いや、待てミネルバ。……そこまで言うなら戦えるんだな？」

「ちょ、ちよつとウルフ！」

ミネルバの心配そうな声をよそに、バツシユはニイツと笑った。

「あつたぼうよ！俺を誰だと思ってるんだ？『ポツケ村出身の器用なハンマー使い』バツシユ様なあ、俺のことよ！」

再び胸を叩き、その痛みで前のめるバツシユ。

「よし……。そこまで言うのなら俺に策がある」

第6話

4人は再び千年樹の中へと戻ってきていた。

「予想通り休眠か……」

最初にエスピと相対した場所で再びエスピナスは眠りについていった。ウルフは既にこうなることを予期し、事前に打ち合わせをしてあった。

「打ち合わせどおりに行くぞ。ミネルバ、バッシユそっちは任せる」

「おうよ、了解だ」

「セレーネは俺と爆弾を運ぶ。あいつを起こすとか途中で爆発させるなんてヘマはするなよ？」

「するわけないでしょ、まったく……」

そう言いつつ、ベースキャンプから持ってきた荷物の中から大タル爆弾を取り出した。取り出した、といってもその大きさは腕に抱えるほどであり、巨大な飛竜や肉食竜の卵よりもさらに二周りほど大きい。これを抱えてる状態で誤爆などでは、下手をすれば命を落とす危険性も出てくる。

さつきは軽口を叩いたが、そんな緊張感もあつてか、セレーネは慎重に爆弾を運んでいった。

先を進んでいたウルフがエスピの左足元に爆弾を置く。眼で合図され、セレーネもそのすぐ横に爆弾を置き、足音を立てないようにして離れた。

「よし……。ミネルバ、頼む」

ウルフの声を合図に、後からセレーネが置いた方の爆弾目掛けて矢が飛ぶ。外部からの衝撃で大タル爆弾は大爆発を起こし、次いで隣の爆弾にも誘爆した。

「よっしゃ！うまくいけばこれで……」

『ヴオオオオウーン!!』

まだ煙が晴れ切らぬうち、バツシュの樂觀論はエスピの咆哮によつて却下された。しかし無論これも計算のうちである。

「やはりそううまくいってはいけないな……次の手だ」

ウルフとセレーネが左右に散る。その真ん中にミネルバ、さらにその後ろにバツシュ。

ブオーファー、ブオーファー……。

戦闘中に相応しくないような音色が響いた。角笛である。大タル爆弾を取りに戻った際、ウルフがバツシュに持たせたのだった。

その音を聞いてエスピが振り返ると同時にミネルバの矢が頭に突き刺さった。

「さあ来な！決着をつけようじゃないの！」

通じていないとわかっていながらも挑発。その挑発に乗ってか、エスピは目標をミネルバへと定めた。

先ほどプレスを交わされたのを覚えているのか、頭を低く下げ、猛然と走り出す。その頭の角は折れ、脚にダメージが蓄積されて最初ほどの速度が出ていない。

しかし迫り来る巨体は人間と言う小さな生き物には脅威以外の何者でもない。

だがミネルバは避けない。ギリギリまでひきつける。そしてひきつけたところで、横に飛び退いた。

「ぐツ……！」

ゴム質の皮で出来たゲリヨスUガードの肩口がざっくり裂けて血が飛ぶ。避けきれず翼の一部が腕をかすり、その棘が防具ごと皮膚を切り裂いたのだ。

だがこれだけの速度が出ているなら減速は難しい。

そしてミネルバがいた場所の後ろにバツシュがいる。1匹目の獲物を逃したと思った先にいた次の獲物。

もはやエスピの眼にはバツシュしか映っていなかったのだろう。

『グウオオオオ!?!』

突如としてエスピの動きが止まる。

ミネルバとバツシュの間には前もってシビレ罠が張ってあった。

角笛とミネルバの矢による挑発、ギリギリまでひきつけての回避、さらに次の獲物としてのバツシュ。全てはこの罠にかけるため、そしてここで勝負を決めるため。

「うおおおおっ!」

バツシュが吠える。胸の痛みを堪え、渾身の力をこめてハンマーを振り下ろす。

ウルフは左腕に力が入りにくいと言った。それでもその乱舞のキレは落ちる様子を見せない。

ミネルバも右腕を痛め、さっきもエスピの突進をかすめたせいで肩口から出血している。だが連射の精度は落ちていない。

全員が満身創痍であったが、セレーネは勝てると直感した。自身にも疲労はある。しかし今はそれを感じない。

強大なモンスターと戦い、そして勝つ、というその興奮、忘れていたわけではなかったが薄れつつあったその感覚、それが心の中から思い起こされる。

初めて狩場に出たとき、初めてリオレイアと戦ったとき、初めて

クシャルダオラを目の当たりにしたとき。

恐怖と興奮が入り混じり、そこから解放されて勝利の余韻に浸る瞬間。今その瞬間が目の前に迫っている。

「はあああッ！」

そう思った瞬間、セレーネは声を上げてスノウギアを切り上げていた。銃槍の切っ先が身動きの取れないエスピナスの首元へと突き刺さる。続けて砲撃を連発。弾倉が空になったのを確認して一歩引いてリロードする。

興奮状態にあったが、頭はどこか冷静だった。

(そろそろ罠が解ける……)

その読みどおり、エスピの足元の罠が弾けた。

(でも……バッシュがそれじゃ終わらせない！)

再び左手に力を込め、開いた距離を詰める。

「ふっ……とべエッ！」

バッシュの全力の振り上げ。命中した瞬間、エスピの巨体が横に崩れ落ちた。

セレーネの読みどおり、傷ついた体でバッシュはスタンを取ってみせていた。

「ここで決めなきゃこちらの策は全部御破算だ！バツシュの努力を無駄にするなよ！」

「言われなくとも！」

「終わらせる！」

ウルフの声にセレーネとミネルバが答える。

しかしバツシュだけは体力を消耗しきった様子でその場に膝を着いた。

「へへッ……わりい……もう動けそうにねえや……お膳立てはしてやったから、あとおいしいところはそつちで持っていつてくれ……」

「十分だ、あとは任せろ！」

叫び、ウルフの対の剣が乱れ舞う。だが続けての攻撃に剣の切れ味は落ち、左手側のキレが悪くなりつつある。

ミネルバも連射の速度が落ちてきていた。

（だったら……私がやるしかない！）

セレーネはバツシュが抜けたことで空いた頭に狙いを定めた。突き刺さる銃槍の先から鮮血がほとばしる。

それでもエスピは戦う意思を失っていない、もがきながらも立ち上がるうとしている。

「なんで……なんで倒れないのよ……！」

セレーネが焦りを口にしたそのとき、よろめくようにしながらエスピナスが立ち上がった。

「クソッ……！ここまでだ、一旦退いて体勢を立て直すぞ！」

力なく左腕が下がったままのウルフが叫ぶ。ミネルバも右腕を抑えるようにしながら距離を取った。

だがセレーネだけは動かない。

「セレーネ！」

いや、動けないのだ。

後ろではまだバツシュが立てないでいる、ここで動けば標的がバツシュに移る。今動くことはできない。

「いいわ………だったら、とっておきをプレゼントしてあげるわよ………！」

よろめきながらエスピナスの顔が迫る。攻撃距離に入る。その口を開け、セレーネを噛み砕こうと首が伸びてくる。

「受け取れッ！」

銃口から紅蓮に伸びた炎は一瞬蒼穹へと変わったかと思うと猛烈な爆発を伴ってエスピナスの顔を飲み込んだ。

オオオオオオン……

まるで未練を残す死霊の呻きの様に声を上げ
樹海の主・「棘
竜」 エスピナスはゆっくりとその場に崩れ落ちた。

エピソード

「今回は割りに合わなかったわ」

ギルドに狩りの報告をし、報酬金を受けとって最初にセレーネが呟いた一言に、クエストの受付嬢は首を傾げた。

「それは報酬金のことを言っとるのかの？」

横からギルドマスターが口を挟んでくる。

「別にお金はいいわよ。今のところ武具分に困ってないし、生活していける分も確保できてる。ギルドの下にいた時から待遇はよかつたし、今は命の危険と隣り合わせとはいえそれ以上に得る物が多いもの。不満はないわ」

「では何が割りに合わないんじゃない？」

「相手が強すぎた、ってこと。仮にも下位種とはいえ古龍種のクシヤルダオラを討伐できたんだもの、ウルフも勝つ見込みがあると言っていたし、飛竜種なんだからなんとかかなると思ってた。……でも実際成功したけど帰って来た時はボロボロ。ハンターランク31から受けれるにしてはリスクが高すぎる、割に合わないと思っただけよ」

「でもすごいよ、エスピナスって言ったら上位の腕利きハンターさ

んでも苦戦することが多いもん。それを上位上がって間もないうちに討伐しちゃうのって珍しいよ!」

茶色の髪を2つに分けている受付嬢は興奮気味に話す。

「まあ……あいつが強いつてことはよくわかったわ。あなたのその話も納得できるわね」

ため息混じりにセレーネが答える。

そこまでを聞いていたギルドマスターが手元の煙草を蒸かして口を開いた。

「セレーネ、樹海ではまだ古龍種の存在が確認されていないことは知っておるか?」

「あら、そうなの?」

「そうじゃ。テロス密林、セクメーア砂漠、クルプティオス湿地帯、ラティオ活火山、フラヒヤ山脈……ほとんどの狩猟場において稀に古龍種の存在が確認されておる。じゃがバテユバトム樹海だけは未だその存在が確認されていない」

煙草を煙らせ、一度間を置く。

「……一節によれば、古龍は樹海において、生存競争に負けたせいで今も生息していない、という仮説を唱える学者もある。その生存競争に勝ち抜いたモンスターこそ、他ならぬエスピナスという話じやがな」

「なっ……!!」

「さらに言うと、樹海では万年霜や鋼龍石といった鉱石が取れる。これはクシャルダオラの鱗が化石化したものじゃ。つまり、生存競争に敗れた古龍というのはクシャルダオラではないか、という説もある」

セレーネは言葉を失った。確かにエスピナスは強力だった。だがあのクシャルダオラを退けているほどだとは思ってもいなかった。

無論、セレーネが戦ったクシャルとエスピはそれぞれ受注可能なハンターランクが異なるから純粹にその力を比べることは出来ない。

「でも……あのクシャルより……」

「最初に言ったとおり、あくまで仮説でそう言われておるだけじゃ。実際のところはまだ説明されておらん。ワシが言いたかったのはそのぐらいの強さを持っておる、ということじゃ」

ふう、とセレーネは1つため息をついた。

「そんな強いんだったら受注時に止めてよね……」

「己の命を管理できんようなハンターなら忠告はしたじゃろう。じやがおぬしらはもう一人前じゃ。危険と判断すれば退くこともできるじゃろう」

「それはどうかしらね……」

実際エスピが嘔み付いてくるのに自分は竜撃砲を強行した、とい

うことを思い出し、1つ苦笑いをこぼす。

「ともかく、そのエスピナスを狩猟したんじゃ。いよいよもって立派なハンターとなりそうじゃな」

「世辞はいいわよ、じいさん」

ギルドマスターの言葉を社交辞令と受けとり、セレーネが軽く流したときだった。

「おいセレーネ！まだかー！？」

振り返ればバツシュがまだ痛むであろう体を延ばしてセレーネを呼んでいる。

「祝杯まだなんだった。それじゃ失礼するわ」

「うむ、しっかり骨を休めるんじゃな」

右手を挙げて遠ざかるセレーネがギルドマスターの元から離れる。そこから机に戻るまでの間、バツシュが「早くしろ」という視線をずっと送り続けていることには気づいていた。

「はい、お待たせ。軍資金よ」

「よっしゃあ！待ってました！おい姉ちゃん！フラヒヤビールとホピ酒お湯割り！あと……」

「万能パインサワーにしようかしら。セレーネ、あなたは？」

「……ミネルバって色々飲むのね。じゃあ私もそれで」

オーダーを取ってスタッフが奥へと引っ込んでいく。

「それにしてもあの大怪我なのに随分元気そうね……」

「あつたりまえだ！あの程度なんてことは……」

そこまで言ったところでウルフの肘打ちを横っ腹に喰らい、バツシユが悶えた。

「寝てろ、と言っても祝杯だけは挙げると聞かなかつたしな。まだ3日しか経っていない、元気そうだが実際は寝てたほうがいいほどの大怪我だ」

「だ、旦那……上げつねえぞ……」

「そついうあんたは左腕どうなのよ？」

「軽い打撲程度だ。防具の上から少し当たったぐらいだからな。ミネルバのように防具を切り裂かれていたらもつと大変だったろうが」

そのウルフの言葉にミネルバは苦笑を浮かべた。

「ちょっとかすったぐらい、の感覚だったのにね。あそこまでとは……」

ミネルバの傷自体は深くはなかった。だがエスピナスの棘には毒がある。解毒薬を飲んではいたものの、翌日は高熱にうなされていった。

「反省会みたいになったついでだ。言っておきたいことがある」

ウルフの真面目な切り出しにセレーネは一瞬緊張した。

「まさか……パーティを抜ける、とか言うんじゃないでしょうね？」

「お前は俺が抜けたほうがいいのか？」

「そんなわけないでしょ！」

「ならこのままだな。俺自身抜けるつもりは今のところまったくない」

セレーネがホッと胸を撫で下ろす。その様子を見ていたバツシユとミネルバがなにやらニヤニヤしているが、今はそれよりもウルフの話のほうが気になっていた。

「まずは感謝を言うておく。俺のわがままに付き合ってもらってエスピナスという危険なモンスターの狩猟に同行してくれたことに対してな。そのせいでバツシユは大怪我を負ったし、俺達も何かしらの傷は負った。これについては素直にすまないとも思ってる」

「旦那が謝ることじゃねえだろ、俺のミスだ。……いや、すまないと思うなら肘打ちとかするんじゃないよー！」

「……もう一つは小言になるが……」

「俺の話は無視かよ！……まあもういい、続けてくれ」

文句を言うのを諦めてバツシュはウルフに先を促した。

「セレーネ、最後の竜撃砲だが……」

「言いたいことはわかるわ。あんな賭けみたいなのはやめろって
いいたいんでしょ？」

「なんだ、わかってるなら話が早い」

「後ろにバツシュがいたとはいえ、なんで咄嗟にやったのかしらね
……。あれで倒しきれなかったら私はただじゃすまなかったのにな。
今後は気をつけるわよ」

「そうか。ならもう言わん。……次はバツシュ」

「げ！俺も何かあるのかよ!？」

話を振られたバツシュが狼狽する。

「お前のハンマーの腕は一流だ、いや、まだ一流でないと自分で思
っていてもいずれはそうなる」

「お、おつ……そりゃどうも……」

「ただ、これから先、お前の腕を持ってしてもスタンを取れない相
手が出てくることもあるだろう。その度に今回のように動揺しては
また大怪我に繋がることになる。……そこを慣れる、という言い方
は変だが、心にはとどめておけ」

「……わかったよ。今回のを教訓にする」

1つ息をつき、ウルフはミネルバのほうを見た。

「最後にミネルバ。……実はこいつが一番重大なんだがな」

「あら？何かしら」

「……火事場の馬鹿力に頼るのはほどほどにしたほうがいい」

「待てよウルフ！ネルのキレたときの連射は脅威だろ！？なぜそれを止めさせる！」

バツシュが興奮した声を出した。

「いえ……いいの、バツシュ。……わかってる、今回のエスピナスを見てわかったわ。あいつは怒るととても強かった。でも攻撃に特化しすぎた代わりに防御を失った。結果、命を縮めることになった。……それは私にも言えることなのよ」

「どういうことだ、ネル？」

「あれをやった後、腕を酷使すると狙いの精度が落ちる、いえ、落ちるだけならいいほう。やり続ければ矢を放つのも困難になる……。そうなたら弓師としては致命的、同時にパーティにも負担と迷惑をかけることになるわ。……そう言いたいんでしょ？」

ウルフが溜め息をつく。

「やれやれ……。物分りがいい連中だな。全く持ってその通りだ。ただ、バツシュの言うとおりあの連射は脅威だ。使う場所をわきま

えて、ほどほどにしろってことだ」

そこまで話し、ウルフは一度言葉を切った。

「……俺からはここまでだ。もし俺に対して何かあったら遠慮なく言ってくれ」

「特にないわ。ウルフにしては珍しく口数が多いとは思ってたけど」

「俺もネルと同意見だな。……ただえげつないことだけはやめてくれ。さっきの肘打ちみたいだな」

「まあ、こうやって取りまとめてる方がウルフっぽいし、私は満足よ。……あとはこれからもよろしく、ぐらいかな。……それからあんた、変わったわね」

そのセレーネの言葉に視線を返すウルフ。

「変わった？俺がか？」

「ええ。最初に会った頃は、何て言うか……ほんと無愛想で何に対しても無関心な感じだったけど、今は私たちのことを気にかけてくれてるし、それに強敵を倒したことで楽しそうにも見えるわ」

フン、と鼻を鳴らしてウルフは無言を通す。セレーネの言葉に再びバツシュとミネルバがニヤニヤしている。

今度は文句を言ってやろうと思ったそこで4人の酒が運ばれてきた。

「……まあいい、一旦話はここまでにするか。とりあえず祝杯だ。……今回の狩りは俺からの頼みだったしな、今日のところは俺の奢りにしておいてやる」

「お！気前がいいぜ旦那！よっしゃ、飲んで食つぞ！」

「バツシュ……傷には障らない程度にしなさいよ」

ミネルバの小言も聞こえない様子でバツシュは追加注文の声を上げた。

2 章後書きと登場人物紹介

というわけで第2章です。

MHFオリジナルモンスターのエスピナス戦でした。

エスピに初めて行った時といえば、怒ると同時にわけもわからずキヤンプに帰された記憶しかありません…。

本編でも書かれてますが、毒、麻痺、高い気絶蓄積と本当に面倒くさい相手で、おかしい突進速度と範囲の広い突き上げは上位に上がりたてのハンターを多数葬ってきたことでしょう。

しかし怒り後の肉質は非常にやわらかく、怯み値も高くないために4人で顔に切りかかれば怯み続けさせることも可能、と攻撃力に特化した分防御が弱くなっています。

この点を本編でも反映しています。

また本編では討伐していますが、尻尾が切れた時点で捕獲可能ラインなので、金銀エスピのようにマストが討伐でなければ普通は無理に討伐に行かず捕獲かと思えます。

エスピは他に1章のウルフの話の中で出てきた亜種（茶ナス）と、それと別に希少種（白ナス）もいます。

どちらも原種とはまた異なる動きで、最近ではさらに特異個体なんてのもいるので、バリエーションは非常に多いモンスターです。

後書きと云うかエスピ紹介になっしまいました…。

本編についても少々。

セレーネのかつての友人ということで登場したアネットですが、MHF内でガイド娘、という役割で道具を売っています。

ガイド娘は他に4人の計5人いまして、エピソードでクエストの受付をしている子も実はガイド娘です。

ちなみにアネットを出した理由ですが、自分は眼鏡の女の子は好きだというのが1つと、可哀想に彼女は人気投票で最下位になってし

まい、ガイド娘はフィギュア化されているのですが、それも1番遅いということになってしまいました。

そのため報われないと思って出演していただいた次第です。

さて、長くなってしまいました。

今回も読んでくださった皆様ありがとうございました。

以下、登場人物紹介です。

年齢は2章時点で、1章時点だとそれより1歳分若くなっています。

あとこの世界では16歳から成人と認められて、そこから飲酒可能な設定ということにしておいてください。

日本において未成年者の飲酒は法律で固く禁じられています。

それからスキルは実際にシミュレータで調べたのでMHFで発動可能なものになっている…はずです。

名前：セレーネ・ヴィヴェルド

年齢：18歳

武器：スノウギアードライブ

防具：レッドピラス(頭)、ザザミス

スキル：防御+30、ガード性能+1、砥石使用高速化、火耐性+

10、砲術師、スローライフ

髪型：レイアレイヤー 色は茶

嗜好：酒に弱い

名前の由来：ランスの英語を並び替えて lance cel
an selenene な感じで半ば無理矢理変換。月の女神に
セレーネと言う神がいたと知ったのはその後。MHP3の前に書き
始めていたので、月穿ちセレーネが元になったわけではなかったり。
苗字はガンランスのヴィヴェルデットSPから。

紹介：元ギルドの人間でマイトレの管理人だったという異色の経歴
を持つ。その際担当になったハンターに憧れてハンターを志す。早
く一人前として認められる存在になろうと1人でレイアを倒すこと
に固執している時にウルフと出会い、レイアを倒せるだけの力を得
るためにパーティを組む。その後、特にレイア打倒後は1人で狩る
ことに対する固執は消え、ドンドルマ防衛戦でパーティを組んだバ
ツシユとミネルバと共に狩りを続けている。「一人娘」と呼ばれて
いた時期もあり取っ付きにくそうな印象があるが、元ギルドの人間
と言うことで実は意外と社交的。強気な性格であるが、年頃の女性
らしい反応を見せることもある。子ども扱いされることを嫌う。

裏話：とにかく主人公はガンスで女ハンターと決めていたので、だ
ったら防具はザザミだろうと。一応スキルは上位でもそこそこ戦え
ると言うことでこんな具合に。自分はガンス大好きだったのでガン
ス一択でした。なお、実際この防具を上位上がりたてで作ろうとす
るとザザミを延々狩る事になるのですが…。まあ細かいことは気に
しないでください。元マイトレ管理人という設定で、わかる人はわ
かるかと思いますがモデルは三女です。

名前：ウルフ・オブシディアン

年齢：20歳

武器：ギルドナイトセイバー

防具：衝撃のピアス(頭)、ブラン

スキル：攻撃力UP【大】、見切り+2、耳栓、風圧【小】無効、ひらめき、砥石使用高速化

髪型：レウスレイヤー 色は赤みがかつた茶

嗜好：辛い物好き 酒好き、強い酒を飲んでもあまり酔わない

名前の由来：セレーネが月の女神とわかったので、当初はそれの対となるアポロンとかを候補にしていたのですが、なんかしっくりこなかったので月に吠える狼という発想からそのままウルフ。苗字は双剣のオブシディアンSPから。

紹介：両親が元ハンター、兄弟もハンターと言うハンター一家の末っ子。幼い頃から父にハンターになるための知識や技術を教え込まれるが、父の教えと衝突して家を出る。その後しばらく野良で狩るなどしていたが自分の考えに自信が持てず、腐りかけていたところでセレーネと出会う。自分の夢をかなえるために戦うセレーネに心を動かされ、パーティを組む。それからはハンターとしての生き方に自信を持ち始め、持ち前の知識と冷静さでパーティを支える存在となるが、一方で戦いを楽しむような様子も伺える。何気にパーティの最年長。

裏話：主人公のパートナーはクレバーな男双剣使いと決めてました。理由は、まだ強走鬼人が出来た時代は双剣といえば強走飲んでとにかく乱舞、という双剣使いが多く、それに対する反発のようなものからです。防具については下位でイーオステンプレだったので上位はバケツテンプレも考えたのですが、期間限定の意外なところを狙って衝撃のピアスとブランにしてみました。自分がブランを作った時代はレイア3頭パリア1頭とかで意外と大変でした。それにしてもこのスキルはランナーがない以上、今の双剣では使えそうにないですね…。

名前：バツシユ・ザファイア

年齢：19歳

武器：正式採用機械槌、ヴェノムモンスター、バインドキューブ（ハンマー） デッドリイタバルジン、デスパライズ（片手剣）

防具：レウス

スキル：攻撃力UP【大】、見切り+2、自動マーキング、高級耳栓、龍耐性-10

髪型：クロオビショート 色は黒

嗜好：肉料理好き フラヒヤビールが好物だが酒はあまり強くない
名前の由来：殴るの英語 *bash* からそのままバツシユ。苗字はザファイアバスターSPから。

紹介：ポツケ村出身のハンター。陽気でパーティのムードメーカー兼トラブルメーカー。ウルフのことを「旦那」と呼ぶ。口癖は「おうよ!」。幼い頃からハンターになることを夢見て育ち、16歳のときにポツケ村で見習いハンターとなる。その後ドンドルマで正式にハンターとなり、ドンドルマ防衛戦を機にセレーネたちとパーティを組む。ハンマーを得意とするが、状況に応じて主にサポート重視の片手剣も使いこなす。ライトボウガンも使えるらしい。ミネルバとは幼い頃からの幼馴染だが、関係はなかなか発展していない様子。

裏話：斬、斬と来たので打。自分がプレイした頃のMHFでは打棒は圧倒的に笛が多かったので逆行してハンマーで。ただ、得手不得手はつきりする武器なので、片手も使えると言う設定にしました。ライトは使える、というだけなので自前では所持していません。防具のレウスは「モンハンと言えばレウス」という考えからです。本当はレウスSで書こう（というか実際Sで書いていたんですが）と思っていたのですが、シミュレータを回すとスキルが絶望的なことになる+本編で言ってる通り素材が冗談抜きでありえない（1部位

に付き逆鱗5枚とテオ塵粉が1つ必要)ということでも却下。しかも
防御・40がつくせいで防御力だけならSにしてもほとんど変わら
ないという悲惨なことに…。運営さん、レウスはモンハンの代名詞
ですよ…？

名前：ミネルバ・ロアベルク

年齢：19歳

武器：パワーハンターボウ？、ハートショットボウ？、グラキファ
ーボウ

防具：ハイメタU(頭)、フルフルU(胴、腰)、ゲリヨスU(腕
脚)

スキル：攻撃力UP【大】、高級耳栓、火事場力+2、広域化+1、
気絶確率半減、見切り+1、ランナー

髪型：ナナストレート 色は金

嗜好：果実酒を中心に色々な種類の酒を好む

名前の由来：幼馴染にだけ愛称で呼ばれ、名前の一部を愛称に出来
る名前、と言うことで。苗字はフェニックスロアSPとベルクシュ
ーターSPから。

紹介：バツシュの幼馴染でポケ村出身のアーチャー。幼い頃は泣
き虫でバツシュに守られてばかりいたが、ハンターになると言う夢
を聞いた後に自分も強くなって一緒にハンターになることを決意す
る。普段は面倒見のいいお姉さんのような性格だが、怒りで我を忘
れると豹変する。これは泣いてばかりいた頃に泣くなら怒るように
自分に言い聞かせていた反動で、一度ポケ村で男ハンター3人を
殴り飛ばしたこともあり、その豹変ぶりから「エスピナ・アーチャ
ー」という不名誉な二つ名も持つ。本人はそう呼ばれることを非常
に嫌っている。

裏話：斬、斬、打と来れば最後は弾です。これはボウガンと迷いましたが、防具を自分の上位時代の弓装備にしよう思ったので弓にしました。優秀で見た目もそこまで悪くないと思ったので採用してます。実はこれは下位からでも作成可能、なのでミネルバだけ1章と2章で防具が変わっていません（外伝1話だけゲリヨス一式）。それでもスロットを使わずにランナーと高級耳栓が付くため、下位でも非常に優秀な防具となります。また、上記のスキルは31時点を想定していて、完全にスロットが開ききれば見切りも3に上げられるため、SP防具までのつなぎとして十分な性能を持っていると思つてます。「怒ると豹変」と言うのはいわゆる火事場、とでも思つていただければ。

前編その1

「この……雑魚め！」

自分目掛けて飛び掛ってきたコンガを右手の盾で殴り返し、地面に落ちたところだとどめの突きを入れる。避けることも叶わず頭にスノウギア・ドライブの刃を突き立てられたコンガはその場で絶命した。

「セレーネ、コンガに気をとられすぎるな！」

相棒の声にセレーネ・ヴィヴェルドは慌てて顔を上げる。

と、コンガ達を束ねる親玉・ババコンガが自分目掛けて走ってくるのを確認した。

「クッ……!!」

慌てて盾を構えて突進をやり過ごす。大事には至らなかつたものの、連続で盾を使ったことで右手に若干の痺れを感じる。

「俺が注意を引く間に体勢を立て直せ！」

叫びながら鬼人化状態になった双剣使いのウルフ・オブシディアンはババコンガの右後ろ足に張り付き、怒涛の斬撃を叩き込む。「乱舞」と呼ばれる双剣の最も有名な連続攻撃だ。

一見すると剣にすら見えないような双剣、ローゼンツァーンから繰り出される攻撃を邪魔に感じたか、ババコンガはウルフの方へと向き直った。

その隙にセレーネは周りにコンガが近づいていないことを確認し、武器を納めるとアイテムポーチから回復薬を取り出し、急いで口へと運ぶ。苦味の代わりに腕に感じていた痛みが引いていく。

「よし！目に入る範囲でコンガは始末したぜ！」

セレーネが回復薬を飲み終わるとほぼ同時に、雑魚の掃討を担当していたバツシュ・ザファイアとミネルバ・ロアベルクが合流した。

「さてと……本命を狩るとしますか！」

叫びながらバツシュは左手の得物をより強く握る。普段ハンマーを使っているバツシュだが、今回はサポートに回るということで麻痺片手剣であるデスパライズを装備してきていた。

ミネルバも背に折りたたんでいた弓を広げる。今まで使っていたパワーハンターボウ？ではない。鋭い棘を弓身にあしらった炎の弓、ローゼンボーゲンである。

コンガは火属性に弱い、と一般的に言われているが、数匹のコンガを狩った時点でそのことを実感していた。

「こいつをババコンガにお見舞いしたら……どれほど効果があるのか楽しみだわ……！」

雑魚との戦いでは温存していた強撃ビンをセットする。セットが終わると同時に、3人にいいようにやられていたババコンガが顔を真っ赤にし、後ろ足で立ち上がった。

『ウガーツ！』

同時に腰を振って放屁し、辺りに悪臭を撒き散らす。

「くっつ……臭ッ……！涙が出てくるわ……！」

鼻と顔を覆いたい衝動に駆られながらも、セレーネはそれを堪えて顔をしかめるだけで我慢した。こういうときは少しでも距離を取っていられるミネルバのことが羨ましく感じる。

そのミネルバのほうから矢が飛来し、ババコンガの自慢のトサカへと突き刺さる。一瞬首を振ってそれを嫌がったババコンガは狙いをミネルバへと定めた。

『ウガーツ！』

跳び上がり、巨大な体でミネルバを押しつぶそうとする。だが相手が跳んだ瞬間、ミネルバはすかさずその場を離れ、空振ったババコンガのトサカへと再び矢を放った。今度はさらに先ほどより効いたらしく、思わず頭をかばうような仕草を見せる。

その隙に距離をつめた3人が後ろ足へと斬りかかった。

たまらずコンガの巨体が転がり、地面を叩きながら痛がる。

「よし、あと一息だ。気を抜くなよ！」

声を上げながら隙だらけのババコンガを斬りつけてウルフは叫ぶ。

その言葉が終わらないうちに桃毛獣が立ち上がり、3人は距離を取る。

『フゴツ、フゴツ、ウガーッ！』

右、左、右と3度大きく引つかき、そのまま身を投げ出すようにしてその場に大の字になる。当たれば脅威となる攻撃だが、それ故隙を生みやすい。何度も戦った経験のある4人からすればここがチャンスとわかっていた。

頭の左側からウルフが乱舞を繰り出し、右側から挟み込むようにセレーネが突きを放つ。かなり効いている様子で、ババコンガは慌てて起き上がると腹に力をこめて思いつきり突き出した。

だが2人はこの習性も把握しており、既にその攻撃が当たる射程外へと離脱している。

と、そのときコンガの体が崩れ落ち、痙攣し始めた。

「お待ちかねの麻痺だ！こいつで決めにしようぜ！」

バツシュの言葉を聞き、3人がさらに攻勢に転じた。

ウルフは目にも止まらぬ乱舞を頭に叩き込み、その横からミネルバが正確に矢を打ち込む。

もはや自慢のトサカはボロボロに崩れ、かなりのダメージを受け

ていることを表していた。

「でかいのいくよ!」

セレーネは叫び、竜撃砲を放つ。桃毛の剛毛が爆炎に飲み込まれるが、それでもババコンガは倒れない。

麻痺が切れたのか、よろよろと立ち上がるうとした。

「体力があるのは認めるけど……しつこいのと臭いのは女には嫌われるわよ!」

ミネルバが驚くべき速さで矢をつがい、放つ。

1発、2発、3発……。

連続で放たれた矢は違いなく頭へと突き刺さり、最後の力を振り絞ったように一度引っかいた後、ババコンガはその場に倒れた。

「よっしゃ、一丁上がりだぜ」

大分余裕のある様子でバツシュはそう言い、剥ぎ取りナイフを手にババコンガの剥ぎ取りを始めた。続いてセレーネとウルフも武器を納め、剥ぎ取りを始める。

ただ、ミネルバだけは1つため息をついた後、ワンテンポ送れて弓を畳んだ。

「なんだ、ネル? やっぱ乗り気じゃなかったのか?」

「ええ……。確かにババコンガを狩りたいと言ったのは私だけど、やっぱりこの依頼は気乗りがしなかったわ……」

そう言うとミネルバも剥ぎ取りナイフを手にし、ようやく剥ぎ取りを始める。

「お前の気持ちはわからないでもないが、俺たちが気にすることじゃない」

ウルフは短くそう言った。

「金持ちの道楽など知ったことじゃないが、俺たちはハンターで、モンスターを狩ることを生業にしてるんだ。今回は報酬だけはいい」

「それはそうだけど……」

「こんなおいしい話、私達がやらなくても誰かはやるわ。だったら私達がやれただけ運がいいと思うけど？」

「私が言いたいのはそういうことじゃないんだけど……。まあいいわ、セレーネの言う通りね」

「大金がもらえてババコンガの素材も手に入る、こんなうまい話なんだ、何も考えることねえだろ？」

「はあ……。バツシュは単純でいいわね」

「な……。！単純とはなんだ、単純とは！」

「そのままの意味だろ」

ウルフは気にもかけない様子で黙々と剥ぎ取りを続ける。そのままバッシュがウルフに突っかかる様子を見てセレーネが苦笑する。

今回のクエストは今までと少し勝手が違っていた。

普通依頼主はギルドや商業組合などが多く、個体数が増えすぎないようにモンスターを狩ったり、商隊の航路上に現れたモンスターを狩猟するといった内容が多い。あるいはハンターが特定のモンスターを狩りたい場合、個体数に余裕があるモンスターの狩猟はギルドの依頼という扱いで許可される。それ以外の依頼主としては工房の親方や辺境の村の村長などが依頼してくることがあるが、今回はそういった類とは少し異なる。

依頼主は俗に「退屈王子」と言われる、歴とした王族の王子である。しかしその趣向に問題があり、命を賭けた戦いを鑑賞することが好みと言う好ましくない趣味で、時折ハンターとモンスターの戦いが見たいと、多大な報酬額と共にギルドに依頼をしてくることがあった。

だが、この王子からの依頼はハンターを見下した、更には命を軽んじているとみなして嫌う人は少なくなかった。当初、セレーネも多少はそう感じていたし、ウルフもおそらくそうだろうと思っていた。

ところが、ミネルバがローゼンボーゲンを試し撃ちたいと言ったとき、ウルフが真っ先に選んだクエストがこれだった。

「あなた、ハンターとしての生き方に誇りとか持てるようになったとか言っただけでなかった？ いいの、こんなクエ受けるって言って」

セレーネは自分が思ったことを正直にぶつけた。しかしウルフは軽く鼻で笑っただけだった。

「確かに誇りは持てるようになったさ。だがそれとこのクエストを受けることは話が別だ。俺は武器を作ったばかりで金が少々心許ない。お前も貯蓄はあるに越したことはないだろう？」

「そりゃそうだけど……」

「金持ち貴族の考えることなど知ったことじゃない。俺たちを見下すならそれで結構、地位を認められたいわけじゃないからな。そんな理想や思想よりも臨時収入が入るといふ現実の方を直視するべきだと俺は思うがな」

相変わらずの現実主義的な見方にセレーネは受注を了解した。単純なバツシユも報酬額に目がくらんで二つ返事で受けるといった。

だがババコンガで試しをしたいと言っていたミネルバは受注を渋った。

「試し撃ちをしたいといった私が言えたセリフじゃないだろうけど…… 生き物の命を弄ぶような、軽んずるような、そんな依頼よね……。……でもウルフの言うとおり武器を生産したばかりで貯蓄が怪しいのも事実だし。……あまり気乗りはしないけど言い出したのは私だものね、行くわ」

最終的には了承して4人で狩場であるクルプティオス湿地帯へと来て、依頼どおりババコンガを討伐したのだった。

「……こうやって私達が狩りをしていたのを、あの王子は空の上の気球かどこから見てたってことかしらね」

ウルフとバツシユの口論、と言うよりバツシユの一方的な「口撃」が収まったときにミネルバはそう呟いた。

戦いが見たい、と言う以上はどこかから見られていると考えるのが妥当だ。ギルド側にもそのために金を払って許可はもらっているだろうが、それでも今も見られていると思うとセレーネはいい気はしなかった。

「ならさっさと引き上げるぞ。依頼は達成した。それから、悪いが今日は飲むのをパスさせてもらう。今日の報酬金は武器分の補填にしたいからな」

「あら、だったら今日は私がおごるわよ」

セレーネらしからぬ大盤振る舞いな提案にウルフは驚いた顔を浮かべたが、先に食いついたのはバツシユだった。

「何！？本当か！？だったら今日は朝まで飲んで……」

「ちよつと、あんたは何も生産してないんだからお金に困ってないでしょ？……まあ別に今日は収入が多いから構わないけど」

「おおー！さすがセレーネ！太っ腹！いやあ、お前も丸くなったねえ」

「丸くなったってどういう意味よ！いいわ、そういうこと言うならこの話は……」

「あー！いやいや、なんでもないなんでもない！丸くなったって言うのは、えーっとだな……」

「バツシュ、沈黙は金よ。余計なこと言ってもどうせ墓穴を掘るだけなんだから、黙って謝った方がいいと思うわよ」

ミネルバにそう言われ、叶わないと言う感じでバツシュは肩をすくめた。

「ならそういうわけで今日はセレーネにご馳走になるか。……言うまでもないが、節度は守れよ？」

バツシュに言い聞かせるようにウルフはそう言った。

「あら、ミネルバもバツシュもまだ来てないの？」

翌日、いつものように大衆酒場で待ち合わせをし、その約束の時刻に間に合うように来たセレーネはそう口を開いた。

昨日は遅くまで飲んでいたわけではない。食事のついでに軽く引っかけた程度で、早めに切り上げたために寝坊と言うのはあまり考えられなかった。

「見ての通りだ」

その問いにウルフは短く答える。元々口数は多くなかったが、ここ最近増えてきた、とセレーネは思っていた。だがそれも思い違いじゃないかと思うような短いやり取りだった。

「珍しいわね……。まあいいか」

セレーネはウルフの向かいに座ると落陽茶を頼んだ。ウルフはいつものようにホピ酒を割ったものを飲んで、普段のお湯割に對して今日は珍しく水割りである。温暖期だからということも関係しているのだろう。

今日は酒場が空いているということもあってセレーネの注文はすぐに出てきた。とりあえず喉に流したそのとき。

「わっぴい！ギリギリになっちまった！」

ハンマーを背負ったバツシュが慌てながら走って席に着く。

「姉ちゃん、フラヒヤビール！……あれ？ネル来てねえのか？」

「席に着く前に気づきなさいよ。一緒じゃなかったの？」

「ああ。あいつが遅れるとか珍しいな……」

そう言いながらもバツシュはジョッキが運ばれてくると嬉しそうにそれを飲む。

「かぁーッ！寝起きのフラヒヤビールはいいねえ！」

いつも通りのバツシュの様子にセレーネはため息をつく。

「朝食べてないならついでに頼んじゃえば？」

「まあそれもそうか。こつちガッツチャーハン1つー！」

「ついでに落陽茶も追加でお願い。……ごめん、遅くなったわ」

いつの間に来ていたか、バツシュの注文に自分の分も追加したところでミネルバはセレーネの隣に腰を下ろした。

「珍しいわね。ミネルバが遅刻するなんて」

「ごめんなさい。昨日の夜防具をどうしようか遅くまで考え込んでいたら寝坊しちゃったの。……恥ずかしい話だけどね」

「お！？とうとう武器だけじゃなく、防具もエスピナで身を固める気になったか！？」

バツシュの一言にミネルバは無言で睨みを利かす。

「じよ、冗談だったの……そんな睨むなよ……」

「ウルフ、肘打ちの一発でも入れておいて」

「ちょ、ちょっと待てよネル！いくら怪我は完治してるとはいえコイツの肘打ちは鋭さが違うんだよ！突き刺さるように来るんだよ！わかるか！？」

「ミネルバとしても二つ名の話題を出されるとそのぐらい傷つく、

ってことじゃないの？」

「さすがセレーネ、乙女心がわかるわね」

「ネルの口から乙女心なんて単語が出るとは……」

そこまで言ったところで再びミネルバに睨まれ、バツシュは口笛を吹きながら明後日の方向を向いてごまかした。

「それで、急に防具がどうか、どうしたの？」

「ええ……。昨日、帰ってきて食事しながら3人の防具を見て、そう言えば私だけ複数種の防具を使ってるんだなってふと思ったの」

「まあ……そう言えばそうね」

セレーネは自分を含めて全員の防具を見渡す。

自分はレッドピアスにザザミスシリーズ、ウルフは父親から譲り受けた書物に記された生産方法から作られた衝撃のピアスと峡谷の稀少鉱石から作られたプランシリーズ、バツシュは今は兜を脱いでるものの、狩場に出れば頭からレウスシリーズに全身を包む。

そんな中、ミネルバだけは頭がハイメタリ、体と腰がフルフルリ、腕と脚がゲリヨスリという装備だった。

「しかしそれはお前が扱いやすいと判断したから、その組み合わせにしてるんだらう？」

そう言ったのは、最初に会ったときにミネルバの装備を面白いと

言ったウルフだった。

「そうね……。私は弓師に必要なだと考えてる動きやすさとスタミナ温存、そして咆哮対策を最優先に考えたら、この装備に行き着いたから……」

「私はガンナーのことはよくわからないけど、フルフルもゲリヨスも素材的に軽そうな割には衝撃に強い印象はあるわよね。まあ硬さという点では私はこのザザミが気に入ってるけど……」

「あのかなあ」

ここでバツシュが口を挟む。

「防具つてのはそいつが『このモンスターを狩った』っていうステータスにもなるんだぞ？俺の防具を見る、レウスだ、レウス。『空の王者』だぜ？」

「そう言われたのもちよつと前じゃない。今も十分手ごわい相手だとは思うけど、それでも生態や習性の研究が進んで、弱点や有効策も一般的になりつつあるし、何より武器が強力になってるし」

ミネルバにそう反論されバツシュは言葉に詰まる。

「う、うるせーな！ハンターといえば防具はレウス、そう相場が決まってるんだよ！」

「いつの時代にそんな相場が決まった？」

ポツリとウルフが呟く。

「ぐ……！大体旦那のその防具はなんだよ！峡谷での依頼があつて運良く手に入った素材で作れた、とか言つてた気がしたが、なんでそんなもの手に入れられたんだよ！」

「あ、でもそれ私も気になつてたのよ」

バツシユの話にセレーネも乗つてきた。

「まあバツシユの逆恨みは置いておくにしても、峡谷……行つたことないしそこでどんなクエストだったのかも興味あるわね。……というわけで、私も聞きたいかな」

3人に期待された眼差しを向けられ、ウルフは1つため息をついた。

「やれやれ……やぶ蛇だったな。……まあいい、少し長くなるが聞きたいと言い出したのはそつちだ、文句は言つなよ。……そもそも俺がその峡谷の依頼の前、俺が上位ハンターになったことを報告してやるつと家に寄つたのが始まりだ」

そつ言つとウルフは話し始めた。

前編その2

ウルフの生まれはココット村であった。若い頃名うてのハンターであったウルフの父、リオン・オブシディアンが、妻でありウルフにとっては母であるレモンと結婚し、子供が生まれるとハンターを引退して教官となり移り住んだのである。

そこでリオンはハンター教官の1人として生計を立てながら、子供達もハンターとすべく教育してきた。しかしウルフはそんな父の教えに反発し、家を飛び出した。「安定して効率よい狩りこそが最善」という考えと、親に敷かれた道しか生きれないことに我慢が出来なくなってきたからだ。

「またここに来ることになるとはな……」

兄弟4人でドンドルマに行き、その後兄弟でのパーティを抜けると言いに戻って来て以来だった、もう2年近くになるうか。いざドアをノックしようとして一瞬躊躇する。自分はこの家に帰る資格がない。

「いや、帰るために来たんじゃない」

自分に言い聞かせるように呟き、ドアをノックした。

家の中から足音が近づいてくる。

「はいはい、どちら様……アラツ!？」

「久しぶりだな、母さん」

約2年ぶりに見る母・レモンの顔は少し年を取ったようにも見え
た。

「ウルフ……あんた2年も全く顔も出さないで……」

「オヤジは訓練所か？」

「え?ええ、この村は若いハンターが多いから、忙しいみたいだよ。
教官はあの人1人じゃないだろうにね」

「そうか……」

「上がっていきな。あの人に話があるんだろう?」

「だが俺は……」

「家を飛び出そうが何しようが、お前にとってここはお前の家に変
わりはないのよ。上がって待てばいいじゃない」

「……わかった」

ウルフは家の中に入る。やけに久しぶりに感じる。

「あの人呼んでくるから、ちょっと待ってて」

そういうとレモンは出て行った。

急ぎではなかったが、かといって別にとどまる理由もない。言うことだけを言ったら帰ろうと思いい、ウルフは広間の椅子に腰掛けた。子供のときからここでそれぞれのモンスターについての講義を聞いたこと、調合の練習をしたこと、ニトロダケの取り扱いを間違っ

て火傷しそうになったこと。様々なことを思い出す。そしてそれは今も自分のために役立つ

いる。
「やれやれ……」

どこか感傷的になりつつある自分に対して1つため息をついた。

そのとき、入り口のドアが勢いよく空き、早足の足音が近づいてくる。ウルフは首だけを向け、その足音を待った。

「よう、親父……」

「……ウルフ、てめえどの面下げて……！」

そこに父・リオンが立っていた。だが言葉とは裏腹にその表情は怒りと言うより、驚きのほうが大きいようだった。

「帰って来たわけじゃない。報告に来ただけだ」

「報告だと？」

「はいはい、いいからあんたも座って。今お茶入れるから」

レモンはそういうとキッチンへ歩いていく。それにつられるようにリオンも歩き、ふとウルフの背にある双剣に一度目を留めた後、再び歩き出した。

リオンが椅子に座るとほぼ同時にレモンが落陽茶を3つ机に運んでくる。

「報告といったな」

茶が机の上に3つ並ぶより先にリオンが口を開く。

「ああ。つい先日ハンターランクが31になった。つまりこれでも上位ハンターだ」

あら、と驚いた様子の母とは対照的に、父は無言で茶を一口喉に流し込む。

「兄貴達のハンターランクには遠く及ばないだろう。だがそれでも俺は俺のやり方で、あなたに敷かれた道と異なる方法でハンターを続けていこうと思ってる」

フン、とリオンが1つ鼻を鳴らした。

「お前のやり方、か？俺がお前達に教えようとしたのは安全で早く、確実な方法だ。そしてお前はそれに異を唱えて家を飛び出した。はつきり言ってる。そんな考え方、そんな狩り方じゃお前いつか死ぬぞー！？」

フ、と今度はウルフが口元を緩めた。

「かもな。だが誰かに敷かれた道を安全に進むだけより、俺は自分で決めた道を進みたいと思ってる。たとえその結果死ぬことになったとしても、狩りの中で死ぬるなら俺は本望だ」

はつきりとしたウルフのその言葉に、一瞬驚いた様子を見せた父は次に視線をテーブルに落とした。

「この馬鹿息子が……」

それは怒りよりもっと違う何かがかもっていたような言葉だった。その2人の間を取り繕うにレモンが口を開く。

「まあまあ2人とも。もう陽が落ちるし、ウルフ、今日は夕飯食べてここに泊まっていきなさい」

「しかし……」

「部屋ならあなたの部屋を書斎代わりに使ってたから、そこを使っ
て寝ることが出来るわ。久しぶりなんだから、母親の手料理でも食
べていきなさい」

レモンにそう言われ、渋々ウルフはそれを了承した。

久しぶりの母の味は懐かしく、そして辛くてうまかった。だが食

事の間、父は難しい顔をして一言も発しなかった。せつかくのうまい飯が勿体無いとは思いつつも、もう言いたいことは言ったし、これ以上何かを話してまた揉めるのも面倒と結局ウルフも口を閉じ、レモンとの他愛もない話をした程度だった。

そのまま食事が終わってかかって自分の部屋だった場所へと来ていた。

食事のときに脱いでいた防具と武器を壁に立てかける。ランプに灯を灯すと、あたかも昔の記憶がよみがえってくるようだった。

「やれやれ……」

そういえば広間の椅子に腰掛けたときも同じ言葉を言ったと気づき、1人で苦笑する。どうしてもこの家にいると昔を思い出して感傷的になってしまうようだ。

「いいかしら？」

部屋の入り口の壁を軽く叩き、入るといふ合図をした後でレモンが部屋へと入ってくる。

「布団持ってきたわ。ちゃんとした寝床を用意できないで悪いけど……」

「いや、構わないさ。勝手に来たのはこっちだ」

「勝手に……さつきも言ったように、ここはあなたの家なんだから、いつ帰って来たっていいのよ？」

「しかし俺は家を飛び出したわけだし、オヤジも俺のことを良くは思っていないだろう……」

レモンは1つため息をついて、ウルフの目を見ながら言った。

「やっぱあんたはあの人に似たのね。そういう鈍いところとか特に」

「鈍い……?」

「そう。あの人はあの人なりにあんたのことを心配してるのよ。良く思うだの思っていないだの、親は自分の子の心配して当然なのよ」

ウルフは無言でうつむく。目の前にいる母親はともかく、とてもあの父親が自分を心配していたなど考えられない。

「そんな鈍いんじゃないよあんたのことを好きになってくれる女性がいても気づかないんでしょうね」

「興味はない。今の俺はハンターをやれているならそれでいい」

レモンは再びため息をついた。

「まったく誰に似てこんな狩り馬鹿になっちまったんだか……。……まあいいわ。あなたにもいずれあの人の気持ちと一緒にわかる日が来るでしょうし。明日朝食、食べていくでしょ?」

「頼む」

「それじゃあ私も寝るわ。おやすみなさい」

部屋を出て行く母の背を見送り、ウルフは布団に入った。

「オヤジなりに俺のことを心配、か……」

やはり考えられない。

(自分の考えに対してあれほど激しく反対したのに、自分のことを気にかけているわけがない)

そう思いながら目を閉じ、ウルフは眠りに着いた。

翌朝、朝食の匂いで目が覚めた。肉を焼く香ばしい匂いがする。

起きて一瞬考えてから防具を身につける。食事の邪魔になるかも考えたが、食べたならそのまま出ようと思いなおして荷物をまとめた。

広間に父の姿はなかった。

「あら、ウルフおはよう。早いのね」

台所から母が声をかけてきた。

「今できるから、もう少し待ってて」

「ああ」

そのとき足音が広間に近づいてきた。

ウルフの父・リオンが広間へと入ってきて、無言でウルフの斜め前に座る。

「おはよう、あんた。丁度できたわよ」

レモンの手には肉がはさまったサンドの乗った皿がある。ウルフはわずかに口元を緩めた。

「はい、特製ソース掛けアプトノスサンド。小さいときからウルフはこれが好物だったものね」

「ああ、そうだな」

次いで出てくるのは昨日の夜も出たドツカンスープ。ただし味付けは特別である。それから北風みかんと万能パインのフルーツ盛り合わせ。昔を思い出すと朝にしては豪華に思える。

昨日の夜もヒーヒーカレー、ドツカンスープ、ランランサラダにフルーツ盛り合わせと豪華だったが、ウルフが帰ってきているという事でレモンが腕を振るっただろう。

「さて、それじゃあ食べましょうか」

レモンがそういうより早く、リオンはサンドを潰して口へと運んでいる。ウルフもサンドを力を入れて潰す。上下のパンの間からアプトノスの肉汁とソースがあふれてきて、そのままかぶりつく。

美味しい。やはり懐かしいこの味は美味だった。

ドンドルマのマイハウスにいる給仕ネコも時折これを作るが、この味は真似できない。その理由が特製ソースとサンドする野菜にある。

大抵アプトノスサンドはアプトノスのステーキ肉と砲丸レタス、シモフリトマトといった野菜をサンドして味をつけるためのソースをかけてサンドする。しかしレモンの作るアプトノスサンドは挟む野菜に激辛ニンジンも使い、さらにスパイスワームとレッドオイルをベースにした辛味ソースを使ったホットサンドになっている。普通の人が食べると涙を流すような辛さだが、しかしその辛さの中に旨みが詰まっており、泣きながらも食べてしまおうと言っ一品だった。

半分ほど食べたところでスープを口に流し込む。こちらもかなり辛みの効いたスープで食欲を刺激する。

結局、食べることに夢中になったのもあったが、リオンとウルフはまたも一言も会話を交わさなかった。

「うまかったよ、ごちそうさま」

最後にみかんとパインを少し口に運び、ウルフはそう言った。

少々食べ過ぎたかもしれない、本来なら今すぐ立ち上がって家を出たいところだがもう少し休んでいた気がする。

向かいではリオンは既に食べ終わっており、不機嫌そうな顔で明

後日の方を向いている。

「やっぱり2人も食べるの早いねえ。さて、フルーツ以外片付けるわね」

レモンが立ち上がり、3人の食器を持ってキッチンへと歩いていく。

ウルフとリオン2人だけとなり、重い空気が流れる。このまま無言でいるのも疲れるだけと感じ、ウルフが立ち上がろうとしたとき、ドサツという音と共に机の上に何かが投げ置かれた。

ウルフはその何かを目視する。古い書物のようだった。

「持っっていけ」

リオンはそう短く言った。

「なんだ、これは？」

「昔俺がハンターだった頃にふとしたきっかけで手に入れた書物だ。ドンドルマの腕がいい親方にも渡せばこの書物を解読して防具を作ってくれるだろう」

ウルフは眉をひそめる。

「……なんのつもりだ？」

「それから最近峡谷という狩場が解放された。この村からだ陸路で丸1日ほどかかるが、そこで今希少な鉱石が取れるらしい。その

鉱石を使えば何か防具が作れるだろう。この村のギルドでその鉱石を運ぶ輸送隊の護衛をするハンターを募集している。俺の紹介だと言えば受注させてくれるだろう」

「だからなんのつもりだと聞いてるんだ」

リオンがウルフの方を見る。

「いいか、てめえはもう上位ハンターだ。だったらいつまでもそのイーオスとシルバーメタルなんぞ使ってないで、SかUシリーズに変えるなり他の防具にするなり、上位ハンターに相応しいものにする。防具は命を守る大切なものだ。だから少しでもいいものを揃えられるように教えてやってんだよ」

「なんでそんなことを……」

「ハンターを続けて、強くなりたいんだろう？俺の教えを守る気はなかったって、アドバイスは聞き入れるべきだ。それが……」

「命を繋げることもあるから、か……」

リオンの言葉を切って続けたウルフの言葉に、父は驚いた顔を一瞬見せた。

「……どのみち防具も変えるつもりでいた、丁度いいか。武器は来る道中でギルドナイトセイバーに変えはしたが……」

「武器ももう何本か作れ」

「わかってる。双剣は属性を有効に使える武器だから、だろう。火

と、あと汎用性の高い毒辺りは考えている」

フン、と鼻を鳴らし、リオンはそれっきり黙りこんだ。

「……有効に使わせてもらおう」

そう言つとウルフは古びた書物を手に取って立ち上がった。

「あら、もう行くの？」

キッチンからレモンが戻ってくる。

「ああ。……体に気をつけて」

「あんたもね」

荷物を手にし、ギルドナイトセーバーを背負う。

「外まで送るよ」

レモンが広間を出る。それに続く前に、最後にもう一度父を見たが、不機嫌そうに窓の外を見ていた。

フ、と1つ笑い、ウルフは玄関へと向かう。

「昨日私が言ったこと、わかった？」

「少しはな」

「少しでもいいのよ、それで。……またいつでも帰って来なさい」

手を振る母を一度見つめ、ウルフは家を後にした。

ココット村ギルドの集会所は村の中心部にある。

ウルフの家は村の外れにあり、中心部までは少し歩かなくてはならない。だんだんと村の賑わいが近づき、それにつれてすれ違う人の数もドンドルマほどではないが多くなってくる。

「そういえば……この村の中心部に来るのも久しぶりだな」

ウルフは上を見上げた。ピンクの綺麗な花をつけた樹が立っており、その花びらが雪のように降ってくる。確か遠い島国にある樹に似ている、といわれるそれはサクラという名をつけられていた。

そのサクラの樹の奥にはさらに巨大な樹が聳え立っており、その根元にはこの村を築いた際にモノブ羅斯を1人で倒した英雄、すなわちこの村の村長がそのときに使っていた剣を突き刺した、という話もあった。今となってはその剣はそこになく、次なる英雄が引き抜いた、とも言われておりその話の真偽は定かではない。

しかしこの村をここまでにした村長なのだ、その話はまるっきり嘘というわけでもない。ウルフは思っていた。そう思って歩いていくと、その村長が集会所の前に立っているのが見えた。

「村長、久しぶりだな」

このまま無視して集会所に入るのもどうかと思い、一応声をかけてみる。ん？と一瞬ウルフを見たあと考え込んだ様子を見せ、

「すまんが……誰じゃったかの？」

と、案の定ウルフの予想通りの答えを返してきた。ウルフは一つ苦笑いを浮かべる。

「覚えてないのも無理ないな……。俺があなたにあっただのはかなり前だからな……。俺はリオンの息子のウルフだ。オブシディアン家末っ子の……」

「おお！この村で教官をしとるリオンの息子か！でっかくなったの。そっいえば確か末っ子は家出をしたとか聞いていたが……」

「耳がいいな」

再びウルフは苦笑をこぼした。

「親父の方針に反対してな。今日はドンドルマの街で狩りを続けて上位ハンターになったことを報告しに戻っただけだ」

「ほほう、そうかそうか。自分の歩むべき道を自分で決める、というところかの。悪いことではないと思うがの」

「珍しいな、普通この話をすれば親に従うべきだと言われるんだがな」

「考え方は人それぞれじゃ。無論、それはお前さんの考えも含まれるが、リオンの考えも含まれる。それぞれ思うところがあつて言っている、ということだけは忘れんようにの」

「覚えておくよ」

「うむ、いい心がけじゃ。ところでお前さん……腹減つとんの？」

ウルフは3度目の苦笑いをこぼす。

「いや、朝は食べてきたばかりだ。これからその集会所でクエストを受けるところだ」

「そつか。まあ頑張るんじゃぞ」

村長に軽く頭を下げ、その先にある集会所へとウルフは脚を踏み入れる。

中にはハンターが数名とギルドのスタッフ数名、トレジャーハンターズクエストを発注するトレジィ、それにここを取り仕切るギルドマスターがいるぐらいで、ドンドルマの大衆酒場よりはるかに人の数は少なかった。

ウルフは机に腰掛けている竜人族のギルドマスターの元へと近づく。

「ギルドマスター、俺はこの村で教官をしているリオン・オブシディアンの息子、ウルフ・オブシディアンだ。ここに来れば『峡谷』と言われる最近開放された狩場の依頼を受けれると聞いてやってきた」

「コロット村のギルドマスターはウルフの様子をまじまじと見つめる。」

「ふむ……お主、ハンターランクは？」

「ドンドルマでいうところの31になったばかりだ」

「ふーむ、とギルドマスターは少し何かを考えた。」

「依頼内容は知つとるのか？」

「稀少鉱石が取れたから、それを運輸する際の護衛と聞いたが」

「そうじゃ。何が襲ってくるかわからんし、何も襲ってこないかもしれん。本来はもう少しランクが高い者に頼みたかったというのが本心じゃが……あのリオンの息子ならいいじやろ、受注を許可する」

「感謝する」

ギルドマスターはクエストの受付嬢に受注のサインをさせるよう指示する。出された羊皮紙には既に3人の名前が書かれていた。そういうえばセレーネと組むようになってから野良で狩る機会はめっきり減ったな、とウルフはふと思い出しながら欄にサインをする。

「では峡谷の運輸護衛のクエストを受注したハンターの皆さん、4人揃いましたので運輸隊の方と一緒に出発してください」

受付嬢がそう言うと奥のテーブルから2人、ウルフのすぐ前のテーブルから1人のハンターが立ちあがった。奥の2人は大剣と太刀、

手前の1人はおそらく双剣であろうが、ウルフの持っている直剣とは異なり円を描くように刃が走っていた。

(双剣……か？それにしても見たことがないが……)

そうウルフが思っていると奥にいた太刀使いの男が口を開く。

「なんだよ、また辛気臭そうな奴だな」

「いいじゃねえかビリー。その方が俺たちの分け前が増えるってんだ」

「ま、そうか。お前の言うとおりだな、パット」

そんなことを言いながらウルフの傍へと近づいてくる。

「ウルフだ。よろしくたの……」

「いらねーよ。そんな装備じゃお前が出る幕はねえ。馴れ合いをする気もねえし、ご自由にどうぞってやつだ」

ビリーと言われた男は言いたいことを言い、パットと言われた男の方も1つ鼻で嗤うだけでそのまま外へと出て行く。その後姿をウルフは目で追った。

(武器は……斬破刀の派生とヴァルキリーブレイド派生……。防具はギザミとコンガか。攻撃的だな)

ウルフは残りの1人を見た。橙の派手な毛飾りが目に付く防具で、顔は目から上は頭防具で隠れている。

(こっちは……防具もあまり見ないな……ヒプノか?)

表情が見えないのも何を考えているかわかりにくく、少し不気味に思える。

「あと1人はあなたか？」

「ま、そのようだな」

「あんたも馴れ合いは嫌いかい？」

「好きなほうじゃない」

「奇遇だな、俺もだよ」

そう言いながらも、とりあえず今回の狩りは連携にも問題がありそうだな、とウルフは先行きを不安に感じた。

後編その1

ココット村を出て一昼夜。未だウルフは馬車の中にいた。丸一日とリオンが言っていたことを考えるともうそろそろ着いてもよさそうである。外を見れば岩の台地が増えており、見慣れた景色からは程遠い。

奥に乗った2人は寝ているとき以外はずっとしゃべり続けていた。稀少鉱石を手に入れたらどうする、いや売って金にする、それを武器や防具の素材にしたらいいものが出来そうだ、などなど。

(やれやれ……よくもあれだけ喋って疲れない連中だな)

しかしいい加減目を閉じたまま不定期に揺られる馬車の感覚を感じるのも飽きてきた。かといってあの2人の話にも入りたいとは思わない。

「そろそろ退屈してきたんじゃないのか？」

そう思っていたそのとき、丁度双剣使いの男に声をかけられた。

「馴れ合いは嫌いなんだろ？」

おそろくここで話に乗れば退屈はしのげるだろう。ただし下手をすれば口喧嘩、と言う形だ。

ウルフは馴れ合う必要はないとわかっていたが、険悪なムードを作ればほしい援護がなくなる可能性等も考えており、それはつまり背中を任せることが困難になる。とりあえずその状況は避けたい、そう考え、今回のハンターとは接触を避ける方向で考えていた。

「好きじゃない、とは言ったな。しかしいくらなんでも暇すぎるかな。よかつたら話し相手にでもなってくれよ。確か……ウルフさなんだっただけかな」

ウルフは一瞬眉を動かす。

「なんで名前を知ってるかというのと、昨日あんたがああ2人にそう名乗ったからだ。覚えてないか？」

そう言っただけで奥にいる2人を指す。2人はこちらの様子など気にも留めないように話を続けていた。

「……そう言えば名乗ったな」

「おいおい、自覚なしか。……まあいい。俺の名はオレガノだ。同じ双剣使い同士、よろしく頼む」

「……やはりそれは双剣か」

かねてから疑問だったことをウルフは口にした。

「そうだ。名は『ローゼンナーゲル』。この双剣は俺の部族が使っている形状をモチーフにされてる」

「なるほど、エスピナス武器か。実物を見たのは初めてだ」

ほう、とオレガノは感心した声を上げた。

「お前の雰囲気から察するに……上位上がりたてだろうか？よくエスピナスの存在を知ってるな」

「まあな」

「よかつたら持ってみるか？そのギルドナイトセイバーとはまた違う握り具合だ」

「いいのか？」

答えの代わりにオレガノは背中から一対の双剣を渡す。

ハンターの中には自分の愛用の得物を他人に触られる事を嫌う者は少なくない。武器や防具はハンターの命とまで言う者もいる。かく言うウルフも自分の武器を他人に勝手に触られたらいい気分はしないと考えていたため、オレガノの行為には一瞬驚いたが、礼を言いなからそれを手に取った。

「気をつけな、エスピナス武器ってことは属性は毒だぜ。間違っても怪我するなよ」

「わかった。……しかしこれは振るうと自分も斬りそうだな」

剣を持った手を回してみる。

直剣とは明らかに使い方は異なる。自分の武器は順手に持った先に刃が来るため、そのまま振り下ろせばいい。

しかしこれは違う。手の周りに扇状に刃が広がる形になる。直剣の振り下ろしをすれば自分にも刃が刺さりかねない。

「コツとかあるのか？」

「コツねえ……。ま、慣れることだな。俺のいた集落じゃこいつを使ってモンスターを狩れて、ようやく一人前って認められたからな。こいつの使い方は体に染み付いているのさ」

「どのモンスターだ？」

オレガノは自分の頭を指差した。

「こいつだ、ヒブノックさ」

村や地域によっては儀式の一環としてモンスターを狩ることがある。

有名なのはモノブロスだ。かつてココット村の村長がモノブロスを一人で狩ったという事にあやかり、モノブロスを狩ることで一人前、場所によっては英雄とみなすこともある。

「俺の生まれた集落はバテユバトム樹海の辺境にあつてな。一人前になって村を出るときはこいつでヒブノックを狩らないといけない。……厳密にはこの武器のモチーフ元で、だがな」

ウルフはもう一度この双剣に目を落とし、2本をオレガノに手渡す。

「なるほど、面白い話を聞かせてもらった」

「少しは暇つぶしになったろう。よかったらお前さんから何か話題を提供してくれ」

ふう、とウルフは1つ息を吐き出す。

「ないな」

「あらら。つれない奴だ」

そう言ってオレガノが双剣を背に戻したとき、丁度馬車が止まった。

「着いたでさア。オラ達はこれから鉱石掘るで、護衛を頼みまさら」
輸送隊の鉱夫らしき男がそう言ってきた。

ウルフは馬車を降りた。

透き通るような青空と、そこからの光を辺りの岩山が反射している。岩壁から下を見下ろせば川が流れており、その源を捜せば、広大な滝に行き着いた。

「ここが『峡谷』か……」

初めての狩場に感慨にひたっていると、

「おい兄ちゃん、昨日言ったとおり仮にモンスターが出てきても俺たち2人で十分だ。あんたらの出番はねえ、覚えておきな」

太刀使いが念を押すように言ってきた。

「だ、そうだ。俺たちは気楽にしていっていいということだな」

他人事のようにオレガノは言う。

(そう気楽にも構えられんとは思うがな……)

やれやれとウルフは1つため息をついた。

鉱夫達は慣れた手つきでピッケルを振るっていった。そのこぼれ落ちた鉱石の中から選別をして、いいものだけを袋に入れていく。

護衛、といってもモンスターの気配がない今、やることは特になく、ビリーとパットのように無駄な話をしているか、オレガノのように岩壁を背によりかかるか、あるいはウルフのように採掘の様子をなんとなしに眺めることぐらいだった。

そんなハンター達は気にならず、輸送隊の面々はピッケルを振るい、鉱石を袋に入れていった。

「調子はどうだ？」

邪魔しては悪いとは思いながらも、興味の方が勝ってウルフは鉱

夫に声をかける。

「うーん、あんまよくはないでさア。鉄鉱石は質のいいものが出るが、ここでなくても掘れるわけですし……。あとはクレンザイトぐらいでさア。いいときはこんなのが掘れるでさアがね」

そういうと小さい欠片をウルフに手渡してきた。渡されたのは緋色の、夕日のような美しい鉱石の欠片だった。

「そいつは『緋夕石』でさア。ここで見つかった鉱石の1つ、オラ達の間じゃ『峡谷に沈む夕日』とも呼ばれてまさア」

「緋夕石か……。これが噂の稀少鉱石なのか？」

鉱夫は首を横に振る。

「あれはこんなもんじゃねえでさア。白く輝くこの世の物とは思えんほどの美しさ……。あの日はなぜかそれがバカみたいに掘れた日で、思わず調子に乗っちゃまったんでさア。そしたらレイアの奴が現れて……」

「あれは運がなかったア。結局ワシらは積荷を捨てて命からがら逃げるのが精一杯だア。んでも今回はハンターさんいるし、モンスターが襲ってきてても大丈夫だ、一攫千金も夢じゃねえ！」

途中で話に入ってきた別の鉱夫が興奮した様子でそう言った。ピッケルを振るっている男達はみな目が輝いている。一方で自分は護衛と言つ名目だが、今は何もすることがなくいる。

「何か手伝つよ」

おせつかいだな、と思いながらもウルフはそう言った。

「んでも……」

「警戒は向こうで2人のハンターがやってる、モンスターが来てもあいつらで十分だとも言っていた。大丈夫だろう」

「んだら、すまんけどこいつを馬車に持って行ってくれ」

「お安い御用だ」

鉱石が詰まった袋をゆっくりを持ち上げ、馬車の荷台に持っていく。

「おいおい、俺達の仕事はモンスターからの護衛だぜ？」

オレガノがにやつきながら声をかけてきた。

「俺達の出る幕はないんだろ？ だったら別に手伝っても問題はない。それに突っ立ってるより気が紛れる」

「物好きだな、お前も」

そついうとオレガノは両手を広げた。

峡谷に着いたのは日が昇りきる前で、それから数時間は経ったかどうか。

「ハア……そろそろ休憩だア……」

湖の側の木陰で輸送隊は昼食を取るようだった。太陽の高度はやや西に傾き、1日で最も時間が暑くなる時間帯だ。

近くに洞窟もあったが、多くの場合洞窟はモンスターが巣にしている。そのことを知っていてか、洞窟には入ろうとしなかった。

既にウルフは支給された携帯食料を腹に入れていたため、付近の警戒にあたる。オレガノも先ほどのうちにそうしていたようだったが、あとの2人はわからなかった。

「お前さんたちは飯はいいのかア？」

鉱夫の1人が声をかけてくる。

「支給された携帯食料を取った。味気はないが、空腹は問題ない」

「寂しい食事だア。オラの愛妻弁当分けてやるかア？」

思わずウルフは苦笑する。

「俺たちの仕事はあんたたちの護衛だからな。一緒にのんびり食うわけにもいかないだろう」

「別に食ってもいいぜ、実際あいつらはそうしてるみたいだしな」

オレガノがそう言って指した顎の先では2人のハンターが肉焼きセットで肉を焼いていた。このエリア付近にモスがいたはずだった、多分その肉を剥いで焼いているのだろう。

「……迂闊すぎないか？確かに食事は重要とはいえ、煙を出せばモンスターに嗅ぎつけられる可能性もある」

「ほっつておけ」

オレガノは短く答える。

「むしろモンスターが襲ってきた方が都合とでも考えてるんだろう。あいつらはモンスターを倒して報酬を余計に手に入れたいんだろっつからな。峡谷と言えはまだ狩りが解禁されて日が浅い。今までと違う素材が手に入る可能性もあるしな」

「その気持ちはわからんでもないが……」

「まあ交戦になっても俺は依頼の達成を最優先に考えさせてもらっつがな」

軽い口調だったがオレガノははっきりとそう言った。ウルフも考えは同じだった。

「……ん？」

そのときだった。

陽の光が岩壁の一部に反射し、白く輝いた気がした。

「なあ、今あそこの壁、白く光らなかつたか？」

「何がだ？」

オレガノは気づいた様子がない。

ウルフは食事中的鉱夫達のところ近づぐ。

「食事中すまない。今あそこの岩壁が壁の色と明らかに異なる白色に輝いた気がしたんだが、そういうことであるのか？」

鉱夫達の手が止まる。

「なあ……今の話……」

「確かに時間も合ってる……来たかア!？」

鉱夫達は食事を切り上げ、荷台にあるピッケルと鉱石を入れる袋を手に取った。

「どこの岩だア!？」

「あ、あそこの……」

「よっしゃあアー!」

ウルフから場所を確認するとそこに向かって走っていく。

「なんだなんだ、何事だ？」

異変に気づいたオレガノが寄ってきてウルフに話しかけてきた。

「俺も知らん。……おい、何があるんだ？」

食事を切り上げるのが遅れた鉱夫を捕まえる。

「来るかも知れねえってことだア！」

「来るかもって……何がだ？」

「でっかい嵐だア！」

興奮気味にそう言った男はまだ続きを聞こうとするウルフを振り切って全員が集まる岩壁へと走っていった。

「なんだってんだ……」

ウルフがそう呟き鉱夫達の元へ近づこうとしたときだった。

「出た！出たア！」

そう叫んだ男の手には眩く輝く白い鉱石が握られていた。その様子にウルフとオレガノだけでなく、肉を食って喋っていたビリーとパットも近づいてきた。

「おいおっさん！そいつが噂の鉱石か？」

「そうだア！『白星鉄』だア！」

差し出された手にあつた鉱石を4人が見つめる。

その石は白く美しく輝き、思わず全員が息を飲んだ。

「また出たア！いいぞ、一攫千金だア、『ホワイトスターラッシュ』
だア！」

違うところで上がった声にそちらに目を移すと、やはり白銀の鉱石が握られている。

「よし、おっさん達死ぬ気で掘れよ！そうすりゃ俺たちの報酬も
一気に倍増だぜ！」

ビリーが激をとばす。その間にも白星鉄を含む鉱石はどんどん掘れ、袋が一杯になっていく。

「手伝おう。荷台に運べばいいか？」

「ああ。氣イつけて頼むだア」

一杯になった袋をウルフが担ぐと、オレガノも近くにあつた袋を担いだ。

「依頼の達成が最優先じゃなかったのか？」

「まあな。だがこのアイルーの手も借りたい状況なら、手を貸した
ほうがいいだろ？」

「おいおい、そんな得にもならねえの、俺たちはごめんだぜ！」

ビリーの言葉を無視して2人は鉱石の入った袋を運ぶ。

どれほど袋を運んだか、次第に取れる鉱石の量が減ってきた。

「ふう……こんなもんかア」

鉱夫達はピツケルを置き、手で汗を拭った。

「どついうことだ？稀少鉱石じゃなかったのか？」

「そうだア。んでもあるとき突然こんな取れるときがあるんだア。前取れたときも時間は大体同じ、原因はわからんがそのときになると鉱石がある場所が光るんだア。オラ達はそれを『ホワイトスターラッシュ』って言ってるんだア」

「なるほど、そういうことだったのか……」

ウルフが納得した声を上げる。

「それで、これだけ取れたってことはもう引き上げるのか？」

「うーん……あと洞窟の中も行きたくないア……。あそこでも白星鉄が掘れる可能性はあるし、それに珍しい化石の鉱石も取れる……。んでもモンスターがいる可能性があるからちよつと悩んでんだが……」

「取れるものは全部取っちまえばいいんだよ！モンスターがいたら俺らが狩ってやるから、次は洞窟の中だ。さっさと行こうぜ」

2人が鉱夫達をせかすように促す。

ウルフはオレガノが難しい顔をしていることに気づいた。

「どうした？」

「いや……そろそろ引き時だと思っただけだ」

「同感だな」

そうは言いながらも輸送隊の意思を尊重しなくてはならない。洞窟は目の前に入り口が広がっており、馬車には乗らず、2人は先にそこへと足を踏み入れる。

「……チツ」

数歩先を歩いていたオレガノの舌打ちが聞こえた。

「どうした？」

「静かに。……顔を上げるな」

ウルフは後続に止まるように手で指示を出す。岩陰から洞窟の中をうかがうとガブラスが数匹、そして。

見たことがない巨大なモンスターが肉を漁るように食っていた。雰囲気としてはガノトトスに似ているようにも思える。

しかしガノトトスのヒレと異なり、四肢の腕の部分は明らかに翼と思えるものがついていた。

「なんだ……あいつは……」

「『パリアプリア』だ」

「『パリアプリア』？」

オウム返しにオレガノの言葉を繰り返す。

「ああ。峡谷で存在が確認されたモンスターでな。絶えず腹をすかせているやつらしい。それほど好戦的な相手ではないがな」

異変に気づいて馬車から2人のハンターが降りてきた。

「なんだ？……おい、ありゃあ……」

「ああ、最近見つかったとかいうパリアプリアだな。……丁度いい、狩っちまおうぜ」

2人は得物に手を伸ばして駆け出そうとする。

「待て。向こうはまだこちらに気づいていない。ここは余計な戦いは避けるべきだ」

ウルフの制止にビリーが食いついた。

「ハア？なんだお前、ビビってるのか？」

「そついうんじゃない。今は戦うべきではないと言いたいんだ」

「なんだかんだでビビってるだけだろ？目の前のモンスターを狩れ」

ばさっきの稀少鉱石に加えて新素材だぞ？そこに魅力を感じないのか？」

「魅力がないといったら嘘になる。だが……」

「もういい。ビリー、俺たちだけで行くつぜ」

パットが促す。

「お前らはそこで見てるなり馬車で逃げるなり好きにしろ。ただしこいつの素材は俺たちのもんだ」

「しかし……」

「わかった、じゃあ好きにさせてもらつぞ」

なおも食い下がろうとするウルフとは違い、オレガノはあっさり引き下がった。

「オレガノ……！！」

「俺は輸送隊にこの状況を話して意見を仰ぐ。……まあ多分引き上げることになるだろう。それでいいんだな？」

「しつけない、勝手にしろって言ってんだよ。……よっしゃ、パット、行くぜ！」

ビリーは自分の得物に手をかけて走り出す。次いでパットも飛び出した。

「お前ら……！」

「ウルフ、お前はどつする？行くと言つなら止めないが」

オレガノは完全に引くつもりらしい。

「……馬車に戻る。引き上げだ」

「賢明だな」

ウルフは踵を返し、後ろで始まった戦いの音から遠ざかった。

後編その2

ウルフとオレガノから状況を聞いた輸送隊は、案の定顔を青くして引き上げを提案した。とりあえず安全なベースキャンプを目指し、その後で村へ戻るという案だ。

「依頼の達成を最優先に考えるっていうのは本気だったか」

揺れる馬車の中、ウルフはオレガノに話しかける。

「あそこでパリアを相手にしても得はない。……それよりもこっちの方が心配だった」

「といつと?」

「さつき鉦夫達が言っていたこと。……白星鉄が大量に出た後、レイアに襲われて積荷を失って命からがら逃げてきた、ってな。そいつがひっかかった」

「俺もそれは考えていた。白星鉄が出るとき……ホワイトスターラッシュだったか、その時に合わせてモンスターの動きが活発になる、というのも考えられるからな」

「だがそれもいらん苦労かもしれんな」

馬車の中から外をうかがい、オレガノの言いたいことがわかった。

ベースキャンプはもう目の前、あとは岩のトンネルを抜ければ安全地帯である。

が、そのとき、馬車が急停車した。

「なんだ!？」

「で、出たア!リオレイアだア!!」

悲鳴にも近い鉦夫達の声。見れば巨大な影が地面に向かって降下してきている。

「俺たちがレイアの相手をする!その間にキャンプに逃げ込め!」

オレガノはそう叫ぶと馬車を飛び降りた。ウルフもそれに続く。

2人が戦闘状態に入るとほぼ同時に巨影が地面に降り立った。

陸の女王・リオレイア。モンスターの知名度としてはリオレウスと双壁をなすほどで、同時に空のリオレウス、陸のリオレイアとも呼ばれていた。

レイアが息を吸い込む。

ブレスかバインドボイスが来る、とウルフは咄嗟に判断してアイテムポーチに手を伸ばす。しかしそれよりわずかに早くオレガノが何かを投げるのを視認した。

「考えることは一緒か!」

そのままウルフは下を向いて目をかばう。

直後、眩い光が炸裂し、それをまともに受けたレイアが後ろに仰け反る。

「今だ！行け！」

そう後ろに叫ぶとそのままオレガノはレイアに向けて走り出す。ウルフもオレガノに続くが、大きく右に膨らむように回り込んだ。

オレガノは背中の中のローゼンナーゲルを抜き、まだ目がくらんだままの頭を二度切りつける。攻撃された位置にレイアが噛み付くが、それを読んでいるオレガノは既に後ろに間合いを取っている。

その隙に今度はウルフが脚元へ潜り込んで2度3度脚を斬りつける。まだ視力が回復していないレイアは闇雲に尻尾を振り回してこれをなぎ払おうとする。が、ウルフも一撃離脱をしているためにこの攻撃には当たらない。

2人の戦い方は倒そうと言うものではなく、明らかに散漫であった。しかしこれが2人の狙いだった。

オレガノが後方に目を移す。輸送隊の馬車はこのエリアとベースキャンプを繋ぐ岩のトンネルを今まさにくぐるうとしていた。

「よし、もう一息だ！馬車がこのエリアを離脱したのを確認したら俺たちも引き上げるぞ！」

再び頭に斬撃を入れつつ、オレガノが叫ぶ。

「……いや、ここでこいつを叩く！」

「何!？」

今度は右の翼に斬りつけたウルフからの言葉にオレガノが聞き返した。

「依頼の達成、つまり輸送隊の安全の確保が最優先だろ!？」

「そうだ、だからだ!ここでこいつを討伐とまではいかなくても休眠を取らせる程度まで弱らせることが出来ればこの後輸送隊を追撃する可能性も減る!」

「……なるほど、確かにそれは一理あるな」

呟くように言った後、オレガノは軽く唇の端を上げた。

同時にレイアが頭を振るう。閃光が解けたのだ。

「よし……こいつはここで叩く!俺の足だけは引っ張るなよ!」

「言われるまでもない!」

レイアが息を吸い込みブレスを吐く。頭の前にいたオレガノはそれを素早く横に前転してかわす。

その隙にウルフは強走薬を飲み干し、鬼人化して尻尾に乱舞を叩き込んだ。

ブレスが吐き終わると乱舞が終わるのがほぼ同時、そのままウ

ルフは右手側に倒れこむように転がった。直後、鼻先をレイアの尻尾がかすめる。

間一髪攻撃を避けたウルフだったが、レイアはウルフを標的に切り替え、正面から対峙する。

「チツ………！」

レイアの巨体がウルフ目掛けて迫る。それをウルフはなんとか横に飛び退いて交わし、すぐに体勢を整えなおす。

案の定レイアは巨体を急停止させ、二歩後ずさりながら体を沈める。

「やはりそう来るか！」

叫びながらウルフは右から後ろに回り込む。見ればオレガノは逆方向からやはり後ろに回り込んでいた。

互いの目が合う。

考えてることは一緒、と思わず微笑を浮かべた。

それとほぼ同時にレイアの体が宙に1回転する。サマーソルト、レイア最大の大技である。

直撃すれば重症は免れず、当たりが浅くてもザザミの強固な殻で出来た防具を易々と砕く。加えて厄介なのはレイアの尾先にある毒を持つ棘で、この毒によって命を落とすハンターも少なくない。

だが、大技である以上、生まれる隙も大きい。回った後、着地するときに放つ前と同様に体が沈みこむ形で着地する。

つまり

「尻尾の位置が落ちるということだ！」

地面に着くほど低く落ちた尻尾に2人が高速の連撃を叩き込む。最後の1撃を放つと同時に手ごたえが軽くなり、レイアの尻尾は断ち切られていた。

「よし！」

満足そうにウルフが叫ぶ。が、オレガノは全く気を緩めた様子すらなく、レイアの元へ駆けていく。

そしてようやく立ち上がった雌火竜の頭目掛けて突きを繰り返す。

「なッ……！？」

だが、ただの突きではない。

両手の剣で交互に連続でついた後、流れるように回転しながらレイアのかみつきを受け流し、振り下ろしの2本の剣でもう1度薙ぐ。

自分の双剣のスタイルとは明らかに違う、いや、多少の違いがあるとはいえ、今まで見てきた双剣のスタイルは自分に似ている場合がほとんどだった。と、いうより、完全な我流でない限りは基本の形は教官や経験者から習うことになる以上、大体同じ形に落ち着く、とどこかで聞いたことがあった。

しかし今の一連の流れは違う。乱舞とはどこか違う流れる動き。

(あの男……もしかしたらとんでもない使い手なのか……?)

物思いに耽りそうになるが、今は戦闘中ということを読み出し、ウルフはオレガノの援護に走る。

レイアがオレガノを噛み砕こうと首を伸ばす。それを横に回転してやりすごすのを確認し終える前に、そこまで予測していたウルフはアイテムポーチから閃光玉を取り出して投げつけた。

再び眼を焼かれ、レイアは後ずさる。その機を逃さずオレガノは左右の突きを繰り返し出し、今度は回りながら斬り上げ、さらに突きで懐に潜り込む。

それを見たウルフは頭を斬りつけて離脱する。

今や2人はレイアを完全に翻弄していた。

頭に攻撃が来たと思って噛み付けば次に脚と腹に攻撃が来る。なぎ払おうと斬られた尻尾を振っても手ごたえはなく、再び頭に攻撃が来る。既にレイアの頭部は鱗がボロボロにはがれ、翼爪は折れ、体の甲殻も傷つき、尻尾も断たれていた。

視力が回復すると同時に、たまらずレイアは翼を羽ばたかせて空中に飛び上がる。

「逃げる気か!？」

ウルフが叫ぶとほぼ同時にオレガノがアイテムポーチに手をかけ、何かをぶつけた。辺りに独特の臭いが広がるそれはペイントボールだった。

やがて2人の遙か上空に飛び上がったレイアはそのまま北東の方へ向へと飛び去っていった。

「どうする？追うのか？」

ギルドナイトセーバーを砥石で砥ぎながら、同様にローゼンツァーンを砥いでいるオレガノに尋ねる。

「お前は どうしたい？」

「……おそらくあいつは休眠に戻ったはずだ。ここで追えば狩れるだろうが……。あくまで目的は輸送隊の護衛だ。休眠する以上、追撃はないと考えられるのだから、無理に追う必要はないだろう」

「いいな。100点満点の模範解答だ」

軽く笑うとオレガノはベースキャンプへ向けて駆け出した。ウルフもそれに続く。

「1ついいか。追わないならなぜペイントをぶつけた？」

「……おいおい、さっきの100点はなしにするぜ？お前だってあの後武器を砥いだろ？それはなんでだ？」

「あれは……いつもの癖と言つのもあるが……。突き詰めればこの後いつ交戦になってもいいように準備を整えておく、ということころ

か

「俺が投げたポイントも同じだ。もし休眠を終えて戻ってきたとき、接近を教えてくれることになる。何もポイントボールと言うのは追うために投げるばかりじゃないということだ」

「なるほど……覚えておこう」

そんな会話をしているうちに岩のトンネルを抜け、ベースキャンブにたどり着いた。テントの中で待機していた輸送隊の鉱夫達が2人の姿を見つけて駆け寄って来る。

「いやあハンターさん達が無事でよかったア。さっきレイアが降りてくるのを見たときはまたダメかと思っただしなア」

「あとの2人はどうした？ここに戻ってきてないのか？」

鉱夫達は顔を見合わせる。

「まだだア。てっきりそっちで合流してるもんだと思ってたア」

「どうする？」

ウルフはオレガノに意見を仰いだ。

「最善は今すぐここを離れることだ。……が、お前のその顔、何か言いたそうだな？」

「あの2人を見捨てるのか？それは賛同しかねる」

「あいつらがここでのたれ死のうが、俺は自業自得だと思うがな」

あからさまにウルフが顔をしかめる。

「なんだ？言い過ぎだって言いたいのか？勝手に仕掛けたのはあいつらだし、俺は思ってることを言ったまでだが」

「しかしあいつらがあそこで出て行ったからパリアプリアの足を止められた、という考え方も出来る。それに怪我を負って戻ってきたら命にも関わる。戻ってくる可能性がある以上、無意味に人を死なせる行為はしたくない。やはり見捨てることはできない」

ふう、とオレガノは1つため息をついた。

「甘ちゃんだな。ハンターなら自分の命を最も大切に考えるべきだろっ」

「……かもな」

「……まあいい。今回はお前の案に乗ってやるよ。あんたらもそれでいいか？」

オレガノに問われ、鉦夫達も頷く。

「しかしあまり長居はできないからな。陽が落ち始めたら戻るぞ。いいな？」

「引き際は任せる」

「俺に任せると今から引くぜ？」

おそらく本気であろうオレガノの言葉にウルフは苦笑した。

「そういえば……」

待つと決めてから小一時間が経っていた。非常食用に塩を塗した肉を焼きながらウルフは口を開く。鉱夫達が採掘をしている間、オレガノがモスから剥いで移動中に塩を塗しておいたものだ。

「さつきレイアと戦っているとき、あなたの動きが俺と全く違うと
きがあつたんだが、あれは……」

「なんだ、ようやくか」

先に肉を焼き終えたオレガノが口に頬張りながら答える。

「気づいてないのかと思った。または興味がないかのどちらか、か」

「……大抵の場合、武器の動きの形はほぼ同じになると聞いたことがある。だがあれは明らかに異なる動きだった。説明してくれないか？」

「乱舞改」

「乱舞……改？」

「そう言われてる。足を止める乱舞に動きを加え、従来より手数は多少落ちるものの、安全性と機動性を確保した動きだ。まだ形が完全ではないためにこれを扱えるのは一部の双剣使いだけだな」

「なぜあんたがそれを……？」

チラッとオレガノがウルフのほうを見る。

「おそらく気づいているだろうが、俺のハンターランクはお前より遥かに高い」

「……ハンターランクをあげれば、その乱舞改を教えてもらえるのか？」

「どうかねえ。今はまだ試しの段階だからな」

「試し？」

「俺はいわゆる凄腕と言われるランクだ。だが、あえて上位ランクの装備にしてそのランク帯のモンスターと戦い、情報を得る。そしてそれをギルドに報告し、新たな型を作る。それでギルドが有用と判断すればハンター達に広まる、と……。武器の試しから狩場やモンスターの調査、そしてこの形の試しまで、高ハンターランクになると色々とギルドのために動くことが出てくるのさ」

やれやれ、とオレガノは腕を広げた。

「……頼みがあるんだが」

「あいにく弟子は取ってない」

「な……！」

「悪いな、人に教えるのは下手なんだよ。それに俺は師匠って柄じやねえ」

「しかし……！」

「俺なんか教えなくてもお前は今のまま狩りを続けければ間違いなく腕利きのハンターになる。まだ上位になったばかりなんだろ？ 焦る必要はない」

それでもウルフは納得していない顔だった。

「……ま、どうしても、って言うんなら……。まずはこいつを使いこなせるようになれ。そうしたら少し考えてやるよ」

そう言ってオレガノは背負った双剣を指差した。

「エスピナスか……。まずは倒すことから始めないといけないと言っわけか」

「まあ使いこなせる頃には気づくだろう、俺の手助けなんかいらないうつてな」

「……だといいがな」

そのとき、岩のトンネル荷台に何かを乗せたアイルーたちの影がこちらに走ってくるのが見えた。

「おっと。待って正解だったらいいな」

荷台に乗っているのは他でもない、最初に飛び出して行ったビリーとパットだった。

獣人種であるアイルーの中には人間の生活に溶け込み、仕事をする者もいる。今荷台を引いてきているのはハンターが狩場で戦闘不能な状況になったとき、ベースキャンプや村などに連れて帰って来るのが仕事のアイルーだった。無論狩場を駆ける為に危険が多く、そのためなかなか高額な報酬が支払われるらしく、一説には1度の出勤にそのクエストの報奨金の3分の1がかかるとも言われていた。

オレガノとウルフが駆け寄ると、2人は命こそ落としていないものの、かなり重傷のようだった。

「ニヤー！パーティーの方を保護して連れてきたニヤー！」

「ご苦労さん。すまないが駄賃のマトタビは持ち合わせてない」

「いいニヤいいニヤ、ギルドからもらうニヤー」

2人を運んできてアイルーにそう声をかけ、荷台からキャンプのベッドへと移す。

「ちくしょう……パリアプリアは仕留めきつたんだが……その後……レイアと遭遇しちまって……連戦でもうボロボロだ……。死ぬかと思った……」

そう言うビリーの鎧を脱がせると、体はアザと傷だらけだった。

「いつてえ！右腕が動かないんだ、もつと静かに防具外してくれ……」

その腕を見たオレガノは難しい顔をする。

「折れてるな……。ウルフ、回復薬を飲ませて応急処置をしてやってくれ」

オレガノに言われたとおり回復薬を飲ませ、適当な当て木を見つけてきて右腕を固定する。

「そのレイアは尻尾は斬れていたか？」

「こちらは全身を強打したらしく、ぐったりしたままのパットにオレガノが聞いた。

「尻尾？残ってたよ……。俺が斬ったんだからよ……」

オレガノとウルフは目を合わせる。

「……もう1匹いるってことか？」

「1匹とは限らないな……。……お前達、レイアも狩りたいと言い出すんじゃないよな？」

「……こんな体で何を狩るって言うんだよ……」

「剥いできたパリアの素材と出た白星鉄でウハウハだ……。もうこれ以上ここにいる理由はねえよ」

ふう、とオレガノが1つ息を吐き出す。

「ならさつさとここから引き上げる。応急処置しかしていない以上、お前達も早く医者に見てもらったほうがいいしな。……ついでに残念なことを教えてやる。剥いただけのパリア素材には大した価値はないぞ」

それを聞いてビリーとパットが悲壮感を浮かべながら顔を上げた。

「おい……冗談だろ……？」

「なぜ峡谷と言う場所がこれまで狩場として開放されなかったか。ここには何も無いと思われていたからだ。ここを根城にしてるパリアアプリアについても素材が扱いにくいということまでこれまでは見向きもされなかった」

「た、確かにあいつ剥いでもいい素材じゃなさそうだし、滑って剥ぎにくいし臭いし散々だった……」

「だが最近になってパリアのある習性から存在が見直され、また、この地から珍しい鉱石が採掘できることがわかって峡谷は開放された」

「ある習性……？」

痛みを堪えた様子でパットがオレガノに問いかける。

「奴は何でも食うのさ。そして満腹になると食ったものを吐く。その嘔吐物に珍しいものが含まれてる、というのがわかってきた。つ

「まり、吐かせないといい素材は手に入らないんだ」

「そ、そうだったのか……」

2人にとってさらなるダメージとなったようだ。

「……知ってるなら教えてやっても良かったんじゃないか？」

そう言ったウルフにオレガノは失笑を浮かべた。

「パリアの素材に価値がない、と言ってもこいつらは信じなかったろう。それに嘔吐物からいい素材が出ると教えてたら、こいつらは余計にパリアに時間をかけて結局のたれ死ぬことになったと思うぞ？」

帰りの馬車はレイアを警戒して岩陰を伝うように進んだ。その結果、来るときよりも時間は多くかかったが、モンスターに襲われることはなく、輸送隊は無事ココット村に着くことが出来た。

「やっと帰って来たア。しかも今回は荷物も一緒だア。いやアハンターさんに頼んで本当によかったア」

輸送隊の面々は安堵した表情を浮かべ、口々にウルフ達に感謝の言葉を述べた。

「いや……俺たちがやったことといたらレイアを追い払ったことぐらいだ」

「医者に直行した2人は先の脅威を取り払ってくれたようではあったがな」

皮肉たっぷりのオレガノにウルフは思わず苦笑をこぼす。

「いやいや、ハンターさんが白星鉄見つけてくれなかったらこんな取れたかわからなかったア」

「そういえばその白星鉄だが……」

「これが2人の分だア。たくさん取れたから、予定より多めだア」

そう言って渡された袋はずっしりとした重さがあり、かなりの量であることがわかる。

「いいのか？こんなに……」

「気にすんなア。これだけ納めればオラ達アしばらくはいい暮らしができる。ハンターさんは武器やら防具やらに多く使うんだア、多い方がいいんでないかア？」

「これだけあれば防具なら一式を揃えられるだろう。ウルフ、こいつを使って新しい防具を作ったらどうだ？そろそろイーオスから乗り換えるのもいいと思うぞ。ドンドルマの親方ならうまく加工してくれるだろう」

「……それもそうだな」

「んじゃあオラ達アこいつをミナガルデに持っていかないといけな
いから失礼するだア。ハンターさん達者でなア」

「ああ、あんたたちもな」

輸送隊だった鉱夫達は村の奥のほうへと消えていく。

「さてと、俺も行くとするか」

「ドンドルマに行くなら俺も行くつもりだが」

「いや、もう少しこの村に用事がある。その後はミナガルデだ」

「そうか……」

オレガノについていくのも面白そうだったが、ドンドルマを離れてかなりの日数が経つ。1人でギルドナイトセーバーの強化素材を集めるのに予想以上に時間がかかり、さらにこの村でクエストをこなしたのだ。

さすがにそろそろ戻らないとセレーネ達に悪いし、自分のハンターランクが置いていかれるかもしれないと言う不安もあった。

「それじゃ、機会があったらまた会おうとしよう」

「ああ。そのときまでにその双剣を使えるようにしておいてみせる
な」

オレガノは苦笑した。

「期待しないで待ってるよ」

そして眠鳥の防具に身を包む双剣使いは背を向けて歩き出し、ウルフもまたドンドルマへと戻る帰路に着いたのであった。

「……そんなわけだ」

長い話を終えてウルフは酒を一口呷った。

「ちくしょう、峡谷かあ……。パリアプリア、白星鉄……。ますますもって行ってみたいぜ！」

「でもいくら価値があるといってもモンスターの嘔吐物を漁るってのはちよっと気が引けるわね……」

「一応言っておくが、白星鉄はもう出ない」

「何イ!？」

ウルフの告白にバツシユが声を裏返らせた。

「しばらくの間はほぼ毎日、決まった時間に突如大量に採掘できる時期が続いたんだが、つい先日、それがパタツと止まったらしい。ギルドで調査分の鉱石は確保したから大丈夫らしいが、俺たちハンターに回すほどの余裕はないそうだ」

「ってことは……あんたのこの装備って幻の防具ってこと!？」

今度はセレーネが声を裏返しそうな勢いだった。

「さあな。確かにほとんど見かけないが」

「あーもう今じゃ入手すらできないピアスに鉱石を使った防具!やっぱ羨ましいぜ!」

頭を抱えて文句を言った後、自棄になった様子でバツシュは酒を流し込む。

「確かにステータスと言う意味で言うなら、『空の王者』よりも『今じゃ手に入らない防具』のほうがインパクトはあるわよね……」

「う、うるせえぞネル!あーもう、ちつくしよー!」

バツシュの叫びに酒場の何人かがこっちを見たが、当の本人は特に気にしていない様子だ。

「……防具ってのは人それぞれに思うところがあってそれを着てるものだ」

ウルフが静かに話し出す。

「俺は運よくこいつを着れるわけだが、バツシュのようにステータスを重視して装備する者、セレーネやミネルバのように機能性を重視する者。他にもあるだろう。その信念をもって着る防具こそが、己の命を守るんだらうな」

「信念、か……」

ミネルバが呟く。

「……やっぱり私はこの装備でいくわ。フルフルもゲリヨスも弓を引き絞ってる間の体の負担を減らしてくれるし、頭のハイメタと合わせてモンスターの咆哮の脅威からも身を守ってくれる。何よりずっと使ってたこの防具には愛着もあるしね」

「そう、それでいいのさ」

そう言うとウルフは残っていたホピ酒を飲み干した。

「よし！それじゃあネルの装備が今までと変わらなくなったことを記念して狩りに行くとしようぜ！」

「何よその動機……。まあ私は構わないけど」

「白星鉄は取れなくなったらしいが、峡谷には他にも特産物はある」

ウルフの言葉に3人の視線が集まった。

「『狩り』にはならないが……峡谷の空気に触れて採取してくる、つてのはどうだ？幸い空路の方がもう開通しているから、俺が行った時より遙かに短い時間で狩場に着ける」

「いいねえ！俺は賛成だ。ネル、お前は？」

「いいわね。狩場を把握しておくのは重要なことだし」

「私も反対する理由はないわ。話を聞いてたら行ってみたいくなったし」

「よっしゃ！そつと決まれば急ごつぜ！こつしちやいらねえよ！」

バツシュは席を立ち上がる。

「まったく……ほんと単純なんだから……」

ミネルバの呟きに2人は思わず小さく笑ったのだった。

外伝2話後書き

外伝第2話、ウルフの帰省と防具が衝撃のピアス+ブランシリーズになった話でした。

2章と同じぐらいの長さになってしまったので、前編後編をさらに2つずつに分けてます。

今回はMHFオリジナルマップの峡谷とチラツと登場する天の型とMHF色がやはり出ています。

一方で戦ったモンスターについては……。

既に1章で描いたレイアを出したのには理由があり、MHFをやっている方なら気づいている方もいらっしやるかと思いますが、このクエストは本編中で鉱夫が言っていた「ホワイトスターラッシュ」という名前のクエストを参考にしています。

これは受注可能なのが1日で数時間だけ3回ほど配信される期間限定のイベントクエストで、ブランシリーズの素材となる白星鉄を集めるにはこれがもっとも手っ取り早くなります。

自分が現役だった頃はパリアプリア1頭とリオレイア3頭といふなかなか面倒なクエストで、そのためレイアが登場しています(最近も白星鉄イベントを配信したらしく、今度はパリア1頭にレイア1頭と大分楽になったと聞きました)。

なぜパリアじゃなくレイアで書いたかという点、パリアというのは本編でもチラツと触れましたが、肉を食わせて満腹にさせ、その後吐いた嘔吐物を採取しないとレアな素材が出ないモンスターです。

そのため、「ただの肉食わせゲーム」とか「肉を食わせるんじゃないかって狩りがしたい」といったような不満がチラホラ聞かれ(自分の周りだけかもしれませんが)あまり好印象のモンスターではありませんでした。

事実、通常時の行動パターンもやや単調気味なために面白みがないのも事実です。

まあ中にはエクストリーム肉食わせを極めてプロのパリアブリーダーになったハンターさんもいるようですが……。
そんな理由で再度レイアさんに登場していただいた次第でした。

長くなってしまいました。以上後書きでした。
読んでいただいた皆様ありがとうございます。
感想等お待ちしております。

プロローグ

オオオオオン……。

断末魔の悲鳴を残し、夜の砂漠に黒い巨塊が崩れ落ちる。自慢の巨大な2本の角は根元から折られ、尻尾の長さも半分以下になっていたが、それでもなお人間に畏怖を与える存在であった。

飛竜種ディアブロス。

リオレウスやグラビモスのようなブレスこそないものの、その咆哮は耳を劈き、2本の角による突進は獲物の体をいともたやすく突き破り絶命させる。飛行能力の代わりに得た強靱な脚力と角を使った潜行によって、その強さは他の飛竜種と謙遜がないほど、いや、むしろそれ以上とも言われていた。

さらにディアブロスのメスは繁殖期が近づくと凶暴性が増し、皮膚の色が黒く変色する。ギルドはその個体を「ディアブロス亜種」と呼んでいた。

今、夜の冷え切った砂漠の砂の上に横たわる飛竜は紛れもなくディアブロス、しかもその亜種であった。

「まったくんでもなくタフな奴だぜ……」

「全くだね……。兄貴、終わったよ！」

その女の声に呼応するように、ディアの屍からやや離れた砂の中から1人の男が姿を現した。

腕にはゲリヨスを模したヘビィボウガンが握られており、ディアを一瞥すると男はそれを畳んで背中に背負った。ギアノス素材から作られたと思われる白い鱗の頭防具によって鼻と口元を隠していたが、唯一見えるその目は睨みつけるだけで獲物を射殺すほどの鋭さを持っていた。

「さつさと剥いたら街に戻るぞ。依頼は2頭だがまだ他にいないとも限らない。もつとも、もう1頭程度ならやれないこともないがな」

「冗談きついで兄貴……俺アもう無理だ」

今横たわるディアブロスと同じの亜種素材で作られた防具に身を包む巨漢の大剣使いが両手を広げて泣き言を上げる。

「あんた男だろ？こんなことでへばってどうすんのよ。……とはいえ、あたしも正直なところもう1頭来たところで戦いたいとは思わないけどね」

器用にディアブロスを剥きながら女も答える。

「それについては俺も同感だ。戦える、というだけで戦いたいとは思わん。弾もギリギリな上に、なにより砂の中というのはそれほど居心地のいいものでもないからな」

ヘビィボウガンはライトボウガンより強力な攻撃力を持つが、重さ故に武器を展開すると機動力が乏しくなる。そのため、2人がデ

イアの気を引いているうちに男は砂の中に身を潜め、隙をうかがって狙撃していたのだ。優れた連携技術がなくてはこの方法での狩りはうまくいかない、そのことからこの3人は並のハンターではないことを証明している。

そうでなくてもこの依頼は「ディアブロス亜種上位種2頭を狩猟してほしい」というものなのだ、1頭でさえ苦勞するモンスターを2頭狩っているというだけでその実力が窺える。

「それにしてもよ、このディアブロスってメスだろ？リオレイアもそうだが、モンスターも女の方が強いとかあんのかね？」

「……あんだ、そりゃあたしにケンカ売ってるのかい？」

「だ、誰も姉貴のことだとは言つてねえだろ！」

「じゃあモンスター『も』ってのはなんだい！？ええ？」

「2人ともそこまでだ」

ガンナーの男が2人を止めた。

「嫌な風だ……。3頭目が来てもおかしくないな。すぐにベースキヤンプに戻って引き上げるぞ」

「兄貴がそういうなら……。こんな『死神』を3頭も相手にしたくねえしな」

「『死神』か……。言い得て妙だな。ともかくここを離れるぞ」

「わかったよ。……んで、戻った後はどうするんだい？」

剥ぎ取りをやめ、キャンプへ向けて走りながら妹は兄に尋ねる。

「ひとまずドンドルマにでも戻るか。地方都市を飛んでるからなあそこに戻るのは久しい」

「たまには自分の家でゆっくり寝たいぜ」

「それもそうだな……。大衆酒場で酒を飲みながら飯を食うのも悪くない」

「名案！金は十分あるんだ、腹いっぱい食おうぜ！」

キャンプを目前にしてこれからのことを考えたとき、遙か後ろのほうで空気を揺らす咆哮が聞こえた気がした。

「……兄貴、今の」

「ああ、3頭目だな。あのまま剥いでいたら交戦していただろう」

「あぶねえ……。さすが兄貴だ。『赤髪の魔眼』は伊達じゃねえな」

フン、と兄は軽く鼻を鳴らした。

まだ上位ハンターであるこの3人は、ハンターランク1000を越える凄腕ハンターからも一目置かれる存在であった。3人で困難なクエストを次々達成している、というだけでなく、酒場や集会所でハンター同士が揉めた際に酒場にいたハンター全員を医者送りにしたという噂もあった。

ハンターたちはそのリーダーの髪の色と眼の鋭さにひっかけて、
畏怖をこめてこう呼んだ。

「赤髪の魔眼」と。

第1話

「はい、じゃあれが今回の報奨金です。あと、今回のクエストで皆さんハンターランク50になったみたい。多分公式狩猟試験についての説明があると思うから、あとでうちのボスのところに行ってみて」

「ええ、わかったわ。ありがとう」

クエスト受付嬢のかなりフランクな話し方を全く気に留める様子もなく、報奨金を受け取った女ハンターは報酬受け取りのサイン欄にセレーネ・ヴィヴェルドと記した。そのまま踵を返し、3人のハンターが待つテーブルへと歩みを進める。

「はい、今日の軍資金。バッシユ、先に言っておくけどこの間みたいに必要以上に高い料理頼んだりしないですよ？」

セレーネに念を押され、自称「器用なハンマー使い」のバッシユ・ザフィーアは失笑を浮かべた。

「そういう小言を言われるのはネルからだけだと思ってたんだが…
…セレーネ、お前最近ネルに似てきたんじゃないかねえか？」

「あら？私ってそんなに小言が多い女だったかしら？」

引き合いに出されたバッシユの幼馴染のミネルバ・ロアベルクは

バツシュを見つめてニツコリと微笑んだ。

「ネ、ネル！こええ！つーかいてえ！足踏んでる！」

「足？なんのことかしら？」

「おい旦那！黙って飲んでないで何かこの2人に言っただれよ！」

1人黙ってホピ酒お湯割を飲んでいたウルフ・オブシディアンはバツシュの言葉を無視して酒を進める。

「ウルフ、聞いてんのか！？」

「大声を出すな。聞こえてる」

「じゃあ何か言っただれよ！」

「以前高い料理と酒をお前が注文したせいで報奨金がほとんどなくなっただけの事実だ。諦めることだな」

「ちくしょー！3人で俺ばっか責めやがって！そっちがその気ならもう自棄食いだ！おい姉ちゃん！フライドケルビ3人前追加！あとフラヒヤビールも！」

「ちょっとバツシュ！あんた全然懲りてないじゃないの！」

いつもの様子でバツシュとミネルバがケンカを始めたのを横目に、やれやれとひとつため息をついてウルフはホピ酒を飲み干す。

「今の追加でホピ酒のお湯割りも頼む」

「ウルフ！あんたまでなんでどさくさに紛れて注文してるのよ！」

「文句を言う前に注文しないとお前の分の金がなくなるぞ、セレーネ」

思わずセレーネとミネルバが顔を見合わせる。そして同時に腕を上げて店員を呼んだ。

「うう……もう食べねえ……」

しばらくの後、バツシュは苦しそうにそうつぶやいた。机の上にある皿を見れば4人がかなりの量を食べたことがわかる。

「バツシュに付き合って……悪ノリしたわ……」

「2人とも限度って物を知らないんだから……」

呆れたようにセレーネが言った。

「あなたに言われるのは心外だったわ……」

「ネルの言つとおりだ……セレーネにまで言われるとは思わなかったぜ」

「なによ？私のことバカにしてるの？」

「まあそういうんじゃないが……」

3人のやり取りを横目に見ていたウルフは再びやれやれと1つ息を吐き、食べかけていたレッドオイルソース掛けランランサラダを口に運んだ。

「いつも思うけど、よくそんな辛そうなの平気で食べられるわね」

バッシュとミネルバが相当満腹のようで、会話が続かないと踏んだセレーネはウルフに話しかけてきた。

「まあな。親父とおふくろがフラヒヤ山脈近辺の出身でな。ポツケ村ほどの大きな村じゃなかったそうだが。その影響か体を温めるために辛いものを中心の食生活だったらしい。だから俺はガキの頃から食うものは辛いものばかりでな。普通の料理じゃ刺激が足りなく感じるようになってる」

「へえ……。私は辛いのはあまり好きじゃないからその感覚はよくわからないわね」

「食の好みなどそんなものだ」

短くまとめ、ウルフはホピ酒に口をつけた。もう相当な量飲んでいるはずだが酔っている様子は感じない。というより、少量ですぐ酔えると評判のもホピ酒をいつも飲んでる割に、セレーネはこの男が酔っているところをほとんど見たことがなかった。

「……そういえば今の家族の話で思い出したんだけど、あんた、兄

弟いるんだっただわよね？」

話のネタがなくなると思い、セレーネは家族の話題から思い出したことを咄嗟に口にした。が、この話題はウルフとしては触れてほしくなかったようで、一瞬眉をしかめ無言でホピ酒を喉に流し込んだ。

「あ……ごめん……」

「……いや、いい。そうだ、以前話したように俺には兄弟がいる。まああいつらのことだ、今頃上位クラスハンターの中でも有数な存在になってるんじゃないかねえのか？」

自分と血を分けた兄弟を「あいつら」と呼んだことにセレーネは戸惑った。

それでもあまり気にかけていないように続ける。

「そうなんだ。ウルフがそこまで言うんだからかなりのものなんでしょうね」

「實力は俺も認める。ただ、親父の教えを忠実すぎるほどに守ってきた兄の姿勢には疑問が残るかな」

普段冷静なウルフにしては珍しく言葉に棘がある。そう感じたセレーネはこの話題は早めに切り上げた方がいいと考えた。バッシュとミネルバの助け舟を待ちたかったが、2人とも自分のことでそれぞれではならしい。

「……あ！そういえば。そんなウルフの兄弟ほどじゃないかもしれ

ないけど……」

思い出したように切り出し、わざとらしく1つ咳払いをしてセレ
ーネは3人を見渡した。

「なんだ……？言いたいことがあるならもったいぶってないで早く
言えよ」

相変わらず苦しそうにバツシュが口を開く。

「さつき報奨金をもらうときにクエスト受付嬢に言われたんだけど、
私たちハンターランク50になったみたいよ。それであとでギルド
マスターのところへ行ってこれからのハンターランクを解放する公
式狩猟試験の内容を確認するように言われたの」

「お！？本当か！？」

さつきまでの様子はどこへやら、嬉しそうにバツシュは身を乗り
出した。

「次はなんだろうな……。30試験はクシャルダオラ追撃の討伐分
で免除、40試験はリオレウスとリオレイアの狩猟だったよな」

「レウスとレイアは厳しかったわね……。レウスがあと少しで倒せ
そう、というときに突然レイアが襲ってきたものね……。咄嗟にウ
ルフが閃光玉を投げてレウスを捕獲してくれたおかげで助かったけ
ど……」

バツシュとミネルバは過去を思い出すように話す。どうやら気にな
る話題のおかげで満腹の苦しさからは多少解放されてるようだ。

「まあそれが何か気になるから……。ちょっと私がじいさんのところに行つて聞いて来るわ。すぐそこだし、何かわかりそうなら呼ぶわね」

2人の体調と大抵こういうときは席に座つたままのウルフのことを考え、セレーネは1人立ち上がってギルドマスターのところへ歩いていく。

そのセレーネの様子に気づいたようで、ギルドマスターは煙草を1つ蒸かし、どこか嬉しそうにセレーネの方へと向き直つた。

「おお、セレーネ。また一段と成長したようじゃの」

「世辞はいいわよ。それよりじいさん、話があるんだけど……」

「わかつとる。公式狩猟試験のことじゃな」

「ええ、そう。体がいくつあつても足りないような依頼だけは勘弁してほしいわね」

セレーネの冗談を聞き流した様子で依頼内容が記してある羊皮紙を数枚取り出して眺めた。

ハンターは一定のハンターランクになると「公式狩猟試験」と呼ばれるものを受けなくてはならず、それを突破することでその後のハンターランクが解放される。試験といっても基本は普段の狩りと同じであり、指定された依頼を達成すれば合格として、そのハンターランク以上になれるというものである。

ギルドの定めでハンターランク10はダイミヨウザザミ、16はドドブランゴと決まっていたが、それ以後、つまり上位以降の試験はギルドマスターが特別な依頼や緊急な依頼、あるいは難易度の高そうな依頼を選び、それを成功させることができれば試験合格となるのであった。

この公式狩猟試験はハンターランク50以後はほぼ一人前と認められた、と言う意味で100までなく、いわば儀式的な要素が強かった。

「ふむ……特別な依頼が何件があるが……どれがいいかの……」

「……一応もう一度言っておくけど、体がいくつあっても足りないようなだけは勘弁してよ」

「では……この辺りはどうかの？」

そういうとギルドマスターは1枚の羊皮紙をセレーネの元へと差し出した。受けとってその内容を確認する。

「えーっと……。依頼主は『大老殿ギルド』ね……。何々……。『現在、クルプティオス湿地帯の洞窟のほうで、繰り返し獣の咆哮が響いています。どうやら、噂にきく響狼がこの地方にもやってきたようです。ギルドのほうでも情報が少ないため、調査と狩猟をお願いします』か……」

「奴らは『オルガロン』と呼ばれておる。お主にとっては因縁ある相手と言えるかもしれんの……」

「ちょ、ちょっと待って。もうこの時点で質問が2つ。……今、奴

『ら』って言ったわよね？じゃあ1頭で活動するモンスターではないってこと？』

セレーネの質問に答える前にギルドマスターは煙草を1つ蒸かして間をおいた。

「よく気づいたの。本当に成長してるようじゃ」

「いいから質問に答えてよ」

「結論から言うと、そうじゃ。奴らは雄である『カム・オルガロン』と雌である『ノノ・オルガロン』が共に行動してある。圧倒的な攻撃力を持つカムと俊敏な素早さをもつノノ。2頭のコンビネーションは熟練のハンターでも手を焼くほどと言われておる。……しかし依頼内容にもあるように、まだ情報が少なすぎる」

「そこで私たちが試験がたら情報を集めてこい、ってわけね」

ギルドマスターの言葉を遮るようにセレーネが続ける。

「ま、そういうことじゃ」

「あともう1つ。私にとって因縁ある相手ってどついうこと？」

「それは行ってからの楽しみじゃ」

「お楽しみって……」

「ギルドマスター、すまないがその依頼、俺達が受けることは出来ないか？」

突然後ろから聞こえた声に驚いてセレーネが振り返る。

そこにはライトボウガンを肩にかけた赤髪の男が立っていた。

「そのオルガロン、確認個体数の都合から一般で受注させてもらえないんでな。もし依頼が来ているなら俺達が受けたい」

今自分とギルドマスターが話しているところに割り込まれたことに加え、自分達が受けるはずのクエストを横取りされかねないと思つたセレーネはムツとして口を開いた。

「待ちなさいよ。この依頼は私達が公式狩猟試験として受けるって話だったのよ。横から出てきてそれを持っていくつもり？」

「だったら他のクエストを試験にしてもらったらどうだ？俺はこのクエストを受けたいから代用は利かないが、お前は狩猟試験になるなら他でも代用が利くだろう」

「ふざけないでよ！」

セレーネの声に酒場の視線が集まる。一瞬わずかな静寂があつたが、すぐにヒソヒソと身内内で会話するような声が聞こえてくる。どうせ「また『一人娘』が何か問題を起こしてるぜ」とか思われてるだけだろう、いつものことだとセレーネは考えた。

「ちよつとセレーネ、何事？」

さっきまでいた机からミネルバとそれに続いてバツシュがこちらに駆け寄ってくるのが見える。

向こうも男の連れなのだろう、笛を担いだ女と大剣を担いだ大男が男の元へ近づくのが見えた。

「なんだ！？何か揉め事……か……？」

「大揉めよ、バツシュ！こいつが私達が狩猟試験に受けるはずのクエストを横取りしようってのよ。ガツンと言ってやってよ！」

「……悪い、ちよいとガツンと言えそうにはない」

バツシュにしては珍しく歯に物が詰まったような言い方だった。

「は！？それってどういう……」

「なんだ、バツシュにミネルバじゃないの。久しぶりじゃない」

その言葉は、意外にも相手の男の連れと思われる笛を担いだ女から発せられた。

女性にしては珍しいドスシャギーと呼ばれる短髪、その髪の色は白く、対照的に肌は茶がかっている。露出が多目の防具とあわせて姉御肌、という感じであった。

「ピーチ、知り合いか？」

男がピーチ、と呼んだ女に確認を取る。

「なんだよ、兄貴も会ってるだろ。……ってあんな一瞬じゃ覚えてるわけないか。ほら、結構前に兄貴がショットボウガンの……陽だ

つけ？それを作りたから砂漠にゲネポス狩りに行くって言ったとき。あたしがごねてポツケ村に置いていかれたる？そのとき一緒に狩った2人だよ」

「そそ。ネルが大暴れした翌日の……」

「バツシュ、余計なことは言わないでいいの」

その2人の様子を見ていたピーチが思わず笑い出す。

「アハハツ！あんたたち相変わらずなんだね！」

「知り合いなら話が早い。ピーチ、俺達がこのクエストを受けられるように説得してくれ」

「それはこっちのセリフよ。バツシュ、ミネルバ、知り合いならなんとか言ってみてよ」

「だからできねえんだって」

バツシュが困ったように肩をすくめる。

「なんでよ!？」

「いいか、ピーチは俺達がまだドドブラの狩猟試験を終えたぐらいのときにもう既に上位ハンターだったんだ。ってことは、今や俺達の遥か大先輩になるわけだ。……実際今ハンターランクいくつなんだ？」

「えっと……92、だっけ、兄貴？」

「昨日のディブロス亜種2頭で93になった」

「だってさ」

「と、いうわけだセレーネ」

「何がというわけなのよ」

いまひとつ物分りの悪いセレーネにバツシュがため息をついた。

「あのな、相手は俺達のハンターランクの倍近く、単純に考えても俺達の倍の経験を積んでるベテランだ。その大先輩が俺達の狩猟試験になりそうなクエストを受けたいって言ってんだろ？ だったら譲っちまえばいいんじゃないか？ ……それに、だ。ピーチの話じゃこのボウガン使いの旦那は結構名が知れてるハンターらしいぜ。なんだっけ、『魔眼』だったかな……。ともかく、事を構えるのはあまり得策じゃない」

そのバツシュの言葉を聞いてセレーネはあることに気づいた。さつきこちらを見た後小声で話している酒場のハンター達の様子がいつもと違う。普段ならこちらを見た後呆れたようにテーブルに視線を戻すのだが、今日は自分ではなく、むしろ相手の男の方を見て、どこか恐れているように見えた。

セレーネは男の方を見直す。

よく見ると赤髪の下からのぞく眼差しは眼光鋭く、「魔眼」の異名に相応しいと感じた。しかし、だからと言って今更引き下がるわけにもいかない。

何よりセレーネ自身、ギルドマスターに言われた「因縁の相手」という言葉がひっかかっていた。

「『魔眼』だかなんだか知らないし、あんた達がどれほどのハンターかも知らないけど、私はこのクエストを狩猟試験にしたいの。…それにいくら腕が立つって言ったってあんた達3人で狩るつもり？」

「俺達はずっと3人で狩って来た。人数の多さがそのまま強さに直結するわけではない。ハンターならそのぐらいのことはわかってるだろう？…もつとも、その様子だとそちらも3人のようだがな」

「あら、残念。うちにはもう1人、腕利きの双剣使いがいるのよ。…ちよつとウルフ！無関心決め込んでないでこつち来なさいよ！」

「何……？」

一瞬「相手の3人に」動揺が走ったように見えた。

無関係を装ってテーブルで1人酒を飲んでいたウルフだったが、セレーネに呼ばれて渋々立ち上がり近づいてくる。心なしか、普段より不機嫌そうに見えた。

「うちの4人目よ。双剣使いの……」

「ウルフ・オブシディアン。よく知ってるよ。こんなところで会うとは、久しぶりだな」

「え……？」

思わずセレーネはウルフの顔を見た。

「ウルフ、知り合いなの……?」

「ああ、知り合いも知り合い。……こいつの名はホーク・オブシデ
イアン、俺の兄だ」

「お、お兄さん……」

呆気にとられた3人だったが、何かに気づいたようにバツシュが
叫んだ。

「ま、待てよ! ってことは、ピーチってまさか……」

「そ。こいつの姉ってこと。まさかあんた達がうちの弟とパーティ
組んでたとは思わなかったけどね……」

「じゃああの時ポケケ村で言った『ひねくれて抜けた末っ子』っ
て……」

「俺のことだろうな。……姉さん、俺のことをそんな風に言ったの
か」

ウルフが1つ鼻で嗤う。

「バカ弟がいるなら、なおさらこっちにクエストを回してもらいて
えな」

それまで黙っていた大男が話題を戻した。

いかついディアブロウの防具に身を包み、その防具と同じ色の髪はゲリヨスソウルと呼ばれる、ゲリヨスのトサカのように纏めてある。防具、髪型、そしてその巨躯と、それだけで相手を威嚇するよ
うな面持ちだ。

「コング、話をややこしくするな。……ともかく、こちらとしてもオルガロンとは一度手合わせを願ったんだ、このチャンスを逃したくはない」

「だから何度も言ってるようにこっちも……」

「まあ双方とも少し待て」

それまで黙って話を聞いていたギルドマスターが煙草の煙を吐き出しながら口を開いた。

「さつきセレーネには言ったとおり、オルガロンは雄と雌の一对が共に行動するモンスターじゃ。じゃが、その中には2匹同時に襲い掛かってくるものと1匹だけで襲い掛かるものがある。……2匹同時の場合は特に強い個体が多く、ギルドではそれを『剛種』と定義した」

「『剛種』……?」

どこかで聞いたことがある。確かクシャルの追撃戦の後、セレーネにとって憧れであり目標であるハンターのダフネと会ったとき、そのパーティが剛種と呼ばれる存在と対峙したと言っていた事をセレーネは思い出した。

「なるほどな」

そう一言だけ言うとホークはギルドマスターの言葉を待った。

「なるほど、って……今ので何かわかるの？」

「セレーネ、こういうことだ」

尋ねられたホークの代わりに弟のウルフが説明する。

「『剛種』というのは今のギルドマスターの説明にもあるとおり、非常に強力な個体だ。しかもそれが雄雌の2頭同時。そんな危険なクエストはハンターランク50程度の上位ハンターである俺達には到底無理な依頼だ。ついでに言えば、おそらく名が知られているといてもハンターランク93の上位ハンターであつてもな。つまり今回のオルガロンはどちらか片方の狩猟になる、ということだろう、ギルドマスター？」

「ほぼ正解じゃ。この依頼は1頭の狩猟になる可能性が高い、故に上位ハンターであるおぬしらに薦めることができるのじゃ。兄弟揃つて非常に優秀じゃの」

ホークとウルフが同時に眉をしかめる。

「よしてくれギルドマスター」

「こいつと一緒にされるのは心外だな」

(なんだかんだで兄弟なのね……反応も一緒じゃないの……)

そう言えば顔もどこか似た雰囲気がある、とセレーネは思った。

「そうそう！兄貴はこんなバカ弟より断然優れてるからな！」

「お前にバカ呼ばわりはされたくないな、コング」

「て、てめえウルフ！兄に向かってその口の聞き方……」

「よしなよコング、みつともない」

呆れた顔でピーチが止めに入った。

「話を戻すぞ。今回のオルガロンは片方の狩猟、つまりその片方がウルフやこのお嬢さんたちの公式狩猟試験として……」

「セレーネよ。お嬢さんはやめて頂戴」

「……それでもう片方は俺達の好きにしてい、ということではないのか？」

ホークの提案にギルドマスターは煙草を煙らせて少し考えているようだった。

「……お主がそれでいいならいいがの。ただし、万が一剛種、つまり2頭同時の場合はセレーネたちには即刻クエストを放棄してもらい、そのときはお主らも同様に放棄ということになるが、それでいいかの？」

「構わん。元々こちらが無理を言って割り込んだ話だ」

「セレーネはどうじゃ？」

「……まあ試験は最初から1頭だけの話だったんでしょ？なら構わないわよ。もう片方は『魔眼』さんに任せるわ」

「感謝する、お嬢さん」

「お嬢さんって言うのはやめてって言うてるでしょ」

「覚えておこう」

フ、とホークは1つ鼻を鳴らした。

やはりその様子はどこかウルフに似ているとセレーネは思った。

第2話

沼地へ向かう気球の甲板。

セレーネたちのほかにも沼地へと向かうハンターは数名いる程度で、甲板上は人がまばらであった。加えて、『赤髪の魔眼』と呼ばれてハンターたちの間で恐れられることもあるホークがいることもあり、普通は喧騒な甲板も今日はどこか静かであった。

結局あの後ウルフはホークと一言も言葉を交わそうとせず、甲板上でも対角線上に位置取っていた。

腰を下ろして腕を組んで眼を閉じているウルフ、立ちながらコングの話を一応耳に入れている様子のホーク。やはり兄弟というべきか、どこか無愛想なところは似ているように思える。

「ねえ、ウルフ、起きてる？」

その無愛想な弟にセレーネが声をかけた。無言で相変わらず腕は組んだまま、片目だけを開けてウルフはセレーネを見る。

「あ、別に大した用じゃないんだけど……」

そう聞くと再び眼を閉じた。

「……怒ってる？」

「何がだ？」

「なんかいつにも増して不機嫌そうだから……」

「そう見えるんなら、そうなんだろう」

「なによそれ……」

セレーネは1つため息をついた。

「……一応謝っておくわ。わからなかったとはいえ、あんたにとつて会いたくなかったであろう人と揉めちゃったわけだし……」

「仕方ないだろう。あの状況ではな」

「……そう思ってるんなら機嫌直しなさいよ」

わざと聞こえる程度の音量で呟いたが、ウルフの反応はない。

「どうせ機嫌悪いならついでに聞いておくんだけど、あんた、お姉さんとの仲はいいの？」

「なぜそう思う？」

「ピーチさんのことだけ姉さんって言ってたからさ、そうなのかなって思っただけ」

「……姉さんだけは俺の考えに同意してくれたからな。長女と言う立場上、兄をサポートしなくてはいけないから一緒に行動すること

はできないが、それでも自分が信じた道を進めつてな」

「ふうん……。見た目によらず、兄弟思いのお姉さんなのね」

そう言いながらセレーネがピーチのほうに視線を移すと、なにやらこちらに向かつて手招きをしている。バツシュとミネルバと話をしていたがそれは終わったらしく、2人はセレーネのほうに歩いてきている。

「セレーネ、ピーチがあなたと話がしたいって」

「私と？」

てつきりウルフに向かつての手招きだと思っていたセレーネは予想外と言う声を出し、ウルフを見る。

「行ってこい。お前を」ご指名だからな」

「あんたは来ないの？」

「呼ばれていない。……。どの道、家出弟の俺には合わせる顔がない」

「……。そ。じゃあちよつと行ってくるわ」

2人と入れ違いにセレーネはピーチのほうへと歩みを進める。その間、ピーチは近づいてくるセレーネの顔と奥にいるウルフの顔を交互に見つめているようだった。

「私を」ご指名って聞いたけど？」

「そそ。ちゃんと挨拶してなかったなと思ってさ。もう3人から聞いているかもしれないけど、あたしの名前はピーチ。ウルフと、あとあっちにいるデカブツの姉よ」

「セレーネよ。よろしく、ピーチさん」

「アハハッ！」

差し出した右手を握り返されながら、何が面白かったのはピーチは笑った。

「いいよいよよ、『さん』なんかつけなくても。確かにあたしより年下そうだけど……。ちなみに年は？」

「18よ」

「へえ、うちのウルフより若いんだ。確かあいつあたしの2つ下だから……。20とかのはずだけど」

「……それで何の用？」

子ども扱いされた、と感じたセレーネは少し不機嫌そうに尋ねる。

「だからさつきも言ったように挨拶しておこうと思っただけさ。多分うちの放浪弟が迷惑かけてるだろうから」

「そんなことないわ。むしろ脚引っ張ってるのはきつと私の方。あいつの狩りに関する知識にはいつも驚かされてるもの」

「ふうん……」

何かを含むようにそう言ってピーチはセレーネを見る。

「……………何よ？」

「ね、ウルフとどんな関係？」

「ど、どんなくて……………ただの狩りのパートナー同士よ」

「パートナー同士、ねえ……………」

ニヤニヤとピーチは笑みを浮かべる。

「無口で無関心なあいつがあなたとは随分仲がいいみたいだから……………ただの狩りのパートナー同士、ってのも怪しいわね」

「ちょ、ちょっと変な勘繰りはやめてよ。本当に私とウルフは……………」

「はいはい、わかってる、わかってるって」

何をわかっているのかと聞きたいところだったが、また話がややこしくなると考えたセレーネはそのまま言葉を飲み込んだ。

「……………ま、でもあいつはあいつなりにうまくやってるみたいで少しは安心したよ」

「さつきも言ったけど、うまくやっているとどこかその腕と知識に助けられっぱなしよ。事実上私達のパーティのリーダーみたいなものだし……………」

「へえ、あいつがリーダーね……」

言いながらもそこには驚きというよりも納得という表情があった。

「あなたたち兄弟のリーダーって兄の魔眼の人じゃないの？」

「ん？ああ、そうだよ？なんでまた？」

「だったらなんで今納得したみたいなの顔したの？」

「した？あたしが？」

「ええ」

どこが決まりが悪そうにピーチが頬をかく。

「身内ならともかく、人付き合いが苦手そうな人間がリーダー格って聞いたら普通驚くものだと思うけど、納得した様子だったのが不思議に思っただけ。……なにか理由でも？」

一瞬間を置いたピーチだったが、

「……あいつには、このこと言わないでほしいんだけど」

そう言って話し始めた。

「兄貴が前に珍しく酔ったときに言ったのよ。あいつは将来もしかしたらとんでもない大物になるかもしれない、って。持って生まれた器が自分よりも大きいだのなんだのって」

「まあ確かにあいつの腕がいいのは認めるけど……」

「腕とかじゃないわ」

「え……？」

セレーネはピーチの顔を見る。

「兄貴は、あいつには人を惹きつける何かがあるとか言ってた。腕は鍛えれば上達するけど、人を惹きつける力だけは天性のものが必要になる、とかって」

「それをウルフが持つてる……」

チラリとウルフのほうを見る。相変わらず不機嫌そうに腕を組み、バツシュとミネルバの話をしているのかもわからない様子である。

444

「将来的には自分じゃなく、ウルフが私達兄弟のパーティのリーダーになるかもしれない、つても言ってたかな。まあそんなわけだから、あいつがリーダーだって聞いても納得できたわけよ」

「そうなんだ……。じゃあお兄さんがウルフの家出に反対したのも、そういう逸材を逃したくなかったからっていうのもあるのかしらね」

「それも逆よ」

「逆？」

「そ。兄貴個人としてはウルフの考えは尊重してやりたかった。自分達と言う檻の中だけでなく、もっと世界を見てほしいと思ってい

た。……でもあの人はオブシディアン家の長男だからね。親の期待を裏切ること、家名を汚すようなことはできない。だから建前では反対してる。……ま、でも心のどこかでは戻ってきてほしいって思ってもいるんだろっけどさ」

「へえ……」

セレーネはホークのほうを見る。こちらもどこか不機嫌そうにしてはいるが、今はコングと何かを話しているようだった。

「ボウガンとか使ってるから器用そうに見えたけど……中身は意外とウルフみたいの不器用なのね」

「アハハツ！わかってるんじゃない！そ、うちの男共ってほんと不器用なのよね」

「ピーチ、そろそろ着く、準備しろ。……喋り好きは結構だが、話したがりには早死にするぞ」

どこから話を耳にしていたのか、ホークが話に割って入ってきた。

「はいはい、わかってるわよ。……じゃあね、セレーネ」

軽く右手を挙げてピーチはコングのいるところに歩き出す。

「お嬢さん……いや、セレーネか。……うちの弟をよろしく頼む」

一瞬だけセレーネの瞳を見つめたあと、ホークを踵を返した。

それは「赤髪の魔眼」と恐れられているものではなく、兄弟を純

粹に心配する兄の眼のようにもセレーネには見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7827x/>

モンスターハンター -The great hunting days!-

2011年11月20日20時12分発行